# 鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　5

昭和63年度発掘調査報告

平成元年３月

鎌倉市教育委員会

# 序　　文

鎌倉市教育委員会
教育長　尾崎　實

近年、鎌倉の街は、古い家屋や店舗の建て替えが相いついでいます。その中で、埋蔵文化財に影響を及ぼす様な大規模な工事も多くなってきました。そのため、工事に先だって発掘調査を実施する件数も多くなりました。このため昭和59年度からは国庫・県費の補助を受けて個人専用住宅等については鎌倉市教育委員会が独自に発掘調査を実施するようにして来ました。

しかし急速な都市化・再開発が進む中で調査が順調に進んできたとは言えません。

郷土の文化財を守るということは市民の責務でありますが、当市のように市街地の中心と遺跡の中心が全く重なってしまうという条件のもとでは、特に市民の皆様のご理解なくしては、埋蔵文化財の保存や発掘調査は不可能であるといえましょう。皆様の御協力をお願い申し上げる次第です。工事計画作成に当ってはできるだけ早くから当委員会との協議を行い、文化財の保護の方策を煮つめて行って頂きたいと思います。

本書は昭和63年度に国庫・県費補助を受けて、鎌倉市教育委員会が実施した、個人専用住宅・店舗併用住宅建設に伴う発掘調査の記録です。本書が鎌倉の歴史を明らかにするのに少しでも役立つことを祈念すると共に、調査実施に際してお世話になった調査員をはじめ多くの方々に、心からお礼申し上げます。

# 例　言

1．本書は昭和62年度及び63年度の国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査にかかわる発掘調査報告書である。

2．本書所収の調査地点等は別表のとおりである。

3．発掘調査及び出土資料の整理は鎌倉市教育委員会文化財保護課が実施した。

4．出土遺物及び写真・図面等の資料は、鎌倉市教育委員会文化財保護課が保管している。

5．各調査内容の詳細は、各々の報文を参照されたい。

# 目　次


序文…… i

例言…… ii

63年度調査の概観…… 1

1．米町遺跡…… 11

第一章　調査地点の位置と歴史的環境…… 13

第二章　調査の経過…… 14

第三章　検出した遺構…… 14

第四章　出土した遺物…… 17

第五章　まとめ…… 18

2．北条泰時・時頼邸跡…… 21

第一章　位置と歴史的環境…… 24

第二章　調査の概要…… 25

第三章　検出遺構と遺物…… 26

第四章　調査のまとめ…… 42

3．北条泰時・時頼邸跡…… 55

第一章　調査地点の位置…… 58

第二章　調査の概要…… 60

第三章　検出遺構と出土遺物…… 61

第四章　まとめ…… 72

4．長谷小路周辺遺跡…… 81

第一章　遺跡の位置及び歴史的環境…… 83

第二章　調査の経過及び堆積土層…… 84

第三章　検出された遺構と遺物…… 86

第四章　まとめと考察…… 96

5．若宮大路周辺遺跡群…… 103

第一章　検出遺構……107
第二章　出土遺物……113
第三章　調査のまとめ……133
6．明月院旧境内遺跡……143
第一章　調査地点の位置と歴史的環境……146
第二章　遺構と遺物……148
第三章　まとめ……155
7．若宮大路周辺遺跡群……163
第一章　調査地点の位置と環境……165
第二章　調査の概要と経過……168
第三章　遺構と遺物……169
第1節　層序……169
第2節　第Ⅰ面の遺構と遺物……169
第3節　第Ⅱ面の遺構と遺物……175
第4節　第Ⅲ面の遺構と遺物……183
第四章　まとめ……189
8．今小路西遺跡……203
第一章　調査地点の位置と環境……205
第二章　調査の概要と経過……208
第三章　遺構と遺物……209
第1節　上層の遺構と遺物……209
第2節　中層の遺構と遺物……221
第3節　下層の遺構と遺物……230
第4節　その他の遺構と遺物……242
第四章　まとめ……247

# 63年度調査の概観

昭和63年度の緊急発掘調査実施件数は12件で、対象面積は1643㎡であった。前年度の9件、1257㎡と比較しても件数・面積共に増加し、60年度以降の増加傾向が不変であることを示している。また調査原因も店舗や共同住宅と併用した形で専用住宅を建てるケースが圧倒的に多く、62年度にみられた土地の多目的有効利用を志向する傾向が一段と顕著になり、調査件数の増加に反映しているものと考えられる。この動向は事業者負担の調査でも同様であり、今後、暫くは続くものと思われるが、昨年度の報告書でも提起した有効な対応方法の策定がますます急がれよう。

## 1　横小路周辺遺跡

二階堂川の両岸、伝宮内時秀邸跡・下山入道邸跡を含む一帯に広がる遺跡内の二階堂字荏柄9番1に所在する。

昭和62年7月、店舗併用住宅建設に係わる開発行為の事前相談があり、市立第二小学校体育館棟の事前調査などの周辺における過去の調査例から推して、試掘調査等を踏まえた協議が必要である旨を説明する。同調査は7月13日に実施され、数面にわたる中世遺構面が良好な状態で遺存しているのが確認され、前面的な掘削行為を伴う現設計内容が変更されない限り本調査の実施は不可避であると判断された。8月7日、設計変更の可否についての検討を依頼するが、不可能である旨の回答を得たので県教育委員会と協議し、専用住宅相当域を対象とした国庫補助事業調査を実施すべきとの指導を得た。これを受け直ちに本調査の実施を前提とした協議を開始することとした。

その後、事業計画を巡って近隣住民との話し合いに時間を要したため具体的な日程を定められずにいたが、11月に入り問題の解決に一定の目途が立ったので、年が改まってから調査を開始することで合意に達した。

63年1月9日、文化財保護法第57条の2の届出書が提出され、2月15日付けで県教育長から調査実施を本旨とする通知書が事業者宛に送付された。その後数次に及ぶ調査実施方法等に関する打合せを重ねた結果、店舗部分の調査を先行し、専用住宅部分については4月に入ってから実施することで合意した。以上の経過を経て4月11日事業者から調査実施依頼書が教育委員会に提出され、4月19日から6月27日にかけて発掘調査が取り行われたのである。

調査により13世紀前半から15世紀中半に至る時期の建物や井戸等の諸遺構が、大量の瓦を始めとする種々の遺物と共に検出され、六浦路沿いの様相を知る貴重な手掛かりを得ることができた。

## 2　北条時房・顕時邸跡

鶴岡八幡宮前、若宮大路東側の区域を占める遺跡内の大路に面した、雪ノ下一丁目265番3に所

在する。

昭和62年10月、店舗併用住宅建設に係わる事前相談があり、周辺の調査例から相当規模の遺構が残っている可能性が高いので試掘調程を経た上で協議を進めることとした。11月４日試掘調程を実施し、中世遺構が良好に残存している状態を確認した。11月20日、事業者と協議し設計変更の可否について検討を依頼するが、11月24日に不可能であるとの回答を得たので事前調査の実施方法等についての協議を開始する。また、同日文化財保護法第57条の２の届出書が提出され、これを受けて県教育委員会と本件の取り扱い方について協議したところ、専用住宅相当域を対象に国庫補助事業調査を実施すべきとの指導を得た。

63年１月11日、県教育長名による発掘調査実施を旨とする通知書が事業者宛に送付され、直ちに具体的な施工方法等を打合せするが、工程上の都合により土留め工事等の準備作業が終わってからの４月中に開始することで合意した。

以上の経過を経て、３月30日に事業者から調査実施依頼書が教育委員会に提出され、４月19日から７月16日にかけて現地調査が行われたのである。

調査により13世紀前半から14世紀後半に至る時期の建物跡を中心とする各種遺構と、日用生活品を主とする多量の遺物を得られた。特に14世紀始めの礎石建物の発見は、若宮大路沿いにおける最初の発見例であり多くの成果が得られたと評される。

3　長谷小路周辺遺跡

長谷寺から六地蔵に至る区域を占める長谷小路周辺遺跡の内、由比ヶ浜三丁目258番８に所在する。

昭和61年11月26日、専用住宅建設に係わる開発行為の事前様談があり、周辺での調査例に鑑みて試掘調査を実施のうえ協議をすすめることとした。翌62年６月11日から20日にかけて試掘調査を実施したところ、古代から中世に至る３－４枚の遺構面が検出され、現設計内容では事前調査は不可避であると判明した。調査結果にもとづき７月初旬に設計変更の可否について協議するが、不可能であるとの回答を得たので、県教育委員会と取り扱い方を協議したところ国庫補助事業調査として実施すべきとの指導を得た。これにもとづき直ちに調査の実施方法等についての打合せを開始し、その中で敷地内に隣接して建設が予定されている共同住宅域を先に調査し、63年度に入ってから専用住宅域を国庫補助事業調査として行うことで合意に達した。

昭和62年10月７日、文化財保護法第57条の２の届出書が提出され、続いて11月２日に調査実施を旨とする県教育長名の通知書が事業者宛に送付される。11月16日から始まった共同住宅域の調査が終盤を迎えた昭和63年５月23日、事業者から調査実施依頼書が教育委員会に提出され、６月２日から８月31日にかけて発掘調査が行われたのである。

調査によって古代から中世の住居跡や建物跡等が検出され、また同時代の埋葬人骨を伴う墓壙も

数多く発見でき、砂丘上の遺跡の在り方についての貴重な資料が得られたのである。

4　米町遺跡

中世商業区域と目される米町遺跡内の、大町二丁目2411番２に所在する。

昭和62年１月、店舗・事務所併用住宅建設に係わる事前相談があり、試掘調査を実施のうえ協議をすすめることとした。２月３日、試掘調査を行ったところ中世遺構が良好に残存していたため、設計変更の可否についての検討を事業者に依頼した。然しながら事業計画が未確定段階であるため暫く協議を延期せざるを得なかった。

63再４月15日、事業計画が確定し協議を再開するが、設計内容に変更が無いことが確認されたため、県教育委員会と取り扱い方について協議したところ、専用住宅相当域を国庫補助事業調査として実施すべきとの指導を得たので、文化財保護法第57条の２の届出書の提出を求め調査方法等に関する打合せを継続した。４月23日届出書が提出され、続いて５月16日に県教育長名で調査実施を旨とする通知書が事業者宛に送付された。

以上の経過を経て、６月15日に事業者から調査実施依頼書が教育委員会に提出され、７月20日から７月26日にかけて発掘調査が行われたのである。

調査により、14世紀代の建物跡が検出されるなどの諸成果が得られた。

5　米町遺跡

同遺跡内の大町二丁目933番他に所在する。

昭和62年10月、共同住宅併用住宅建設計画に係わる開発行為の事前相談があり、地下駐車場が計画に含まれているので試掘調査を実施のうえ協議をすすめることとした。63年２月18日、試掘調査を行ったところ中世遺構が良好に残存しているため、設計変更についての検討を依頼した。３月24日、事業者から変更が不可能であるとの回答を得たため、県教育委員会と協議したところ専用住宅相当域を対象に国庫補助事業調査を実施すべきとの指導を得た。これを受けて直ちに調査方法等の協議を開始した。

４月７日、文化財保護法第57条の２による届出書が提出され続いて４月27日付けで県教育長名による調査実施を旨とした通知書が事業者宛に送付された。

以上の経過を経て、６月21日に事業者から調査実施依頼書が教育委員会に提出され、８月１日から９月19日にかけて発掘調査が行われたのである。

調査により12世紀末期から14世紀前半期に亙る建物・井戸等が検出され、舶載陶磁器も多数出土するなど、従来調査例が希少であった、いわゆる町屋遺跡の様相を解明する手立てが得られたと評されよう。

## 6　北条泰時・時頼邸跡

鶴岡八幡宮正面の若宮大路東側から小町大路にかけての区域を占める北条泰時・時頼邸跡は若宮大路幕府跡とも目されるが、その内の小町大路に面した雪ノ下一丁目432番2に所在する。

昭和63年6月、医院併用住宅の建設計画に係わる事前相談がありRC造の設計計画内容であるので試掘調査が必要であることを説明し、7月2日同調査を実施する。調査の結果、地表下140㎝程で遺構面を検出したため、直ちに設計変更を含む協議を開始するが、変更が不可能であると判明したので県教育委員会と協議し、掘削深度が遺構面に達しない布基礎部分を除く杭打箇所内の、専用住宅相当域を対象にして国庫補助事業調査を実施すべきとの指導を得た。

これを受けて調査方法等を協議決定のうえ、7月19日文化財保護法第57条の2の届出書が提出され、続いて8月16日付けで県教育長名による調査実施を旨とする通知書が事業者宛に送付された。そして8月18日に事業者から調査実施依頼書が教育委員会に提出され、9月1日から9月14日にかけて調査が行われたのである。

調査により小町大路に沿って南北に走行する幅約3㍍の大溝が検出されたが、これは若宮大路沿いの大溝に匹敵する規模を有するのであり、鎌倉の中世都市構造を考えるうえで貴重な資料となったのである。

## 7　北条泰時・時頼邸跡

遺跡東隅辺りに位置する雪ノ下一丁目395番に所在する。

昭和62年12月、共同住宅併用住宅建設に係わる開発行為の事前相談があり、試掘調査を実施し協議をすすめることとした。同調査は既存建物の解体工程の関係で暫く間をおいた5月10日に実施された。調査の結果、既存建物のため一部破壊されているものの全体的には中世遺構が良好に残存するので設計変更の可否を含めた協議を行うが変更が不可能であると確認されたため、専用住宅相当域を対象に国庫補助調査をすべしとの県教育委員会の指導に基づき実施方法等を事業者と協議する。そして5月18日に文化財保護法第57条の2の届出書を提出され、6月13日付けで県教育長名による調査実施を旨とする通知書が事業者宛に送付された。これを受けて更に調査方法についての細部を調整した後に8月17日、事業者から調査実施依頼書が教育委員会に提出され9月8日から10月11日にかけて発掘調査が行われたのである。

調査により、邸内コーナー域の施設を示すと考えられる大型の柱穴列等の遺構が検出されるなどの諸成果が得られた。

## 8　材木座町屋遺跡

史跡和賀江嶋を中心とした商業区域と目される、材木座町屋遺跡内の材木座四丁目 260番１他に所在する。

昭和63年１月、倉庫併用住宅建設に係わる開発行為の事前相談があり、試掘調査を経たうえ協議をすすめることとした。２月16日、同調査を実施した３面に亙る中世遺構面が検出されたのでRC造３階建・地下１階の当該設計内容では事前調査の実施が不可避であることが判明した。このため設計変更の可否についての検討を依頼したところ、困難である旨の回答を得た。これを受けて２月27日、県教育委員会と協議し専用住宅相当域の国庫補助事業調査を実施すべきとの指導を得たので、直ちに調査方法等の打合せを開始したのである。

ところが５月11日に事業者側の事由により事業計画が変更され、同時に設計内容も再検討する旨の意向が示された。続いて６月21日、設計変更結果が伝えられ、鉄骨造３階建・布基礎となったことが判明した。これに伴い調査の対象区域も布基礎部に縮小され、同域内の住宅相当部分を国庫補助事業調査することとした。

７月８日、文化財保護法第57条の２の届出書が提出され、これに対する県教育長名の調査実施を旨とする通知書が９月７日付けで事業者宛に送付された。以上の経過を経て９月12日に事業者から調査実施依頼書が教育委員会に提出され、９月19日から９月30日にかけて発掘調査が実施されたのである。

調査によって13世紀末期から14世紀中半期の、多量の吹子の羽口等の製鉄遺物を伴う方形竪穴遺構などが検出され、当地域の考古学的性格を示唆する成果が得られたのである。

## 9　若宮大路周辺遺跡群

鎌倉の中枢部の一角を占める若宮大路周辺遺跡群の北西側、雪ノ下一丁目210番他に所在する。

昭和62年５月、共同住宅併用住宅建設に係わる開発行為の事前相談があり、直ちに試掘調査を実施し協議をすすめることとした。６月23日から27日にかけて行われた試掘調査によって良好な状態で残存する中世遺構が確認され、現設計内容では調査実施が不可避であると判明した。しかし計画変更が不可能であるとの回答を得たため、県教育委員会の指導により専用住宅相当域を対象に国庫補助事業調査をすることとし、その具体的実施方法を協議した結果、11月中旬頃に共同住宅域の調査を開始し、専用住宅域調査は63年度に実施することで合意に達した。また同日、文化財保護法第57条の２による届出書が提出され、11月２日付で県教育長名による調査実施を旨とする通知書が事業者に送付された。しかし、11月21日事業者側からその後の開発手続きや解体工程等の事情により共同住宅域の調査開始を63年４月以降に変更したいとの申し入れがあり、協議の結果その意向に沿って全体の工程を変更することとした。

その後、細部に亙る協議を重ね、昭和63年４月26日に調査実施依頼書が事業者から教育委員会に提出され、共同住宅域に続き10月１日から平成元年１月16日にかけて調査が実施されたのである。

調査により14世紀代を中心とする各種の建物遺構や工芸品的木製遺物が多数発見され、都市遺跡の解明研究上極めて貴重な成果が得られた。

10　若宮大路周辺遺跡群

遺跡内の今小路に西面した扇ガ谷一丁目74番８他に所在する。

昭和63年７月11日、店舗併用住宅建設に係わる事前相談があり、試掘調査を実施のうえ協議をすすめることとした。７月18日に行った同調査によって３面以上に及ぶ中世遺構面を検出し、７月20日に設計変更を含めて協議するが、変更するのは不可能であると判明したため、県教育委員会の指導により専用住宅域を対象に国庫補助事業調査を実施することにした。７月22日、文化財保護法第57条の２の届出書が提出され、続いて８月16日に調査実施を旨とする県教育長名の通知書が事業者宛に送付された。その後調査実施方法を還って数次に亙る協議を重ね10月20日、事業者から調査実施依頼書が教育委員会に提出され、11月４日から12月10日にかけて発掘調査が実施されたのである。

調査により13世紀初期から15世紀中半期の５面に及ぶ遺構面が検出され、都市域における中世遺構の密度高い構成状況が確認されたのである。

11　若宮大路周辺遺跡群

遺跡内の若宮大路に東面した、小町二丁目280番２に跟在する。

昭和63年５月、店舗併用住宅建設に係わる事前相談があり、試掘調査を実施のうえ協議をすすめることとした。５月30日、同調査を実施したところ近世の攪乱を受けた部分は多いものの、若宮大路沿いの大溝跡等の残存が確認されたため、６月３日設計変更も含めて協議を行った。ここで設計変更は不可能であると判明したので、専用住宅相当域を対象に国庫補助事業調査を実施すべきとの県教育委員会の指導に基づき調査方法等の打合せを開始した。しかし、工事工程に未確定なところがあり、それが定まるまで協議を延期せざるを得なかった。その後８月31日、工程の概要が決定したので協議を再開し、９月７日文化財保護法第57条の２の届出書が提出され、10月13日に県教育長名による調査実施を旨とする通知書が事業者宛に送付された。その後、準備工事に時間を費やしたが、平成元年１月12日に調査実施依頼書が事業者から教育委員会に提出され、１月19日から１月27日にかけて発掘調査が行われたのである。

調査により若宮大路に沿って走行する大溝と鎌倉時代以前に存在した河川を発見し、鎌倉の都市構造の変遷を知る重要な資料が得られたのである。

12　笹目遺跡

長谷小路北側の山間を占める笹目遺跡内の笹目町330番１に所在する。

昭和63年５月15日、共同住宅併用住宅建設に係わる開発行為の事前相談があり、試掘調査を実施のうえ協議をすすめることとした。４月４日と５日に同調査を実施したところ、掘削予定深度の120㎝内に２面の中世遺構面が検出されたため設計変更の可否の検討を依頼した。４月15日、変更が不可能である旨の回答を得たので、専用住宅相当域の国庫補助事業調査を実施すべきとの県教育委員会の指導に基づき調査実施方法等の協議を開始した。６月１日、文化財保護法第57条の２の届出書が提出され、６月22日に県教育長名による調査実施を旨とする通知書が事業者宛に送付された。その後調査方法の細部に関わる協議を重ね、９月13日に調査実施依頼書が事業者から教育委員会に提出され、共同住宅域の調査に続いて平成元年１月28日から２月21日にかけて当調査が開始されたのである。

調査により、寺院建築的な建物遺構が発見され、調査の事例が比較的希少であった同遺跡の性格を究明する上で貴重な資料が得られたのである。

# 昭和63年度調査地点一覧

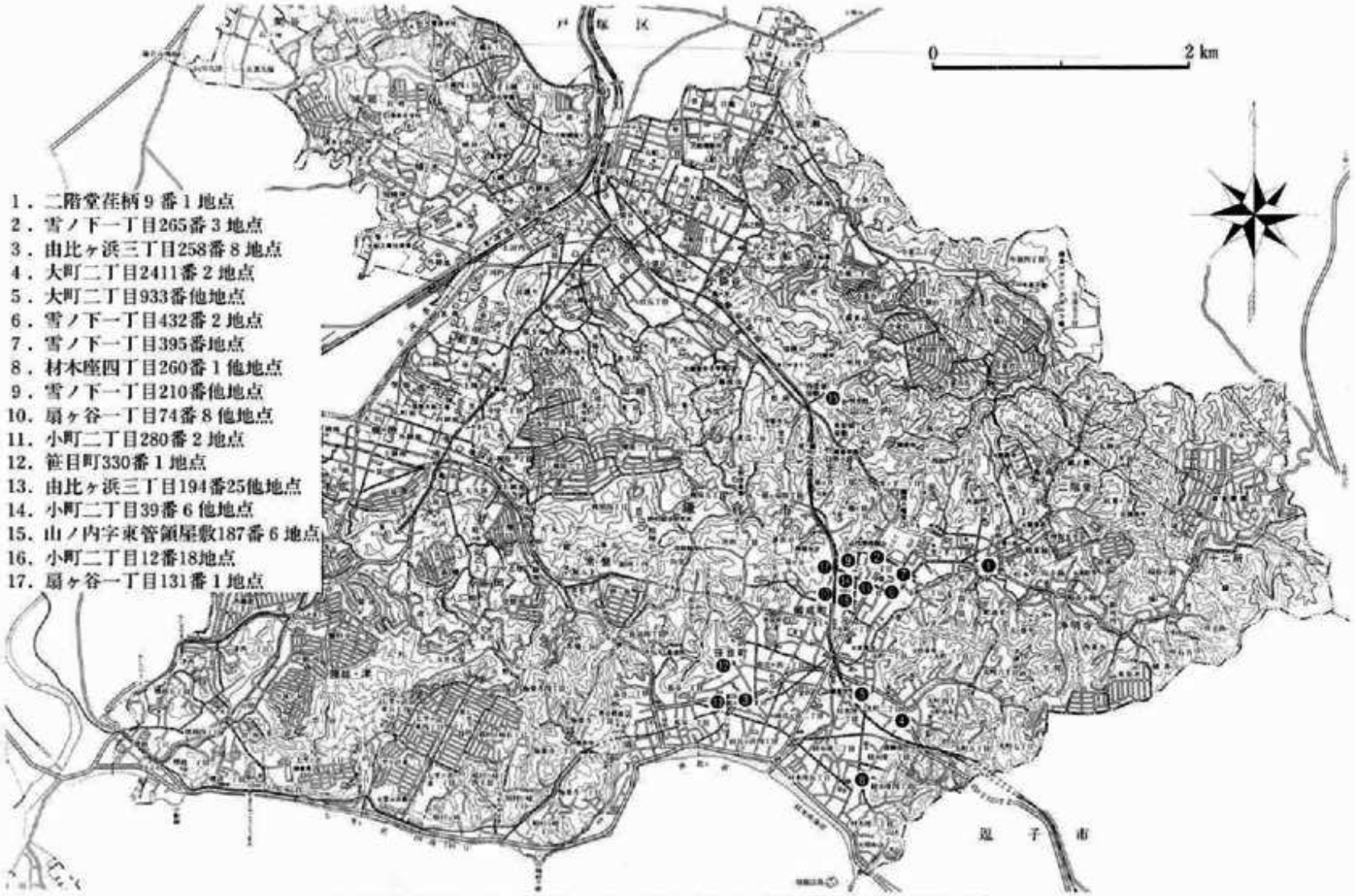
（＊印は本書所収遺跡）

| No. | 遺跡名 | 所在地 | 事業者 | 調査原因 | 種別 | 面積 | 調査期間 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 横小路周辺遺跡 (No.259) | 二階堂荏柄9番1 | 矢田　徹 | 店舗併用住宅 | 都市 | 380㎡ | 63.4.19～63.6.27 |
| 2 | 北条時房・顕時邸跡 (No.278) | 雪ノ下一丁目265番3 | 鬼頭　住江 | 店舗併用住宅 | 館 | 85㎡ | 63.4.19～63.7.16 |
| 3 | 長谷小路周辺遺跡 (No.236) | 由比ヶ浜三丁目258番8 | 河合富美子 | 専用住宅 | 都市 | 380㎡ | 63.6.2～63.8.31 |
| ＊4 | 米町遺跡 (No.245) | 大町二丁目2411番2 | 安藤　勇 | 店舗・事務所併用住宅 | 都市 | 15㎡ | 63.7.20～63.7.26 |
| 5 | 米町遺跡 (No.245) | 大町二丁目933番他 | 紫　正明<br>紫　幸江 | 共同住宅<br>併用住宅 | 都市 | 70㎡ | 63.8.1～63.9.19 |
| ＊6 | 北条泰時・時頼邸跡 (No.282) | 雪ノ下一丁目432番2 | 安田　擁年 | 医院併用住宅 | 館 | 20㎡ | 63.9.1～63.9.14 |
| ＊7 | 北条泰時・時頼邸跡 (No.282) | 雪ノ下一丁目395番 | 伊原　永子 | 共同住宅<br>併用住宅 | 館 | 50㎡ | 63.9.8～63.10.11 |
| 8 | 材木座町屋遺跡 (No.261) | 材木座四丁目260番1他 | 山本　元洋 | 倉庫併用住宅 | 都市 | 60㎡ | 63.9.19～63.9.30 |
| 9 | 若宮大路周辺遺跡群 (No.242) | 雪ノ下一丁目210番他 | 瀬古　美年 | 共同住宅<br>併用住宅 | 都市 | 443㎡ | 63.10.1～元.1.16 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 10 | 若宮大路周辺遺跡群（No.242） | 扇ガ谷一丁目74番8他 | 小黒　俊治 | 店舗併用住宅 | 都市 | 20㎡ | 63.11.4～63.12.10 |
| 11 | 若宮大路周辺遺跡群（No.242） | 小町二丁目280番2 | 渡辺　昌子 | 店舗併用住宅 | 都市 | 40㎡ | 元.1.19～元.1.27 |
| 12 | 笹目遺跡（No.207） | 笹目町330番1 | 島津　忠承 | 共同住宅併用住宅 | 都市 | 80㎡ | 元.1.28～元.2.21 |

# 本書所収の昭和62年度調査地点

| No. | 遺跡名 | 所在地 | 事業者 | 調査原因 | 種別 | 面積 | 調査期間 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 若宮大路周辺遺跡群（No.242） | 小町二丁目12番18 | 石井　清 | 自己用店舗 | 都市 | 130㎡ | 62.4.22～62.7.10 |
| 2 | 今小路西遺跡（No.201） | 扇ガ谷一丁目131番1 | 錦　妙子 | 店舗併用住宅 | 都市 | 87㎡ | 62.7.12～62.8.14 |
| 3 | 長谷小路周辺遺跡（No.236） | 由比ヶ浜三丁目194番25他 | 秋山　茂 | 店舗併用住宅 | 都市 | 60㎡ | 62.7.13～62.8.31 |
| 4 | 若宮大路周辺遺跡群（No.242） | 小町二丁目39番6他 | 上条　漾 | 専用住宅 | 都市 | 130㎡ | 62.11.16～63.2.20 |
| 5 | 明月院旧境内遺跡（No.139） | 山ノ内字東管領屋敷187番6 | 中川　明男 | 専用住宅 | 都市 | 100㎡ | 63.1.4～63.1.9 |




昭和63年度の緊急発掘調査地点(1～12)と本書掲載の62年度調査地点(13～17)

# I. 米町遺跡

## 大町二丁目2411番2地点

# 例　言

1　本報は鎌倉市大町二丁目2411番地２における住宅建設に伴う発掘調査の報告書である。

2　発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が、米町遺跡発掘調査団と併行して実施した。

3　本書の執筆、図版作成及び編集は福田　誠が行なった。

4　調査体制は以下のとおりである。

担当者　福田　誠（鎌倉市教育委員会嘱託）

調査員　武　淳一

作業員　（社）シルバー人材センター鎌倉市高齢者事業団

# 第一章　調査地点の位置と歴史的環境

本遺跡は鎌倉市大町二丁目2411番２に所在する。遺跡名の米町は、『鎌倉志』によると、「大町ノ四辻ヨリ西へ行横町ヲ米町ト云う」。明応頃の作と思われる津久井光明寺蔵『善宝寺寺地図』によると、米町は大町大路にあったことになる。

米町は商売を営んでよい町屋の一つで、鎌倉時代に最も賑わった地域である。鎌倉時代の鎌倉では、商売の人々は一定地域に居住し、特定な地域以外で商売をしてはならなかった。『吾妻鏡』建長三年（1251）十二月三日条に、商売を営んでよい所として、大町、小町、米町、亀谷辻、和賀江、大倉辻、化粧坂山上の七個所を指定し、かつ、小路に牛をつないではならぬこと、小路を清掃することなど、厳密に規定する。後に文永二年（1265）三月五日条では、鎌倉中に散在する町屋を止め、改めて大町、魚町、米町、武蔵大路下、須地賀江橋、大倉辻の七個所を定めている。

大町大路から名越を抜ける道は、鎌倉から三浦に通じる重要な道筋にあたり、名越切通しに通じていた。名越切通しは鎌倉七口と呼ばれる七切通しの一つで、鎌倉と三浦との境界であった。

本遺跡は町屋の米町と東側一帯に広がる名越とのちょうど境付近にあたるか。

米町から名越にかけては、北条氏の名越氏、三善氏等の有力御家人の館、日蓮上人縁りの妙法寺、安国論寺、長勝寺があり、さらに新善光寺、慈恩寺、長善寺などの寺院も建ち並んでいた。

図１　調査地点位置図

# 第二章　調査の経過

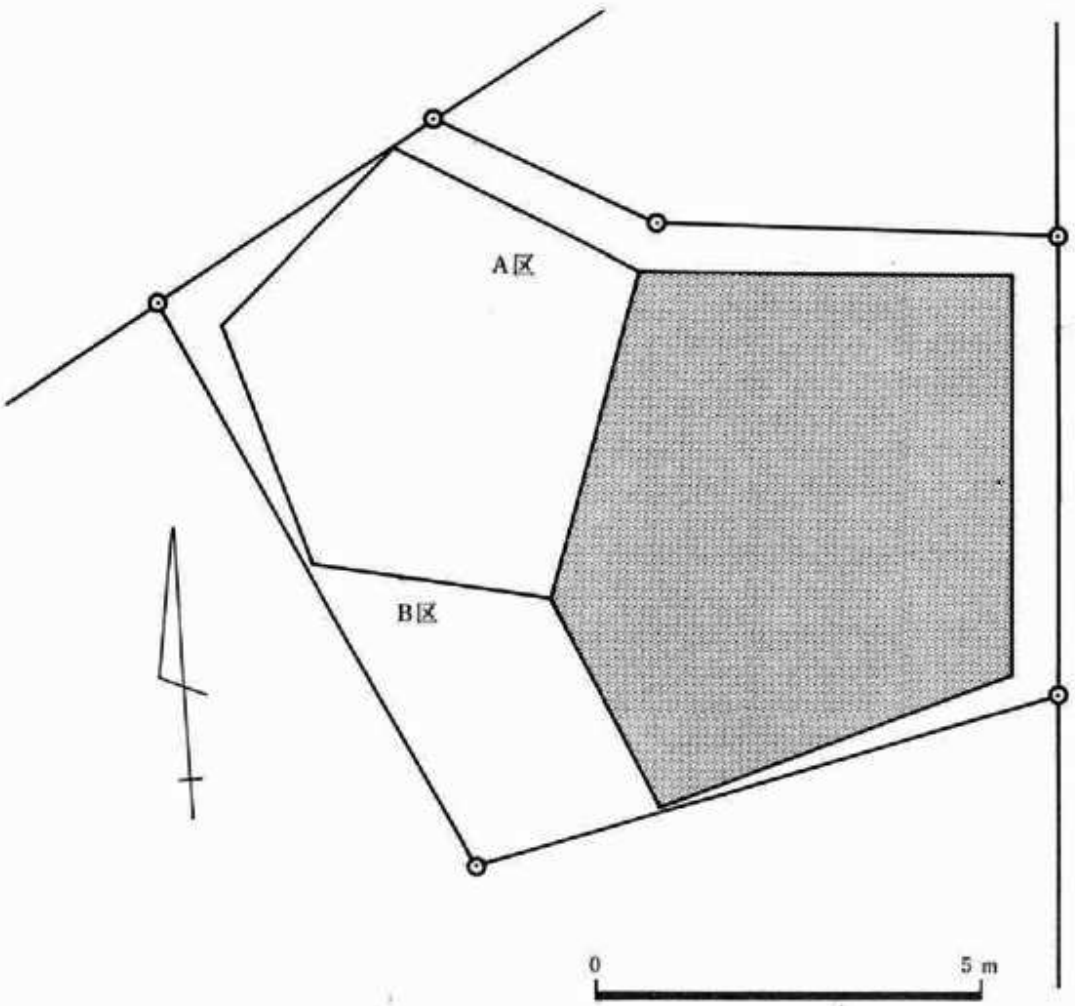
本遺跡に対する発掘調査は、鎌倉市教育委員会による試掘調査を経て実施した。

試掘調査の結果を踏まえて、本調査は昭和63年７月７日に掘削作業を開始し、同年７月24日に現地調査を終えた。

敷地面積は、約77㎡であるが、この内国庫補助による調査は敷地の道路側約30㎡である。

# 第三章　検出した遺構

調査地点は南北に延びる国道134号線の西側に面している。現地表面から約80cmまで近・現代の埋




**第２図　調査区設定図**

め土で覆われていた。

遺構検出面は中世基盤層である黒色土の地山である。地山上面まで近・現代に削平を受けて、一部地山面上に20cm程の厚さの包含層が認められた。

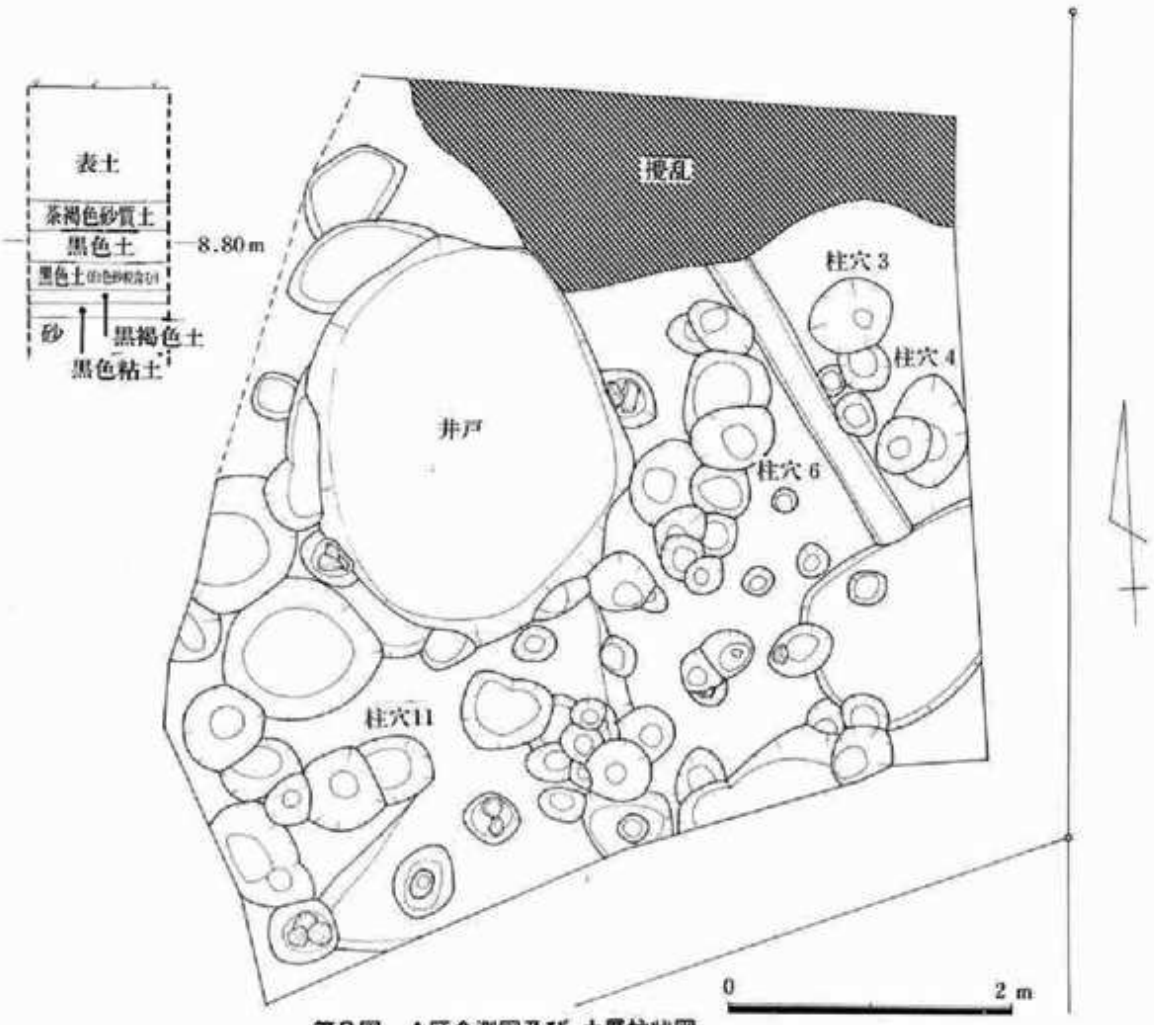
この包含層と地山面を切り込んだ遺構を検出した。

検出した遺構は、柱穴54口、土壙6基と井戸が1基である。削平により上層の遺構面が遺存していないため、遺構の新旧関係は不明なものが大半を占める。

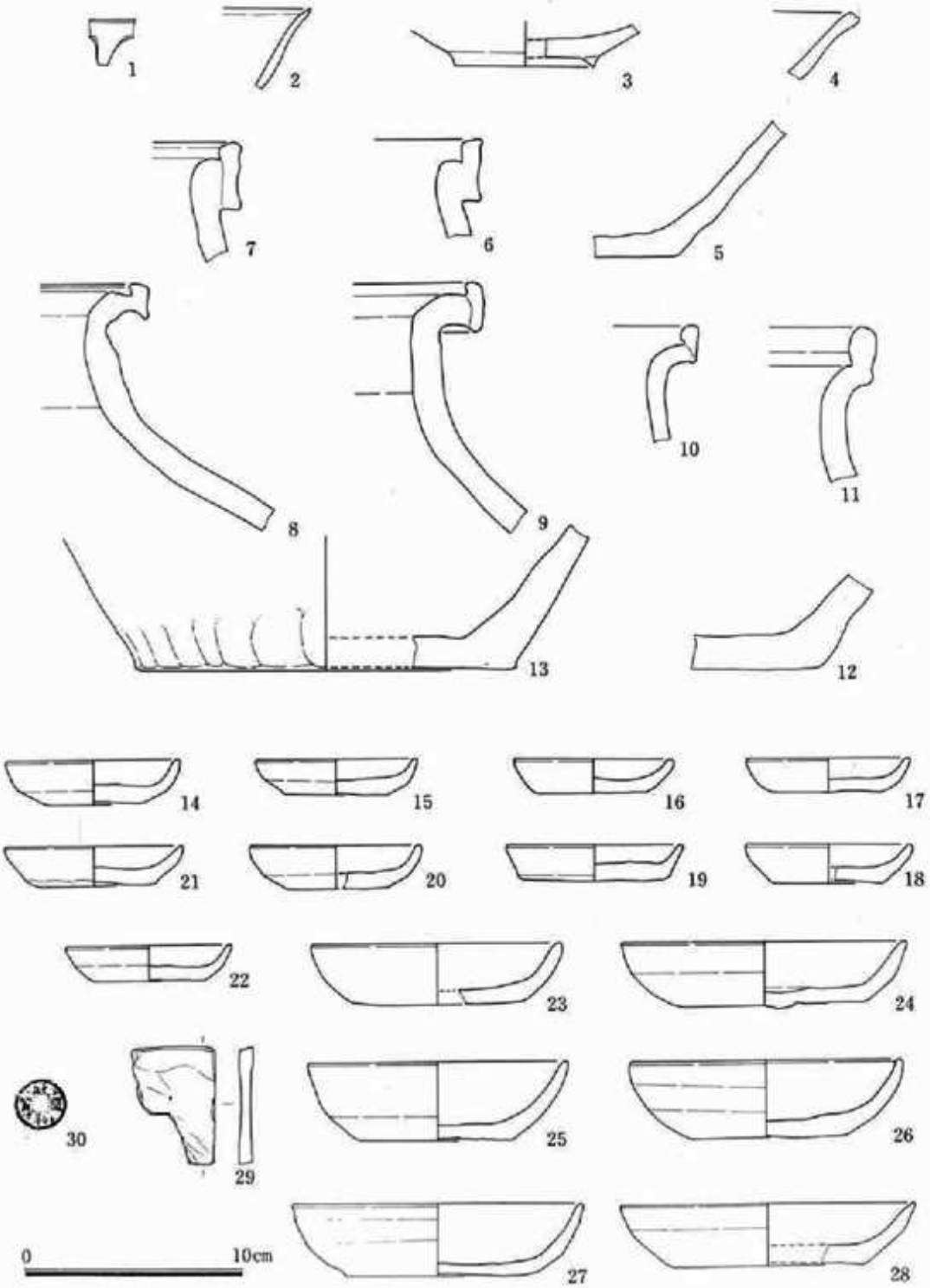
柱穴の中には、土丹を根固めに入れ込んだものも見られるが、特に各柱穴間に規則性は認められなかった。

土壙は径40～60cm、深さ30cm程のものが大半を占める。特に並ぶ等の規則性はない。

井戸はほぼ中央付近で検出された。短径2.2m、長径2.7mの楕円形の掘方で、深さは約1m程である。井戸枠は廃棄された時に抜き取られたのが遺存していなかった。出土遺物から14世紀代の年代が与えられる。




第3図　A区全測図及び、土層柱状図


1
2
3
4
7
6
5
8
9
10
11
13
12
14
15
16
17
21
20
19
18
22
23
24
30
29
25
26
0
10cm
27
28

第4図　出土遺物

# 第四章　出土した遺物

舶載陶磁器

1は青磁盤の底部片である。素地は白色を呈し粘性が強い。釉は青緑色で透明。2は白磁口兀皿の口縁部片である。素地は白色を呈する。釉は透明。1・2共に井戸出土である。

国産陶器類

3は山茶碗の底部片である。底部の復原径6.4cmで、糸切り高台である。素地は青灰色で砂っぽい。4は山茶碗である。素地は灰白色で1mm大の砂粒を多く含む。3・4共に井戸出土である。
5は捏鉢の底部～体部片である。素地は灰褐色を呈し、内面は摩耗している。地山出土である。6～11は常滑甕の口縁部片である。6・7は頸部に幅の広い口縁帯を貼り付けている。共に0.5～2mm大の白色粒を多く含み、粘性は強い。6は井戸、7は柱穴4出土である。8～11はいずれも大きく外方に折曲げた頸部に幅の狭い口縁帯を貼り付けている。この口縁帯は下方には拡がらない。8・10・11は井戸、9は地山出土である。12・13は底部片である。13の復元径は17.5cmである。0.5～2mm大の白色粒を含み、粘性は強い。12は地山、13は柱穴3出土である。

かわらけ

14～22までは口径7～8cmの小型品である。21の手捏ね成形を除きあとはすべて底部に糸切り、スノコ痕を有する。19・21以外は器壁が薄く体部は内湾ぎみに立ち上がっている。19はやや厚い底部で、体部は直線的にやや外方に摘み上げられて成形されている。21は手捏ね成形のかわらけである。指頭による圧痕は底部部分だけに認められる。

23～28は大型品のかわらけである。23は口径11.3cm器高2.8cm底径7.6cmである。内湾して立ち上がる体部を持ち、口端部は丸くおさめている。柱穴3出土。24は口径12.9cm器高2.9cm底径8.2cmである。体部中程外面に軽く陵が付く。柱穴6出土。25は口径11.8cm器高3.6cm底径8cmである。底部が小さく、器高も深い。薄い器壁は大きく内湾して立ち上がる。地山面出土。26口径12.4cm器高3.6cm底径7cmである。大きく内湾して立ち上がる体部は、口端部で内面にやや肥厚する。柱穴11出土。27は口径13.2cm器高3.5cm底径8.4cmである。大きく内湾して立ち上がる体部外面に軽く2条の陵が付く。28は口径13.5cm器高2.9cm底径8.8cmである。口径に対し器高が低い。直線的に斜め上方に立ち上がる体部は、外面中程に明瞭な陵を持つ。27・28共に地山面出土である。14～28までのかわらけは、胎土に針状物を含み赤灰色を呈す。

その他の遺物

29は砥石である。硬質の泥岩製であり仕上げ砥であると思われる。欠損しているが復元形は扁平

な長方形である。砥石面は平滑で、鋭い鋭利な削痕を残す。

30は銭である。政和通宝で、西暦1111年に北宋で作られたものである。 29・30共に地山面出土。

## 第五章　まとめ

本遺跡の様相は簡単な構造の建物が、雑然と建ち並んでいる姿と推定されよう。規格性のない柱穴、数多くの土壙がこのことを示している。ごく狭い範囲の調査のため、米町全体の中でどこに位置付けられるのか不明である。ただ狭い調査地の中で多くの柱穴等が見い出せたことから、数多くの建物が次々と造られて賑わった、中世町屋に住む人々の生活の息吹が感じ取られた。

後世の削平がほとんど地山面まで及んでいたため、遺構の新旧関係は不明である。出土した遺物から本遺跡は14世紀中頃から15世紀にかけて栄えていたものと思われる。

町屋である米町の発掘調査はまだ始まったばかりである。この後調査が進めば、町屋の広がり、大町大路との関係などから、本遺跡の位置付けも明らかになろう。

〈文献〉

『鎌倉市史』総説編

三浦勝男『鎌倉の古絵図』（図録第16）

大三輪龍彦「中世都市鎌倉の地割試論」『仏教藝術』164号毎日新聞社1986

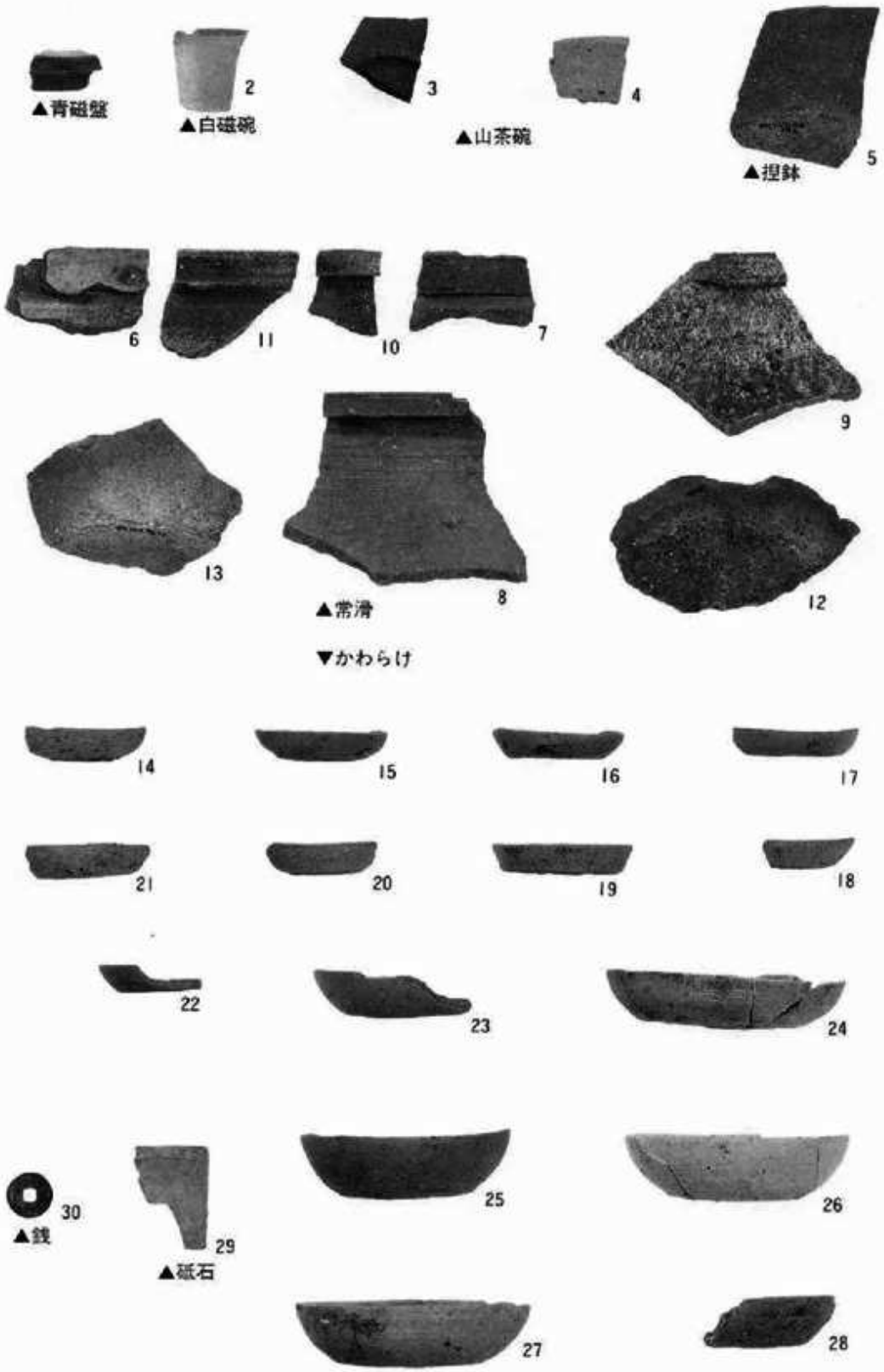
白井永二『鎌倉事典』東京堂出版

図版 1

▲1． A区全景

▼2． B区全景

## 図版2


▲青磁盤
2
▲白磁碗
3
▲山茶碗
4
5
▲捏鉢
6
11
10
7
9
13
▲常滑
8
12
▼かわらけ
14
15
16
17
21
20
19
18
22
23
24
▲銭
30
▲砥石
29
25
26
27
28

## 2．北条泰時・時頼邸跡

雪ノ下一丁目432番２地点

例　言

1　本報は鎌倉市雪ノ下一丁目432番２地点に所在する、安田医院改築工事に伴う発掘調査報告である。

2　発掘調査は、昭和63年８月22日から同年９月５日にかけて、吉田章一郎氏を団長とする北条泰時・時頼廊跡発掘調査団が行った。

3　調査団の構成は以下のとおり。

団長　吉田章一郎（青山学院大学名誉教授）

主任調査員　菊川英政（鎌倉考古学研究所）

調査員　関口真理

調査補助員　山田健二、折茂芳則

4　本報中、第三章４ｅは関口真理が執筆し、他は菊川英政が執筆した。遺物実測・図版作製には関口、山田健二、折茂芳則があたり、菊川が編集した。

5　使用した写真は、遺構・遺物とも菊川が撮影した。

6　出土品等発掘調査資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

7　発掘調査・遺物整理に際し、次の諸氏、諸機関から貴重な御教示、御援助を賜わった。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）

河野真知郎、原廣志、馬淵和雄、松尾宣方、玉林美男、吉田茂夫、須田乃布美、堀田清子、鎌倉市高齢者事業団、㈱相互建設工業

# 目　次

例　言…… (22)
目　次…… (23)

## 本文目次

第一章　位置と歴史的環境…… (24)
第二章　調査の概要…… (25)
第三章　検出遺構と遺物…… (26)
　1　層序
　2　トレンチⅠ・Ⅱ
　3　トレンチⅢ・Ⅳ
　4　出土遺物
第四章　調査のまとめ…… (42)

### 挿図目次

第1図　調査地点の位置
第2図　トレンチ配置図
第3図　トレンチⅠ・Ⅱ検出遺構図
第4図　トレンチⅢ・Ⅳ検出遺構図
第5図　舶載陶磁器
第6図　国産陶器・金属・土製品
第7図　かわらけ(1)・トレンチⅣ
第8図　かわらけ(2)・トレンチⅣ
第9図　かわらけ(3)・トレンチⅢ
第10図　瓦
第11図　木製品(1)
第12図　木製品(2)
第13図　調査地点断面図

### 図版目次

図版1　調査地点近景、トレンチⅠ溝
図版2　トレンチⅡ全景、トレンチⅢ木材、トレンチⅣ木材
図版3　トレンチⅢ全景、トレンチⅣ全景
図版4　トレンチⅢ全景、トレンチⅣ全景
図版5　舶載陶磁器
図版6　国産陶器
図版7　かわらけ大皿（12～14層・7～11層）
図版8　かわらけ小皿（12～14層・7～11層）
図版9　羽口、転用硯、常滑盤、「永福寺」銘瓦
図版10　木製品
図版11　自然遺物

# 第一章　位置と歴史的環境

治承四年十月、鎌倉に入った源頼朝は、早速街作りを開始している。治承四年十二月、道を直くにし、寿永元年三月には、段葛の築造を行っている。その後も、文治三年三月梶原景時に、文治四年四月八田知家に課して、鎌倉中の道路を改修、築造したことが、『吾妻鏡』の記事から判明している。[註1]

小町大路の名は、『吾妻鏡』建久二年三月四日の条を初見とするが、若宮大路の完成と合わせ、市街東辺を画する道路として、小町大路の整備も行われたに違いない。若宮大路が、源氏の氏神を祀る鶴岡八幡宮への参道的側面をもつ重要幹線であるのに対して、小町大路は、幕府や政所と当時の貿易港である和賀江島とを繋ぐ道であり、また北条執権時代には、得宗家をはじめ一族の家敷地が小町大路周辺に集中して営まれるなど、若宮大路と並ぶ重要幹線道路として位置づけられる。

現在の小町大路が、当時のそれと変わらぬ位置であったか否かは別として、今回調査を行った場所は、北条泰時・時頼邸跡とされる区域[註2]の東辺に当り、現在の小町大路際である。既に発掘調査が実施された西辺（若宮大路際）[註3]、北辺（横大路際）[註4]とあわせ、三辺での調査が行われたことになる。

泰時・時頼邸に関しては、既に他地点での報告書中に紹介されているので、ここでは割愛する。

註1　『吾妻鏡』の記事に関しては、高柳光寿『鎌倉市史・総説編』吉川弘文館　昭和47年に拠った。

註2　神奈川県遺跡台帳No282

註3　「北条泰時・時頼邸跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書1』市教育委員会　昭和60年3月

第1図　調査地点の位置

『北条泰時・時頼邸跡』同発掘調査団編

昭和60年8月

註4　本報告書中に所収
（雪ノ下1－395地点）

（調査地点）

1．雪ノ下1－432－2地点
2．雪ノ下1－372－7地点
3．雪ノ下1－371－1地点
4．雪ノ下1－419－3地点
5．雪ノ下1－374－2地点
6．雪ノ下1－395－地点

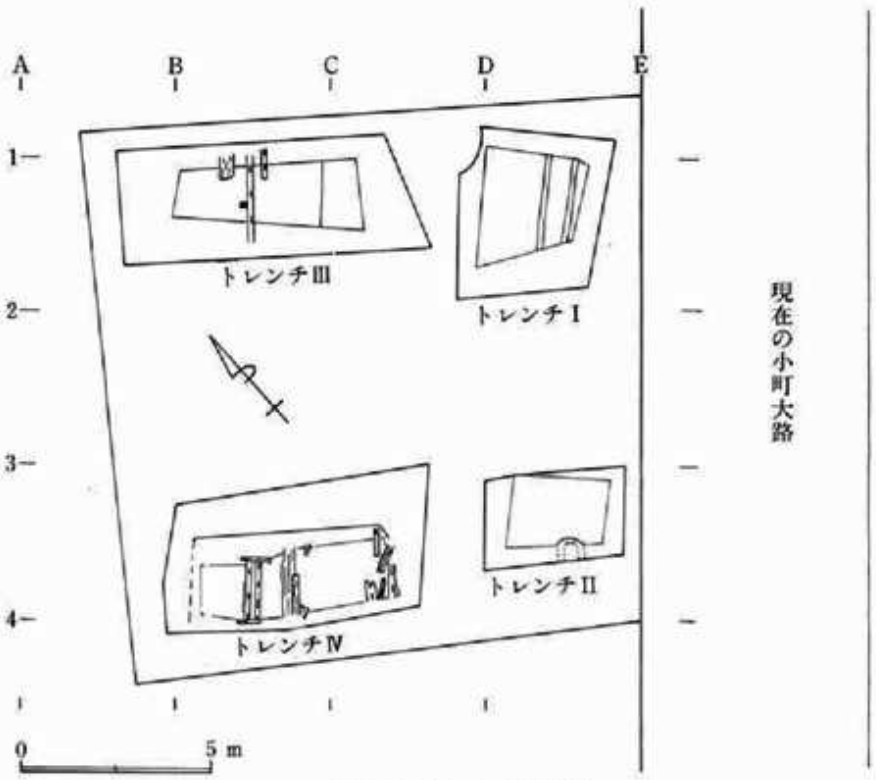
# 第二章　調査の概要

鎌倉市教育委員会による事前の試掘調査結果から、建築基礎杭の部分以外、遺構の破壊はないとの判断を受け、発掘調査は、基礎杭部分に限って実施することとなった。

調査は、昭和63年８月22日から開始され、同年９月５日をもって終了した。当初、約２ｍ×２ｍの範囲で９箇所の坪掘りを行なう予定であったが、一部で小町大路側溝と考えられる遺構が検出され、発掘深度も地表下３ｍに達したため、作業の安全上、坪掘り箇所を６箇所に減じ、更に、側溝にあたった４箇所は、事業者の了承のもと、２箇所づつを掘り繋いで調査を行った。

最終的には、坪掘り箇所が４箇所となり、各々にトレンチⅠ～Ⅳの名称を付した。

グリッドは、現在の小町大路を基軸にし、東西軸にアルファベット、南北軸に算用数字をあて、４ｍ間隔の方眼を組んだ。南北軸と磁北との偏差はＮ－43°－Ｅである。




第２図　トレンチ配置図

# 第三章　検出遺構と遺物

## 1　層序（第4図）

調査地点の土層堆積は単純である。小町大路側のトレンチⅠ・Ⅱでは、地表下1.4～1.8m（絶対高8.25m）で黒褐色地山面が露見しており、その上に、田圃床土様の暗灰色粘土、大形土丹塊による地業層、表土が堆積する。暗灰色粘土と地山面との間には、中世期の遺物包含層は存在せず、後世の削平を受けたことが明らかである。

若宮大路側のトレンチⅢ・Ⅳでは、暗灰色粘土層下が直ちに溝覆土となる。多量のかわらけを含む砂礫層、粘土層が堆積しており、溝底の地山は暗青灰色砂層である。

遺物あげの際、単層毎の遺物検出が不可能であったため、便宜上、砂礫層（第4図7～11層）、茶褐色粘土層（同図12～14層）、砂礫最下層（同図15層）の別で行った。本文中の遺物出土層位もこの名称を使用した。

## 2　トレンチⅠ・Ⅱ（第3図）

地山面上で、一条の溝が検出された。断面形は浅いU字状を呈し、暗灰褐色粘土を覆土とする。出土遺物はない。トレンチⅡでは、遺構確認面より、若干、掘りすぎているため、溝の一部が南壁際で確認されただけである。

溝の主軸方位は、N－43°－E（磁北）を測り、現在の小町大路と平行する。なお、溝と小町大路との距離は、1.5～1.8mである。

## 3　トレンチⅢ・Ⅳ（第4図）

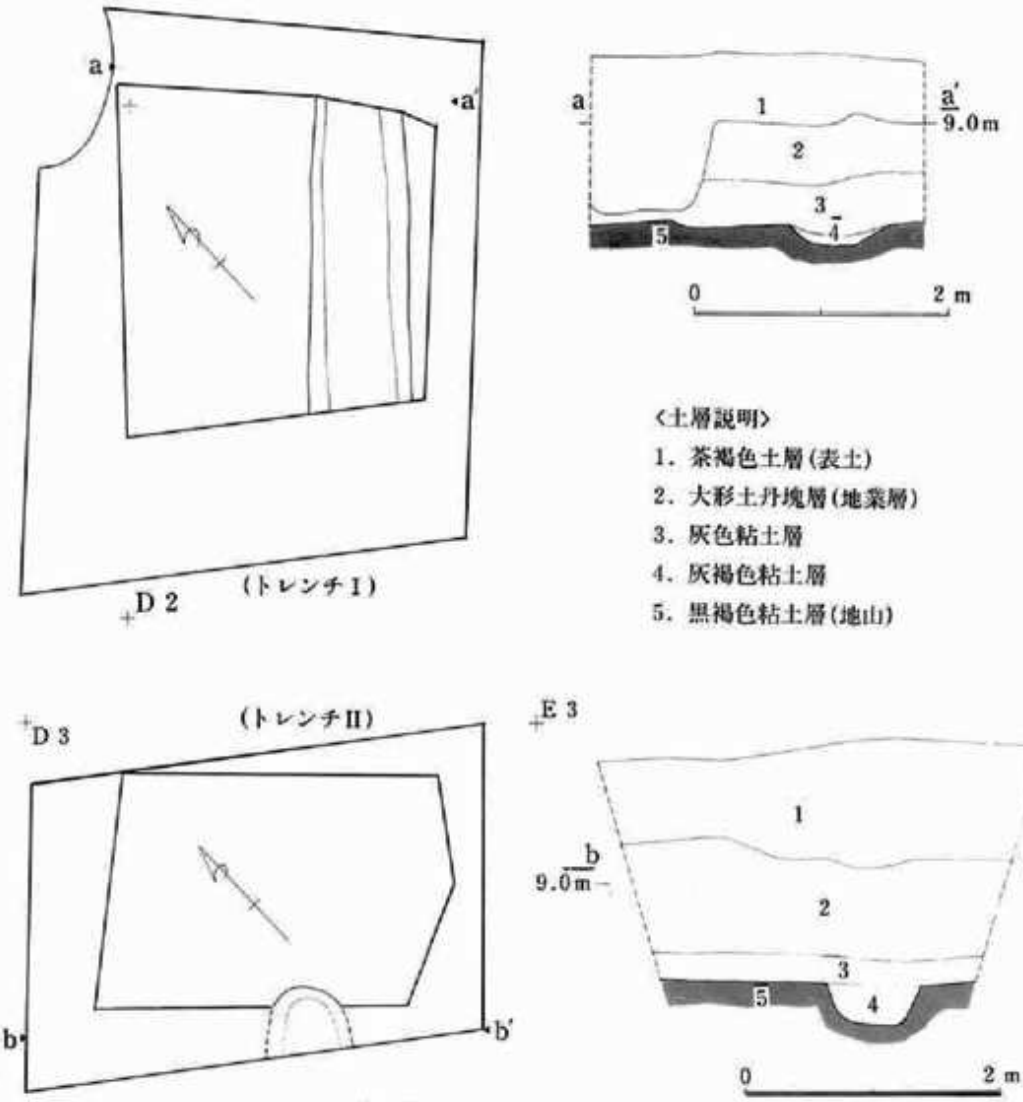
両トレンチとも、小町大路側溝と思われる遺構の中央部分にあたる。

地表下3m近くて、一部溝底を検出し得たが、溝底が暗青灰色の細砂層（地山）を切っているため、湧水によって容易に崩れ、正確な計測は不可能であった。また、溝の側壁もトレンチ内では検出できず、幾度かの改修による溝の掘り方ラインが、壁面の土層観察結果から確認されたに過ぎない。

溝の改修は、少なくとも3回行われている。トレンチⅣで検出された、枘穴入りの角材を参考にして、上位から(ア)～(ウ)の仮称を付し、角材どうしの対応関係等を調べた。

(ア)　最も上位で検出された。小町大路側の角材は、幅18cm、厚さ3cm、枘穴は2箇所残存しており、長辺20cm、短辺6cmの内法をもつ。枘穴どうしは、30cm離れて穿たれている。これと対応する若宮大路側の角材は、角材端で、連結部分にあたる。全幅は不明。厚さは6cmを測る。土丹塊と再加工した角杭を下部に置き、沈下防止の工夫をしている。

両角材の真芯間距離は3.1m。絶対高7.8mに据えられている。

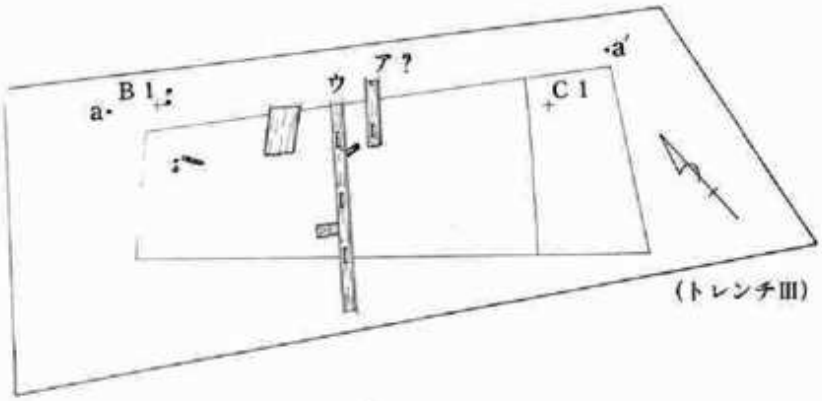



**第3図　トレンチ I・II　検出遺構図**

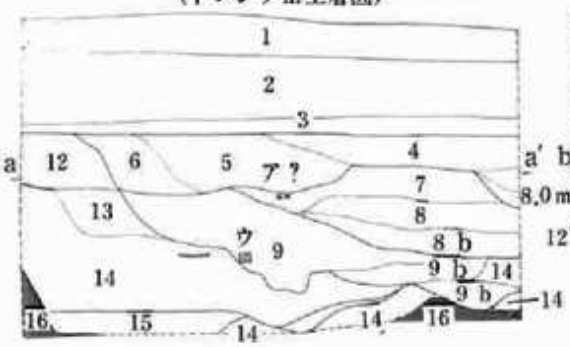
(イ)　小町大路側は、幅 8 cm、厚さ 5 cmの角材が 2 本残る。連結部分は約30cm離れ、高低差も約10cmある。各材に 1 箇所づつ、3 cm×14cmの枘穴が穿たれている。対応する若宮大路側の角材は、幅 9 cm、厚さ 5 cm、トレンチ内での連結箇所はない。枘穴は、3 cm× 9 cmの内法をもち、35～40cm間隔で穿れている。枘穴中央部に角釘の遺存する部分が 1 箇所あり、束柱の固定方法の一例を知り得る。

両角材の真芯間距離は3.2m。絶対高7.5～7.6mに据えられている。

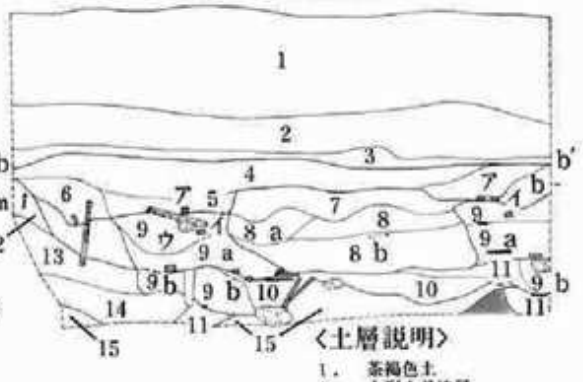
(ウ)　小町大路側の角材は、連結端部である。幅11cm、厚さ 4 cm、下部に土丹塊を据え置く。枘穴の内法は、5 ×15cm。端部ではやや大き目に穿たれている。若宮大路側の角材は、幅10cm、厚さ 7 cm。枘穴は、約45cm間隔で 3 箇所にみられる。枘穴の内法は 3 ×14cm、中央連結部のもののみ貫通する。連結部の補強として、長さ85cm、幅 5 cm、厚さ 2 cmの板材をあて、3 箇所を釘で固定する。




(トレンチIII土層図)



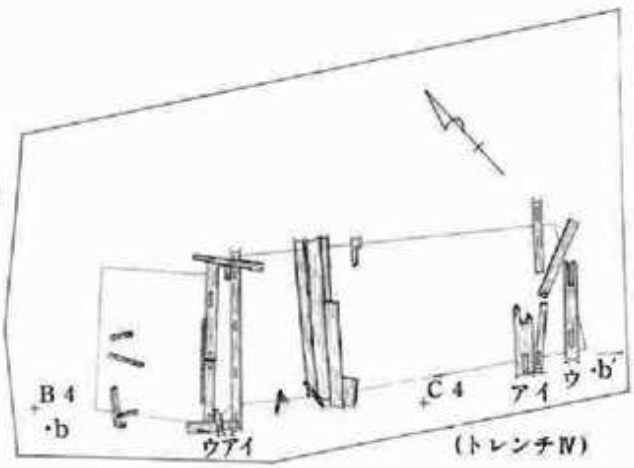

(トレンチIV土層図)




<土層説明>

1. 茶褐色土
2. 大形上井塊層
3. 灰色粘土
4. 灰褐色粘質土
5. 黄灰色粘質土
6. 黄灰色土
7. 灰褐色砂質土
8. 茶褐色砂礫層
8a. 灰白色砂層
8b. 青灰色砂礫層
9. 青灰色粘土
9 青灰色粘質土
9b. 青灰色砂質粘土
10. 黄褐色漸色土
11. 青灰色砂質
12. 茶褐色粘土
13. 灰褐色粘土
14. 灰黒色粘土
15. 青灰色砂礫層
16. 青灰色砂層(地山)

0 2 m




**第4図　トレンチIII・IV　検出遺構図**

両角材の真芯距離は3.8m。絶対高7.2mに据えられている。

トレンチIIIでは、若宮大路側の角材が検出された。IVとの対応からみると、(ア)と(ウ)であろう。(ウ)の角材下には沈下防止用に、短く切った角材が使用されている。

両トレンチで得られた建築材には、この他に、大小の杭、溝の側壁材がある。

杭は主として、若宮大路側で多く検出されたが、溝との対応関係は不明。2×2.5cm角、あるいは

3×4cm角のものが多い。大形のものでは、(イ)の上に乗った状態で検出された角杭がある。8×7cm角で、長さ75cm、頭部近くに抉りを入れている。溝の両側に並行する角材、または、その間に渡す梁のいずれかを固定するために使用されたものであろう。

溝の側壁材は、トレンチIVの中央部で検出された。幅20～28cm、厚さ1～2.5cmの板材が6枚、折り重なる状態でみつかった。1枚で壁としたのか、数枚を重ね合わせて壁としたのかは不明である。

## 4　出土遺物

### a　舶載陶磁器（第5図）

総破片数40点、完形品はない。すべてトレンチIII・IV内から出土したもので、1～9が青磁、10が青白磁、11～16が白磁である。

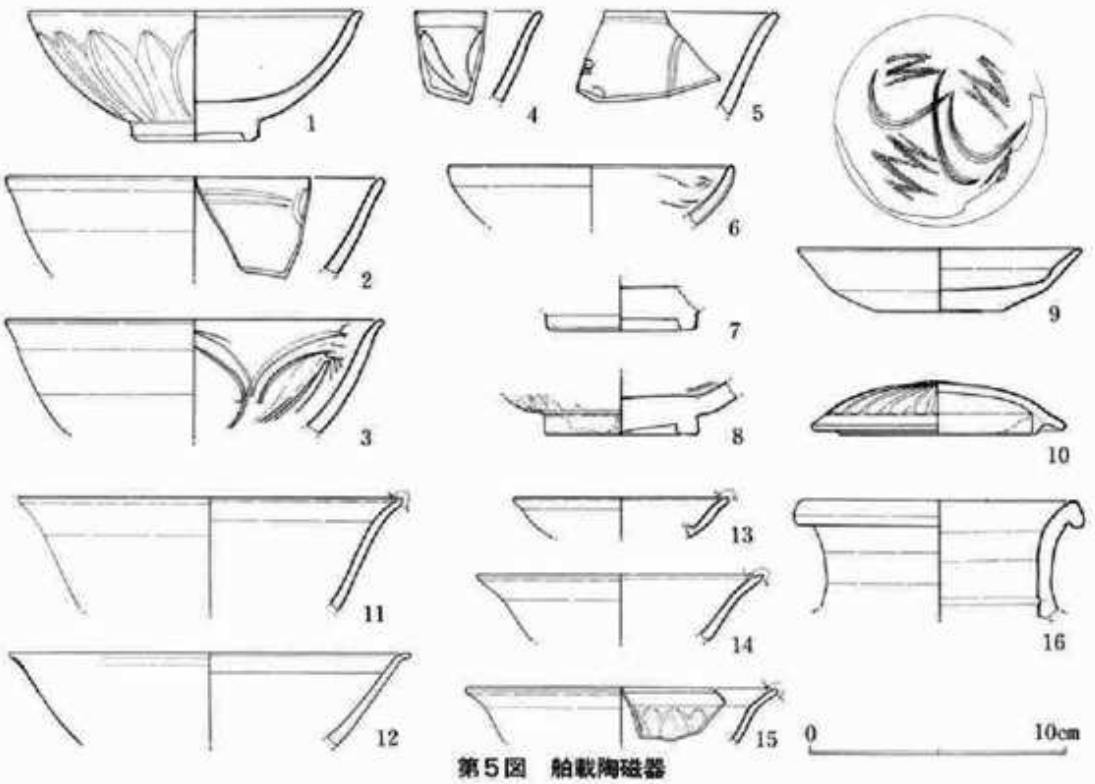
1は鎬蓮弁文碗。複弁である。釉は水青色を呈し、高台畳付け部までかかる。

2～6は劃花文碗。劃花文碗は、垂下する沈線によって文様帯を区画するもの（2・5）とそうでないもの（3・4）とに分けられる。釉色は2が青緑色、4が緑灰色、他は緑黄灰色である。6は内面に飛雲文状の文様が陰刻されるが、釉が厚く失透し、貫入も多いため不明瞭である。

7は碗底部。残存部に文様はない。緑黄色で光沢のある釉がかかる。

8は櫛描蓮弁文を外面に配し、内面に劃花文を配す。釉は緑黄色で失透している。

9は劃花文皿。内底面に櫛描劃花文を配す。釉は黄緑色で光沢をもち、透明感が強い。素地は灰白色で緻密である。




第5図　舶載陶磁器

10は頂部に蓮弁文をもつ蓋。断面に膠が付着しており、破損後も補修して使用されたものらしい。

11は口禿げ碗である。素地に黒色微粒子を多く混入し、全体の色調は暗い。

12は端反り碗。釉に光沢はない。内面の口縁部近くに一条の沈線がめぐる。

13～15は口禿げ小皿である。15は口縁部が大きく外反し、体部内面に蓮弁文を陽刻する。素地は白色緻密で、釉の透明感、光沢とも強い。

16は壺。素地に黒色微粒子を少量混入する。

図化し得ない小破片も含め、その器種別内訳をみると、青磁では碗24点（鎬蓮弁文９、劃花文11、櫛描劃花文２、不明２）、皿２点（櫛描劃花文２）、鉢あるいは盤２点。青白磁では蓋１点、梅瓶１点。白磁では碗２点（端反１、口禿１）、皿４点（口禿４）、壺２点。彩釉陶では盤２点（黄釉１、緑釉１）となり、青磁碗の出土量が全体の30％を占めている。

出土層位別にみると、砂礫最下層（第４図15層）から４・７・８・12が、茶褐色粘土層（第４図12～14層）から２・３・５・９が出土しており、他は砂礫層（第４図７～11層）からの出土である。破片も含めてみた場合、青磁劃花文碗は、３点を除いたすべてが12～15層中より出土しており、逆に鎬蓮弁文碗は１点も出土していない。白磁では端反り碗が同層中にみられ、口禿げ碗・皿は１点もない。青白磁も同層中には検出されなかった。

b　国産陶器（第６図１～８）

渥美窯、常滑窯の製品以外に、生産窯の同定が不明瞭なため、従来から「山茶碗窯系」「美濃系」と呼称される一群の製品がみられる。

１は渥美窯の甕口縁部である。口径40cm前後の大形品であろう。砂礫最下層の出土。同窯産の甕片は、１も含めて49点得られた。出土層位別にみると、砂礫層中10点、茶褐色粘土層中16点、砂礫最下層中23点となる。

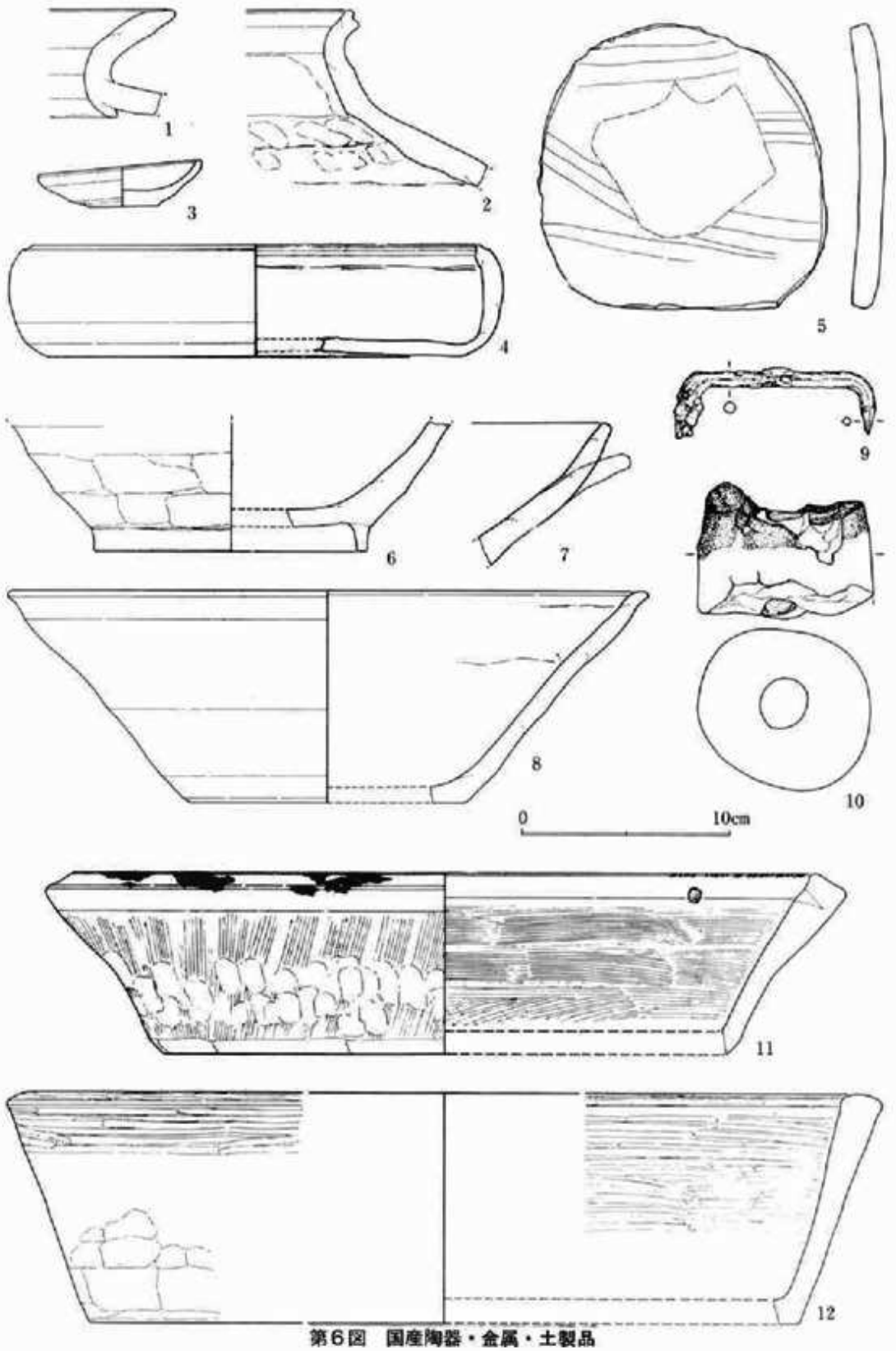
２は常滑窯の甕口縁部である。口径25cm前後のものであろう。砂礫最下層の出土。同窯産の甕片は67点得られた。その内訳は、砂礫層中24点、茶褐色粘土層中23点、砂礫最下層中20点である。

３は「美濃系」と称される山皿である。暗灰色精良な胎土をもち、焼成堅緻。内外面とも丁寧なナデを施す。砂礫最下層中より出土。山茶碗、山皿の類はこの１点だけである。

４は常滑窯の盤である。体部から口縁部にかけて内彎し、口唇部は断面三角形状を呈する。体部下半と底部外周は、４段にわたって回転篦削りがなされるが、体部中位の篦削り痕は、ナデによって大部分が消されている。砂礫層中の出土。

５は転用硯。渥美窯産の甕体部片を利用している。周囲は打ち欠いたままである。中央部分が７cm×７cm程の範囲で磨耗しており、墨の付着がみられる。砂礫層中の出土。

６～８は捏ね鉢である。６は「山茶碗窯系」と称されるものである。長石粒の多い粗い胎土で、灰白色を呈する。体部下半に回転篦削り痕を残す。砂礫層中の出土。「山茶碗窯系」捏ね鉢片は11点得られた。出土層位は砂礫層中５点、茶褐色粘土層中１点、砂礫最下層中４点である。７は常滑窯産の捏ね鉢。片口が付く。口唇部は平坦に仕上げている。砂礫層中の出土。８も常滑窯産の捏ね




第6図　国産陶器・金属・土製品

鉢である。小片ながら復原可能。片口の有無は不明。外面はナデ調整を施す。口唇部は小さく外反し、丸められる。高台はなく、砂底である。砂礫最下層の出土。胎土、焼成から常滑窯産とみられる捏ね鉢片は、7・8を含めて10点得られた。砂礫層中4点、口唇部が平坦で浅い沈線が廻るタイプが多い。茶褐色粘土層中1点、8のタイプである。砂礫最下層中5点、8のタイプが多い。なお、これら以外に、渥美窯産と思われる捏ね鉢片が1点ある。口唇部は8のタイプで、砂礫最下層から出土している。

c　金属製品（第6図9）

地下水位が高いためか、金属製品は僅かしか出土していない。

9は鏡。長さ9cm（3寸）。両端を直角に曲げ、先端部を四角錐状に尖らせる。茶褐色粘土層中の出土。

他に「天聖元宝」（初鋳1023年）が2点出土した。1点は砂礫層中から、もう1点は茶褐色粘土層中の出土である。

d　土製品（第6図10～12）

10は羽口である。先端部は直径約8cm、火熱と溶着物で変質している。砂礫最下層中より出土。

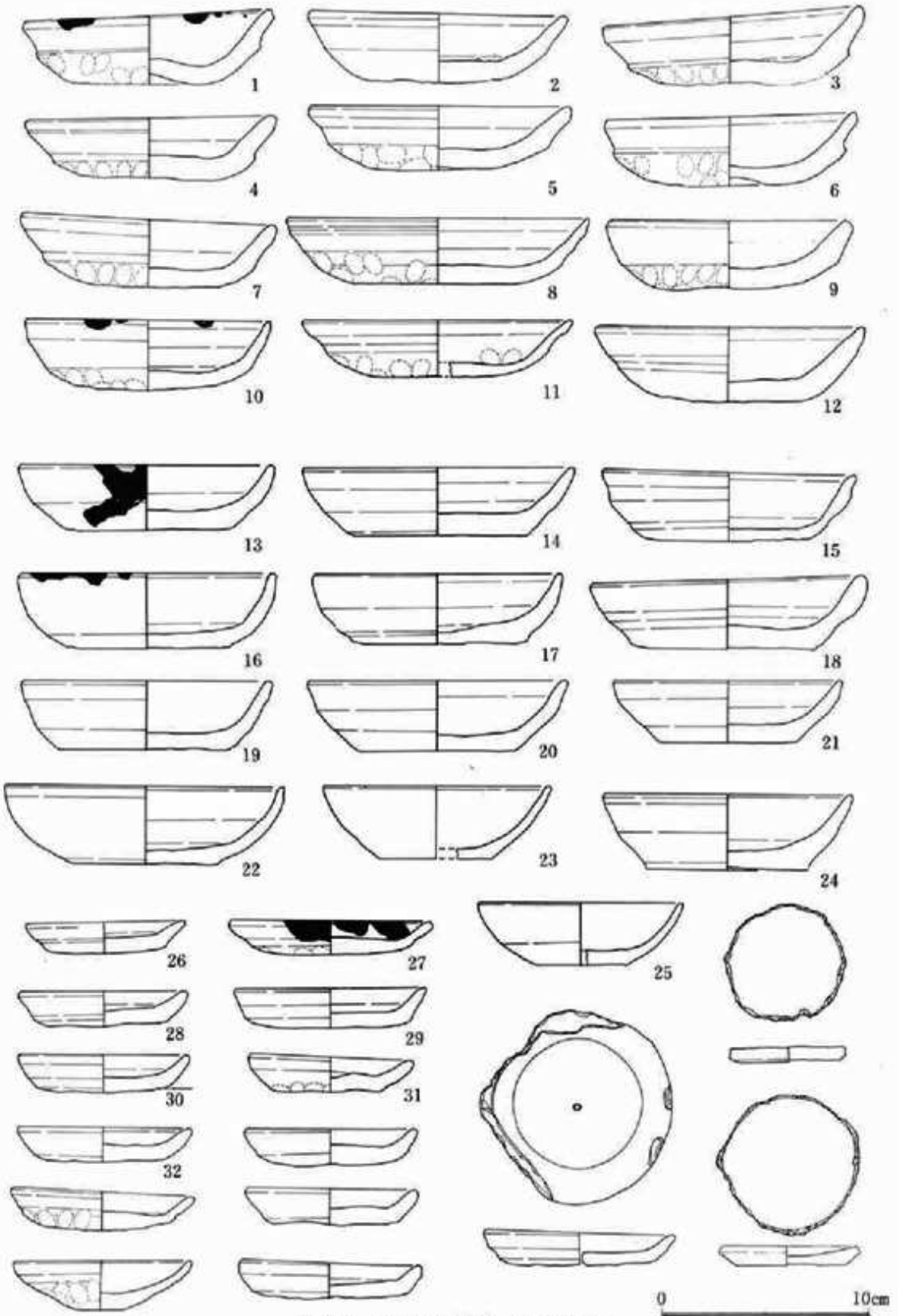
11・12は手焙りである。生産地は不明。11は鎌倉市内遺跡に多くみられるタイプで、浅鉢形を呈する。胎土は砂、長石粒を含むやや粗い土で、器表は暗灰色～黒灰色である。外面の調整は、体部中位に指頭圧痕を残したまま、縦方向の刷毛を施し、底部際は篦削りで仕上げる。口縁部には装飾効果を高めるため、黒漆が塗られていたようである。12も市内遺跡で類例をみるが、数量的には少ないものである。胎土中に長石粒を多く含み、器表は灰白色を呈する。調整も丁寧で、底部際を篦削り後、体部中位以上をナデ、更に口縁部付近に篦磨きを施す。11・12とも砂礫層中の出土。手焙り片は、他に3点が同層中から出土している。いずれも瓦質。なお、出土した手焙り片の中に、土場として使用されたものは1点もない。

e　かわらけ（第7～9図）

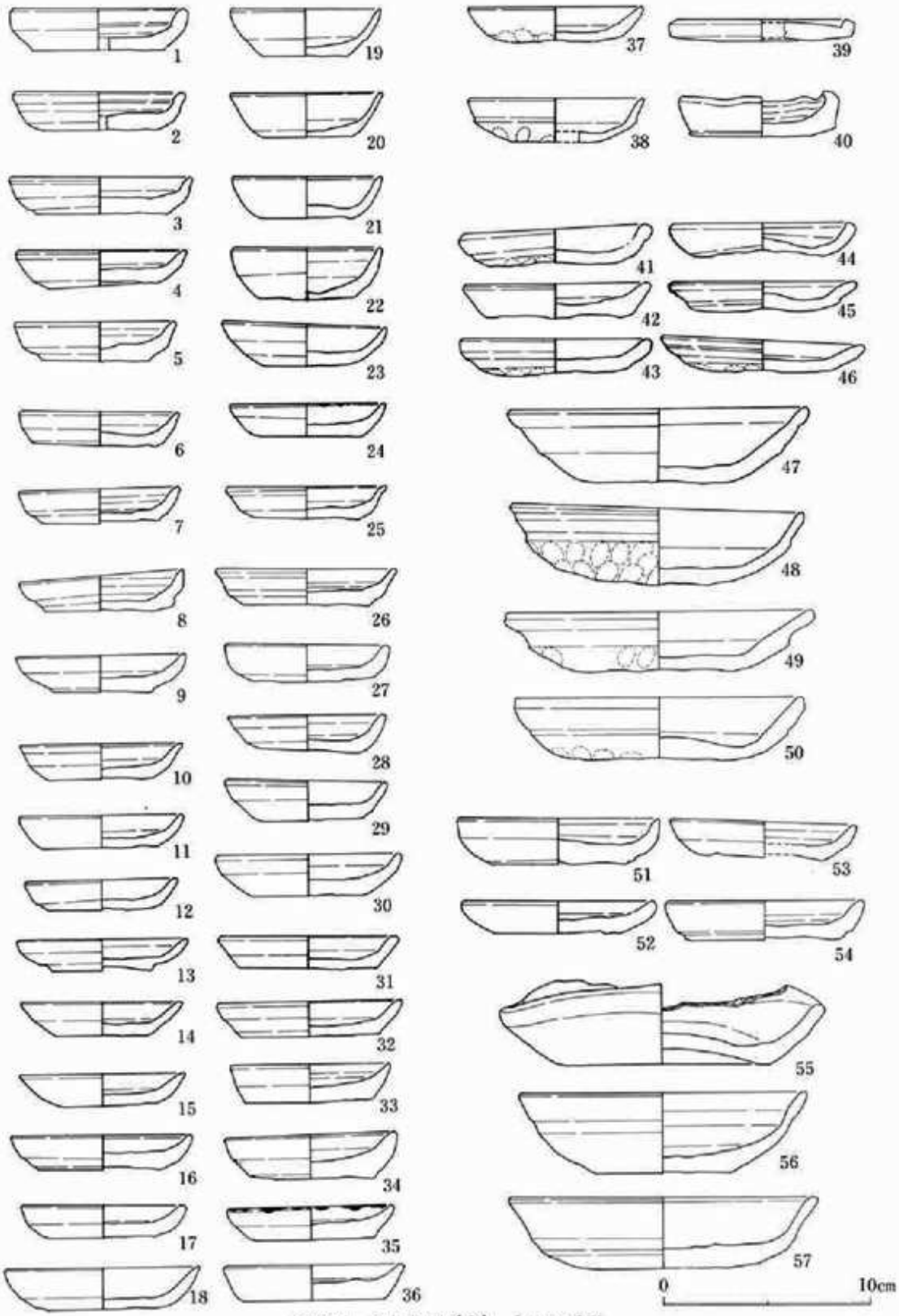
トレンチ掘削による調査のため、遺構に伴う出土状況を見ることは難しいが、トレンチIII・IV内で検出された小町大路側溝と思われる溝中から出土した多量のかわらけについては、溝覆土の層位に従って考察することにした。トレンチIII・IVの溝以外の部分、及び他のトレンチからのかわらけの出土は小片を含めても非常に小量であったので、ここでは特に記述を行わなかった。

トレンチIII・IVで検出された溝からは約7000点にのぼるかわらけ片が出土したが、実測はほぼ完形に近い443点について行い、うち約三分の一を本稿中に図示した。両トレンチ間の未掘部分についても同様の遺物分布があるとすれば、さらに多くのかわらけが調査地点周辺にあると思われ、この側溝へのかわらけの大量投棄の跡がうかがわれる。

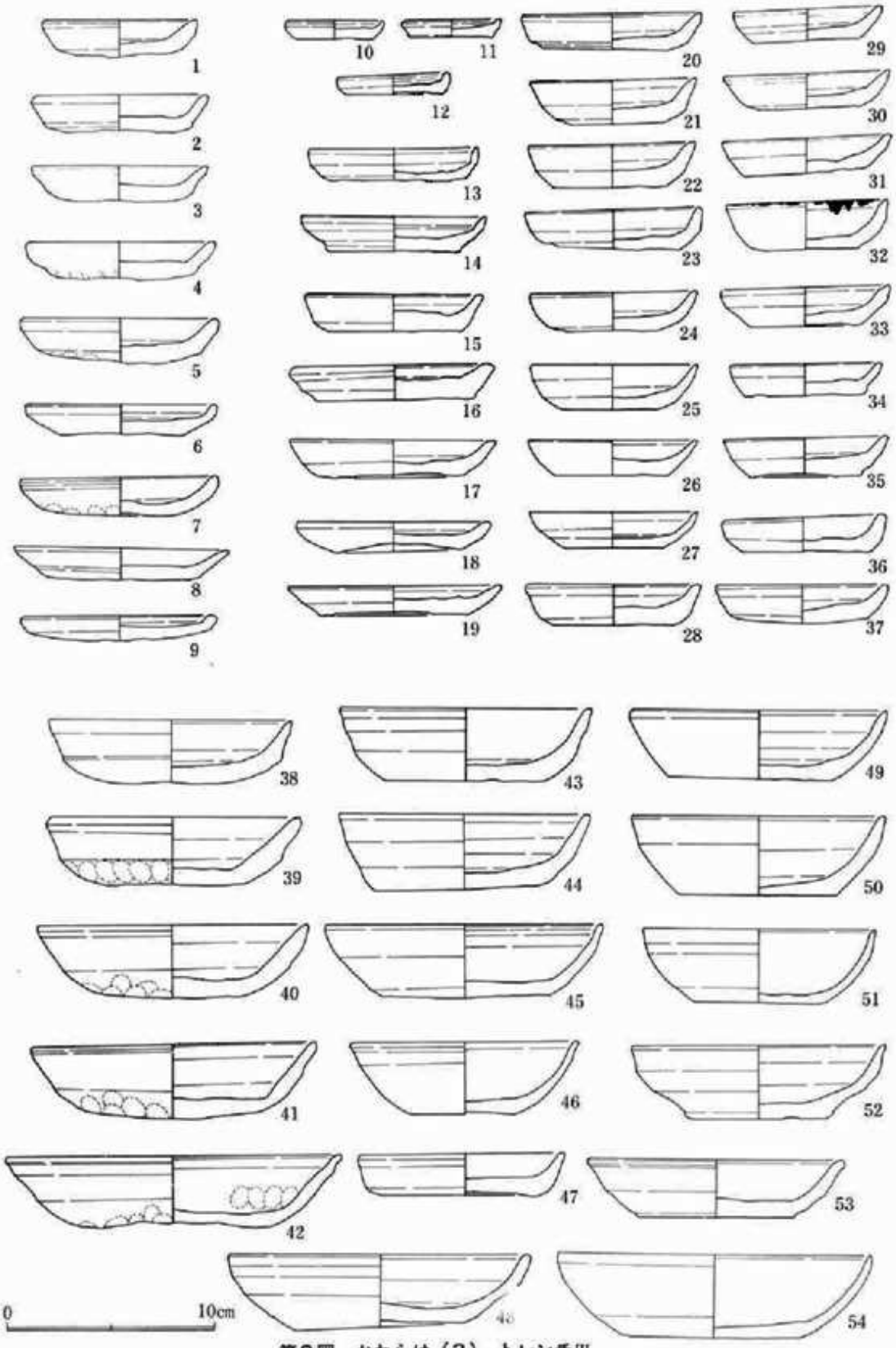
かわらけを含む溝覆土は砂礫層（第4図7～9）、茶褐色粘土層（同12～14）、砂礫最下層（同15）の三層に大別できるが、砂礫層と茶褐色粘土層中の遺物には年代的に大差はみられない。そこでこの二層からの遺物は一括して図示した。




第7図　かわらけ（1）　トレンチⅣ




第8図　かつらけ（2）　トレンチⅣ




第9図　かわらけ（3）　トレンチIII

砂礫層中からは全体の約七割が出土した。河野真知郎氏による鎌倉のかわらけ編年[註1]において鎌倉第Ⅲ～Ⅳ期にあたるものが中心であるが、その前後の時期と思われるものも混じっている。

トレンチⅢ・Ⅳの間で遺物分布に変化はない。

手づくねの大皿（第７図１～12、第９図38～42、うち39、42は茶褐色粘土層中）では、外面下半に稜があり、口唇部が緑帯状を呈するタイプが多くみられる（第７図１、３、４、５、６、７、８、９、11、第９図38、39、42）。この特徴は手づくねの中でも古手の特徴である。第７図１、６は指頭による底部の調整において、中央部にかなりはっきりと窪みが作られている。

糸切りの大皿（第７図13～25、第９図43～54、うち43、44、45、52は茶褐色粘土層中）では、器高が高く、底径が小さく、底部脇から外傾ぎみに開き、その後内湾ぎみ、あるいは直線状に立ち上がる形のものがいくつかみられる（第７図20～25、第９図46、50、51、52、54）。このタイプで薄手のものは胎土が細い粒子で焼成も良好、鎌倉第Ⅴ期にかかる新しいものと思われる（第７図23、25、第９図46、51）。一方、第９図47は器高が低く、底径の大きな、やや古手の様相をもっている。[註2]

手づくね小皿（第７図26～38、第９図１～９、うち５、９は茶褐色粘土層中）では器形が偏平、底部がほぼ平らな、古手の特徴を持つものが含まれている（第７図26、27、29、34、第９図８）。27は灯明皿に使用されたもので、内面に煤が付着するほか、表地の三分の一程度までが黒ずんでいる。第７図36は底部が非常に小さく、器壁が底部から急角度で立ちあがっている。手づくね小皿としては変則的な器形であるが、本地点では図示した以外にも一点出土している。

糸切り底小皿（第８図１～36、39、40、第９図10～37、うち第９図13、14、17、18、19、32は茶褐色粘土層中）では、第８図３、８、26、[註3]33、35、36が古手の特徴を持つ。第８図１、２は口唇部内側が厚く、内側に丸い縁がついたような器形である。第８図19～22、第９図25、32は薄手の小椀状の器形で、鎌倉第Ⅳ期から第Ⅴ期のやや新しいものと思われる。

砂礫層最下層（第８図41～57）からは明らかに古手と考えられるものが高い割合で出土した。また糸切り底よりも手づくねの方が多かった。

手づくね小皿は器高が低く、口径が大きく、ほぼ平底の、鎌倉第Ⅱ期の特徴を備えたものが多い（42、43、45、46）。大皿も49、50は全体に扁平な器形で、外面の稜が鋭く、緑帯状の口唇部を持っている。

糸切り底の小皿は器高が低く、底径の大きいものが多い。大皿の56、57は器高・口径・底径に若干の差があるものの、薄手でナデ痕が多いなど側面観が似通っている。鎌倉第Ⅰ期、第Ⅱ期の特徴的な例の中にこれらとよく似たものがあり、かなり古手のものである可能性が考えられる。

最後に特殊なかわらけについて触れておく。

第７図38は手づくねの小皿で、穿孔がなされている。これは焼成の後に加工されたものとみられる。

同39、40は糸切り底の底部のみが残って円盤状を呈している。加工されたものか、自然に破損したものかは不明である。

いわゆる「内折れ」かわらけでは、第８図39は糸切りの小皿で、口唇部は直立かやや外傾ぎみに折れている。第９図９は手づくねの小皿、折れの程度はわずかで、口唇部が３～５㎜立ちあがって内側を囲むような形をしている。第９図10～12は口径４～５cmとごく小さいもので、いずれも糸切り底である。また口唇部はわずかに内傾か、直立している。

白かわらけは三点を実測した。第７図８、11は破片実測を行ったが同一個体であった。灰白色、器高は低く、底部は広く、焼成は良好、口径13cmの大皿である。第８図37、38はいずれも乳白色、薄手の小皿である。

註１　河野真知郎「鎌倉における中世土器様相」シンポジウム「古代末期～中世における在地系土器の諸問題」神奈川考古同人会、昭和62年２月

註２　『研修道場用地発掘調査報告書』同発掘調査団編　昭和58年11月

註３　『蔵屋敷遺跡』同発掘調査会編　昭和59年２月、におけるかわらけ編年による

f　瓦（第10図）

合計23点の瓦片が出土している。出土層位別の内訳は、砂礫層中11点（男瓦２、女瓦９）、茶褐色粘土層中１点（女瓦１）、砂礫最下層中11点（男瓦１、鐙瓦１、女瓦９）である。そのうち、図示した瓦は、１・２・４が砂礫層中から、10が茶褐色粘土層中から出土し、他は砂礫最下層中より出土したものである。

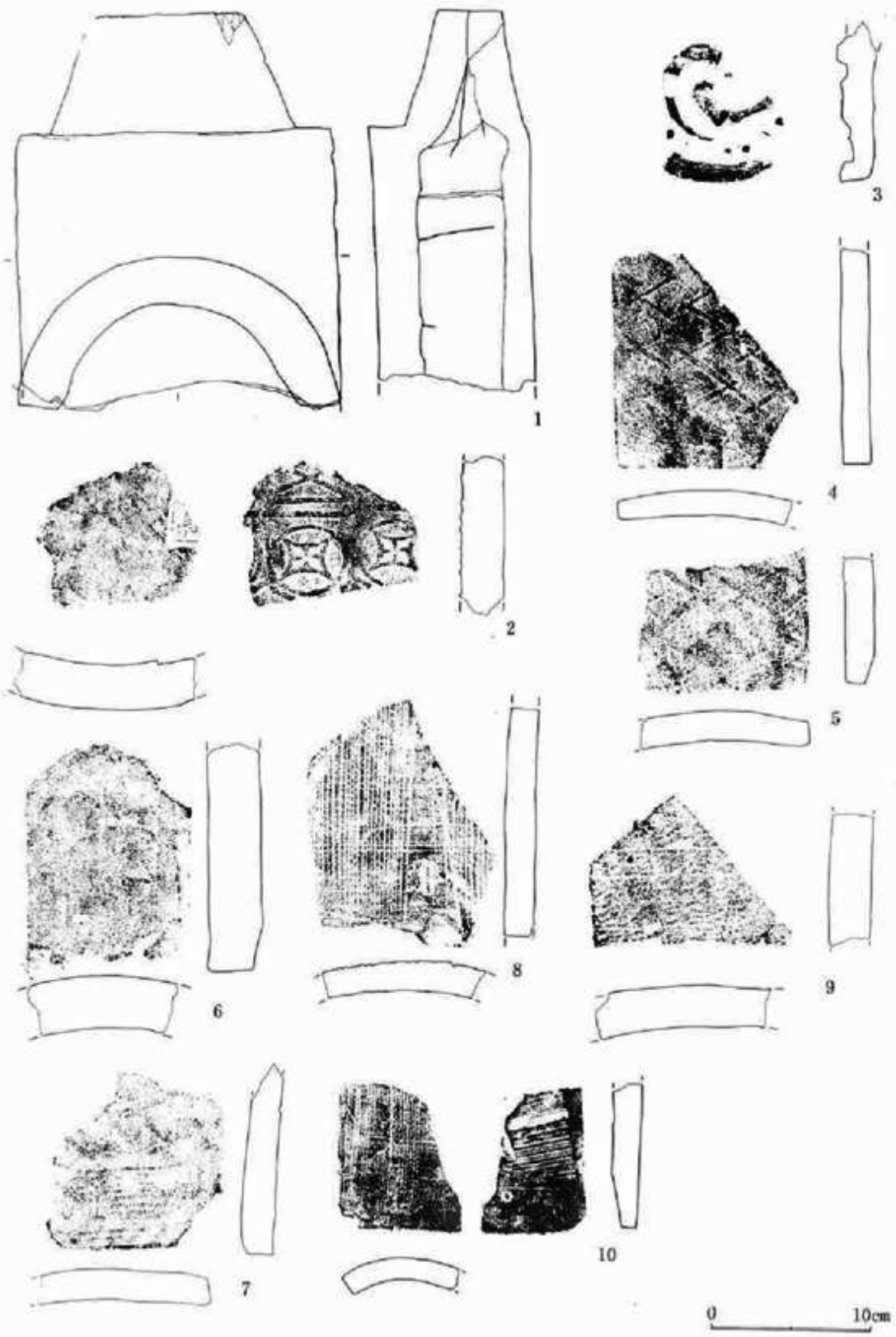
１は男瓦。筒部は径約15cm、厚さ３cmを測る。胎土は小礫を含むが良質で、焼成は若干軟質である。

２は女瓦。粗胎であるが、焼成は硬質。凸面の叩き目は、円に花菱を入れた文様と斜格子文とを組み合わせており、凹面には「永福寺」銘を押捺する。「永福寺」銘の上半は欠失し、「寺」の部分が残存する。永福寺の分類では、女瓦D類にあたり、寛元・宝治年間（1244～1248）の修造に際して使用された瓦としている。[註1]

３は鐙瓦。直径13cm程の小ぶりな製品である。瓦当面に三巴文と珠文を配し、裏面は指頭圧痕を一面に残す。良質な胎土で、焼成は硬質である。中央官衙系の製作技法による製品で、市内では12C末～13C初頭の年代観が与えられている。[註2]

４～７は斜格子の叩き目をもつ女瓦。いずれも粗胎で、６は前述の２（寺銘瓦）と同質の胎土である。焼成は４・６が硬質、５・７はやや軟質となる。凹面の調整は不規則なナデつけを行うが、４のみ全体を丁寧にナデつけている。

８～10は縄の叩き目をもつ。８・９は女瓦。10は男瓦である。８の胎土は良質。焼成は硬質である。凸面の縄目は細く密。凹面には離れ砂が顕著で、不明瞭ながら、一部に縄目痕が看取できる。重ねた際に下の瓦の叩き目が写ったものであろうか。９の表裏面には石英粒が多く、凸面側は横位の縄目叩きによって打ち込まれている。永福寺で同種の瓦の出土例があり、女瓦F類に分類され、東海地方窯の製品ではないかとしている。[註3]10は良質な胎土、若干軟質な焼成。表裏面とも連べ状を呈する。凸面の縄目は細く、凹面の糸切り痕は明瞭である。




第10図　瓦

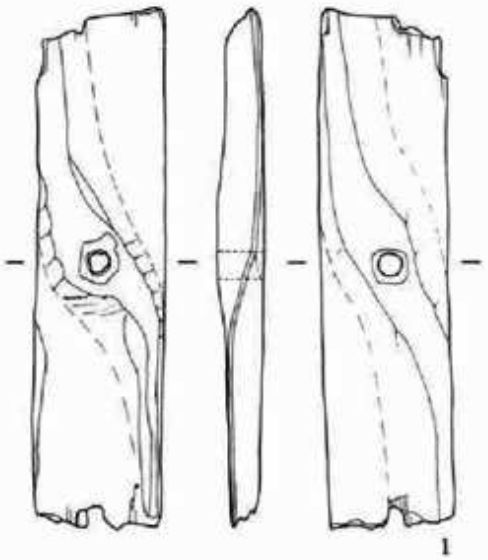
註1　原廣志「鎌倉における瓦の様式」『仏教芸術』164号、毎日新聞社、昭和61年1月

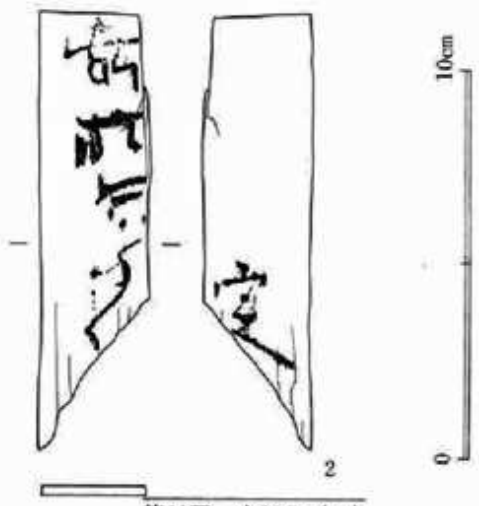
註2　原廣志氏の御教示による。

註3　『永福寺発掘調査概要報告書—昭和61年度—』鎌倉市教育委員会　昭和62年3月

g　木製品（第11・12図）

砂礫層以下では湧水が多く、そのため木製品の遺存状態は良好であった。木製品には、建築部材や調度品の一部と思われるもの、箸や漆椀といった生活用品類が雑多に出土しているが、完形品の割合は低いことが特徴である。また、製品ではないが、藁と思われる植物繊維の集積層（第4図10層）もみられた。




第11図　木製品（1）

1は木製のトンボである。羽根の両端は欠失している。羽根を回すための軸棒は検出できなかった。砂礫層中の出土。頭具としてのトンボは奈良時代にまで遡ることが知られるが、管見の限りでは、鶴岡八幡宮研修道場用地[註1]の第1溝（14C中～15C後半）から出土した2点と合わせ、中世で3例目のものである。

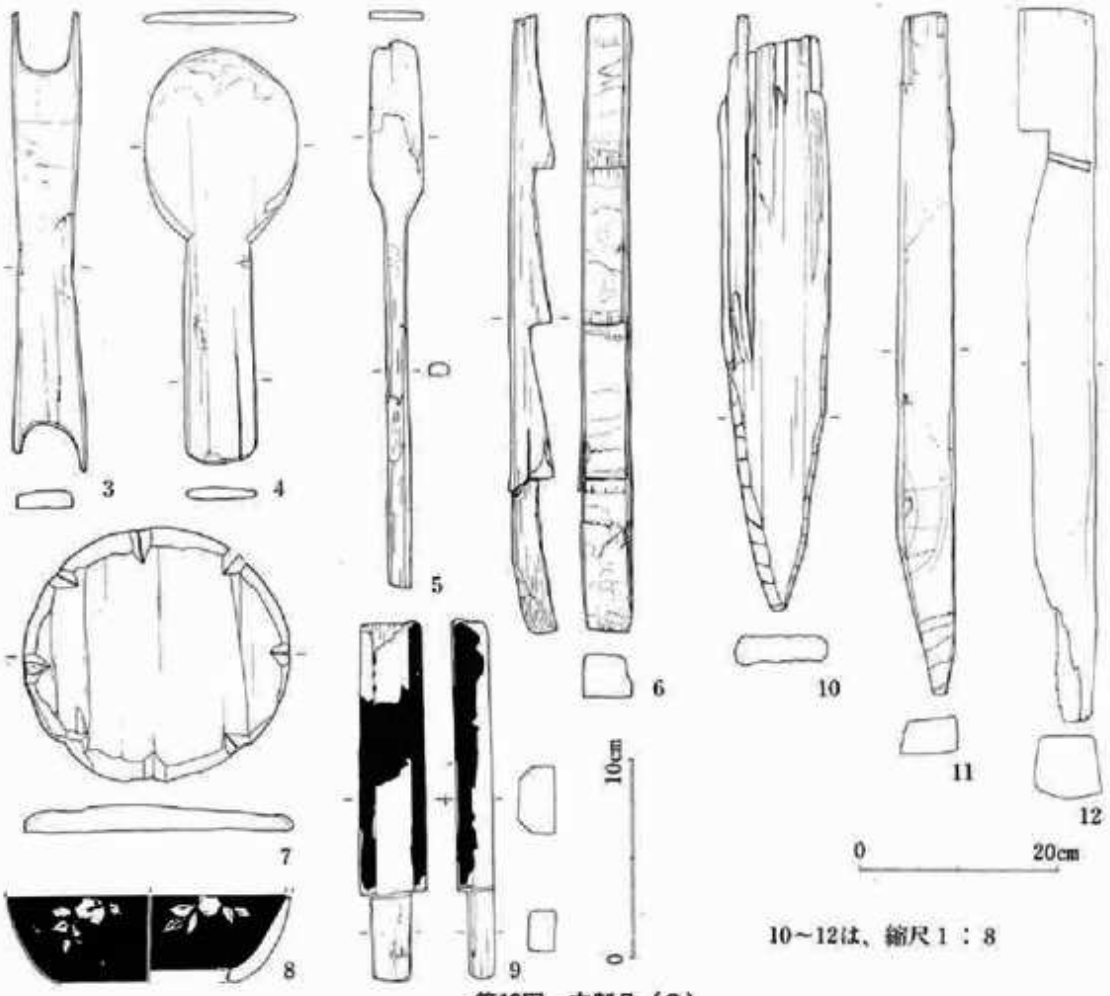
2は墨書木符である。幅2.5cm、厚さ0.25mm。頭部は直に切っている。表裏面の墨書文字は薄く、判読できなかった。茶褐色粘土層中の出土。

3は用途不明木製品。両端に半円形ないし隅丸矩形の抉りを入れ、中央部分は括れている。砂礫層中の出土。

4・5は杓子。ともに茶褐色粘土層中の出土である。市街地の調査で杓子の出土例は多く、一遺跡で数本出土することも珍らしくない。機能的には板杓子と呼ばれる類が多く、汁をすくう壺杓子の出土例は少ない。板杓子の形状は種々ある。4のように、現在でも飯を盛る際に使われる形をしたもの、5のように鍋の中をかき混ぜるのに適した櫂状を呈するものなどである。

6は自在鉤。上端は破損。下端は火熱を受けて焦げ、鉤の部分は欠失する。砂礫層中の出土。

7は用途不明木製品。円形を呈し、片面に7箇所の抉りを入れる。形状的には曲物の底板、あるいは蓋などの用途が考えられるが、側面および表裏面にも釘の痕跡等はみられない。砂礫層中の出土。




第12図　木製品（2）

8は漆椀。小片であるが何とか復原した。口唇部と底部を欠失する。内外面とも黒漆を塗り、その上に朱漆で橘らしき草花文を手描きする。茶褐色粘土層中の出土。

9は調度品の一部であろうか。一端に差し込み部を細く作り出す。上面と側面に黒漆が残る。茶褐色粘土層中の出土。

10～12は砂礫層中ないし茶褐色粘土層中に打ち込まれていた杭である。側溝の護岸等に用いられたものであろう。10は幅11cmの板状の杭。頭部を欠失するため、全長は不明である。先端部は両側縁から斜めに切り、更に面取り様の細かい削りを四隅に入れる。11は角杭。全長70cm。先端に近い部分が若干太い。一側面から大きく斜めに切り、先端部を作り出している。表面に円弧と直線を組み合わせた様な引っ掻き傷がみられる。目盛と思われる傷をもつ角杭の出土例[註2]もあることから、今後こうした資料も注意してみる必要があろう。12は角杭。全長73cm。側溝内の枘穴入り横木に乗った状態で検出された。先端部は11と同様に斜めに切り出している。頭部近くに抉りを入れており、この部分を利用して他材を固定したものと考えられる。

註1　『研修道場用地発掘調査報告書』同調査団編　昭和58年11月

註2　「北条時房・顕時邸跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書3』鎌倉市教育委員会　昭和62年3月

h　自然遺物（図版12）

種子、貝、獣骨、魚骨が出土した。種子は茶褐色粘土層中よりまとまって検出された。瓜科の植物と思われる。貝殻は食用に供した後に廃棄されたもので、アワビ、サザエ、アカニシ、ハマグリ、シオフキ等がみられた。この中でも、アカニシ、シオフキは比較的多く検出された。骨では鋭利な刃物による傷痕を残すものもみられたが、残念ながら個々の資料に対しては、十分な考察をする機会がなかった。

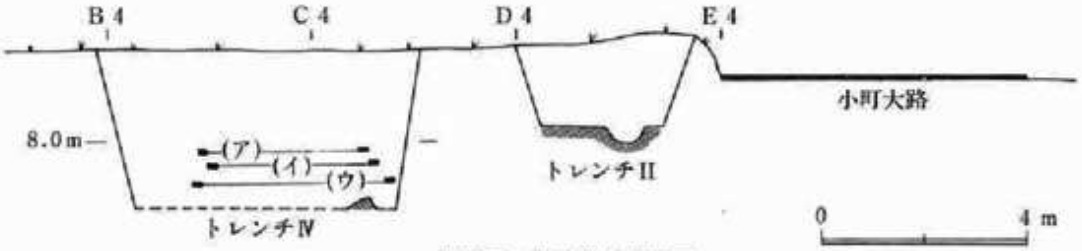
i　その他

中世以前の資料として、縄文式土器が1片出土した。砂礫最下層中に混入していたもので、器表はかなり水磨されている。キャリパー形土器の括れ部分と思われる。地文は縄文。口縁部文様帯と垂下する沈線文が看取できる。加曽利EIII段階に比定されよう。付近の遺跡では、鶴岡八幡宮研修道場用地、[註1]直会殿用地[註2]の調査で早期(?)～後期にわたる縄文式土器片が何点か出土している。当地域の先史時代を考える上で貴重な資料といえよう。

註1　「研修道場用地発掘調査報告書」同発掘調査団編　昭和58年11月

註2　「直会殿用地発掘調査報告書」同発掘調査団編　昭和58年11月

# 第四章　調査のまとめ




**第13図　調査地点断面図**

トレンチIII・IVで検出された枘穴入りの角材はその主軸方位が大体N－43°－E（磁北）を測り、現在の小町大路にほぼ平行である。若宮大路沿いの遺跡で検出された、木組排水施設[註1]と同様の構造を持つと考えられ、小町大路側溝の存在が確認されたわけである。

第13図に枘穴入りの角材と現在の小町大路との位置関係を示した。角材は、小町大路際から6.5～7.0m離れて据えられたことがわかる。また、検出できなかった溝肩は、トレンチIIとIVの中間部分、つまり、小町大路際から3.5～6.0mの地点で東側の肩が、12m以上で西側の肩が検出される筈である。

上記の溝は、3段になって検出された横木の存在から、短期間のうちに3回の改修があったと考えられる。各期の年代を特定することは無理であるが、砂礫層（第4図7～11層）中より出土した遺物によって、大体の年代観は与えられる。

砂礫層中より出土した遺物は、青磁鎬蓮弁文碗、白磁口禿皿、青白磁瓶・蓋、常滑窯第III段階後半[註2]の擂ね鉢、瓦質手焙り、「永福寺」銘瓦などであり、かわらけ皿では、薄手中形の皿はみられるが、体部が直線的に外反する15C代の皿はない。これらの様相から、13C後半～14C後半までに比定されよう。

それ以前の状況については、トレンチIII・IVの壁面にみられる地山の立ち上がり、茶褐色粘土層（第4図12～14層）や砂礫最下層（同図15層）の在り方から、一時期古い溝の存在を想定できる。この溝も幾度かの改修があったと考えられるが、覆土中からの遺物は、余り大きな時間幅をもたない。遺物には青磁劃花文碗・皿、白磁端反り碗、渥美窯産甕、常滑窯第II段階後半[註3]の甕、鎌倉初期の鐙瓦などがあり、かわらけ皿は鎌倉第II期[註4]の特徴を有している。年代的には13C前半代に置けるものと思う。

若宮大路を中心とした街割りを考える上で、最近、11丈という単位が指摘されている。[註5]既に調査された雪ノ下1－371－1地点[註6]検出の溝内横木と本地点横木との距離は、1－371－1地点横木ラインを南へ延長して計測した場合、約175m～180m（58.3～60丈）の隔りがあり、必ずしも11丈の倍数とはならない。勿論この数値は、両者が平行にあると仮定した場合であり、現実には、小町大路の傾きに合わせて、北側では更に数値が大きくなると予想される。

先に調査された雪ノ下１－395地点[註7]での溝主軸も若宮大路と直交関係にはなく、本地点も平行関係にはない。若宮大路を中心とした街割がどのような規格性をもっていたのか、更に検討を要す問題である。

註１　「北条時房・顕時邸跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書４』市教育委員会　昭和63年３月。23頁に構造復原模式図を掲載する。

註２　赤羽一郎『常滑焼』考古学ライブラリー23　ニューサイエンス社

註３　註２前掲書

註４　河野真知郎「鎌倉における中世土器様相」シンポジウム『古代末期～中世における在地系土器の諸問題』神奈川考古同人会　昭和62年２月

註５　註１前掲書

註６　『北条泰時・時頼邸跡』同発掘調査団編　昭和61年８月

註７　本報告書中に併載

## 図版1

▲調査地点近景

トレンチⅠ・溝▼

図版2

◀トレンチII・全景

トレンチIII・木材▶

◀トレンチIV・木材

## 図版３

◀トレンチⅢ・全景(西から)

トレンチⅣ・全景(西から) ▶

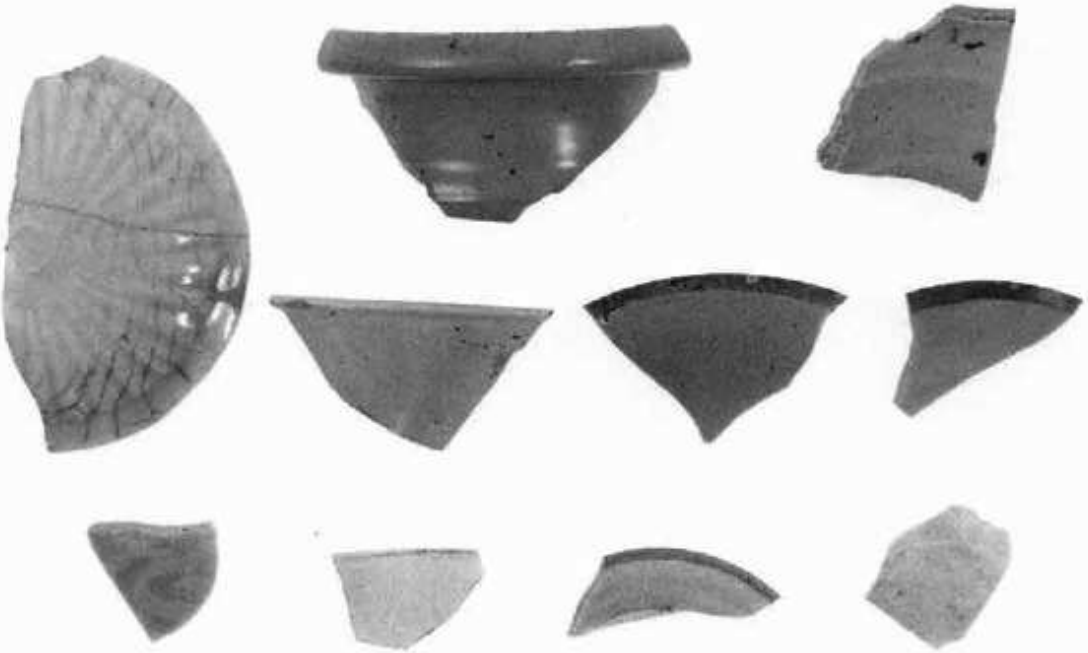
▲トレンチⅢ・全景(南から)

トレンチⅣ・全景(北から) ▼

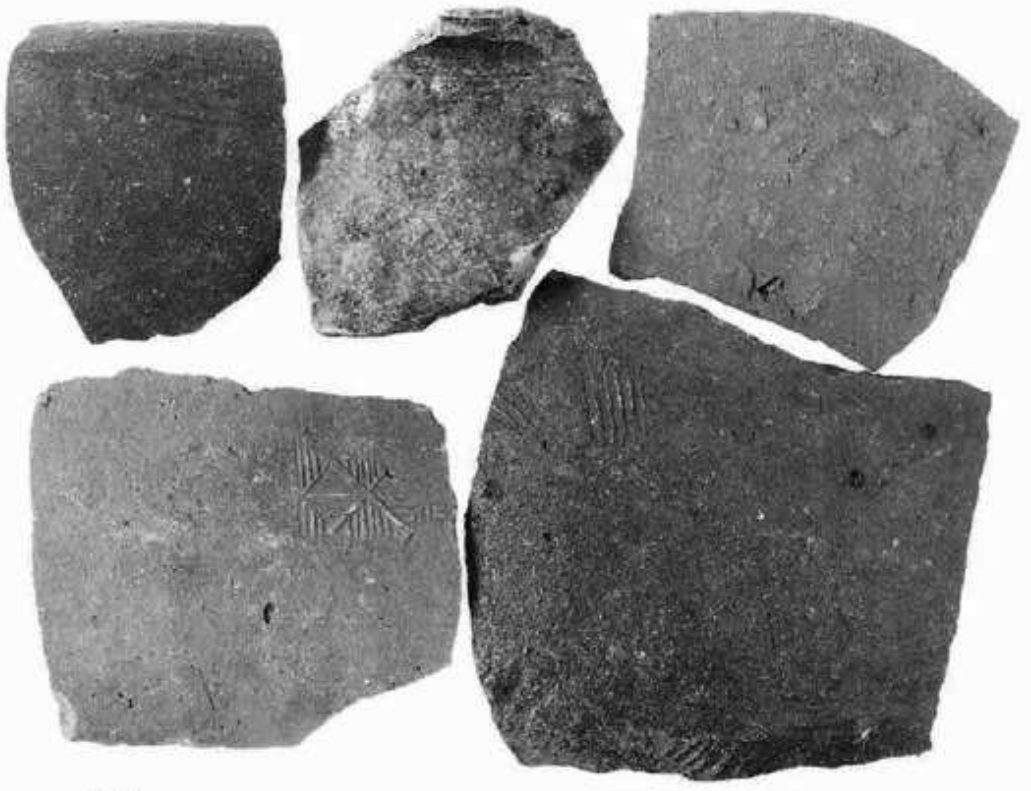
## 図版5

▲青磁

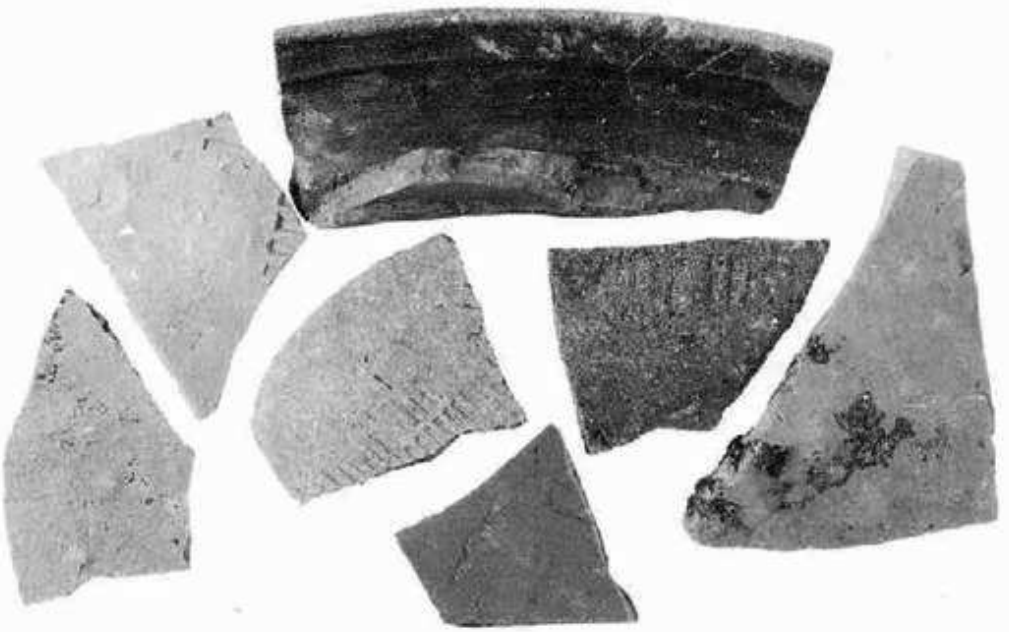
白磁・青白磁▼



図版6



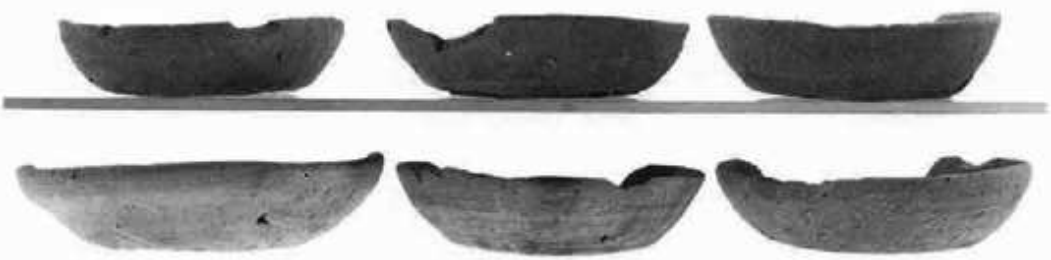
▲常滑



濃美▼

## 図版7

▲12～14層出土かわらけ大皿(手捏ね)



▲同（糸切り）

▲7～11層出土かわらけ大皿(手捏ね)

▲同（糸切り）

▲12～14層出土かわらけ小皿(手捏ね)

▲同（糸切り）

▲7～11層出土かわらけ小皿(手捏ね)

▲同（糸切り）

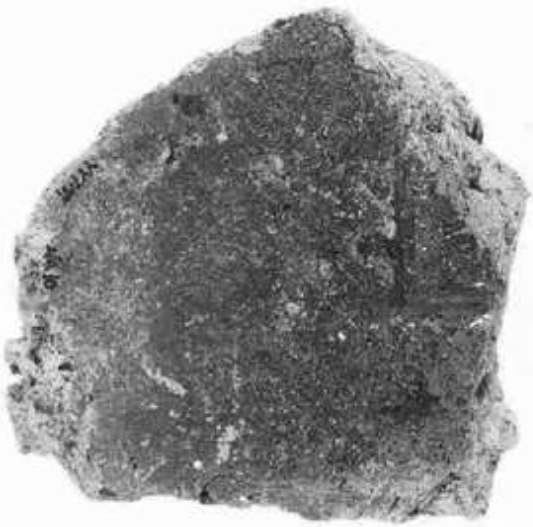
## 図版9

◀転用硯

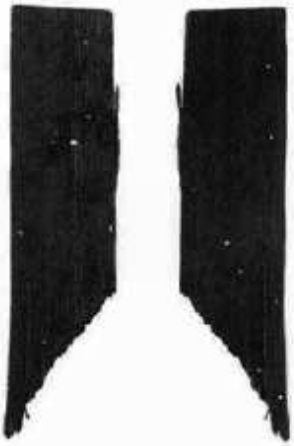
▲羽口

▲常滑鉢

▼「永福寺」銘瓦



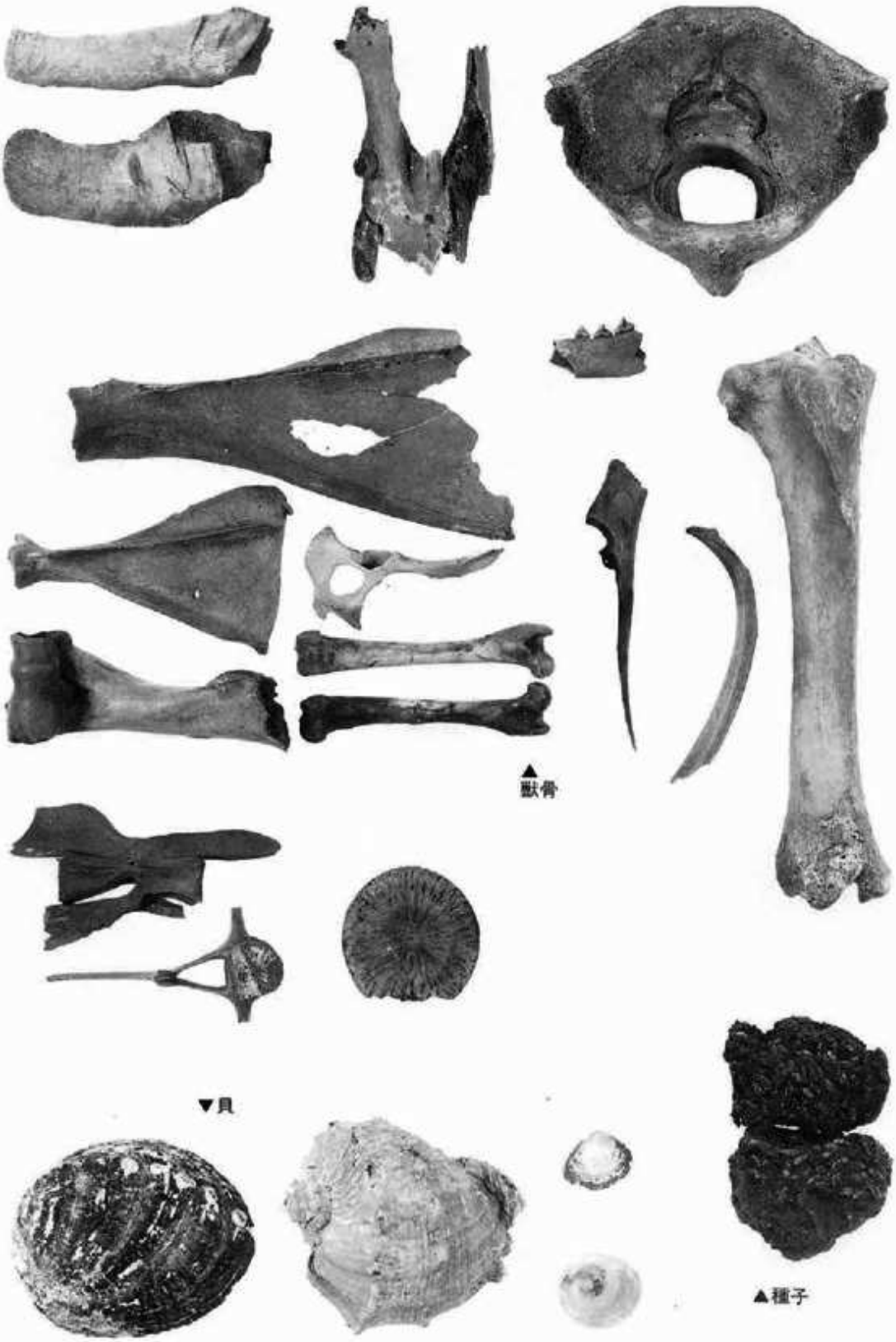
◀漆器椀



▲墨書木符

▲
トンボ

図版11



## 3．北条泰時・時頼邸跡

雪ノ下一丁目395番地点

# 例　言

1、　本報は鎌倉市雪ノ下一丁目395番における伊原商工株式会社の集合住宅建設工事に伴う発掘調査報告である。

2、　本報は、青山学院大学名誉教授吉田章一郎氏を団長とする北条泰時・時頼邸跡発掘調査団による、昭和63年6月29日から同年7月16日までに実施された先行調査分を収めた。

3、　本報の執筆には菊川英政があたり、図版作成は、関口真理、山田健二、折茂芳則が協力してあたった。

4、　本報で使用した写真は、遺構・遺物とも菊川が撮影した。

5、調査体制は以下のとおり。

団長　　吉田章一郎（青山学院大学名誉教授）　主任調査員　　菊川英政（鎌倉考古学研究所）

調査員　　新国哲也　関口真理

調査補助員　　折茂芳則　三枝みゆき　山田健二

6、　出土品等発掘調査資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

7、　発掘調査、および資料整理に際しては、以下の諸氏、諸機関から貴重な御教示と御援助を賜わった。記して感謝の意を表したい。（順不同、敬称略）

大三輪龍彦、手塚直樹、松尾宣方、玉林美男、河野真知郎、馬淵和雄、吉田文一、吉田茂夫、吉田茂、田畑佐和子、黒崎卓、田辺竜司、蒲谷由利子、鎌倉市高齢者事業団、（株）日本ハウジング、辰村組

# 目　次

例　言…… (56)
目　次…… (57)

## 本 文 目 次

第一章　調査地点の位置…… (58)
第二章　調査の概要…… (60)
第三章　検出遺構と出土遺物…… (61)
　1、基準層位
　2、1面の遺構
　3、2面の遺構
　4、地山面の遺構
　5、出土遺物
第四章　まとめ…… (72)

## 挿 図 目 次

第1図　若宮大路周辺の主な発掘調査地点
第2図　調査区設定図
第3図　基準層位
第4図　I区遺構平面図
第5図　I区溝状遺構・動物遺骸
第6図　II区溝1
第7図　II区溝2
第8図　包含層出土遺物
第9図　溝1出土遺物
第10図　溝2出土遺物 (1)
第11図　溝2出土遺物 (2)

## 図 版 目 次

図版1　調査地近景
図版2　I区土壙1・溝3側壁・全景
図版3　II区動物遺骸、II区溝1側壁板材
図版4　II区溝1全景・溝2全景
図版5　かわらけ皿
図版6　陶磁器、瓦、五輪塔
図版7　漆器、木簡、木製品
図版8　貝、骨

# 第一章　調査地点の位置

泰時、時頼邸跡[註1]とされる区域内では、既に4箇所で発掘調査が行われ、[註2]若宮大路と平行する大溝、掘立柱建築址、玉砂利を敷く地業面などが検出されている。

今回の調査は、同区域の北辺。横大路に接し、東辺を画する小町大路との交点に近い位置で行われた。

泰時邸に関しては、『吾妻鏡』の記事から、小町西北にあり、同塀内に、関左近大夫将監宅と尾藤

1.雪ノ下一丁目395番地点遺跡(調査地点)
2.雪ノ下一丁目432番－2地点遺跡
3.雪ノ下一丁目374番－2地点遺跡
4.雪ノ下一丁目372番－7地点遺跡
5.雪ノ下一丁目371番－1地点遺跡
6.雪ノ下一丁目419番－3地点遺跡
7.雪ノ下一丁目293番－1地点遺跡
8.雪ノ下一丁目271番－1地点遺跡
9.雪ノ下一丁目273番－□地点遺跡
10.雪ノ下一丁目274番－2地点遺跡
11.雪ノ下一丁目233番－9地点遺跡
12.雪ノ下一丁目210番地点遺跡
13.鶴岡八幡宮境内遺跡(国宝館用地)
14.鶴岡八幡宮境内遺跡(研修道場用地)

**第1図　若宮大路周辺の主な発掘調査地点**

左近将監宅があったことが窺え、[註3]また、正家としての泰時邸は、その後、経時、重時へと譲られていったことがわかっている。[註4]貫達人氏は、重時以降、長時、義宗、久時、守時―後に赤橋姓を名乗る―へと引き継がれたのではないかとし、正家の位置を「八幡宮の三の鳥居の角屋敷」と推定された。[註5]　時頼邸に関しては、同じく『吾妻鏡』から、小町大路に面していたと推測されており、[註6]貫氏は、若宮大路の東側、約220m（約2町分）の地に、泰時邸が営まれ、後に、若宮大路側を重時の子孫が、小町大路側を得宗が継いでいったのではないかと推定された。[註7]　遺跡地に居住していた人物を特定することは、非常に難しいことであるが、本調査地点は、以上のような背景の地にある。

註1　神奈川県遺跡台帳No282

註2　『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書1』S・60・3・市教育委員会

『　同　2』S・61・3・市教育委員会

『　同　3』S・62・3・市教育委員会

『北条泰時・時頼邸跡』S・62・8・同調査団編

註3　元仁元年六月二十七日の条

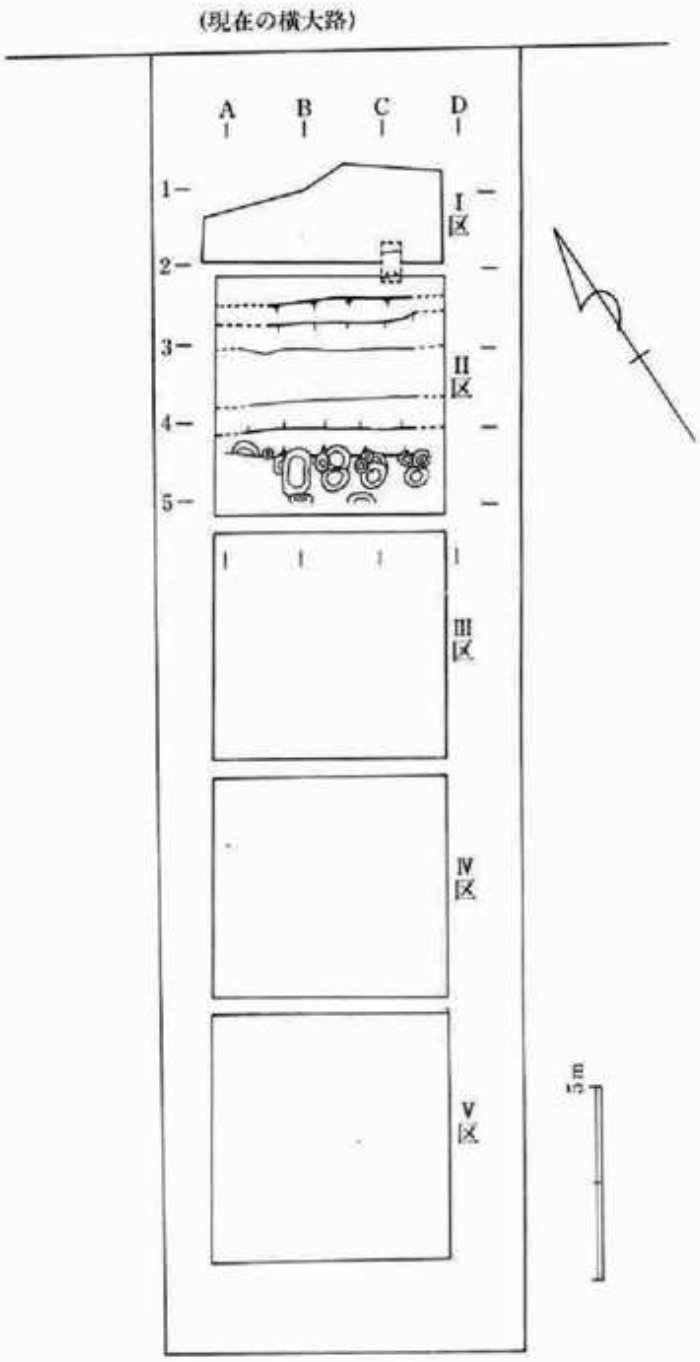
註4　宝治元年七月十七日の条

註5　貫達人「北条氏亭址考」『金沢文庫研究紀要』第8号　S・46年

註6　建長四年四月一日の条

註7　註5に同じ

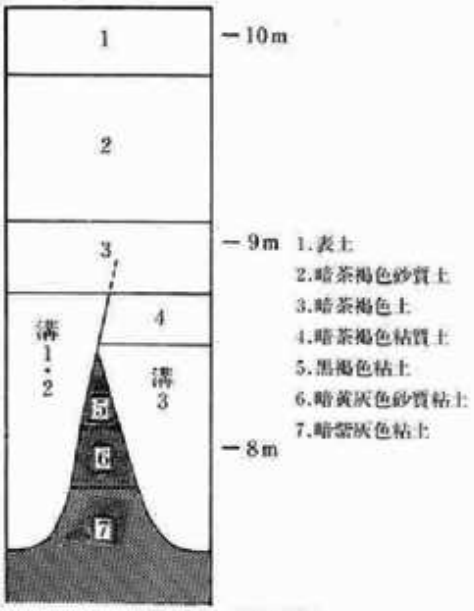
# 第二章　調査の概要




発掘調査は、昭和63年６月29日から開始された。調査地には、約６×６m四方にコンクリート基礎（地中梁）が打ち込まれており、地中梁除去に伴なう遺跡の破壊を避けるため、実際の発掘調査は、その升形内部に対して行われた。升形は南北方向に４ヶ並ぶが、山留め工事等の都合上、北端の１升分（II区）及び、更にその北側、道路際部分（I区）を先行して調査し、本報告にまとめた。県道に接するI区においては、工事に伴ない破壊の及ぶ南側部分についてのみ調査した。鎌倉市教育委員会による事前の試掘調査結果から、地表下約１mまでを重機によって掘削し、同レベルでの精査、遺構検出作業後、地山面まで掘り下げた。

グリッドは、２m間隔に設定し、東西軸にアルファベット、南北軸に算用数字をあてた。南北軸と真北との偏差はN—35°30′—Eを測る。（若宮大路と真北との偏差は、N—27°30′—E）

# 第三章　検出遺構と出土遺物




第3図　基準層位

1、基準層位（第3図）

調査地点での土層観察は、I区の北側壁面で行った。また、溝3の掘り込みを面を確認するため、I区東端のトレンチ西壁も参考にした。

土層は大略7層に分けられる。1層は表土。コンクリート塊などを含む、現代の撹乱を主体とした層である。2層は近世以降の堆積土。3層以下が中世の地業土と考えられる。3層は上面を削平されている可能性もあるが、一応、生活面として把えた。土壙1のプラン確認面である。II区では同層の有無を確認できなかった。4層は溝3廃棄後の埋土で、溝状遺構、動物遺骸が上面で検出された。5層以下は地山である。

地業層は、東西方向にほぼ水平、南北方向では水平ないし、若干北側に厚く堆積する。6層上面のレベル値によって、地山の傾斜を測った場合、約20cm程度、北側に低いことが確認された。

2、1面の遺構

II区では、1面の存在自体を確認できなかった。したがって、I区で検出した遺構のみである。

土壙1（第4図）

I区3層上面において検出した。長方形ないし、長楕円形を呈するものであろうか。全容は不明である。床面は良く締まっており、平坦。壁は直立気味に立ち上がり、中央部分の壁高は40cmを測る。覆土は、黄褐色砂を混入する暗灰褐色砂質土で、炭化物片、かわらけ片が少量出土した。

壁沿いの床面にピットが並ぶが、いずれも、本土壙には伴わず、より新しい時期のものである。

3、2面の遺構

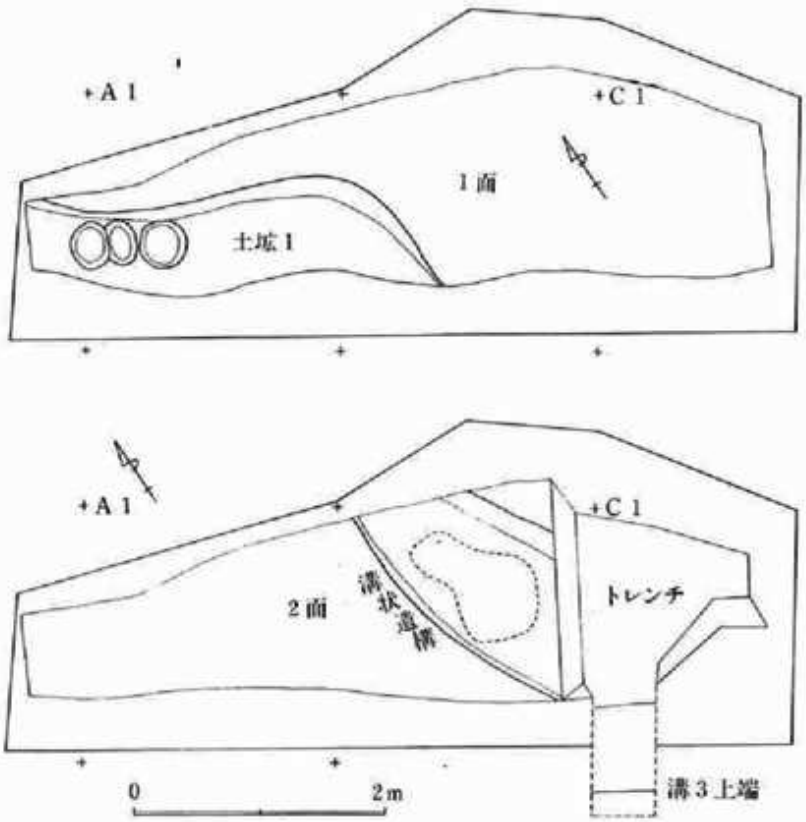
I区4層上面を2面とした。II区の南側部分では、同レベルで既に地山面が検出されている。

溝状遺構（第4、5図）

I区のほぼ中央部で検出された。遺構としては、あまり明確なプランをもたず、2面上にできた浅い窪みの一つであるかもしれない。

溝中からは、犬らしき小動物の遺骸がみつかっている。頭を磁北方向に向け、右側面を下に、横たわった状態である。尾部に近いところには、別個体の骨も検出された。

2面上部の地業層中には、骨片、五輪塔空風輪が含まれており、本例も埋葬とする積極的根拠がない以上、地業の際に遺棄されたものと考えたい。




第4図　1区遺溝平面図

4、地山面の遺構

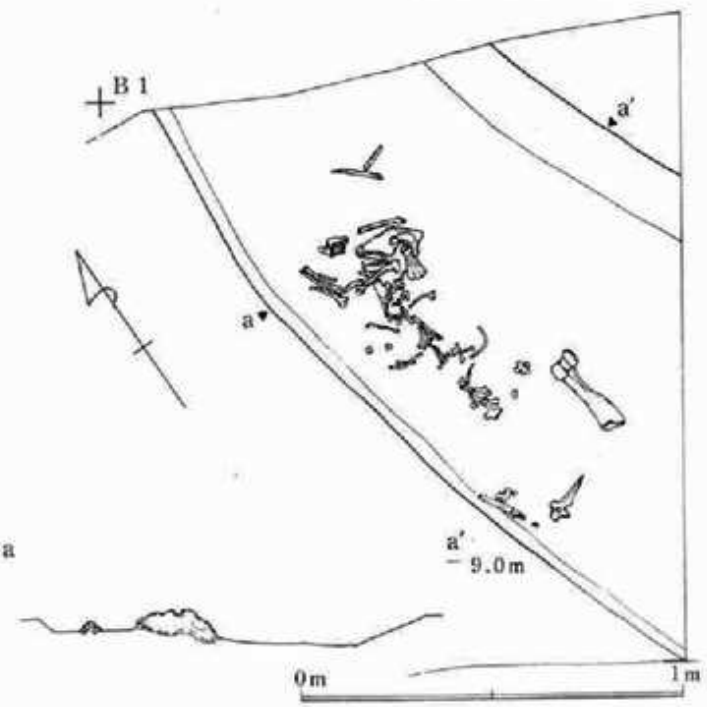
II区南部では、2面相当のレベルで概に地山面が確認されており、次に述べる遺構の掘り込み面は、2面あるいはそれ以上と考えられる。

溝1（第6図）

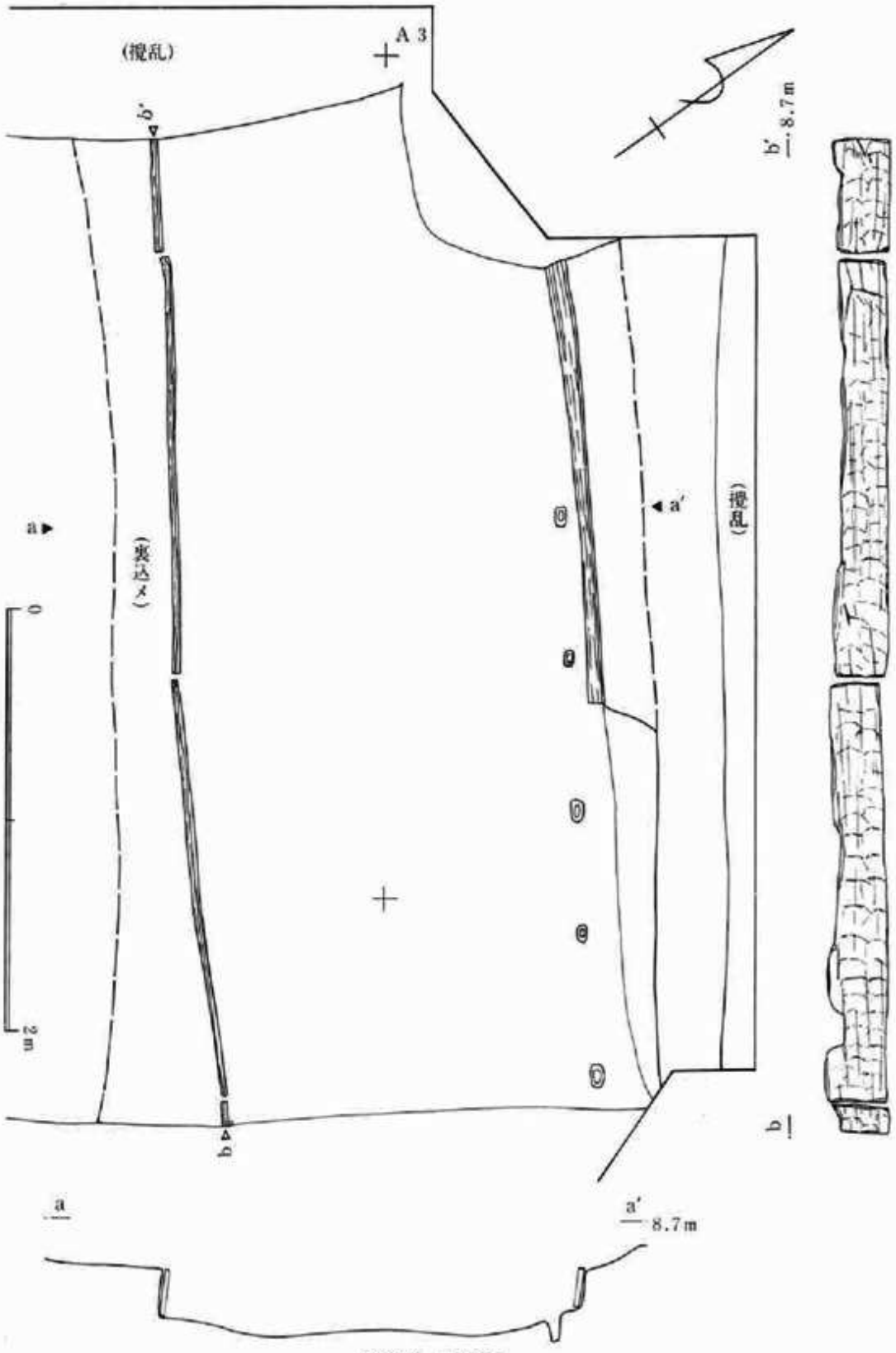
II区で検出された、板材による側壁をもつ溝である。溝幅は約1.9～2.0m、南側に4枚、北側に1枚の板材が遺存している。

板材は、表裏面を丁斧で加工した柾目材で、長さ198～215cm、幅18～23cm、上端厚1～2cm、下端厚2～3cmを測る。板材どうしは、特に連結のための加工は施されず、溝の内側を杭で、外側を裏込め土で固定していたようである。杭の痕跡は、北側に露呈した地山面で確認された。縦3cm、横10cm、深さ15cm程の長方形平面を呈し、約60cmの間隔をもつ。平面形から推察すると、板材を打ち込んで杭としていたようで、また、杭の痕跡と側板との間が、約6cmあいており、間に角材等の押えを置いた可能性が考えられる。

溝1の中心軸は、約E－31°－Sを測り、後述する溝2の中心軸から、北側に0.8m程ずらして構築され




第5図　1区溝状遺構・動物遺骸




第6図　II区溝1

ている。

溝２（第７図）

溝１下に検出された。地山を掘り込む大形の溝である。溝３との切り合い関係は、撹乱のため不明瞭であるが、出土遺物や溝３廃棄後の地業層（第３図　４層）の存在から、溝２がより新しいものと考えられる。

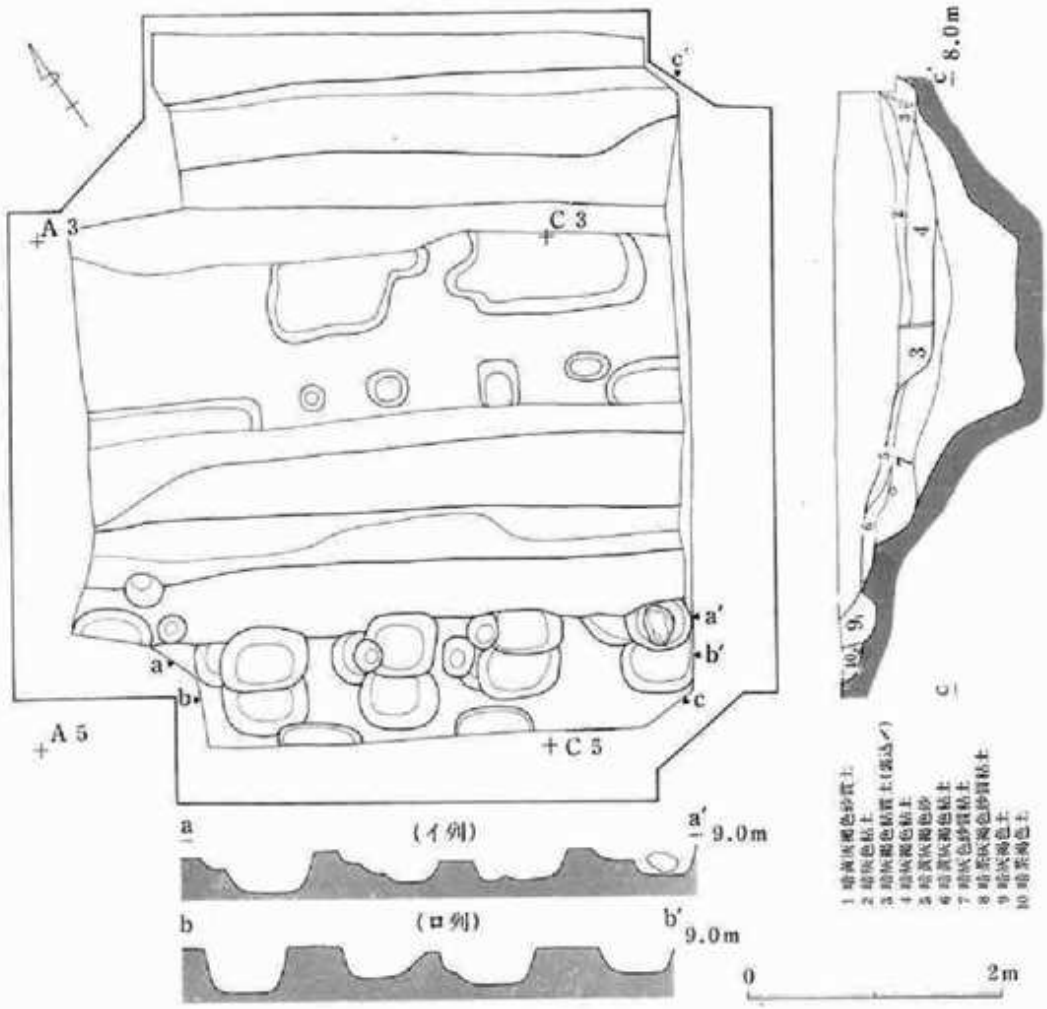
溝２の断面形は、逆台形に近く、中位以上に数段の段差を有する。これは数回の掘り直しが行われた結果であろう。溝底は幅約1.3m、凸凹が多く、溝底レベルは東端が約２cm程低い。

覆土中に含まれる砂礫は、すべて丸みを有しており、水流のあったことが窺える。

主軸は、E－32°－S前後を測り、溝１の主軸方向とほぼ同一である。

溝３（第４図）

Ⅰ区東端のトレンチによって存在が確認された。２面下の遺構である。調査区が狭く、作業の安全上、全掘はできなかった。




第７図　Ⅱ区溝２

溝底はほぼ平坦、側壁は約52°の傾きをもって立ち上がる。断面形は、逆台形を呈するものと思われる。

覆土は、上層と下層に分けて把えることができる。上層は暗茶褐色粘質土層で締まり強く、遺物をほとんど含まない土層（第3図　4層）、溝3廃棄後の地業層である。下層は暗青灰色砂質粘土層。溝3の埋没過程で、堆積した土層とみることができる。トレンチ壁面での土層観察からは、溝3の改修は認められなかった。

主軸は計測できなかったが、溝1あるいは溝2と大差なく、平行関係にあるものと思われる。

柱穴列（第7図）

II区南端の溝肩部に、東西方向に並ぶ2列の柱穴列が確認された。仮に北側をイ列、南側を口列とした場合、イ列の柱穴は口列の柱穴を切り、溝1に切られている。つまり、両列とも、溝2あるいはそれ以前の時期に伴なうものと考えられる。柱穴の規模、間隔は、両列ともほとんど差異はなく、柱穴の中心位置が北側へ約30cm程度、移動しているにすぎない。これは、イ列から口列への移動が、断絶期間を経ずして行われた結果と考えられる。

この柱穴列の性格であるが、未報告分のIII区には、同様の規模、間隔をもつ柱穴が検出されておらず、掘立柱建物とすれば、両列より北側に広がる建物を想定できる。しかし、柱穴の間隔が約1mと狭く、また、溝と近接し、軸方向を同じくすることから、柵等の構築物を考えるのが、妥当ではないだろうか。

5　出土遺物

a　包含層出土遺物（第8図1～10）

すべてI区内で検出されたものである。包含層中の遺物は、種類・数量とも極端に少なく、図示したもの以外は小破片のみである。以下、特徴的なものについて記すが、11はI区東端のトレンチ内から出土しており、溝3覆土中の遺物として後述する。

1～8はかわらけ皿。1～4が暗茶褐色砂質土層（第3図2層）中より出土し、5～8が、暗茶褐色土層（第3図3層）中より出土した。このうち、4・7は器形・整形が他のかわらけ皿と大きく異なる。器肉が厚く、体部は直線的に開く。底部際のナデは粗略で、内底面のナデつけも行っていない。比較的新しい時期の所産と思われ、7については上層から混入した可能性が強い。

9は常滑窯の短頸壺片。暗茶褐色砂質土層中の出土である。

10は五輪塔の空風輪。安山岩製である。四方に梵字を配し、中に金泥の遺存する箇所もある。火輪と組み合う部分は円柱状をなし、中央に小孔を穿つ。石材加工の際に中心を求めた痕跡であろう。

b　溝1の出土遺物（第9図）

1・2は青磁。1の内面には蓮弁文が陰刻されている。2は鎬蓮弁文を外面に配す。

3は瀬戸窯の灰釉平茶碗。外面は体部中位まで釉がかかる。

4は砥石。角柱状を呈し、使用痕は4面にみられる。中砥あるいは荒砥であろう。

5は底部穿孔のかわらけ皿。穿孔は焼成後の二次的なものである。体部は破損か意識的に欠いた

ものかは不明。

6～15はかわらけ小皿。そのうち14･15は手捏ね成形である。小皿は胎土、整形、色調に種々のものがみられる。本来なら大皿･中皿とのセット関係を把握して述べるべきであるが、未だ不明な点が多いため、ここでは特徴的なものについてのみ記しておく。

6は比較的良質な胎土で、灰褐色を呈する。器肉は薄く、体部は直線的にのびる。

11・12は小皿の中では若干大ぶりで器肉も厚い。胎土中には砂粒・赤褐色粒子を含むが、丁寧にナデられているためか、器表の荒れは目立たない。　13は胎土・色調とも6と同じである。器形も外見的には6と同じであるが、実測図では少々異なった感じになる。

16～24はかわらけ大皿。すべて糸切り底である。小皿と同様にその特徴を記す。

16は底径が小さく、体部は緩く内彎する。胎土中には赤褐色粒子を多く混入する。

17・18は胎土・色調・器形とも非常に似通ったもの。底部際のナデは粗略で丸味を帯びる。

23は丁寧なナデによって器壁を薄く作る。胎土は精良で、明橙褐色を呈す

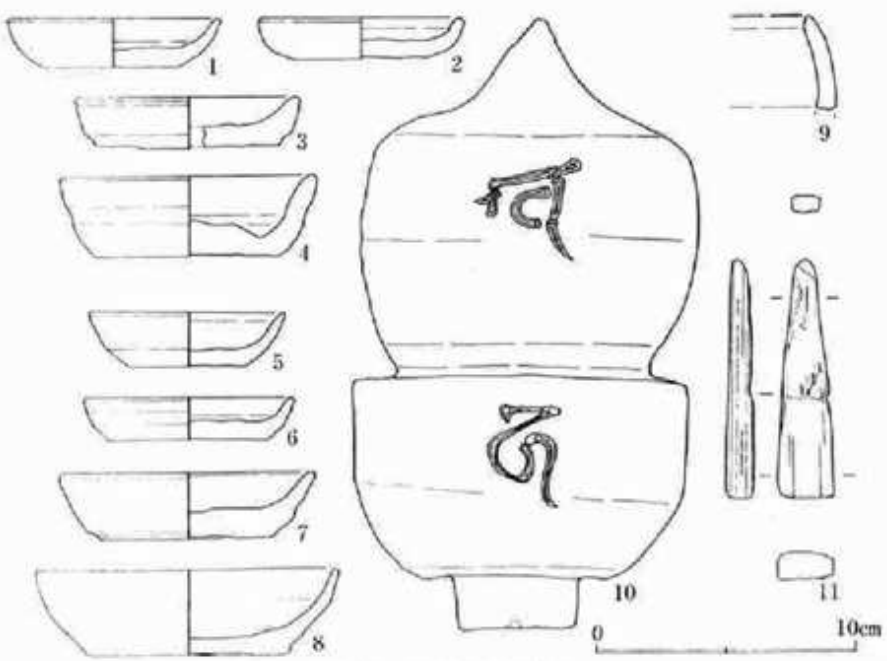
24は灯明皿として使用されたもの。口唇部に煤が付着する。

25・26は漆器小皿である。25は底部を高台状に削り出す。内外面に黒漆を塗るが、外底面の黒漆は殆んど残っていない。26は輪高台状の突出部をもつが、歪みが大きく不明瞭である。内外面に黒漆を塗った後、内面に手描きの草花文を朱漆で描く。外底面の黒漆は遺存部分が少ない。

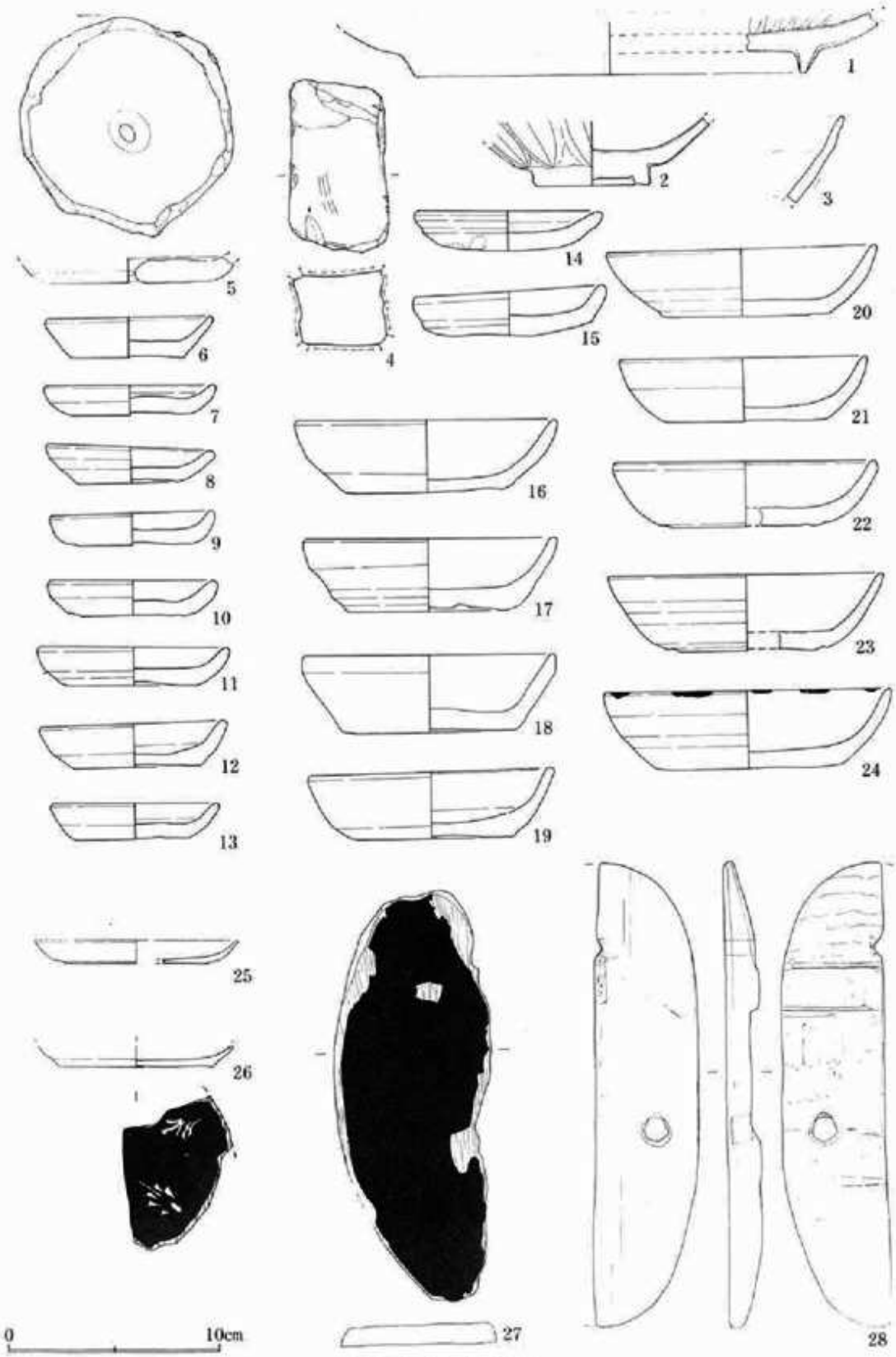
27は漆塗木製品。表裏面に黒漆を塗る。全形・用途等は不明。

28は下駄。表面を平滑にし、裏面は先端と後端を斜めに削る。歯は欠失しているが、平鑿で削り出していたらしい。鼻緒を通す孔は内面が焦げており、焼け火箸状のもので整形したと思われる。

以上が溝1覆土中の遺物である。数量的にはかわらけ皿が最も多く、総破片数212点を数えた。その内訳は、手捏ねかわらけ44点（大皿36、小皿8）糸切りかわらけ168点（大皿129、小皿39）であった。陶磁器類は極端に少なく、青磁・常滑・瀬戸等を合わせても10数点程度であった。




第8図　包含層出土遺物


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
0
10cm

第9図　溝1出土遺物

c　溝２出土遺物（第10・11図）

溝２覆土中からは多量の遺物が出土した。確実な層位区分による遺物あげは不可能であったが、溝底近くの遺物は下層として一括した。一応の目安となろう。

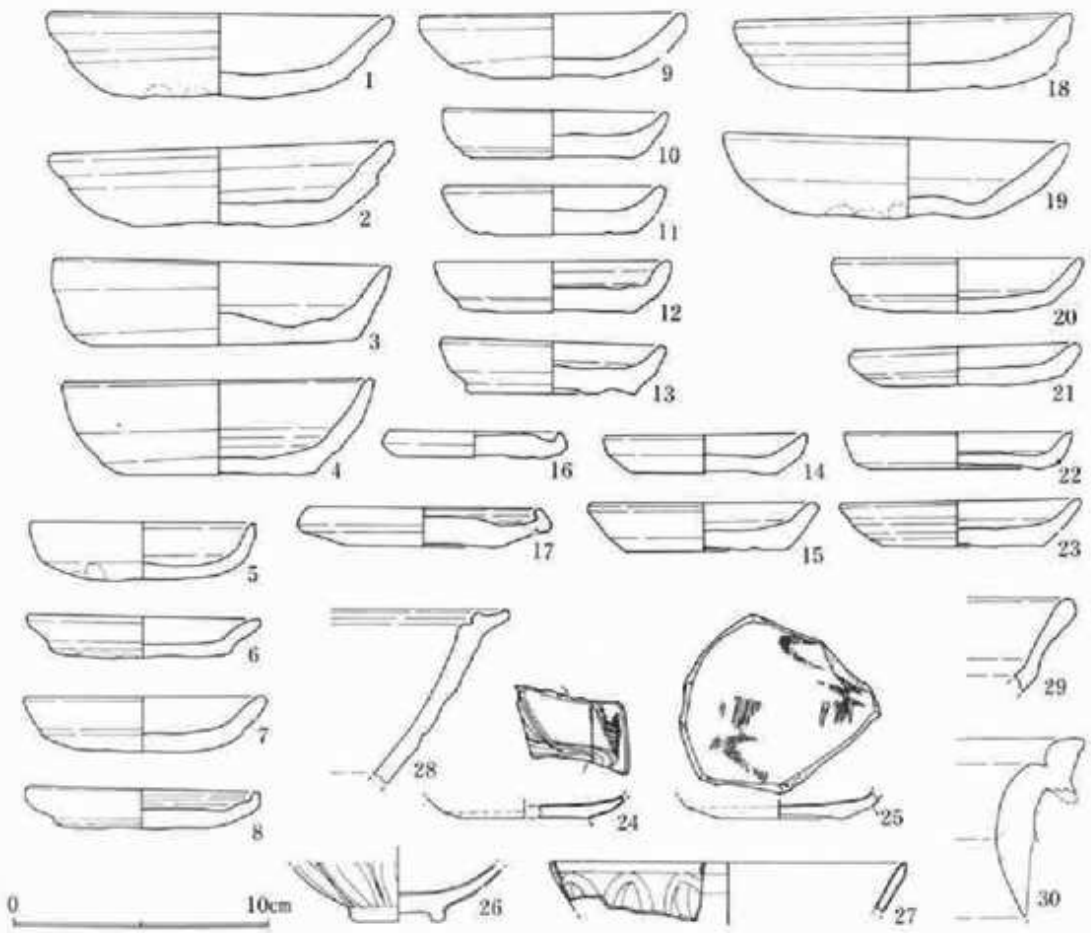
１～23はかわらけ皿。そのうち1～17までが中層より出土し、18～23までが下層から出土したものである。以下、特徴的なかわらけ皿について述べる。

１・２は手捏ね大皿。胎土・色調・器形とも非常に似通ったものである。

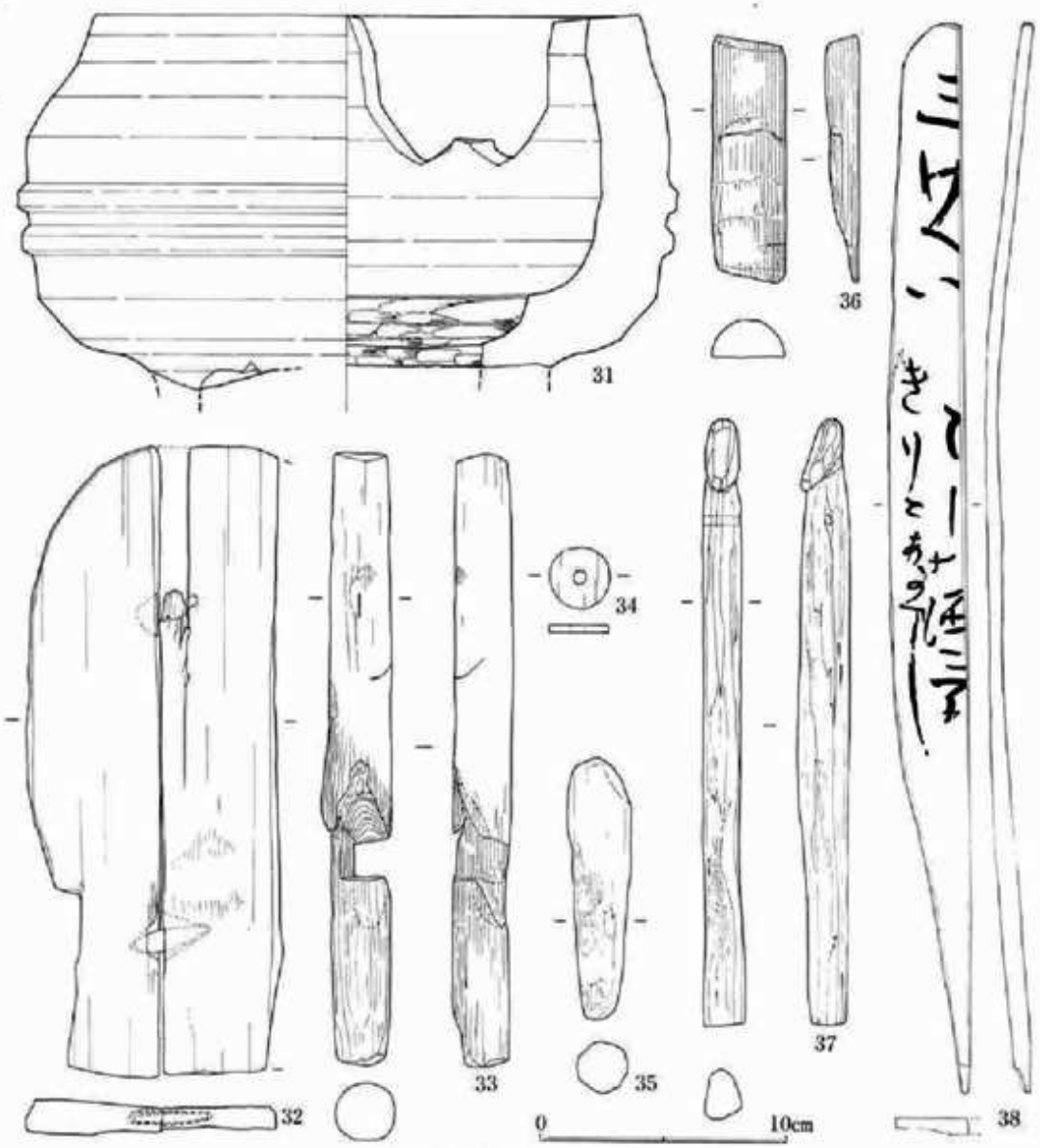
３・４は糸切り大皿。３は胎土・色調が前記１・２に近似する。底径が大きく、器高は低い。体部の立ち上がりは直立に近く、口縁部を若干肥厚させる。底部際のナデは粗略。内底面のナデつけも不充分で、凸部を完全には消していない。４は底径が小さく、椀に近い形状のものである。

５～９は手捏ね小皿。６は平底に近く、体部に強い稜をつくる。口縁部は大きく外方へ開いている。８も平底に近い。体部の稜は強く、口唇部は直立ないし若干内側へ傾く。胎土は精良で焼成も良好である。

10～15は糸切り小皿。12は口縁部内面が若干肥厚している。14は体部中位に強い稜ができ、口縁




第10図　溝２出土遺物（１）




第11図　溝2出土遺物(2)

部は直立気味に立ち上がる。15は口縁部がほんの少し外反するものである。

16・17は所謂"内折れ形"と称される小皿である。ともに底部に回転糸切り痕を残すが、17は回転の速度が遅いためか、糸目の間隔が広い。16は底部から直に口縁部が接続するのに対し、17は外方へ開く長い体部をもつ。また、17の内底面はナデつけがなされていない。

18・19は手捏ね大皿。18は器高が低く、体部の稜も段に近い。

20・21は手捏ね小皿。体部の稜はともに弱く、不明瞭である。

22・23は糸切り小皿。22は砂を含む精良な胎土で、焼成も良好。体部下位に強い稜ができ、口縁部は直立気味に立ち上がる。23は器壁が薄く、口唇部はわずかに外反気味である。

24～27は青磁。24・25が下層から出土し、26・27は中・上層より出土したものである。

24は櫛描劃花文皿。釉は緑灰色透明で光沢を有す。外面は底部際まで釉がかかる。

25は櫛描文皿。篦による草花文の表現はない。釉は黄味を帯びた緑灰色で、細かい貫入がみられる。体部中位以下の釉は削り取られている。

26は鎬蓮弁文碗。暗緑黄色の釉が高台畳付け部までかけられる。

27は鎬蓮弁文碗。釉は明緑灰色を呈し、失透している。

28～30は国産陶器。いずれも上層より出土したものである。

28は瀬戸窯産の折縁鉢。外面は轆轤調整痕をよく残し、折縁部分には沈線を廻らす。灰釉は内外面にかけられる。

29は山茶碗窯系の捏ね鉢。口縁部の小片である。

30は常滑窯産の甕である。

31は土製品。手焙りの一種であろうか。管見にして類例を知らず、器体の天地も不確かである。口縁部とした方にはW形の窓が3箇所にあき、外見は三脚状の口縁部となる。体部外面には凸帯を2本貼り付けている。内面は中央部分が一段窪み、更に下部へ通ずる円孔があいていたようである。この窪みと円孔部分には、内外面に塗られた化粧土がみられず、粗い篦削り痕をそのまま残す。また、下部との接続部分は、外側から篦によって窓が作られるが、その形状や数まではわからなかった。溝2上層の出土である。

32～38は木製品。32～36までが上層より出土し、37・38は下層から出土したものである。

32は2枚の板を組み合わせた製品。全形・用途は不明である。組み合わせは2箇所で行い、板の厚みの中程に三角形状の切り込みを入れ、中に厚さ3㎜程の板状の芯を入れて固定する。

33は直径2.3cmを測る丸棒状木製品。全長の½程の所に斜めに円形の抉りを入れる。やや細目の丸棒を組み合わせて使用されたものらしい。

34は直径2.3cm、円板状の木製品。中央に円孔をあける。用途不明。

35は栓であろうか。長さ10.5cm。一端を細く削っている。

36は楔形木製品。半円形を呈し、一端を斜めに切っている。楔として使用されたかは疑問である。

37は陽物形木製品。全長24.5cmを測り、細長いものである。先端に近い部分に一孔を有す。

38は墨書木札。頭部を三角形に切り、尾部を尖らせる。裏面に墨痕はみられない。表面の文字は判読できなかった。

以上が溝2覆土中の遺物である。数量的にはかわらけ皿が最も多く、中・上層からは手捏ねかわらけ150点（大皿120、小皿30）糸切りかわらけ265点（大皿219、小皿46）が出土し、下層からは手捏ねかわらけ155点（大皿117、小皿38）、糸切りかわらけ20点（大皿18、小皿2）が出土した。

陶磁器類は極端に少なく、図示したもの以外はほとんど出土していない。

d　溝3出土遺物（第8図11）

11は楔状木製品。建築部材の一種であろうか。溝3覆土上層から出土した。

溝３はトレンチ調査によって存在が確認されたもので、発掘面積が狭いためか出土遺物は少なかった。上層からは、糸切りかわらけ３点（大皿３）、手捏ねかわらけ12点（大皿８、小皿４）が出土し、下層からは、糸切りかわらけ３点（大皿１、小皿２）、手捏ねかわらけ13点（大皿９、小皿４）が出土している。上・下層とも糸切りかわらけの内底面には、ナデつけ調整が行われている。他の遺物としては、下層から男瓦が１点出土した。木片の類は上・下層とも出土しているが、特記する程のものはない。

# 第四章　まとめ

北条泰時・時頼邸跡とされる区域で、北辺を画する３本の溝が検出されたことは、大きな成果であった。３本の溝はその切り合い関係から、溝３→溝２→溝１という変遷を経て廃絶しており、また、溝の主軸は真北を基準とするとE−31°−S前後で、現在の横大路とほぼ平行関係にある。

既に調査された雪ノ下１−371−１地点[註1]で検出された南北溝が、現在の若宮大路と平行していることと考え合わせると、当時の若宮大路と横大路も現在と同様に直交関係にはなかったと推定される。発掘調査は、未だ点と点を繋ぐ段階になったばかりであり、今後の資料増加によって検証し直す必要があろう。

３本の溝の年代に関しては、多量に出土したかわらけ皿を手がかりにして、大雑把ではあるが年代の比定を試みたい。[註2]まず、総破片数に占める手捏ねかわらけの占める割合は、溝３が80%。溝２下層84%、上層36%、溝１は21%となる。溝３については資料数が少な過ぎる点に注意する必要があろう。

出土した手捏ねかわらけ皿では、薄い器壁で体部に稜をもち、縁帯状の口縁を呈する、所謂古手と称するタイプはみられないものの、擬似平底の皿は溝２下層中から何点か出土している。また糸切り底のかわらけ皿については、確実に鎌倉第１期とされる皿は出土していない。器壁が薄く、底径が小さく、丁寧な仕上げの皿は鎌倉第Ⅴ期に特徴的なもので、溝１覆土中に類例がみられる（第９図16・23)。

かわらけ皿の器形からみる限り、溝２と溝１の間に大きな断絶期間はないと考えられ、両溝はおおよそ鎌倉第Ⅲ期(13C中葉～後半)から鎌倉第Ⅴ期(14C中葉～終末)の時期に比定できよう。このことは溝２下層から青磁劃花文皿が出土し、上層および溝１から青磁鎬蓮弁文碗、瀬戸灰釉平茶碗、常滑窯第Ⅳ段階前半[註3]の甕が出土していることと矛盾はない。ただし、溝２上層より出土した瀬戸灰釉折縁鉢については詳しく調べる余裕がなく、この鉢の編年的位置付け次第では、若干年代の下る可能性もある。溝３については、出土した糸切りかわらけ皿が内底調整を行っており、鎌倉第Ⅰ期までは遡らず、恐らく鎌倉第Ⅱ期（13C前半）頃のものと考えている。

なお、遺構から出土したものではないが、Ⅰ区包含層中より異質なかわらけ皿（第８図４・７）が出土している。この皿は鎌倉第Ⅶ期(16C代)に比定されるもので、遺跡地が近世においても活動の場であったことを知る資料である。

註１　『北条泰時・時頼邸跡』同発掘調査団編　昭和61年８月

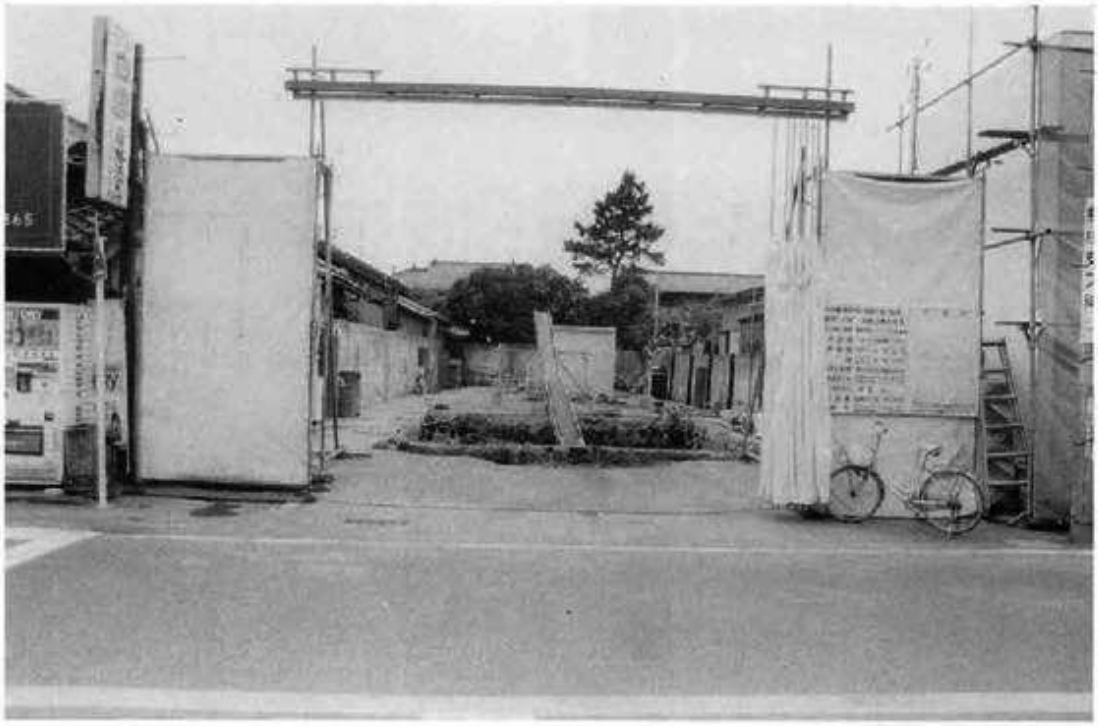
註２　かわらけの編年観については、河野真知郎「鎌倉における中世土器様相」シンポジウム『古代末期～中世における在地系土器の諸問題』神奈川考古同人会、昭和62年２月に依拠した。

註３　赤羽一郎『常滑焼』考古学ライブラリー23　ニューサイエンス社

図版 1

▲調査地近景

▼同上



## 図版2

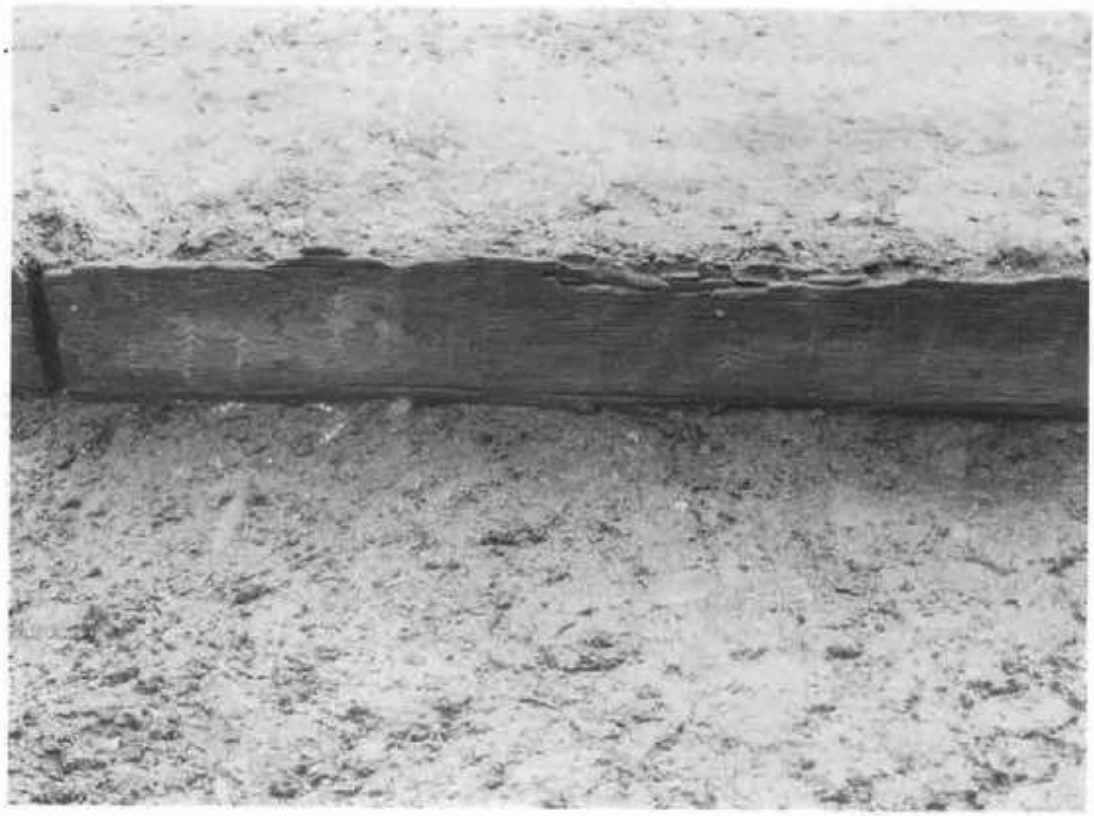
▲I区　土坑1

▲I区　全景

◀I区　トレンチ・溝3側壁

▲I区　動物遺骸

▼I区　溝1．側壁板材



図版4

▲II区　溝1全景

▼II区　溝2全景

図版5

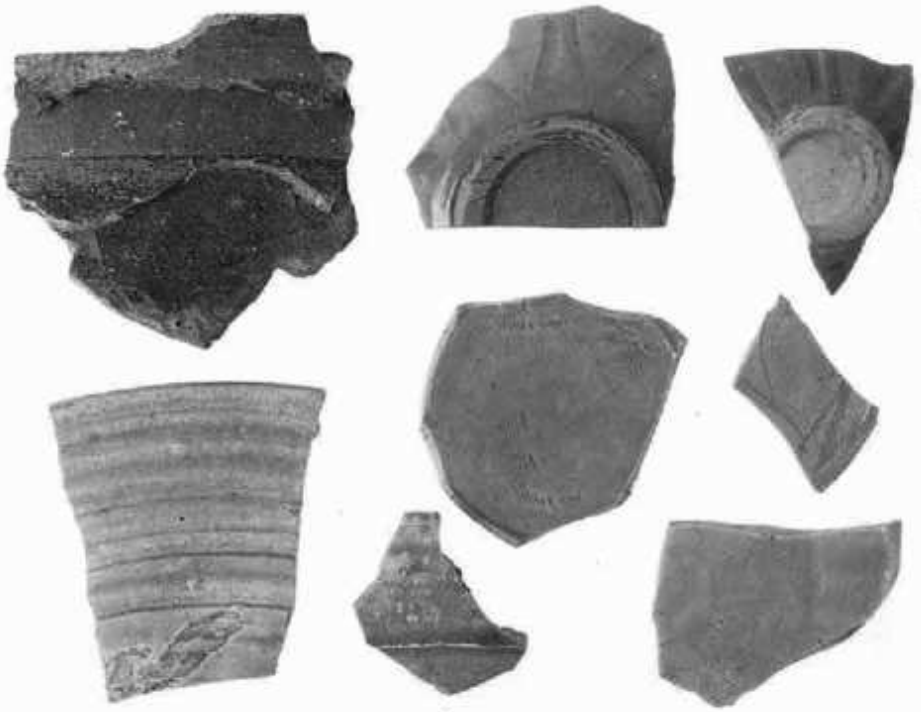
▲かわらけ小皿(溝1)

▲かわらけ大皿(溝1)

▲かわらけ小皿(溝2)

▲かわらけ大皿(溝2)

## 図版6

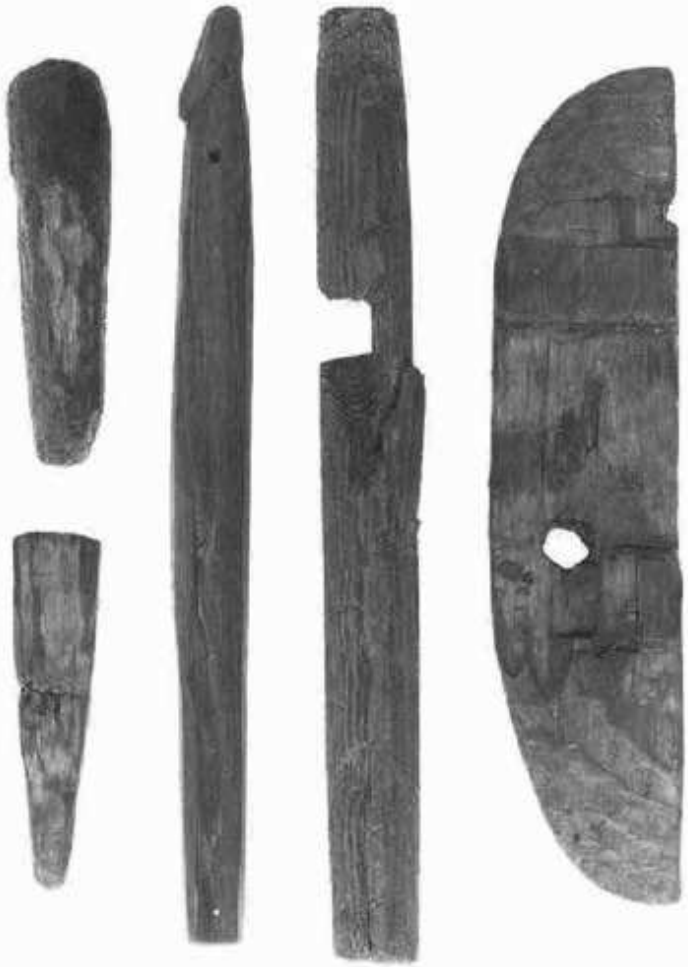


▲陶磁器

▲瓦

▲五輪塔

▲漆器小皿



▲木製品

▶木簡

図版8

▲貝

骨▼

## 4. 長谷小路周辺遺跡
由比ガ浜三丁目194番25他地点

例　言

1．本書は鎌倉市由比ヶ浜三丁目194番25外所在の中世遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は対称面積の３分の１を鎌倉市教育委員会（教育長・尾崎實、担当・松尾宣方）が、３分の２を長谷小路周辺遺跡発掘調査団（団長・斉木秀雄）が昭和62年７月10日から８月31日にかけて実施した。

本報告書に収録したのは、鎌倉市教育委員会調査分である。

3．調査参加者は下記のとおりである。

調査員　　浜口　康

調査補助員　片岡睦枝　稲田桂子

4．本報告書は、鎌倉市教育委員会の指示を受けて、斉木秀雄が執筆・編集した。

なお、斉木以外に、宗基富貴子、稲田桂子、作田あゆみ、伊丹まどからが実測、トレースにあたった。

5．本書に使用した写真は遺構を斉木が、遺物を木村美代治が撮影した。

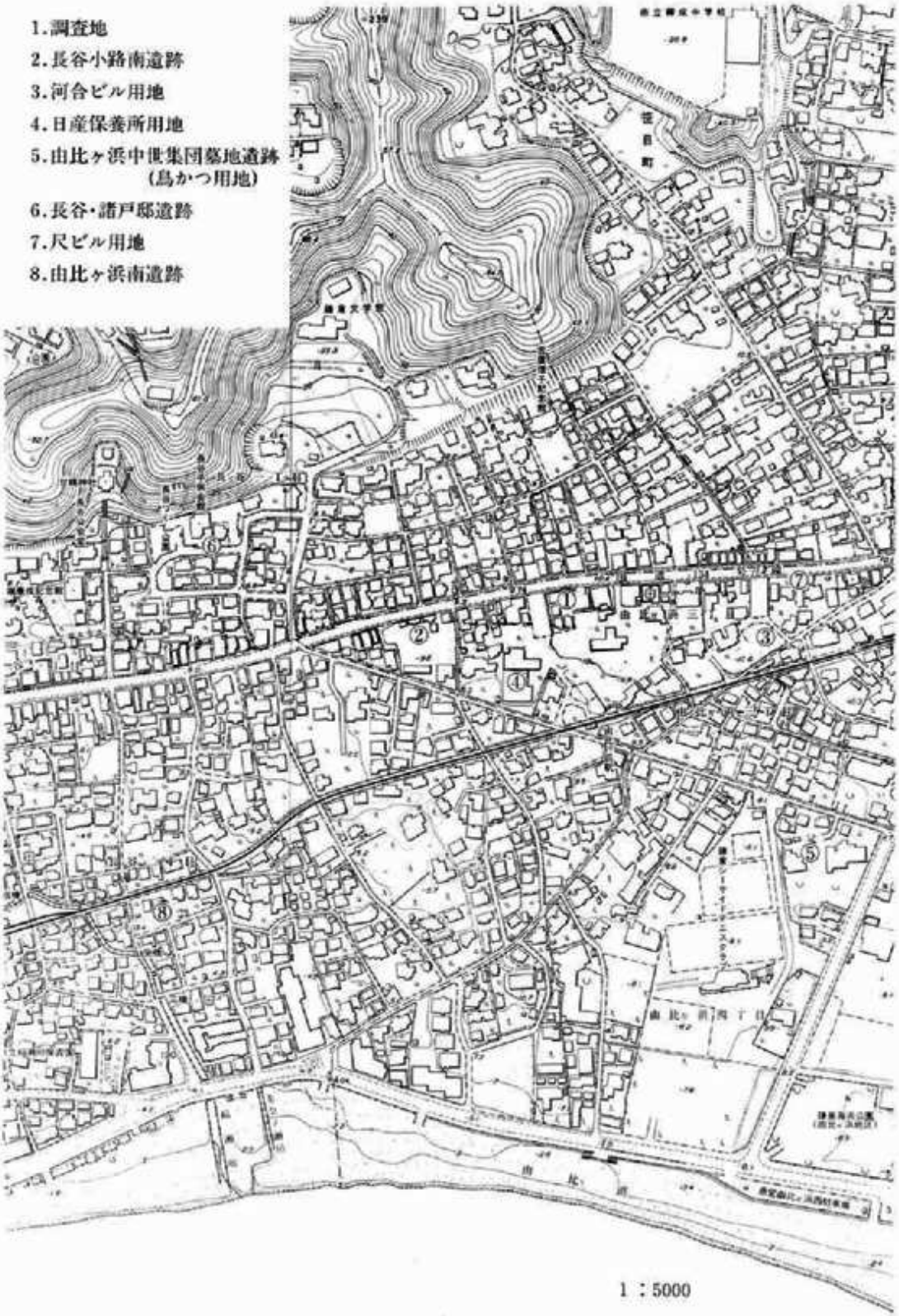

1.調査地
2.長谷小路南遺跡
3.河合ビル用地
4.日産保養所用地
5.由比ヶ浜中世集団墓地遺跡
(鳥かつ用地)
6.長谷・諸戸邸遺跡
7.尺ビル用地
8.由比ヶ浜南遺跡
1：5000

Fig. 1 遺跡周辺地図

# 第一章　遺跡の位置及び歴史的環境

遺跡地は若宮大路下馬交差点から長谷観音、大仏前、大仏の切通しを経て藤沢方面に抜ける道路（国道134号）の六地蔵と長谷観音との中間地点南側に位置する。この地域は、東・北・西の三方を山で囲まれた鎌倉旧市街地内で最も海と山との間が狭い地域である。遺跡地では山まで100m、海（波打ち際）まで500mを測り、現況での海抜は約10m前後である。

遺跡地周辺は古代（中世以前）においては、古東海道の道筋にあたり――古東海道は腰越から稲村ヶ崎を経て鎌倉に入り、小坪に抜けていた――、源頼朝が鎌倉に入った治承四年（1180）以前から存在していた御霊神社（鎌倉権五郎景政を祭神とするため「権五郎神社」ともいわれる）、甘縄神明社などの古社がある。又、遺跡地南東の旧海岸砂丘一帯は「下向原古墳群」と称される古墳群が明治時代頃まで存在していたといわれる。古墳群内の姥女塚（うねめづか）から出土したと伝える女性人物埴輪が京都大学文学部に所蔵されている。河川では、遺跡地西約300mを流れる稲瀬川は古くから有名で『万葉集』にも詠まれている。

中世においては、遺跡地から滑川河口西岸に至る地域は「前浜」と称される浜地であり、一種の自由活動地域であったと推定されるが、大仏、極楽寺の両切り通しから鎌倉に入る交通の要でもあった。又、遺跡地北の山側の地域一帯は「甘縄」と称され（甘縄神社から起った地名）安達藤九郎盛長、右衛門尉景盛、義景、泰盛らの安達一族の屋敷の他に、多くの御家人の屋敷地が並んでいたようである。

遺跡地周辺の発掘調査は近年盛んになり、本遺跡も含め８ヶ所で行われている。最も早く実施されたのは諸戸邸用地遺跡（Fig　1―⑥）で、大規模な木組み溝と多くの輸入陶磁器類及び古代の竪穴住居址１戸が確認され、木組溝などは安達氏の屋敷の一画と推定されている。ついで、日産自動車鎌倉保養所用地（Fig　1―④）の発掘調査が行われ、長谷小路南遺跡（Fig　1―②）、長谷小路周辺遺跡（河合ビル用地、Fig　1―③）、長谷小路周辺遺跡（尺ビル用地、Fig　1―⑦）、由比ヶ浜中世集団墓地遺跡（島かつ用地、Fig　1―⑤）、由比ヶ浜南遺跡（Fig　1―⑧）などの調査が1986年以降に相次いで実施された。これらの遺跡は、諸戸邸用地と異なり、現地表から下の堆積土層はすべて砂層を中心とする土層であり、旧海岸地帯であることが判明している。

各遺跡で検出された遺構は中世では、方形竪穴建築址、土壙、井戸、土壙墓を中心とし、掘立柱建物、礎石建物、溝はわずかである。遺物は市内で通常よく出土する輸入陶磁品。国内各窯の製品、かわらけなどの他に多量のフイゴの羽口、鋳型、スラグが加わり、長谷小路南遺跡では骨製品の薬形の加工途上のものが多く出土している。これは遺跡地を含む旧海岸砂丘上にこれらに従事する人々が多く居住していたことをあらわしている。

古代では、諸戸邸用地と長谷小路南遺跡、河合ビル用地で竪穴住居址が検出されており、河合ビル用地では副葬品を伴う土壙墓も確認されている。周辺の砂丘上の遺跡では竪穴住居址が多く検出されているので、古代でも遺跡地周辺はかなり多くの人々が住んでいたのだろう。

# 第二章　調査の経過及び堆積土層

## Ⅰ、調査の経過

発掘調査は、昭和62年７月10日から８月31日にかけて実施した。調査に際しては、本報告書収録部分と同時に原因者負担分調査（長谷小路周辺遺跡発掘調査団・団長斉木秀雄）の発掘調査も実施した。

調査では、試掘調査の結果から、現地表下約1.2mまでの現代撹乱層をユンボによって取り除き、以下第１面から第３面までの調査は順次行った。建築建物の基礎深度が現地表下約２mということもあり、第３面以下（中世以前）の調査はトレンチにより実施した。

調査中の遺構平面図、写真（全景）の際には、同一面の連続遺構であることから、あえて、調査範囲の区分は入れなかった。

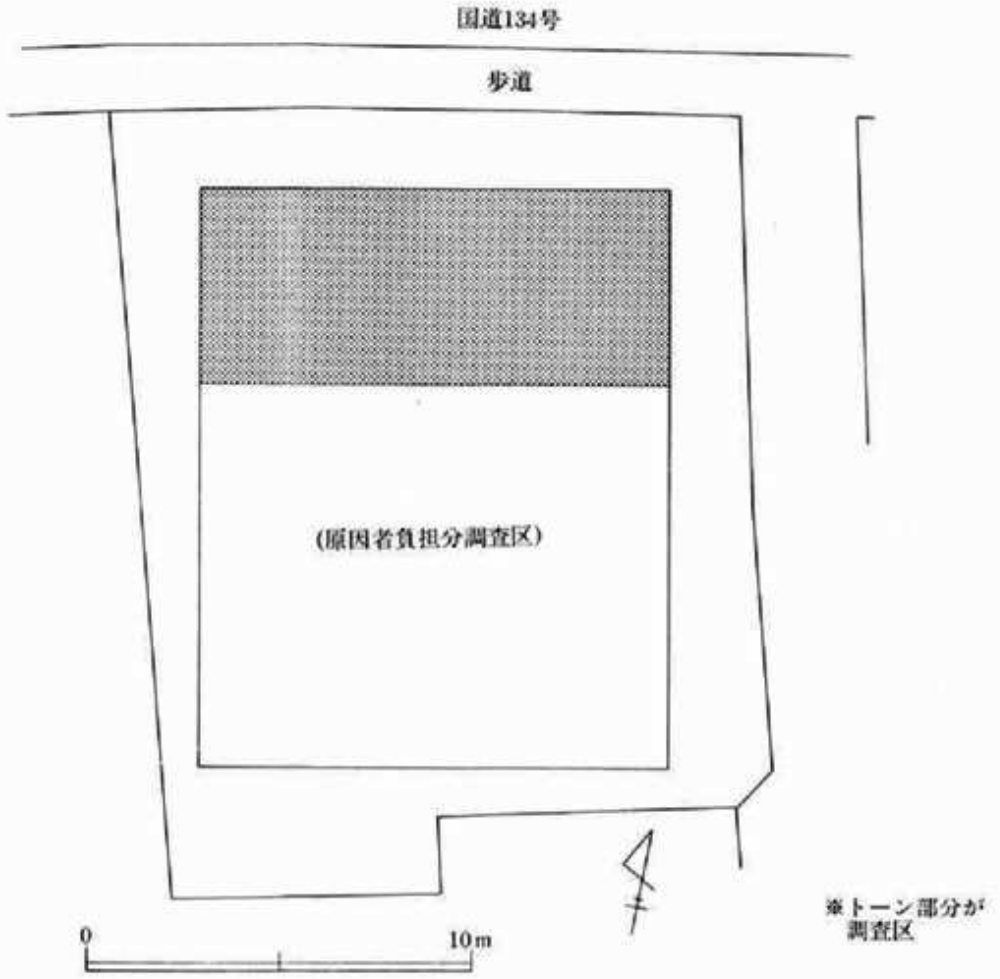



Fig. 2 調査区位置図

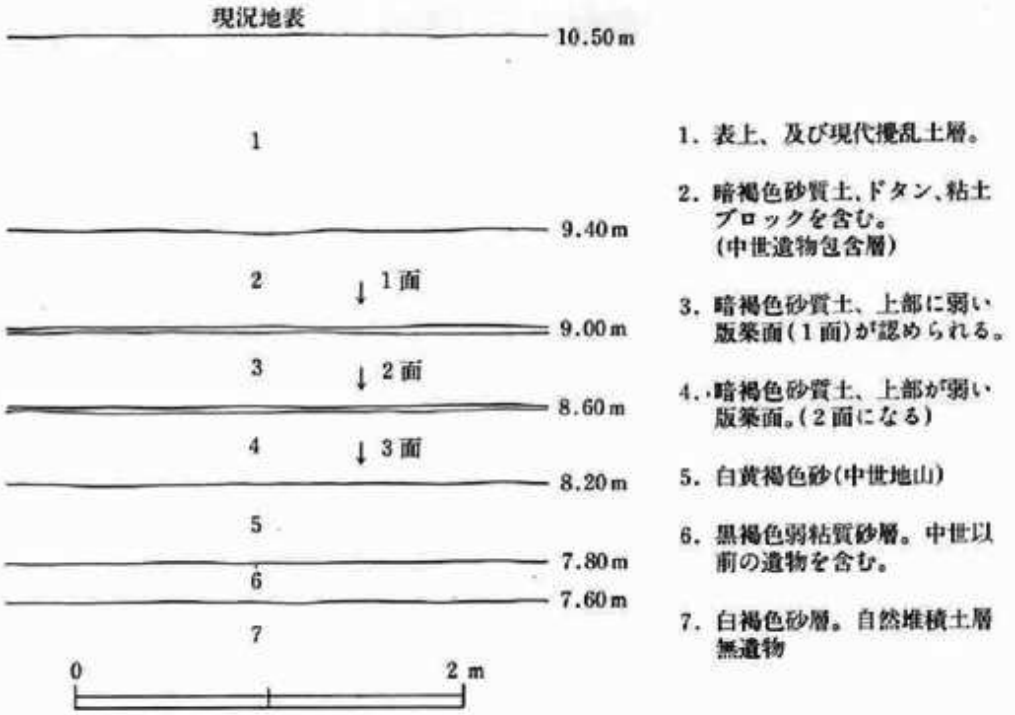



Fig. 3 堆積土層模工図

II、堆積土層

遺跡地内で確認した堆積土層は7層に大別できる。第1層は表土及び現代撹乱層であり、地表下1.1mにまで達している。第2層は中世遺物包含層である。炭化物、かわらけ片、土丹などを多量に含み、暗褐色を呈する。部分的に近世（江戸時代）の遺物が混入している個所もあるため、第2層上面近くが近世の生活面と考えられる。

第3層は暗褐色砂質土であり、層中には多くの中世遺物を含んでいる。上面には部分的な弱い土丹版築あるいは黄褐色を呈する砂の地行（?）と思われる面がある。調査では、この弱い版築面を第1面とした。

第4層は第3層と同様の土質であるが、上面に炭化物を多く含む黄褐色又は灰白色の弱い地行面が認められた。地行面は部分的であり、調査区全域には広がらないが、この地行面を第2面として調査した。

第5層は白黄褐色を呈する砂層、中世地山である。層内には粒子の荒い部分と細かい部分とが何重にもかさなっており、神奈川県立博物館の松島先生の御指摘では、海岸砂丘の砂が風で飛ばされた結果であろうとのことである。第5層の上面は海抜8.2mほどであり、長谷小路南遺跡よりやや低くなっている。

第6層は黒褐色（ややチョコレート色に近い）を呈する粒子の細かい砂層であり、層内に古代遺

物（弥生時代～平安時代）を若干含んでいる。本遺跡の調査時には確認できなかったが、周辺の調査では上面に多数の小孔が認められる。松島先生の御指摘では、水辺に住む陸生の小虫の穴であろうとのことであり、本層が堆積中には、遺跡地周辺が「湿地」状の土地であった可能性が高い。

第7層は白褐色を呈するやや粒子の荒い砂層であり、細かい貝片を多く含むが、遺物は全く出土しない。

## 第三章　検出された遺構と遺物

調査では第1面～第3面までの3枚の生活面と古代の遺物包含層が検出され、各面から柱穴、土壙、方形竪穴建築址などが多く確認された。

本項では検出された遺構と遺物について説明を加えていくことにするが、古代の遺物は図示できるものがないため、本報告中では割愛し、原因者負担分調査報告書に収録した。又、第1面から第3面の面上出土遺物も、調査中に2調査区域の区分を明確にできなかったため、本報告書内では簡単にふれるにとどめ、実測図は示さなかった。建築用材（H鋼、矢板）によって区分された比較的小面積の調査区（約180㎡）内を、さらに、2つの調査団が調査を実施した訳であるから、報告書が遺跡全体について不明瞭になってしまったが、御容赦いただきたい。

以下、各面検出の遺構と遺構出土の遺物について説明を加えるが、以下で使用するレベル数値はすべて海抜で示している。

### I　第1面

調査区内からは、比較的大きな土壙（土壙1）と、小土壙・柱穴を合わせて19口が検出された。調査区外（原因者負担分調査）では土壙と、鎌倉石（砂質凝灰岩切石）が覆土内に多量に投げ込まれた方形竪穴建築址などが検出されている。土壙1を除いた小土壙と柱穴には規則的な配置が認められない。

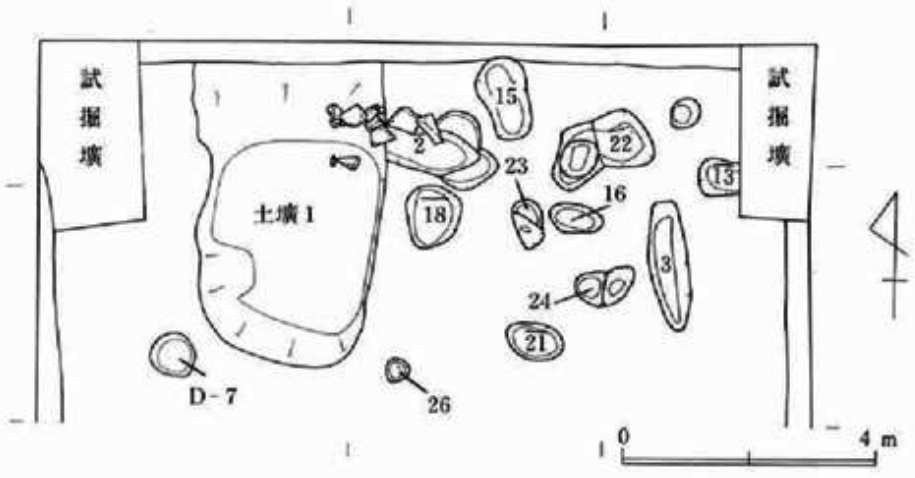



Fig. 4　第1面検出遺構

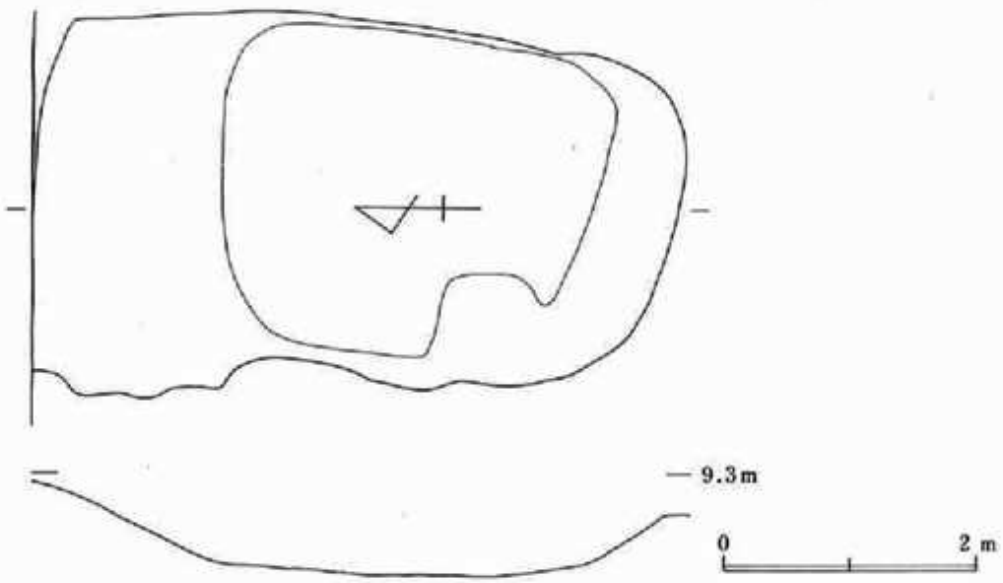



Fig. 5 土壙1

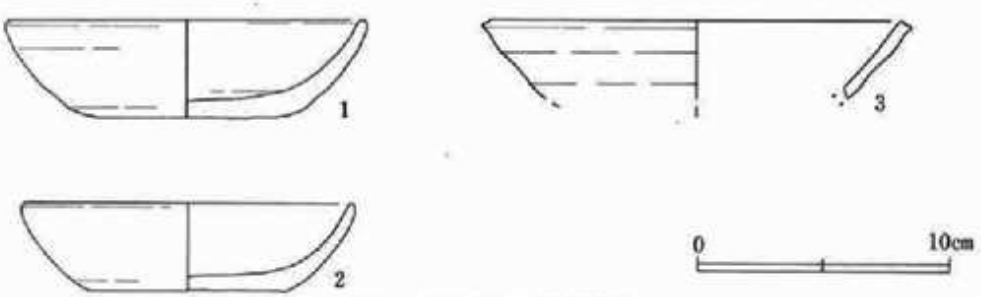



Fig. 6 土壙1 出土遺物

(1) 土壙1

調査区北壁際で検出された。一部が調査区外北に延びる。平面型は隅丸方形に近いが、底面プラこはやや不整形を呈する。長軸はほぼ磁北。確認規模は南北5.1m以上、東西2.8m、深さ約80mを測る。底部は南に寄り、北壁の落ち込みはなだらかである。

遺物はかわらけ、常滑甕片、こね鉢片、瀬戸陶器片、輸入磁器片などが多く出土したが、図示できたのは、かわらけ2点と瀬戸灰釉おろし皿片1点である。

かわらけはFig 6－1が口径14.2cm、底径7.4cm、器高3.9cmで、外底部に回転糸切り痕、スノコ痕が残る。器肉はやや厚く、胎土には金雲母及び白色棒状粒子が混入する。側壁はゆるやかなカーブを描きながら立ち上がり、口唇部はやや内湾気味である。

Fig 6－2も1と同様の胎土、整形、器形で口径13cm、底径7.6cm、器高3.4cmを測る。

Fig 6－3は瀬戸おろし皿。ほぼ全面に灰釉がハケ塗りされる。口径16.8cm、残存高3cm。胎土は灰褐色を呈し、固い。

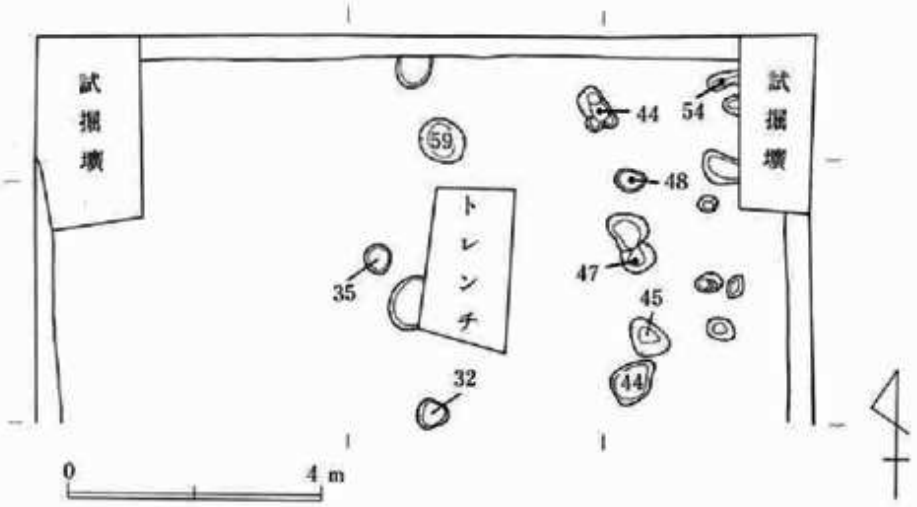



Fig. 7　第2面検出遺構

II　第2面

第1面の下約40cmで検出された。炭化物を多く含む黄褐色又は灰白色の弱い地行面が部分的に確認されたが、遺構は20口の柱穴が検出されたにとどまった。

検出された柱穴は建物を復元することはできなかったが、前面(北側)の国道にほぼ直交方向に、建物が復元できそうでもある。

遺物はかわらけ、常滑甕片、瀬戸、舶載陶磁器などが出土しているが、このほかに他調査区域で多量のスラグ、フイゴの羽口が出土している。しかし、工房（炉址）と考えられるような土壙は確認されていない。

III　第3面

第2面の下約40cmで検出された。中世地山である白黄褐色砂層上に構築された遺構面であるが、上部の第2面での遺構検出が十分でなかった点もあるので、第3面検出遺構に、上面の遺構が含まれている可能性も残る。

検出されたのは、重複する2基の方形竪穴建築址と土壙、約60口の柱穴である。

遺物は多量のかわらけと常滑、瀬戸、備前すり鉢の他にスラグ、フイゴの羽口、舶載陶磁器などが出土している。スラグ、フイゴの羽口は第1面より多いが、第2面より少ない。

以下、第3面検出の主要遺構について説明を加えていく。

(1)　D—123（1号方形竪穴建築址）

調査時に附した番号はD—123であるが、本来は方形竪穴建築址であるため、報告書作成時に1号方形竪穴建築址と附した。

長軸はほぼ正南北（磁北）にあり、確認規模は東西3m（底面幅2.0～2.3m)、南北4.5m（底面幅4.1m)、深さ65～75cmを測る。掘り込み壁はややなだらか、床面は平坦である。床面上からは柱穴や根

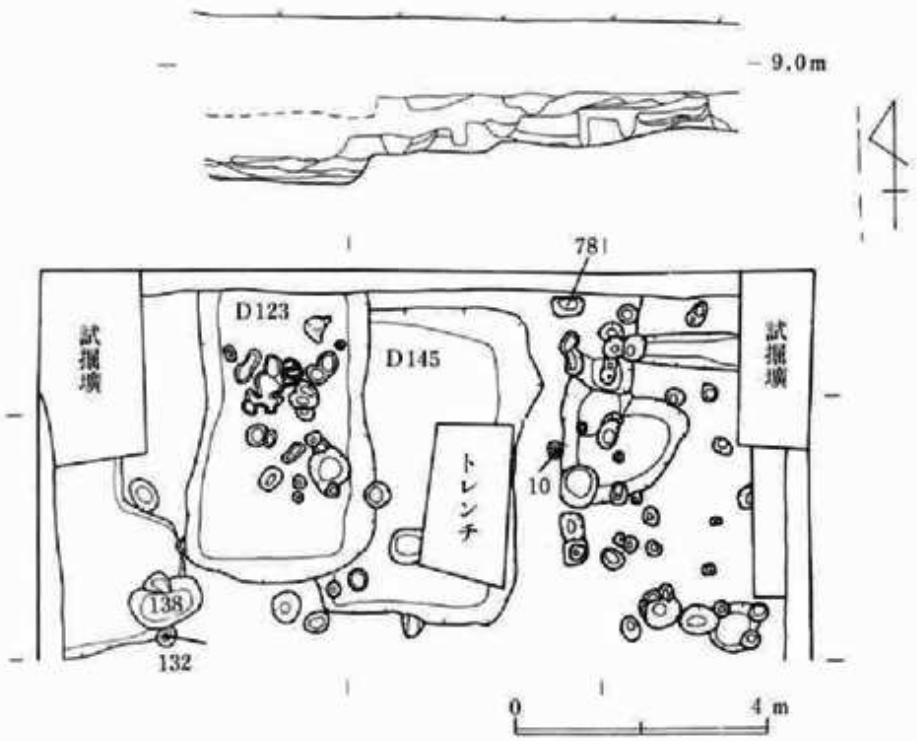



Fig. 8　第3面検出遺構

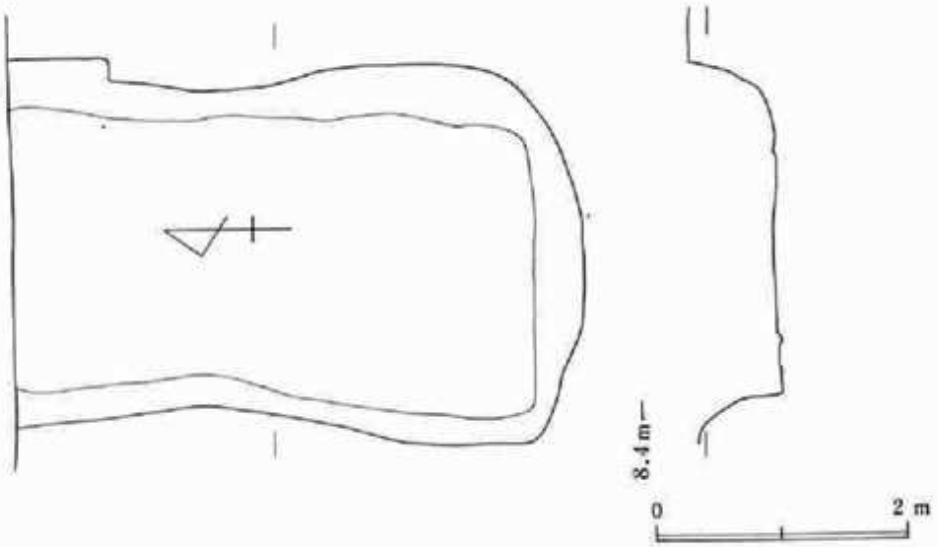



Fig. 9　D-123（1号方形竪穴建築址）

太木痕などの遺構は検出できなかった。当初からこれらのない型式の方形竪穴建築址であろう。

遺物は舶載磁器、かわらけ、常滑甕片、こね鉢片、瀬戸製品片などが出土したが、図示できたのは舶載磁器5点とかわらけ4点だけである。

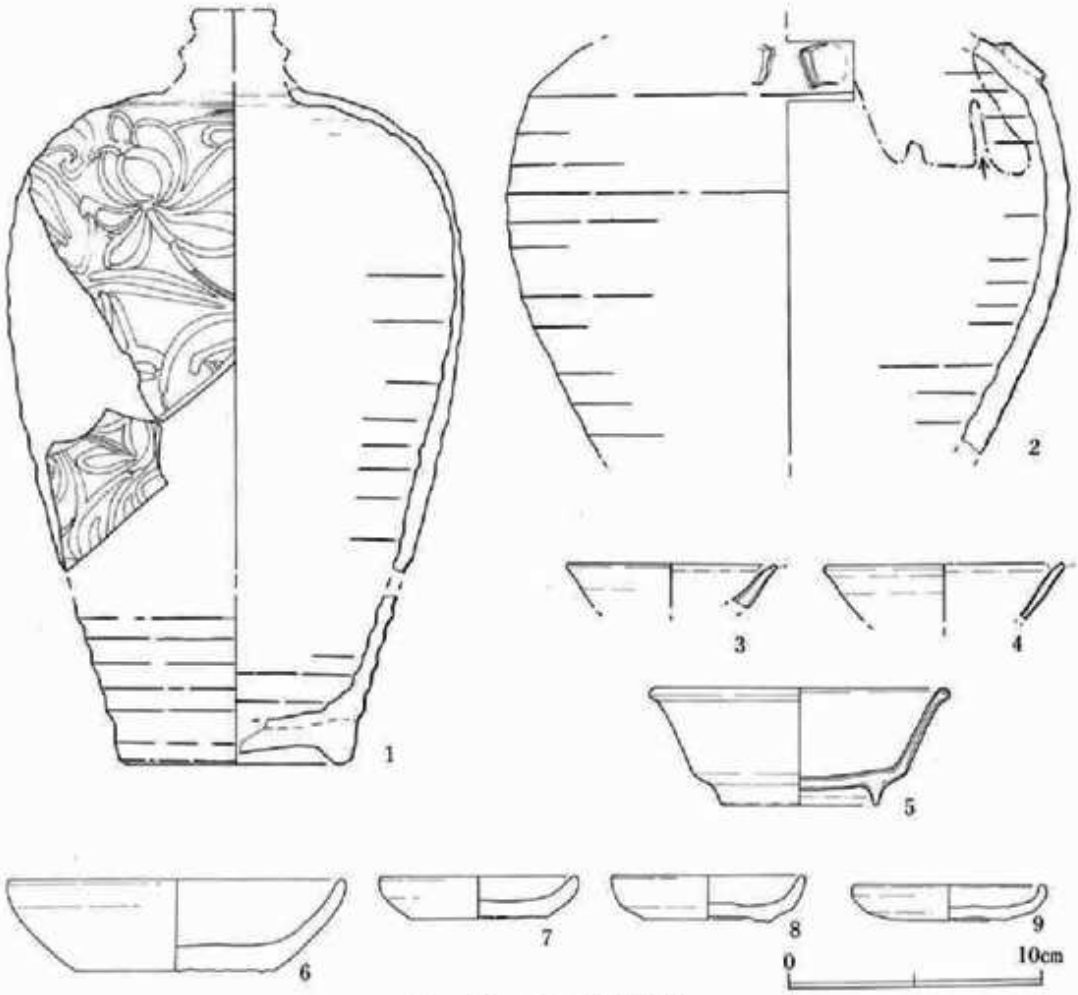



Fig. 10　D-123 出土遺物

Fig 10－1は青白磁梅瓶片である。本遺構出土のものとD—132、第1面、第3面、D—85出土の破片が接合している。胴部片と底部片との接点がないため推定の域を出ないが、器高29cm前後、胴部最大径18cm、底径9cmほどと思われる。外面にはヘラ彫りによる花文が彫られ、透明度の高いうすい青緑色の釉がかけられている。高台はやや幅の広いがっしりしたもので、破片の観察によると本体と接合しているもののようだ。

Fig 10—2は白磁四耳壺。本遺構出土のものとD—139出土のものが接合している。肩部以上と胴下半分を欠くため全体形は把握できない。胴部最大径（復元）22cm。肩部に横方向の貼り付け耳が付く。外面には白淘色釉がかかり、一部は肩部内側に流れる。

Fig 10—3、4は白磁口元皿。3は口径8.2cm、口唇部から内側にかけての釉が削り取られている。釉は不透明な白淘色を呈し、内外共に厚くかけられている。4は口径9.4cm、口唇部から内側にかけての釉が削り取られている。

Fig 10—5は青磁小型鉢。口径11.5cm、高台径6.2cm、器高4.6cm。素地はうすい灰白色を呈し粒子が

細い。釉はうすい緑色で、やや透明度が低く、高台畳付を除く全面に施釉されている。体部は、断面逆三角形様の高台からやや腰を張った形に張り出し、ゆるやかに開き口唇部でやや肥厚している。

Fig 10—6～9はかわらけ。6は大皿、7～9は小皿である。6は口径13cm、底径7.7cm、器高3.5cm。外底面には回転糸切り痕とスノコ痕が残っている。7は口径7.6cm、底径5cm、器高1.6cm。8は口径7.5cm、底径5cm、器高1.7cm。9は口径7.3cm、底径4.4cm、器高1.4cm。6・7は口唇部が内湾気味に立ち上がる器形を呈し、8は体部下半がやや張り出し外返気味の口縁部をもつ、胎土は比較的粗く、粉質ではないかわらけであるが、9はやや異なる。9の胎土はやや細かく、口唇部は内側に折れ込むように立ち上がっている。いわゆる「内折れ」タイプのかわらけと同一であるかもしれない。

(2) D—145（2号方形竪穴建築址）

D—123土壙に掘り込み壁の一部を切られる。本遺跡では古い方形竪穴建築址であるが、調査時には標記名称を使用していたので、本報告中でこれにならった。2号方形竪穴建築址という名称は報告書作成に附したものである。

竪穴はほぼ全体が確認された。南北に長辺を持つ方形の掘り込みを持ち、南北軸N—3°—E。竪穴規模は東西2.7～3m（底面幅2.3～2.5m）、南北4.8m（底面幅4～4.2m）、深さ50～75mを測る。底面はほぼ平坦であるが、柱穴などの遺構は検出できなかった。海岸地帯では床面に何の痕跡も残らない中型の方形竪穴建築址がよく検出されているので、本例もそうしたタイプのものであろう。

覆土内からはかわらけ、砥石、釘、舶載磁器、常滑片、鉢片、瀬戸製品などが多く出土したがいずれも小片のため、かわらけのみの図示にとどまった。

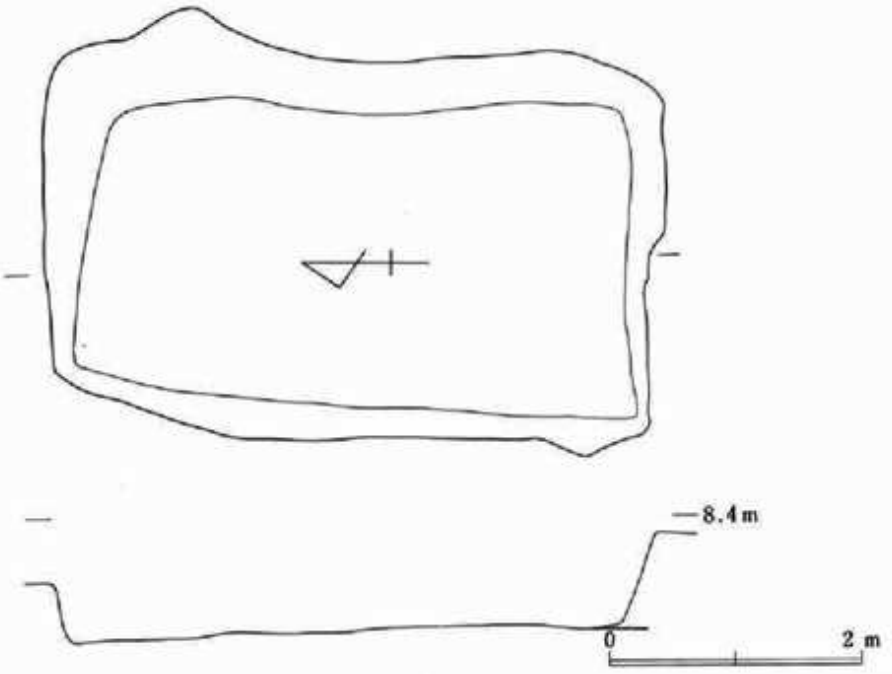



Fig. 11 D-145（2号方形竪穴建築址）

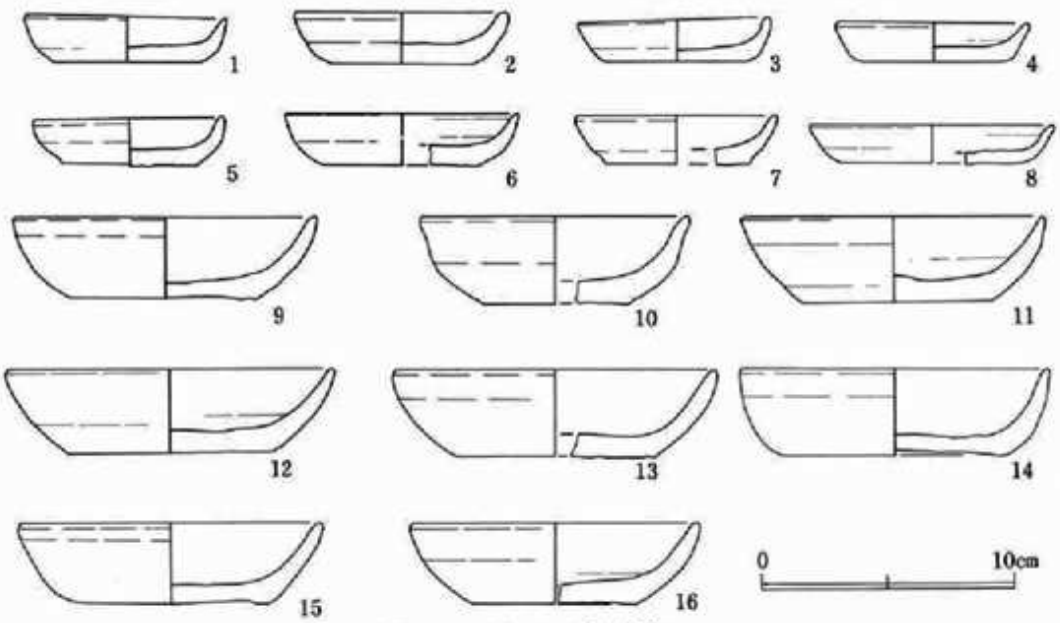



Fig. 12　D-145 出土遺物

図示したかわらけのうち、1～8は小皿、10・16は中皿、9・11～15は大皿である。出土した破片には内折れ皿は含まれていない。

1－8は口径7.5～8cm、器高1.6cm前後であるが、6・8は復元口径で9.5cm近い。胎土はいずれも粉質土ではなく、焼成も良好である。外底面には回転糸切り痕を残し、ほとんどにスノコ痕が明瞭に残る。器形には若干の変化がみられ、底部近くに曲折点をもつもの（1、2、5、6）、底部から直線的に外返するもの（4）、薄い器肉で口縁部が外方にやや引かれているもの（8）などが認められる。

10・16の中皿は口径10.5～11cm、器高3.5cm前後を測る。胎土は小皿と同様であり、回転糸切り痕とスノコ痕もみられる。10は側壁中位に曲折点をもち、口縁部は外方に引き出されている。16はゆるやかな体部をもち、口唇部はやや内湾気味に立ちあがっている。

大皿は口径12～13cm、器高3～3.5cm近くの寸法が測れる。胎土その他は小皿、中皿と同様である。体部はゆるやかなカーブを描きながら立ち上がり、口唇部はやや内湾傾向を示すものがほとんどであり、さほど変化は認められない。

以上、説明を加えたかわらけはいずれも覆土内の出土であり、一括廃棄されたものとは思われないほどの変化が小皿、中皿には認められる。土壙内の一括資料（近い層位からまとまって出土したもの）には、このような変化は認められないことが多いので覆土内の出土遺物にみられる変化は竪穴などの埋没年代の長さを裏付けているともいえる。

Ⅳ　その他の出土遺物

ここでは、第一面～第3面の各面で検出された遺構のうち、前項までに説明を加えた各面の主要遺構を除き、遺物の出土した土壙について説明を加える。しかし、ここで扱った各土壙は柱穴様の

ものや、原因者負担調査区に主体部があるものあるいは、極く限られた部分の調査しかできなかったものなどであり、遺構の図面は各面の平面図を使用し、ここでは載せなかった。

(1) D－3出土遺物

D－3は第1面に属する溝様土壙である。かわらけとフイゴの羽口が図示できたが、この他に常滑甕片などが若干出土している。

Fig 13－1はフイゴの羽口。下端を欠くため全体形は把めない。本体はワラ状の植物を多く混じえた粗い土で作られ、先端部には黒緑色を呈する溶触物が付着している。本体には中心にややひしゃげた穴（2.5～3㎝）が穿けられている。整形痕ははっきりしないが、棒状具に粘土をまきつけて指頭で整形したものと思われる。

Fig 13－2はかわらけ皿。口径12.2㎝、底径7.6㎝、器高3.2㎝を測る。体部は側壁上位に弱い曲折点をもち、口唇部はやや外返傾向を示す。外底面には回転糸切り痕とその上にスノコ痕が明瞭に残る。

(2) D－6出土遺物

図示できたのは瀬戸灰釉おろし皿1点であるが、これ以外にかわらけ片、常滑甕片などが出土している。かわらけには粉質胎土のもの、内折れ器形を呈するものは含まれていない。D－7の南西。

Fig 13－3は口径13.7㎝、内外共にやや黄ばんだ緑色の釉がかけられている。胎土はうすい黄緑色を呈し、ややさっくりとしている。

(3) D－10出土遺物

小型土壙では最も多く遺物が出土している。図示したのはすべてかわらけであるが、このほかに常滑甕片、スラグ、フイゴの羽口、舶載磁器、瀬戸製品、釘などが出土しているが、いずれも小片であり図示できなかった。第1面検出。

Fig 13－6～12が本土壙出土のかわらけ。6は口径7.5㎝、底径5㎝、器高1.4㎝を測り、外底面に回転糸切り痕とスノコ痕が残る。体部は底部近くに曲折点があり、口唇部は外反気味である。

7は口径8㎝、底径4.5㎝、器高2.2㎝で器肉が薄く、胎土は良い。鎌倉市内で「薄手」と呼称される一群のものであろう。口唇部はやや外反傾向を示す。

8は口径12㎝、底径5.8㎝、器高3㎝。7と同様の胎土、器肉の一群である。側壁はゆるやかなカーブを描きながら立ち、口唇部はやや外反している。

9も7・8と同質胎土の一群である。口径は、12㎝、底径5.5㎝、器高3.3㎝。底部近くが整形時の不手際からややゆがんでいるが、全体的にはゆるやかな立ちあがりから口唇部が外反するプロポーションである。

10は口径12㎝、底径6㎝、器高3.4㎝。7～9とは異なる胎土で鎌倉の一般的かわらけである。粉質胎土ではない。側壁は上位に曲折点を持ち、口唇部はやや外反している。外底面には回転糸切り痕とスノコ痕が残る。

11は復元口径が14㎝を越える。胎土は10と同質である。

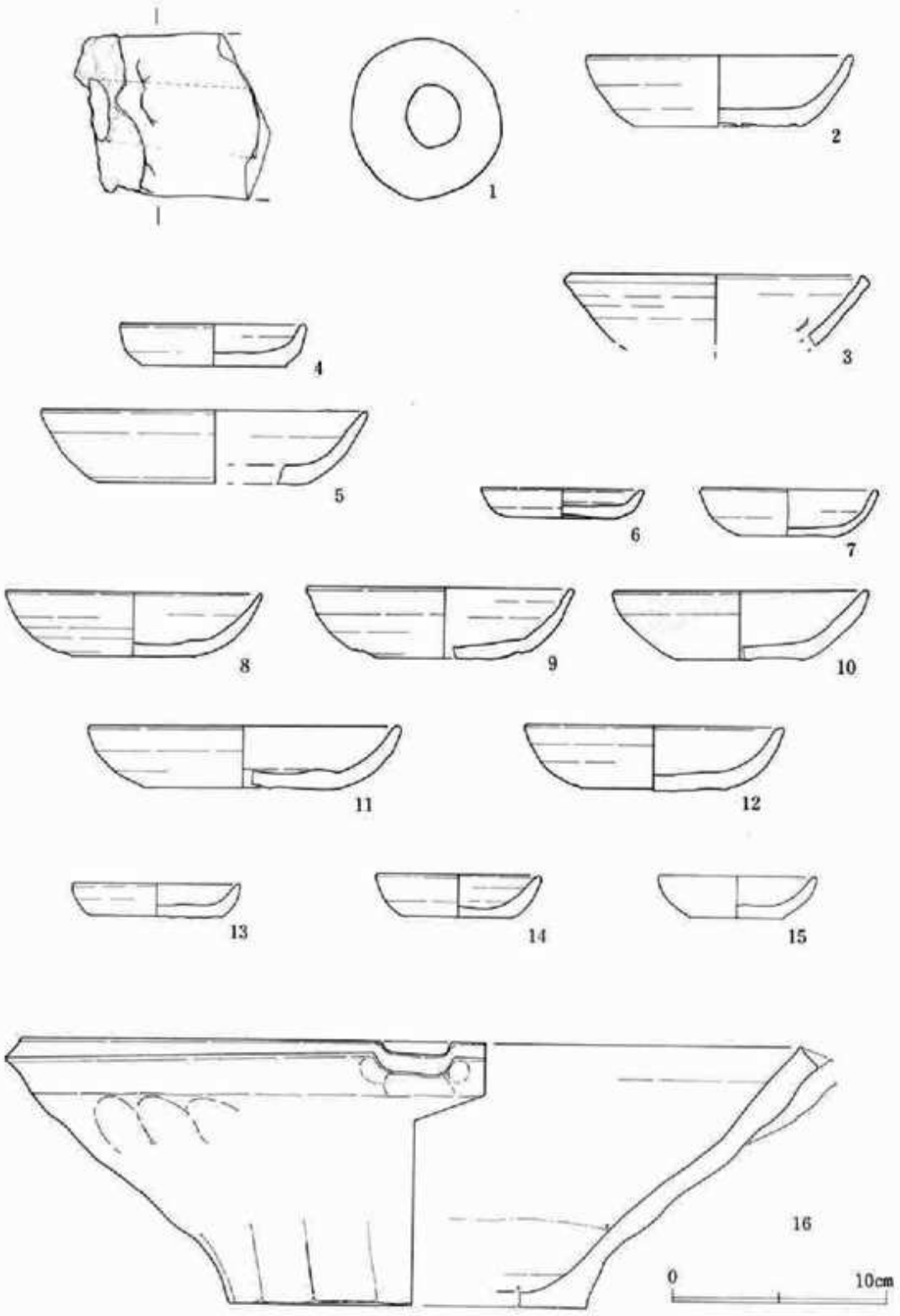



Fig. 13 その他出土遺物

12は口径12cm、底径6.8cm、器高3cm。体部はゆるやかに立ちあがり、口唇部はやや外反傾向を示す。

本土壙出土のかわらけには、薄手良品と粗い胎土のものとが共伴関係にある。いずれの胎土のものも口唇部が外反傾向を示しており、さほど時代差は認められない。

(4) D—53出土遺物

第2面で唯一図示可能な遺物の出土した土壙である。本来ならば、第2面の主要遺構として取り扱うべきところであるが、小規模であることなどから本項で扱った。かわらけが2点図示できたがこの他に常滑甕片などの小片が若干出土している。D—13南東、試掘壙壁にて確認。

Fig 13—4・5が本土壙出土かわらけである。4は口径8.5cm、底径6.8cm、器高2cm。胎土はやや砂を含み粗い。側壁体部は底部近くに曲折点をもち、口唇部はやや外反気味である。

5は復元口径が15cm近い。胎土はD—10出土の薄手に近いが、器肉はやや厚い。体部はゆるやかに立ちあがり、口唇部は外反傾向を示す。

(5) D—124出土遺物

本土壙はD—123の南西調査区際で検出されたため、主体部は調査区外西側にあり、調査された部分のほとんどは原因者負担分側にある。そのため、第3面検出遺構にも図示していないが、ここに示した遺物はD—124の北端からまとまって出土しているため、参考までに図示した。

Fig 13—13～15が本土壙出土のかわらけである。いずれもやや砂を含んだ粗い胎土であるが、焼成は良好である。口径は7.5cm前後、器高は13が1.5cm、他は2cmを測る。ややプロポーションは異なるが、口唇部が外反傾向を示す点は共通している。

(6) D—132出土遺物

常滑系こね鉢1点が図示できた。この他にはかわらけ、常滑甕片、瀬戸製品などが出土しているがいずれも小片である。

Fig 13—6は口径36.5cm、底径16.7cm、器高12.6cmを測る。口唇部1個所が指頭により引き出され、片口部となる。外面は口縁近くが横ナデ、下部がヘラのナデ上げ、中央部が指頭整形である。内底面近くの摩滅は著しく、良く使用されたものと思われる。

# 第四章　まとめと考察

調査では、3枚の版築地行面とそれぞれの面上から土壙・柱穴・方形竪穴建築址などが検出されており、出土遺物も小片ながら舶載磁器・瀬戸・かわらけ・フイゴの羽口などが多く出土している。遺物全般の組成をみると、市内の各遺跡ときほど変化は認められないが、フイゴの羽口が多いことなどにやや特徴的な要素が認められる。

以下、調査によって得られた結果（原因者負担分調査区も含めて）から、遺跡の年代、遺跡の性格などについて、若干の考察を加えながらまとめを行うこととする。

## 遺跡の年代について

出土遺物では弥生時代（?）から中世にいたる期間のものが断続的ながら確認されているが、中世以前では遺構は確認されていない。出土したかわらけを観察すると、これらの内には粉質土のもの（戦国期くらい）と手づくねあるいは砂質胎土で内底面に指頭ナデの施されないもの（鎌倉初期から13世紀中葉）がまったく含まれていない。この状況は、位置の近い長谷小路南遺跡などと共通している。舶載磁器では蓮弁文の施された青磁碗が主体をなして、画花文青磁碗は極く少い。白磁では口元皿が主体をなしている。

3枚の版築地行面による出土遺物の変化はあまり認められない。舶載磁器での接合状況では異なる版築面のものも接合している。極く近い時期に営まれた生活面と思われる。かわらけ・舶載磁器などから考えられる年代は13世紀末から15世紀初頭頃の比較的短い期間である。このことからも3枚の版築面が近い時期に営まれたものといえる。3枚の版築地行面それぞれの年代を推定するには得られた資料が少ないが、本遺跡地周辺での生活は（古代を除くと）13世紀末頃に始まり、15世紀初頭頃には生活の場ではなくなっていたものと推定できる。

## 遺跡の性格について

調査地周辺地域は鎌倉時代には「前浜」と呼ばれる浜地であり、一種の自由活動地域であったと推定されている。この地には多くの職能人（手工業者）が住んでいたことが長谷小路南遺跡などの調査で判明している。本遺跡では2つの調査区内で、わずか180㎡という狭い区域にもかかわらず20個体以上のフイゴの羽口が出土している。鎌倉市街地の調査でも、これほど多くのフイゴの羽口が出土することはまれである。これらの鋳造関係施設としての炉などは検出されなかったが、調査地周辺で鋳造関係の仕事に従事する人々が多く住んでいたことは明らかであろう。

検出された遺構は方形竪穴建築址・土壙・柱穴の他に犬の埋葬墓1例であり、これらの状況も他

の砂丘上遺跡と大差がない。このように方形竪穴建築址を主体とする遺構のありかたは「浜地」での大きな特徴である。

本遺跡の性格は長谷小路南遺跡と同様の都市縁辺部（浜地）の手工業者集団の居住遺跡であるといえよう。

### 自然環境について

堆積土層の分析も十分におこなわれていない現状で自然環境について考察を加えるのは、推論の域をでないだろうが、近接した遺跡の同様の堆積を神奈川県立博物館の松島先生に観察していただいた結果に非常に興味深い点が多いので、ここではその結果に出土遺物を合わせ考えたうえでの推論を示すことにする。

堆積土層でふれた6層は、松島先生の御指摘で陸生の小虫が多く住む湿地様の折の堆積土であることが判明している。本遺跡ではこの層中からは中世以前の遺物しか出土していないが、南東の長谷小路周辺遺跡（河合ビル用地）では手づくねかわらけが若干出土している。このかわらけに伴う遺構はまったく確認されていないが、遺物が出土するということは、中世初期まで「湿地」が存在していたことを裏付けているのだろう。この層の上に堆積した白黄褐色砂（5層）は砂丘砂が風によって吹きよせられた様相を呈している。

検出された中世遺構はすべて第5層上面から掘り込まれたものであり、手づくねかわらけはまったく含まれていない。かわらけをみても13世紀中頃に属するものはみられない。このことからすると、古代から鎌倉時代前期（13世紀中頃）にかけて存在していた湿地が埋った時点で、人々が居住し始めたのであろう。そして、この開始時期が13世紀末から14世紀初頭になる。湿地の範囲は十分に把握できていないが、長谷小路南遺跡から笹目の交差点近くまでの国道の南側一帯が含まれているようだ。

▲遺跡地周辺状況：気球写真
（矢印が調査地点、写真右下の空地は
長谷小路南遺跡）

PL. 2

第2面全景 ▶
（調査区北東部、北から）

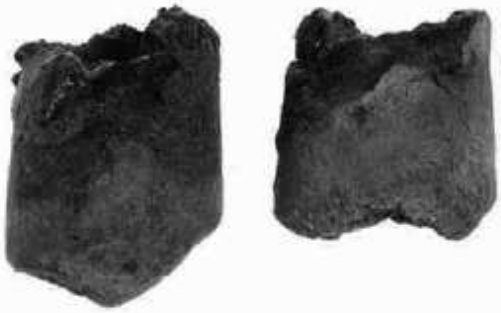
◀第2面全景
（調査区北東部、南から）

◀常滑甕

こね鉢
1～3　常滑系
4．5　山茶碗窯系

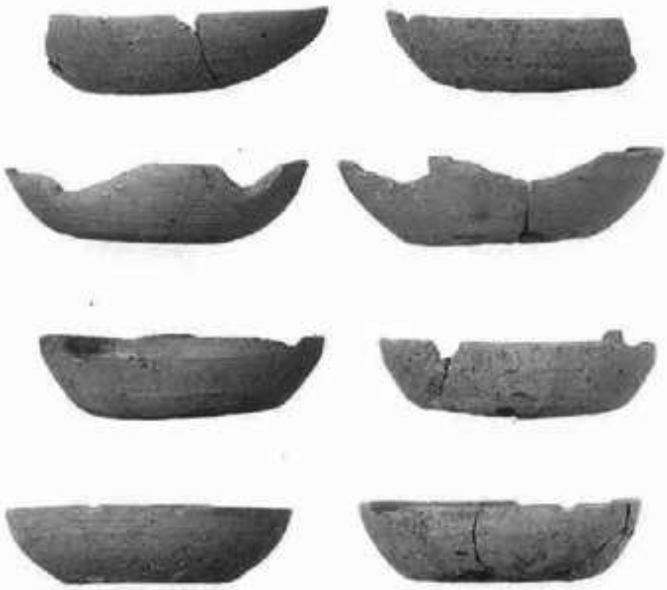
◀常滑系こね鉢

PL 4



◀フィゴの羽口

かわらけ皿 ▶
(大)



◀かわらけ皿
(小)

# 5. 若宮大路周辺遺跡群

小町二丁目39番 6 他地点

例　言

1　本報は鎌倉市小町二丁目39番6他における、上條　源の専用住宅建設工事に伴う発掘調査の報告である。

2　本報の執筆には田代郁夫、第二章12.漆製品の項には、佐藤泉が、図版作成には原廣志・継　実・片岡睦子・大畑明子・土屋浩美があたり、原がこれを編集した。

3　本報で使用した写真のうち、遺構は田代・田中哲也が撮り、遺物は木村美代治があたった。

4　調査体制は以下の通りである。

担当者　　田代郁夫
調査員　　田中哲也　継　実　佐藤　泉
調査補助員　村上和久　片岡睦子　土屋浩美

5　出土品等発掘調査資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

6　発掘調査及び資料整理の際には、以下の諸氏及び諸機関から貴重な御教示と援助を賜った。記して感謝の意を表したい。(順不同・敬称略)

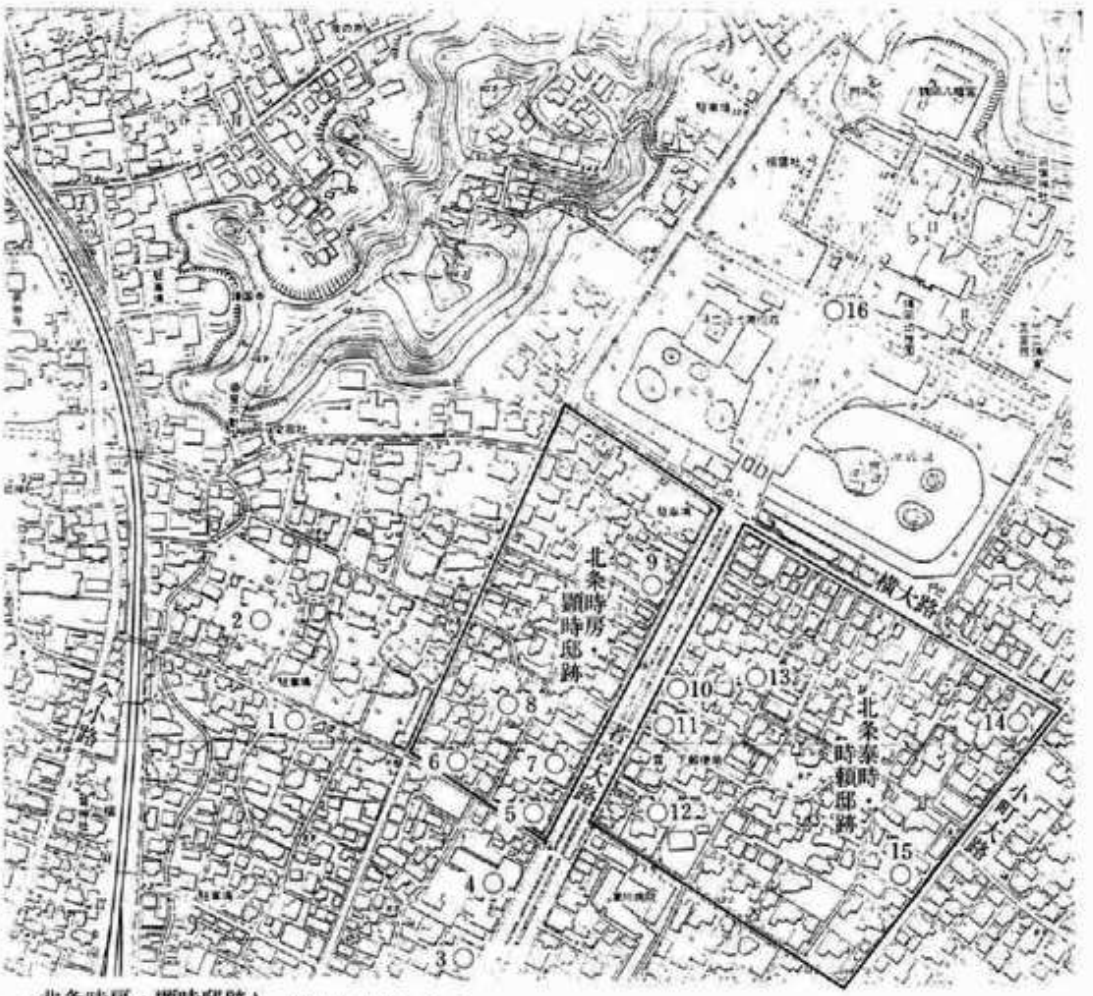
手塚直樹・河野真知郎・斉木秀雄・馬淵和雄・宮田　真・福田　誠・大河内勉・宗臺秀明・菊川英政・高田静子・及川加代子・吉田章一郎・貫達人・石井　進・大三輪龍彦・清水菜穂
鎌倉市高齢者事業団シルバーセンター

# 目　次

例　言……(104)
目　次……(104)

## 本　文　目　次

第一章　検出遺構……(107)
第二章　出土遺物……(113)
第三章　調査のまとめ……(133)
図版




※北条時房・顕時邸跡、北条泰時・時頼邸跡 } 県遺跡台帳による。

1 小 町二丁目 39番 — 6 他地点(調査地点)

2 雪ノ下一丁目210番

3 小 町二丁目280番 — 2 地点

4 〃 二丁目276番 他地点

5 雪ノ下一丁目274番 — 2 地点(ボロ用地)

6 〃 一丁目233番 — 9 地点

7 〃 一丁目273番 — ロ地点(鶴岡旅館用地)

8 〃 一丁目271番 — 1 地点(小池ビル用地)

9 雪ノ下一丁目293番 — 1 地点(津多屋ビル用地)

10 〃 一丁目372番 — 7 地点

11 〃 一丁目371番 — 1 地点

12 〃 一丁目419番 — 3 地点

13 〃 一丁目374番 — 2 地点

14 〃 一丁目395番地点

15 〃 一丁目432番 — 2 地点

16 鶴岡八幡宮境内(国宝館・研修道場用地)

**図1 周辺の主な発掘調査地点**

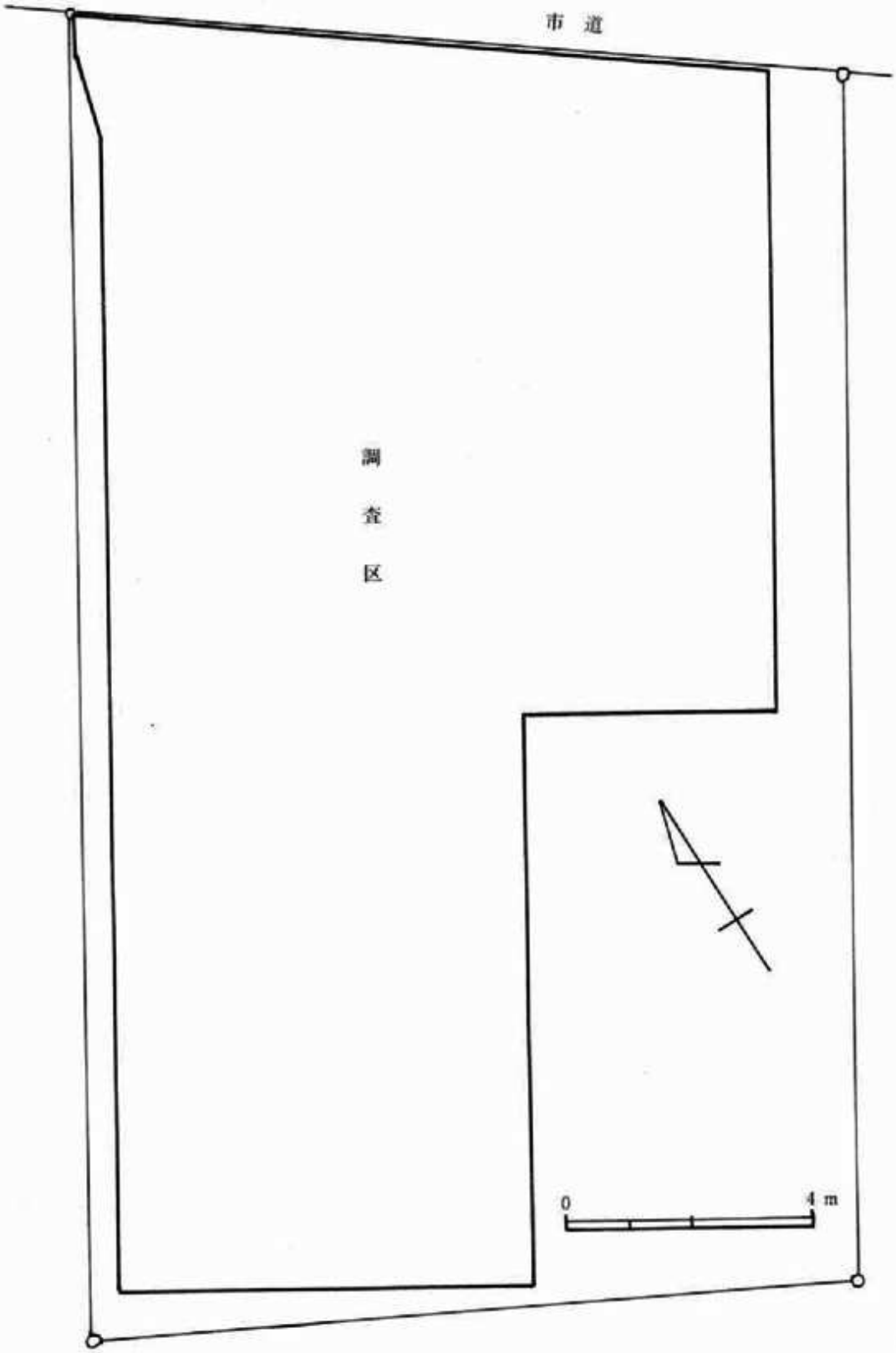



図2　調査地点位置図

# 第一章　検出遺構

## 1　層　序

第1層　盛土（厚さ約70cm）

第2層　暗褐色土・粘性が強く、鉄分が多い。水田の床土か。（厚さ約16cm）

第3層　灰黒褐色土・小土丹、砂を多く含む。（第1遺物包含層）

第4層　暗褐色土・砂を多く含み、地点によっては上方に大土丹による地業層が認められる。（本層の上面が第Ⅰ面である。）

第5層　暗黒褐色土・やや青味を帯び、砂及び土丹を含む。木片が多い。（第2包含層）

第6層　暗黒褐色土・本層中より木材を伴なった遺構が検出されている。（第Ⅱ面）

以上が今回の調査によって確認された層序であるが、先行調査トレンチNo.8は更に掘り下げたところ、地表約220cmで地山を形成する青灰色砂層に達した。

## 2　Ⅰ面の遺構（図4）

遺構面は、概ね暗褐色土上にあり、川砂様の粒子の粗い砂を多く含む。この砂は調査区中央を東西に走る浅い1号溝の覆土と極めて近似しており、この溝の氾濫によるものと思われる。

この溝に沿って南側に半人頭大の土丹を主体に構成される版築面が帯状にあり、道路あるいは建物の際に通路的に敷かれたものであろう。

本土丹版築面の南側12尺（364cm）のところに平行して礎版が3か所検出されている。各礎版は真々で6.3尺（195cm）である。

1号溝の北側、調査区の北東に、土丹版築面が不整形に広がっている。土丹の版築は、間層を挟まず2回行なわれている。第1面は、総じて荒れている。

## 3　Ⅱ面の遺構（図5．6．7）

Ⅱ面は、調査区南で南西から北西に延びる土丹版築面が検出されたため、これをⅡ面の基準に考え、一応同一レベルで面的な調査を行なった。調査区西側は、半地下式の建物址が南北に並んでいるようで、木片を多く含む腐植土に覆われている。今回は個人住宅建築に先立つ調査で、発掘深度は基準掘削深度に合わせ地表下110cmとされたが、ところどころに木組遺構の一部が検出されたため木組の範囲だけは確認するように努めた。従って、遺構検出はかならずしも完全ではないことをお断わりしておく。

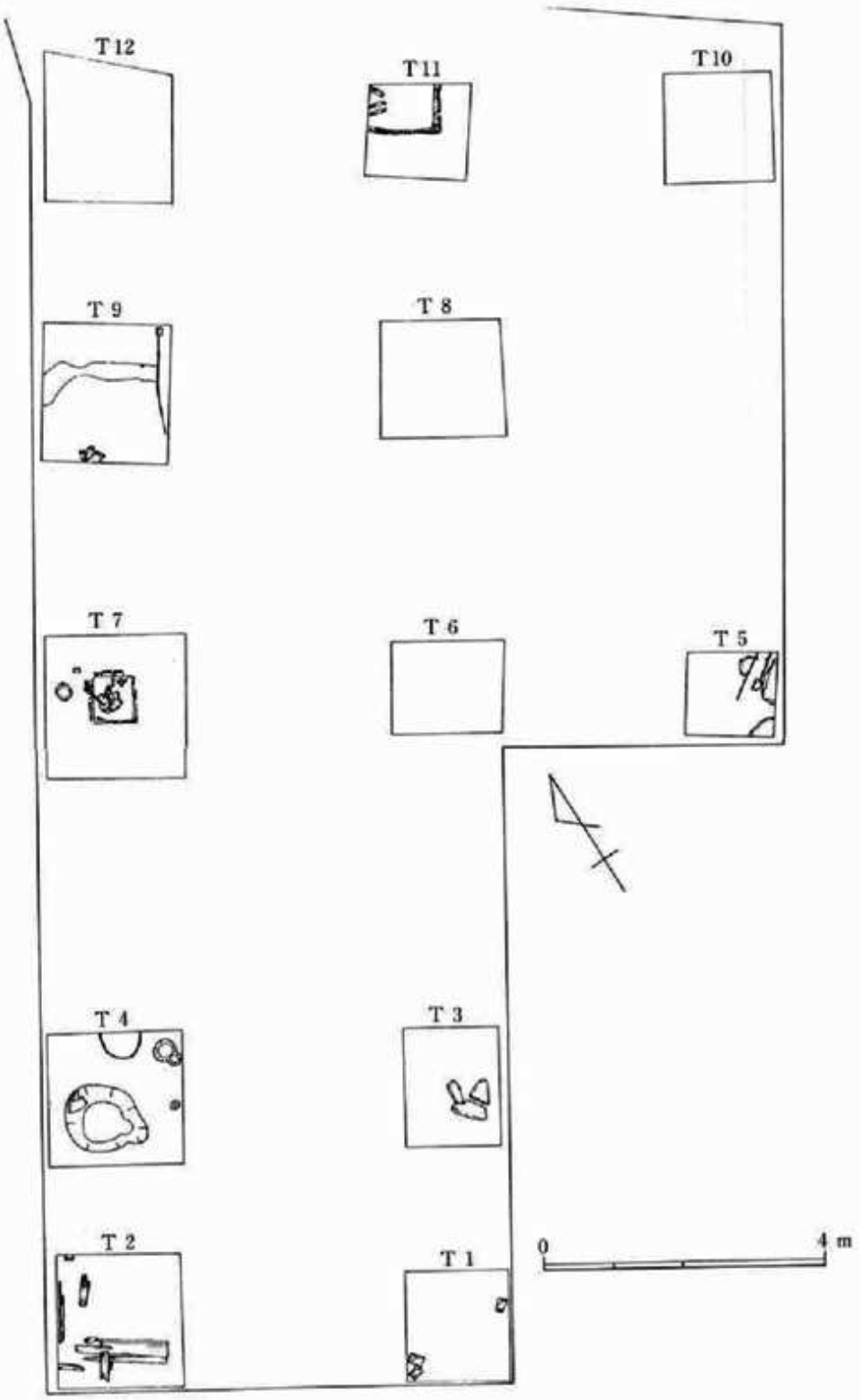



図3　基礎杭部分の先行調査トレンチ

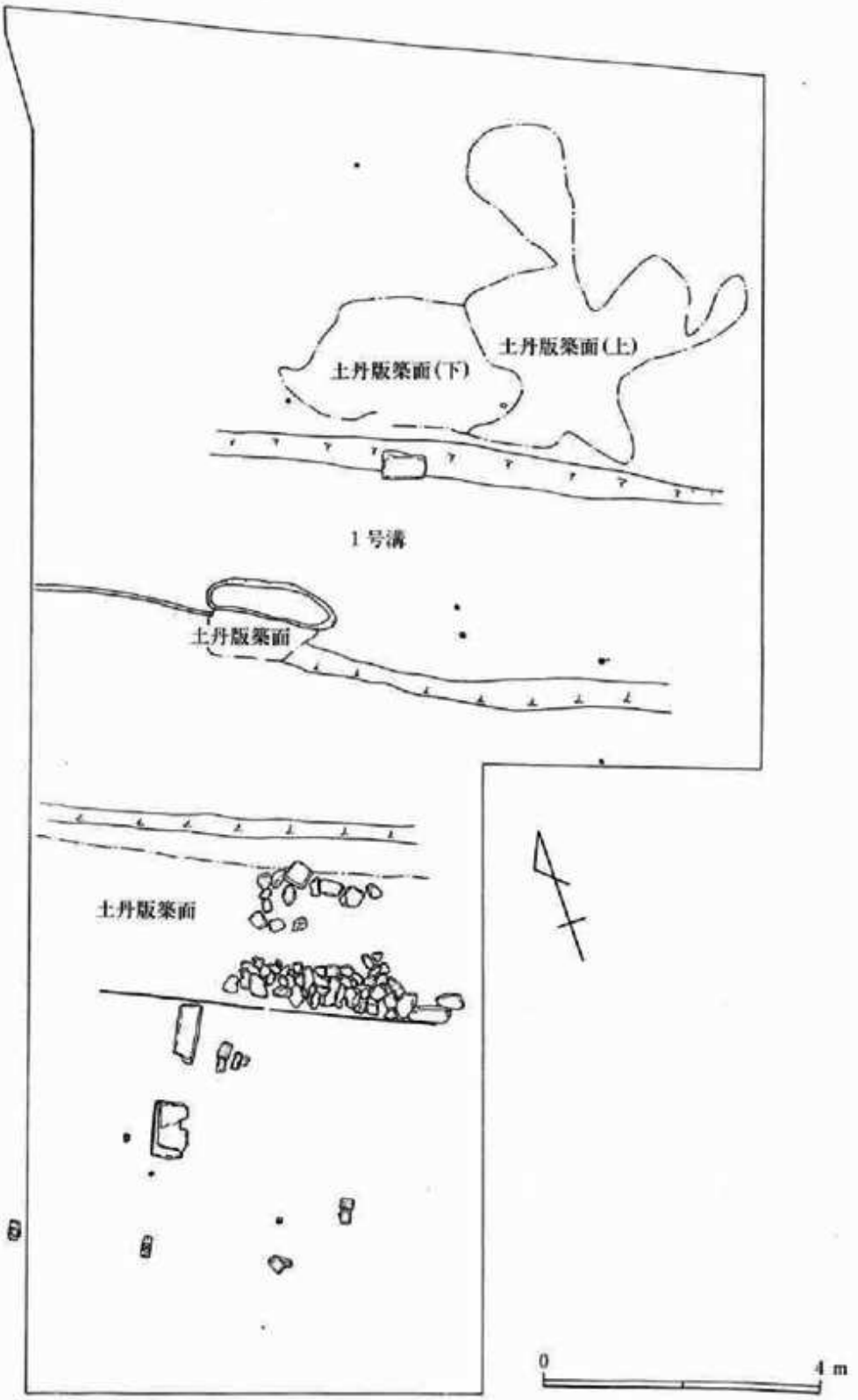



図4　1面遺構全体図

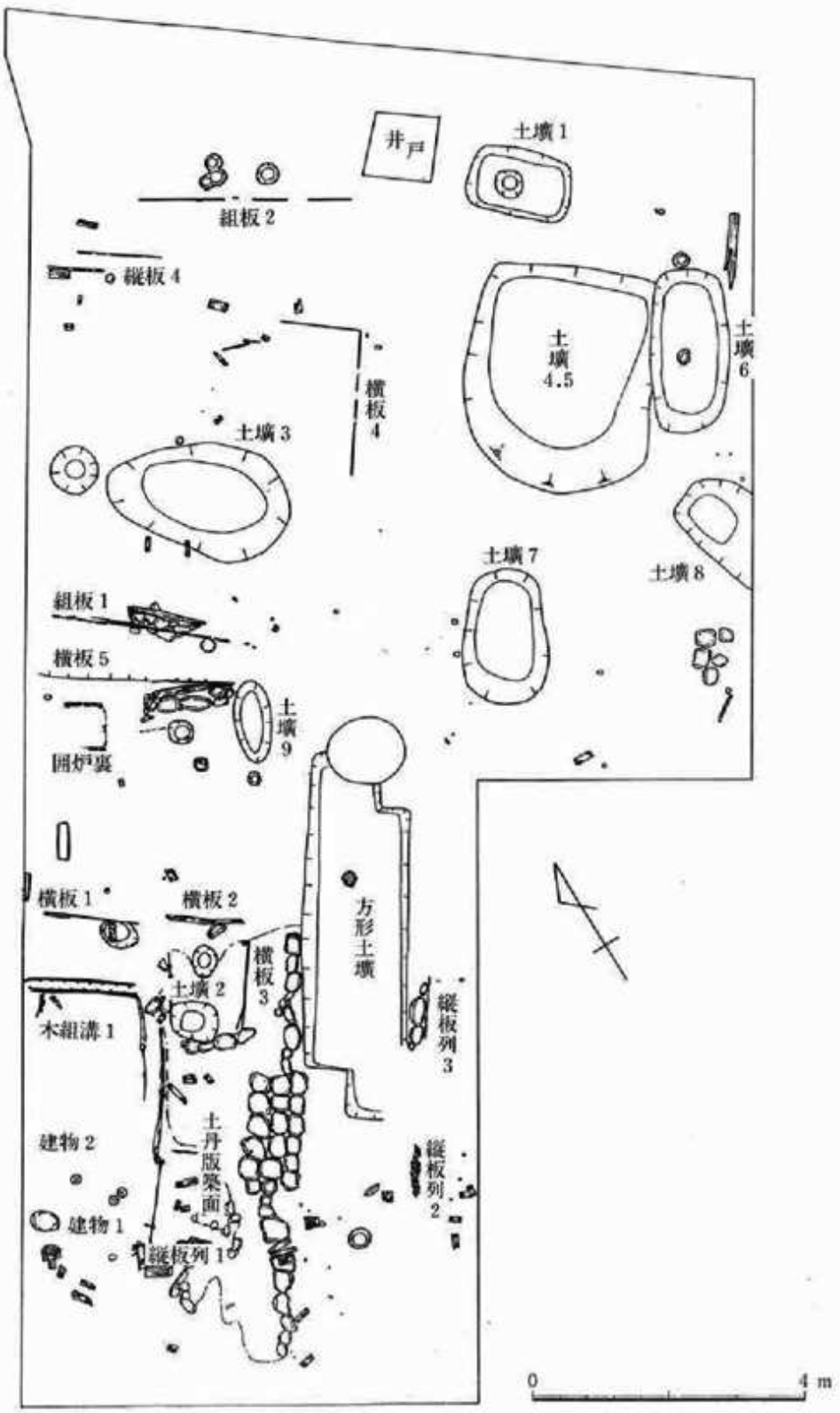

井戸
土壙1
組板2
縦板4
横板4
土壙4.5
土壙6
土壙3
土壙7
土壙8
組板1
横板5
土壙9
囲炉裏
横板1
横板2
横板3
土壙2
木組溝1
方形土壙
縦板列3
縦板列2
建物2
土丹版築面
建物1
縦板列1
0
4 m

図5　II面遺構全体図

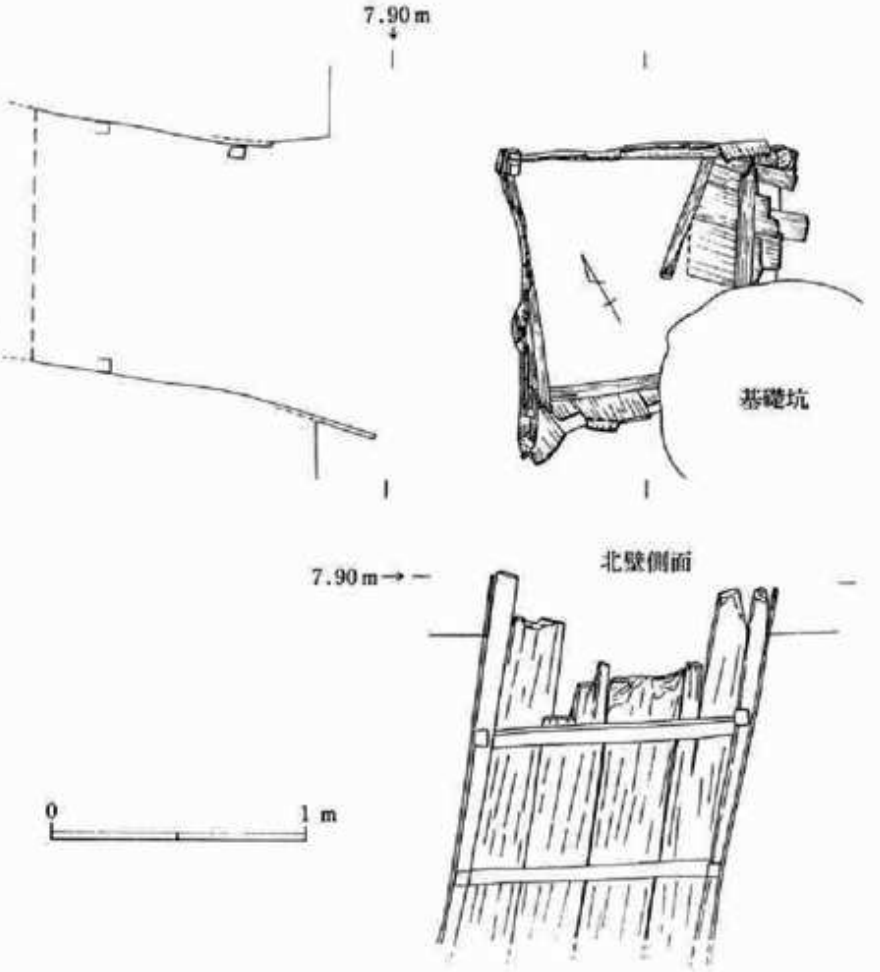



**図6　井戸址**

建物1

調査区南、南西から北西に延びる土丹版築面の西側に沿って検出された。幅約10cm、長さ160cmの横板を両サイド、柱で挟み込んで建てている。更に北側には、この横板材と同材が西側に倒れて連続している。両材の接合部東側に、幅10cm程度の縦板が2枚ずつ交互に連続して立てられている。残存長は、50cm程度で全体は把握出来ない。

建物2

建物1とした横板の西側は、明らかに遺構覆土と思われ、この覆土を掘り下げると同様の横板が約20cm西側に平行して検出された。横材は、長さ80cm程残存し、その北側は板に接して西側に5×10cm程の角材が立っており、この横板を立てるための部材と考えられる。横板中央、西側に接して幅5cmの縦板が立っている。

横板遺構1・2・3・4・5

横板が層位で検出されている。いずれも、建物址の一部であると思われる。南東から北西方向に

延びるものと、北西から南西に延びるものとに分けられ、一定の方向性を持っている。このうちのあるものは一方向で接合し、カギ型を構成する。建物址のコーナーであろう。5は横板が、小杭によって等間隔に押えられており、後述木組溝の片側に類似する。

縦板遺構1・2・3・4

幅5cm程の縦板が、連続して縦位で検出されている。1は板材が交互に組まれており、2・3・4は平行している。これら縦板列の長さは80cm内外であり、囲炉裏の残骸の可能性も考えられる。

板組遺構1・2

上述の横板と縦板が組になったもので、横板材に接して縦板材が立っている。建物1の状況を見ると、建物址の一辺の一部である可能性が大である。

木組溝1

建物2の北東辺を構成する。西側は調査区外に延びる可能性を有するが、現存長160cmで横板材を約10cm間隔で並列し、その内側を小杭で押えている。建物の区画を意味するものであろう。

囲炉裏

縦板材を1辺60cm内外の方形に立て、内部は炭化物が多く、常滑甕底部の大破片が出土している。本調査時、基礎杭で大半を失っていた。

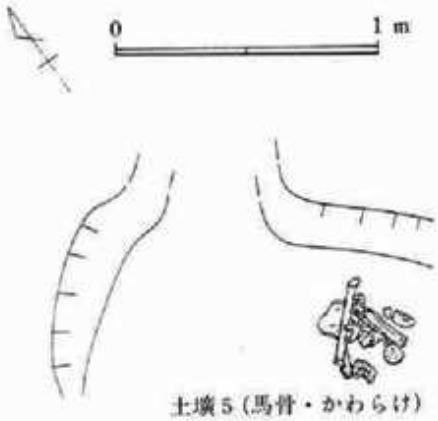
井戸

先行調査時に一部が検出されている。一辺198cmで方形横桟支柱型である。横材の各隅は、ホゾによって組まれている。横桟の外側に縦板が立てられ、深さは確認した範囲では240cmを測る。

土壙1～8

調査区全体、特に北東側に多く検出された。用途不明のものが多いが、土壙1及び5から馬骨が出土している。土壙1の馬骨は、一頭全部を埋葬（?）したものである。意識的にか偶然か北頭位をとっている。残念ながら、共伴遺物を欠く。家畜を埋葬したと思われる例は、市内南御門A地点、B地点、釈迦堂遺跡（註1）、（推定）藤内定員郎跡遺跡（註2）などで検出されている。

土壙1（馬の埋葬状況）




土壙5（馬骨・かわらけ）

**図7　土壙1・5出土の馬骨**

# 第二章　出土遺物

1　舶載陶磁器（図８－１～12）

１～３は鎬蓮弁文碗の青磁で第Ⅱ面上より出土した。１は口径16.1cmを測り、素地は堅緻で少量の気泡がみられ、色調は灰白色を呈する。外面の鎬蓮弁は彫りが深くやや丁寧である。内外面に深緑色の釉がかかる。２・３は暗灰色を呈した堅緻な素地を持ち、内外面の釉は青緑色である。４は劃花文碗の青磁で第Ⅱ面出土。口径17.1cmを測り、素地は灰色を呈し堅緻である。釉は透明度の高い淡緑色を呈する。５・６は内面に蓮弁文を陰刻した青磁鉢である。５は口径18.3cm、素地は灰白色を呈し、粘性強く釉は淡緑色を呈す。第Ⅱ面出土。６は口径12.2cm、内面の蓮弁文は幅が狭い。素地は灰色を呈し堅緻である。釉は透明度の高い深緑色を呈す。第Ⅱ面土壙７出土。12は無文鉢の青磁である。口径は20.2cmを測り、口縁部は水平に折り返し、端部を上方へ折り曲げる。第Ⅰ面溝１出土。

７～10は白磁の口兀小皿で、第Ⅱ面上で出土した。７は口径10.4cm、器壁が薄く口縁部がゆるやかに外反する。８は口径11.2cmである。器壁が薄く、口縁部がわずかに外反する。９は底径7.4cm、底面には横方向の釉のハケ塗り痕が顕著に残る。10は口径10.5cm、器壁は胴部から口縁部にかけて薄くなり、大きく外反している。

11は青白磁の梅瓶の蓋で、第Ⅰ面溝より出土。口径5.5cm、器高2.5cmである。釉は不透明な水青色を呈する。

2　国産陶器（図８－13～21）

13は瀬戸製品のおろし皿で、第Ⅰ面溝より出土。側壁がゆるやかに内彎気味に立ち上がり、口唇端部が外向きの縁帯を呈する。

14～17は瀬戸の折縁皿で、第Ⅰ面溝１より出土。14は口径21.8cm、口縁部の折り返しは殆どない。釉は灰釉で良く溶け切り黄緑色を呈す。15は口径24.4cm、器高5.3cmである。胴部下半と外底面にかけて粗いヘラ削り痕が残る。釉はハケ塗りで黄灰白色を呈す。16は口径26.7cm、器壁、口縁部は薄手に作られている。釉は淡緑色を呈す。17は底径10.7cm、内底面に円弧状の櫛掻文を配し、釉は灰釉で厚く施されている。

18～20は美濃系山茶碗である。素地が極めて精良で灰白色を呈し、ロクロ水引きにより器壁を薄手に作りあげている。18は口径16.3cmで、第Ⅰ面溝１より出土。19は口径10.9cmで、第２包含層より出土（第Ⅰ面下）。20は底径4.2cmで、断面が三角形を呈するモミガラ高台を持つ。

21は瀬戸の入子で、第Ⅰ面溝１より出土。口径4.5cm、器高1.9cm、底径3.0cmを測り、素地は精良で灰色を呈し堅い焼きである。内底面には降灰が見られ、底部は回転糸切り痕を残す。

3　常滑（図９－１～７、図10－１・２）

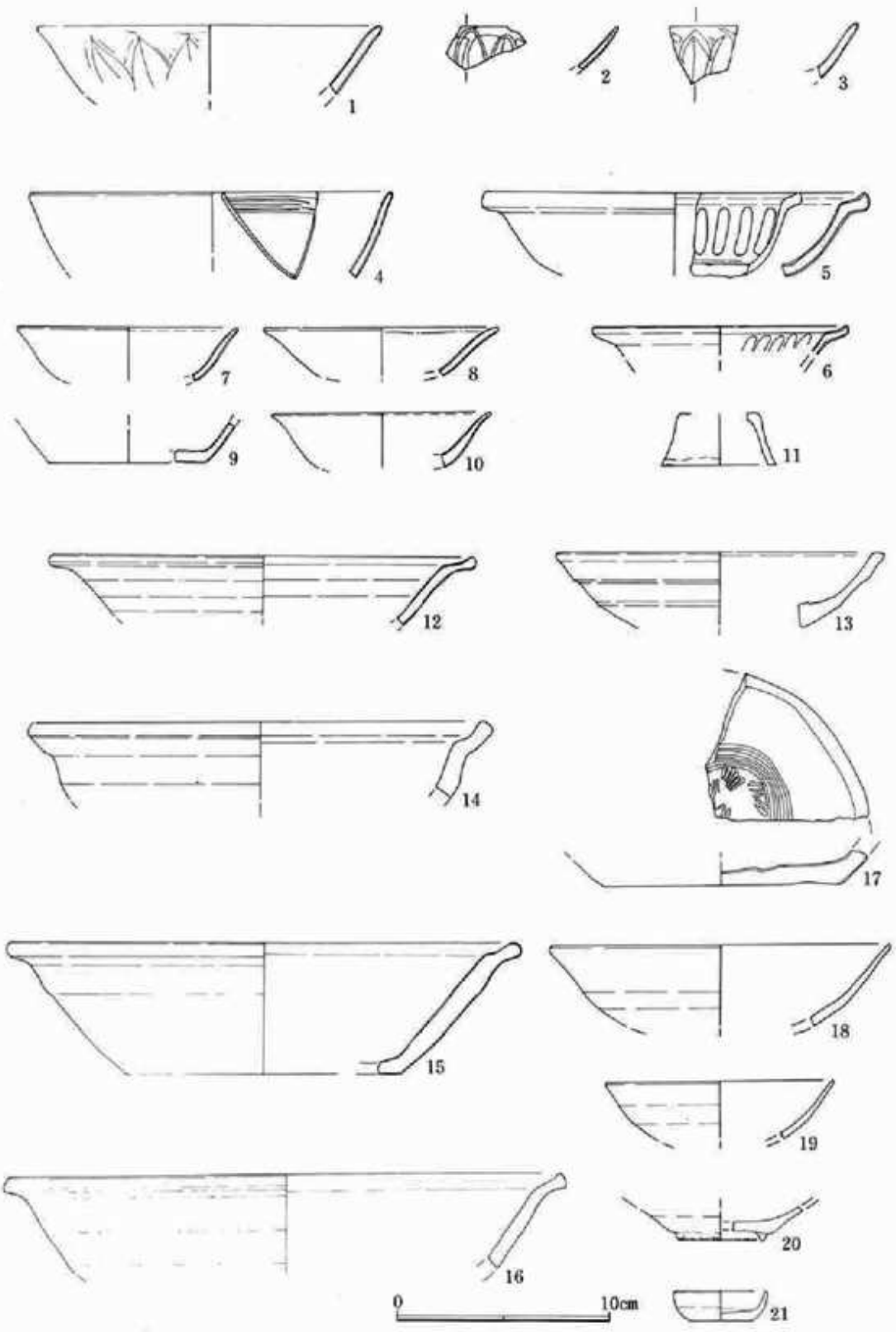



図8　舶載・国産陶磁器

1・2は大甕の口縁部で、1は口径42.6cm、幅3.2cmの縁帯を形成するN字状を呈する。2は縁帯幅2.3cmである。第2包含層から出土している3～6は同じく甕の底部で、外面は縦のヘラ調整、内面には指頭痕が顕著である。3は溝1、4は第II面、5は先行調査T4（第II面相当）、6は第II面土丹版築面上から出土している。7は壺である。肩部より上を欠く。胴部がやや膨らみ、最大径は胴部中位からやや上方にある。肩部が撫で肩状になるタイプであろう。溝1から出土している。

図10－1　2は鉢である。内面下半から底部が摩滅しており、捏鉢として使用されたものであろう。体部外面底部付近は縦のヘラ成形。口縁付近は木口状、あるいは櫛状の調整が縦に、内面は横位に施されている。1は先行調査T7の囲炉裏中から出土。2は第II面土丹版築面から出土。

4　山茶碗窯系鉢（図10－3～6）

3は口径30.6cm、直立する高台を持つ。胴部中位がやや膨らみを持つ。第II面から出土。4は溝1出土で、やはり直立する高台を持つ。5は口縁部片で、第2包含層中出土。6は口縁を欠き、高台はやや外側に開く。第II面土丹版築面上出土。いずれも内面が摩滅しており、捏鉢として利用されている。

5　東播系鉢（図10－7・8）

胎土は細かい砂粒を含み、暗灰色を呈する。内面は摩滅し、捏鉢として利用されている。7・8ともに溝1出土である。

6　瓦質輪花型手焙り（図11－1）

口径37.5cm、器高9.4cm、底径27.0cmを測る。胎土は砂や石粒を交える粗土、焼成も瓦に類似した表面が黒灰色の燻べ様を呈す。口縁部から内壁面にかけて火熱を受けている。底部を大半欠失するが、板状の脚を有していたと思われる。

7　白かわらけ（図11－2～4）

2～4はいずれも手捏ね成形で、外面下半部に指頭圧痕を無調整のまま留める。2・3は白っぽい色調を呈し、側壁の立ち上がりが直線的に外傾している。4はいわゆる「へそ皿」の形をとる。口径7.0cm、器高2.1cmである。2・3は第I面溝1、4は第2包含層より出土。

8　土製小型壺（図11－5）

かわらけとほぼ似た土で作られた小型の壺である。口径2.5cm、底径2.8cmを測る。第I面溝1より出土。

9　かわらけ（図12－1～40）（図13－1～54）

1～11は第1包含層中から出土している。全体に14世紀後半以降顕著となる薄手化の傾向をもつが、やや厚手で器高の低いものも残る。10は溝1の氾濫と思われる砂層中より出土している。

12～32は第I面溝1覆土中から出土している。口径の小さく器高も低い極小のものが出土している。(12)。19～23など内底からの立ち上がりがやや肥厚し、体部が内彎しながら立ち上がり直線的に開く、やや下ると思われる時期のものも混入するが、全体には器高の低いタイプと薄手のものがみられる。33～40は第I面上出土である。底径、口径差があまりなく、立ち上がりもきついものが

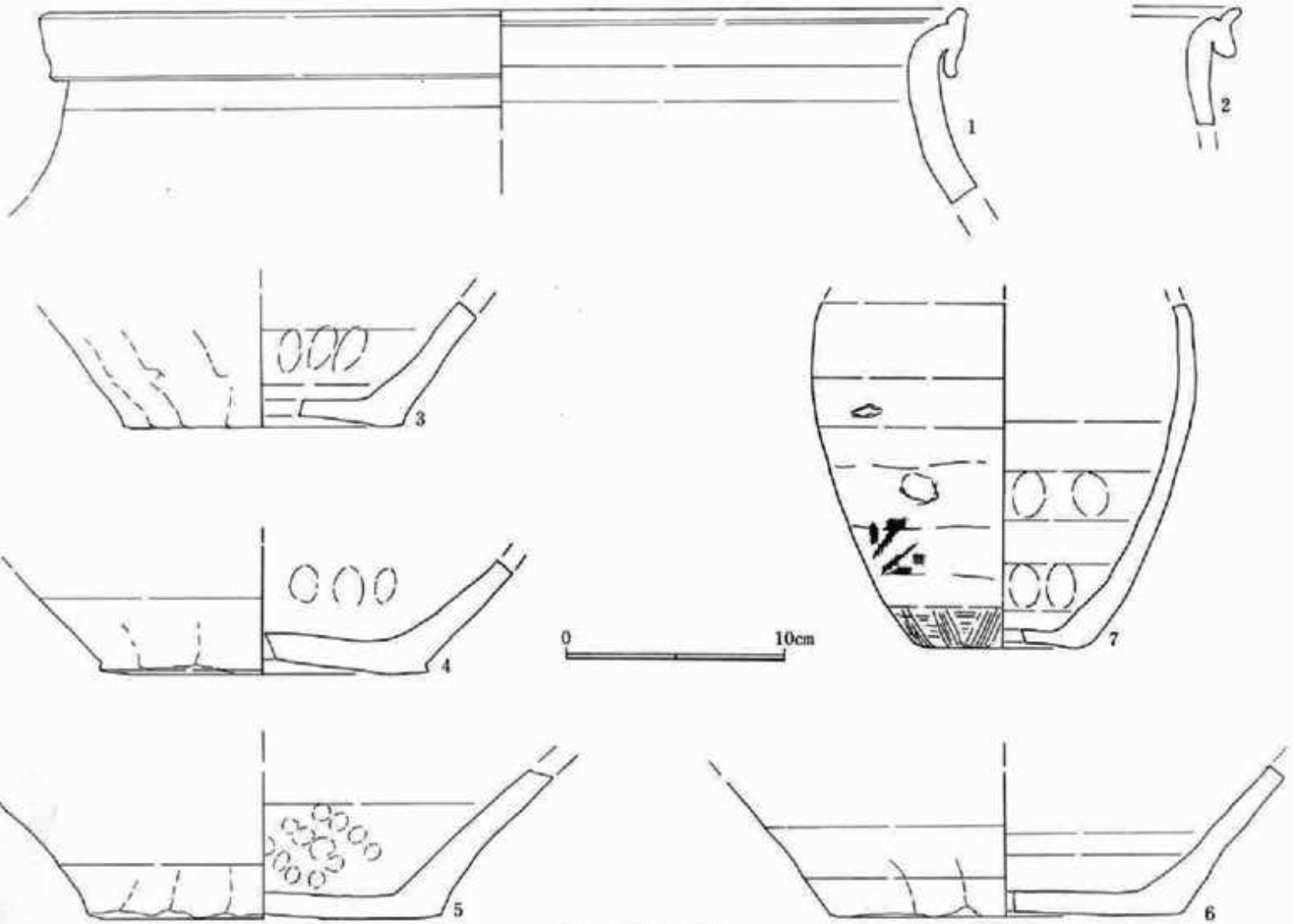



図9　常滑壺、甕

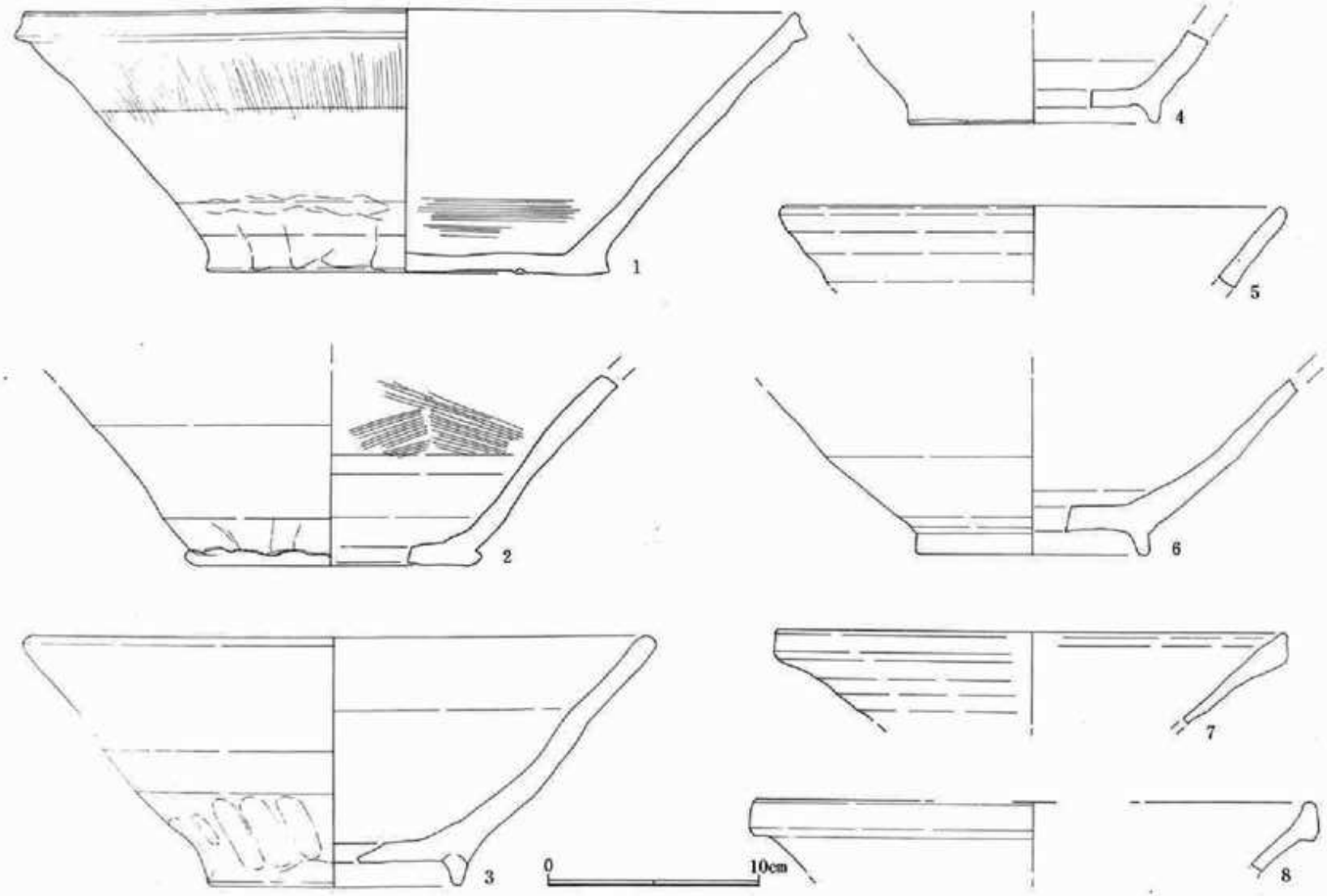



図10　こね鉢

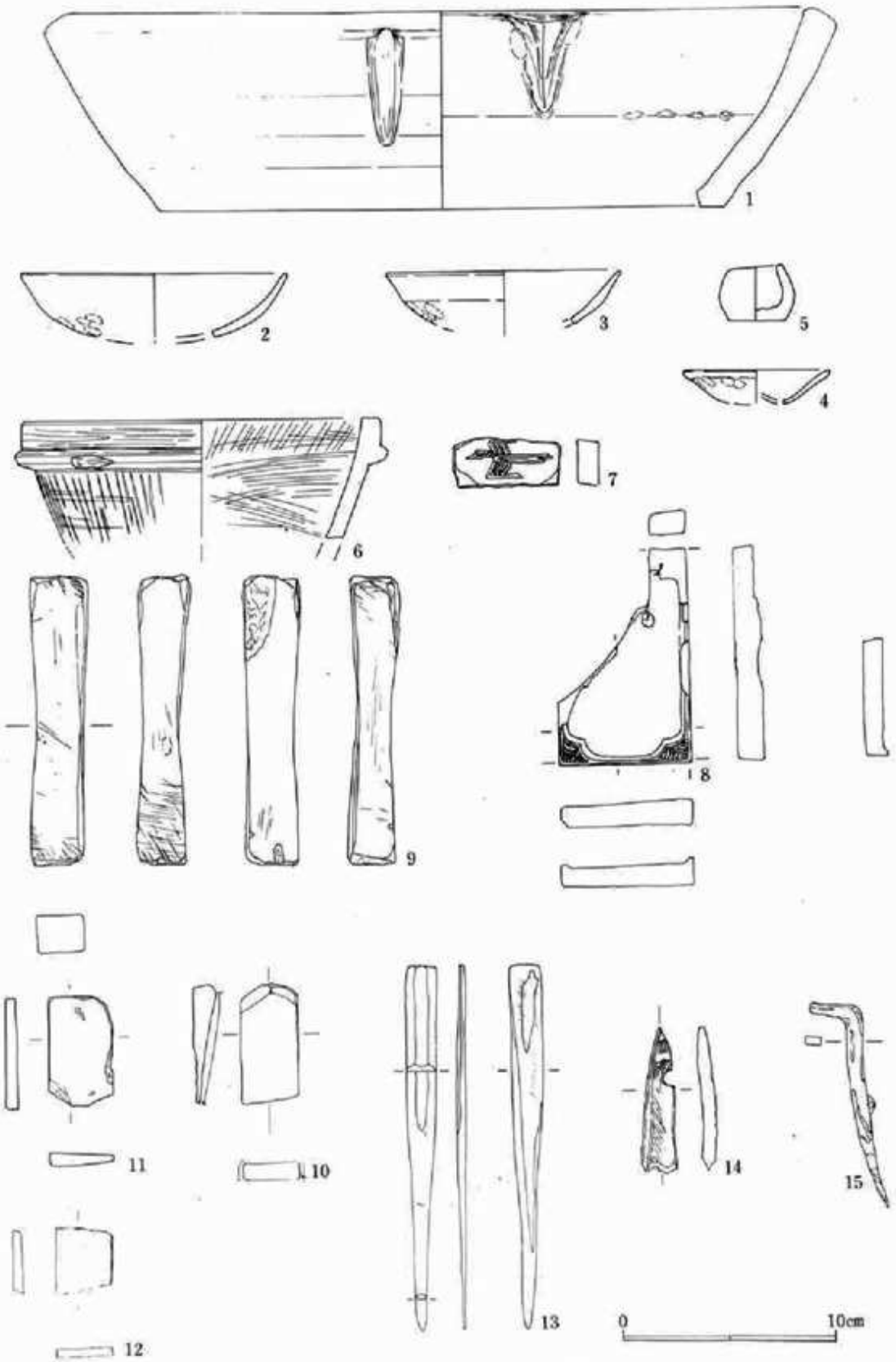



図11　瓦質製品・その他の遺物

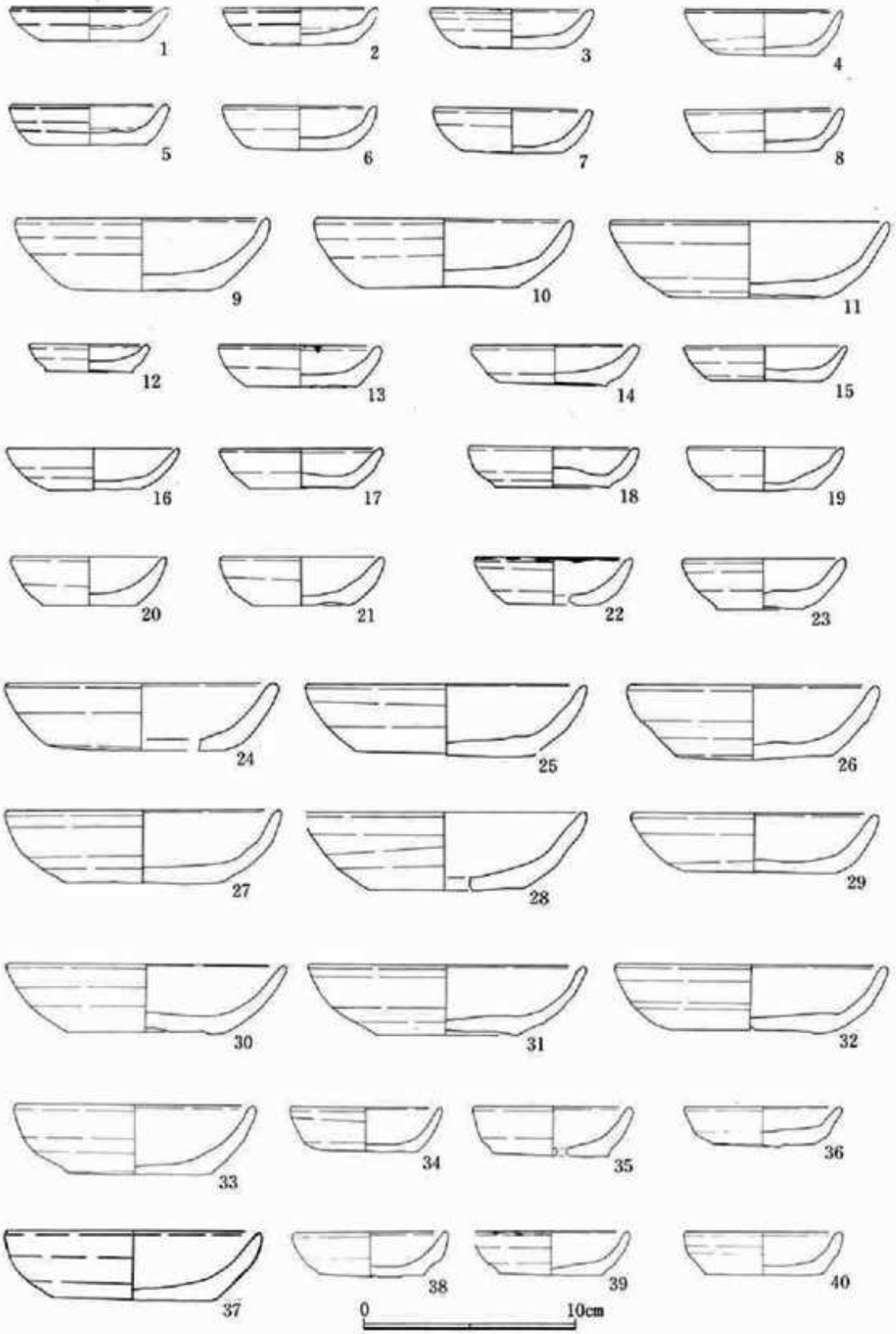

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
0
10cm

図12　かわらけ　(1)

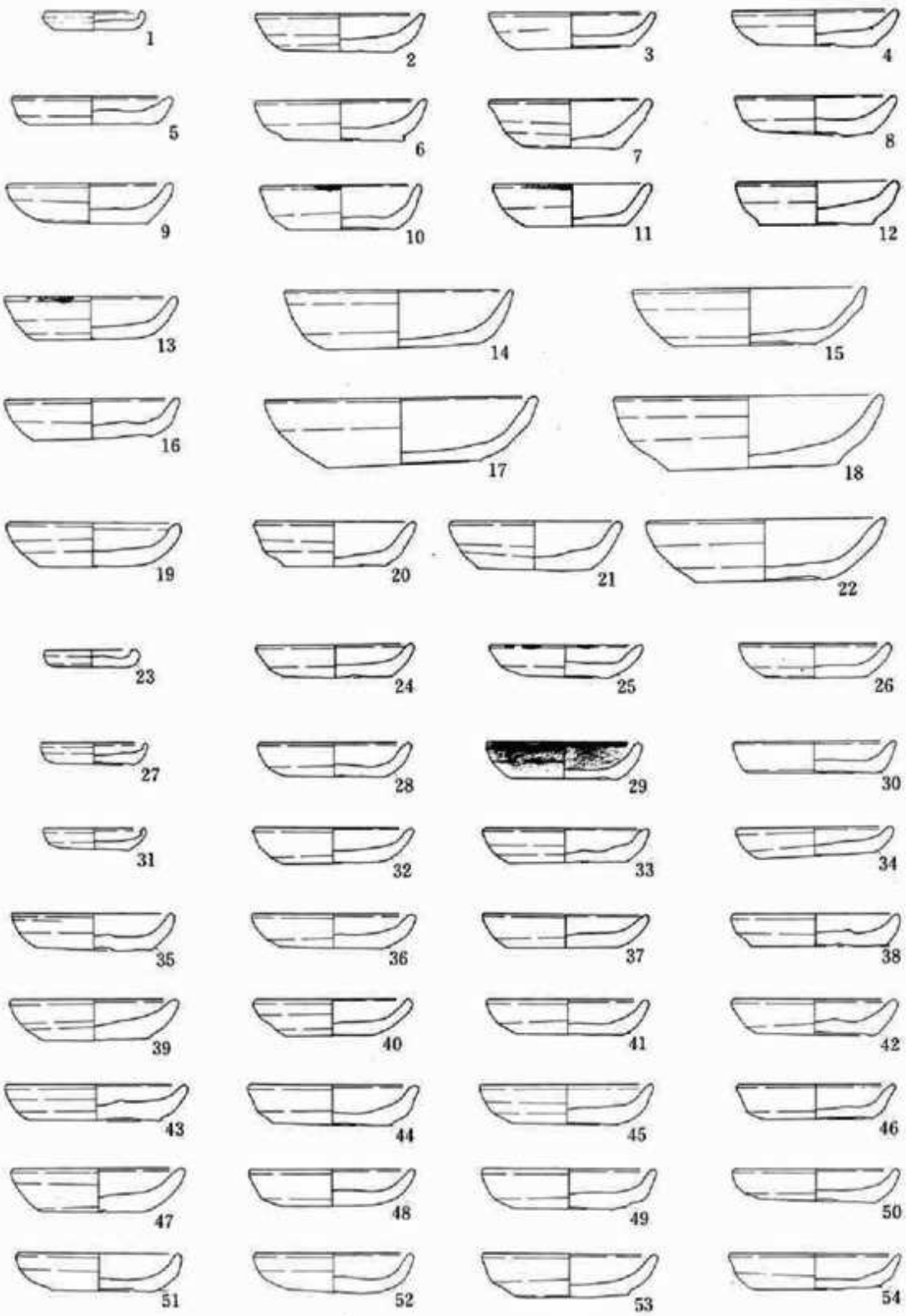

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
0
10cm

図13　かわらけ　(2)

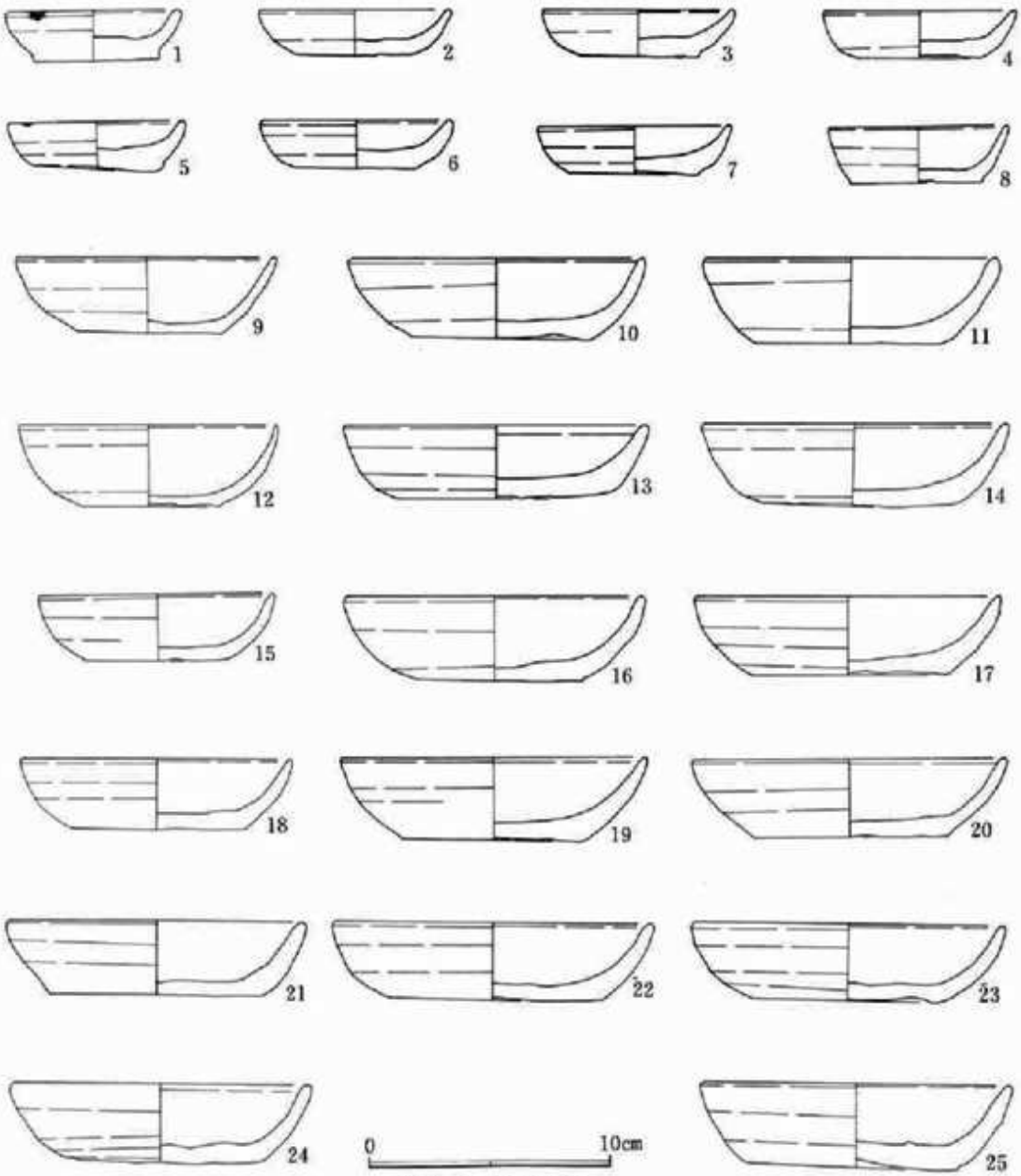



図14　かわらけ(3)

多い。大型品では、体部側面の口縁から1/3程のところに腰をもって立ち上がる。図13—1～18は、第2包含層及び第II面から出土している。底径、口径差の少ない体部立ち上がりの急なものを主体とする。

第2包含層中出土の15・17の中には薄手化傾向のものもあるが、緩やかに内彎しながら開きそのまま口縁部に至るものではなく、口縁付近に一旦腰を持つ。19～22は、調査区南土丹版築面の東側にある方形土壙覆土中から出土している。器高の低いものが出土していない点、これだけでは判断

しかねるが、第II面自体よりもやや下るか。図13—23～54、図14—1～25は、第II面出土のかわらけである。1～3は、内折れの小型かわらけである。全体に底径、口径差が少なく、器高の低いタイプが主体的に出土している。図14—9～11は、中型で器壁の薄く胎土の精製されたタイプで、このタイプは14世紀前半代に出現するように思われる。未報告の第4次北条時房・顕時邸跡遺跡でも、他の遺物との共伴から考えてこれくらいの時期が与えられる。

10　石製品（図11—6～12）

6・7は滑石製品である。6は口径17cm程の小型の石鍋である。鍔は丸みのある凸形をなし、胴部外面に煤が付着する。ノミ状工具の削りが不鮮明になる程縦位の擦痕が残る。第II面上より出土。7は取手のない板状の形をした滑石製スタンプである。文様は鶏と思われる鳥を雑に陽刻している。第I面溝1より出土。

8は長方形の硯で、第I面より出土した。隅に波頭文が線彫りされ、内側は四葉状に仕上げられている。長さ10.3cm、幅6.3cm、高さ1.3cmである。

9～12は砥石である。第I面溝1より出土。9は方柱状の中央部が摩滅してへこんだもので、石材からみて中砥であろう。10～12は泥岩製で扁平な長方形をなし、側面は擦切り痕を残す仕上げ砥である。

11　骨角製品（図11—13・14）

13は鹿角（四肢骨）を刃物で削り出した竿である。長さは17.5cmで、第II面土壙1より出土。14は鹿角製の装身具片で、第I面溝1より出土。破片ではあるが、市内長谷小路南遺跡で出土した鹿角製野沓と類似している。

その他、第II面より鉄釘が出土している。（図11—15）。

12　漆製品（図15～18）

椀・皿などの什器が多くの割合を占める。他にも盆・膳脚・側木・柄・櫛などが出土している。

a　什器

出土した遺物のなかには極小片のもの、剝離した漆だけが残存するものなども含まれているが、ここでは完形品とほぼこれに近いもの、及び残存状態が比較的良好で器形・法量などを把握しうるものを取りあげる。尚、特記しない限り、挙げた製品はいずれも柾目材を用いて黒漆を直塗りしたもので、文様は朱漆で施されている。また、殆どの製品が土圧により歪みを生じているため、正確な法量は測りえない。記載する法量は概ねのものであることをはじめに記しておく。

皿（図15—1～17）

1は口径9.1cm、器高1.2cm。第II面土壙8出土。2は口径8.8cm、器高1.1cm。第II面土壙7出土。3は口径9.6cm、器高1.6cm。第II面土丹敷東側遺構群出土。以上の3点は、全面に黒漆を施した後、内面のみ朱漆を塗っている。高台がなく、体部はなだらかな曲線を持つ器形である。4は口径9.7cm、器高は推定で1cm程度。全面に黒漆を塗った無文の製品で、器形は1・2に比較的近い。5は口径7.6cm、器高2.1cm。鎌倉市内の遺跡から出土する皿は口径9cm程度、器高1cm程度のものが最

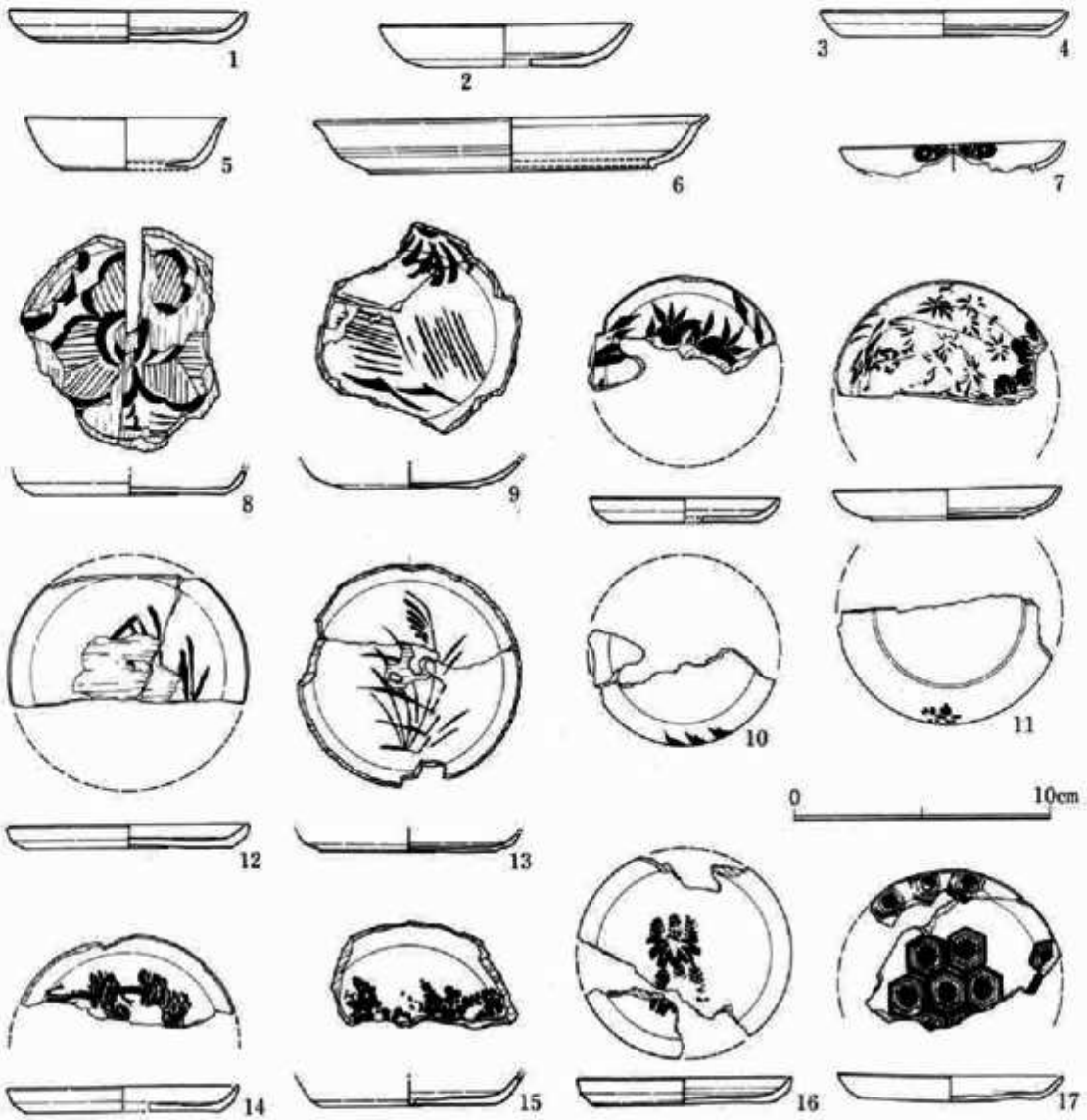



図15　漆製品(1)皿

も多いが、その点ではこれは小型で浅く、やや特異なものである。全面に黒漆を塗った無文の製品で、底部は欠失しているが輪高台を形成するものであろうか。6は口径15.2cm、器高2.2cm。折縁の口縁で、体部に二本の溝を持つ。瀬戸の折縁皿に似た器形であり、模倣の可能性も考えられよう。素地は比較的薄く、漆は厚く施されている。7は口径8.8cm、器高は1.3cm程度であろう。巴とその周辺に珠文を配する文様を、内・外面各一か所合致した場所に施している。底部は欠失しており高台の有無は知りえない。以上4点はいずれも第II面出土。8は口径、器高など不明であるが、上述した口径9cm程度、器高1cm程度の製品の一群に属するものであろう。内底面に大きく三弁の花をあ

しらい、内体部にも同じ様な花弁を描いていると思われる。高台はない。第Ⅰ土丹面下出土。9も口径、器高など不明である。上述の一群に属するものか。文様は比較的太い筆を用いて施されたものとみられ、ごく粗雑な描き方で内面に施されている。波・花とも考えられるが、意匠は不明である。素地の腐食が著しく、土圧によってかなり薄くなっていると考えられるが、底部の形状は総高台であろうか。10は口径7.4cm、器高1.0cmと比較的小型のものである。内面に橘、外面にはその葉の文様をごく丁寧に描いている。高台はない。11は口径8.8cm、器高1.2cm。内面に桐と草、外面口縁部に草を繊細に描いている。ごく薄手で、底部面積に対して口縁が広い器形。底部は輪高台。12は口径9.4cm、器高0.9cm。内底面に文様が施されているが、意匠は不明である。あるいは扇かもしれない。器高が低く、やや厚手で、体部中程にはっきりとした稜線がみられる器形。高台はない。以上四点、第Ⅱ面出土。13は底径8.9cm、器高は概ね1.0cm。内面は黒漆を塗った上にスズか何かを塗ったものらしく、鈍い金色の発色をしている。そのうえに朱でススキの文様を内底面に施している。これも土圧で器肉が薄くなっており、素地の腐食が進んでいる。第Ⅱ面溝1出土。以上7～13は手描きによる施文である。以下14～17まではスタンプによる施文である。

14は口径9.0cm、器高1.0cm。内底面に松を施文している。文様は幹の部分と葉の部分の二重のスタンプを用いて、これを組み合わせているものらしい。高台はなく、器高が比較的低く、やや厚手。体部中程にはっきりとした稜線が見られる。15は底径6.3cm。口径、器高が測り得ないが、上述の一群に属するものであろう。内底面に梅の文様を施しているが、残存状態が良好でなく、版の組み合わせや大きさは観察出来ない。高台はない。14・15ともに第Ⅱ面より出土。16は口径8.4cm、器高1.0cm。内底面に桐のスタンプを二箇所施しているが、上部の施文と比較して下部の施文は漆が薄くやや不鮮明である。上部を施文した後、漆を再度版に塗り補うことをしなかった可能性も考えられる。器形は14に似る。第Ⅱ面土壙より出土。17は口径8.8cm、器高1.0cm。亀甲・菊花文を内底面には密に、口縁部には間隔をおいてあしらっている。全体に薄手で高台はない。第Ⅱ面出土。

椀（図16－1～9）（図17－1～4）

1は口径15.0cm、器高6.0cm。比較的厚手の素地に漆は薄く施されている。側面にはノミ状の工具で平らに削った痕が認められる。漆はその後に塗られたものである。底部は厚く、輪高台。第Ⅱ面土壙5より出土。2は口径12.8cm、器高3.1cm。薄手の素地に漆は厚く塗られている。広い口縁を持ち、器高は比較的低い。輪高台。第Ⅱ面1号建物より出土。3は口径13.2cm、器高4.0cm。外体面一箇所に八曜の珠文を配した三巴の文様を丁寧に描いている。全体に薄手で、底部は輪高台。第Ⅱ面より出土。4は底径6.7cm。高台及び口縁部が欠失しており、口径、器高は測り得ない。内・外面共に繊細な草文様を描いている。第Ⅱ面1号建物より出土。5は口径15.8cm。器高6.3cm。内面及び、外面に亀甲花菱を円形に配した文様を施している。円形の外郭線は、ぶんまわしのような用具を用いたものと見られ、極めて精密で整った円形である。文様全体も繊細で丁寧に描かれている。高台部は欠損しているが輪高台。体部は比較的素地が薄く、なだらかに立ち上がる器形である。第Ⅱ面より出土。6は底径6.2cm。内面に桐・笹の紋様を繊細に描いている。外面にも紋様を施しているが、

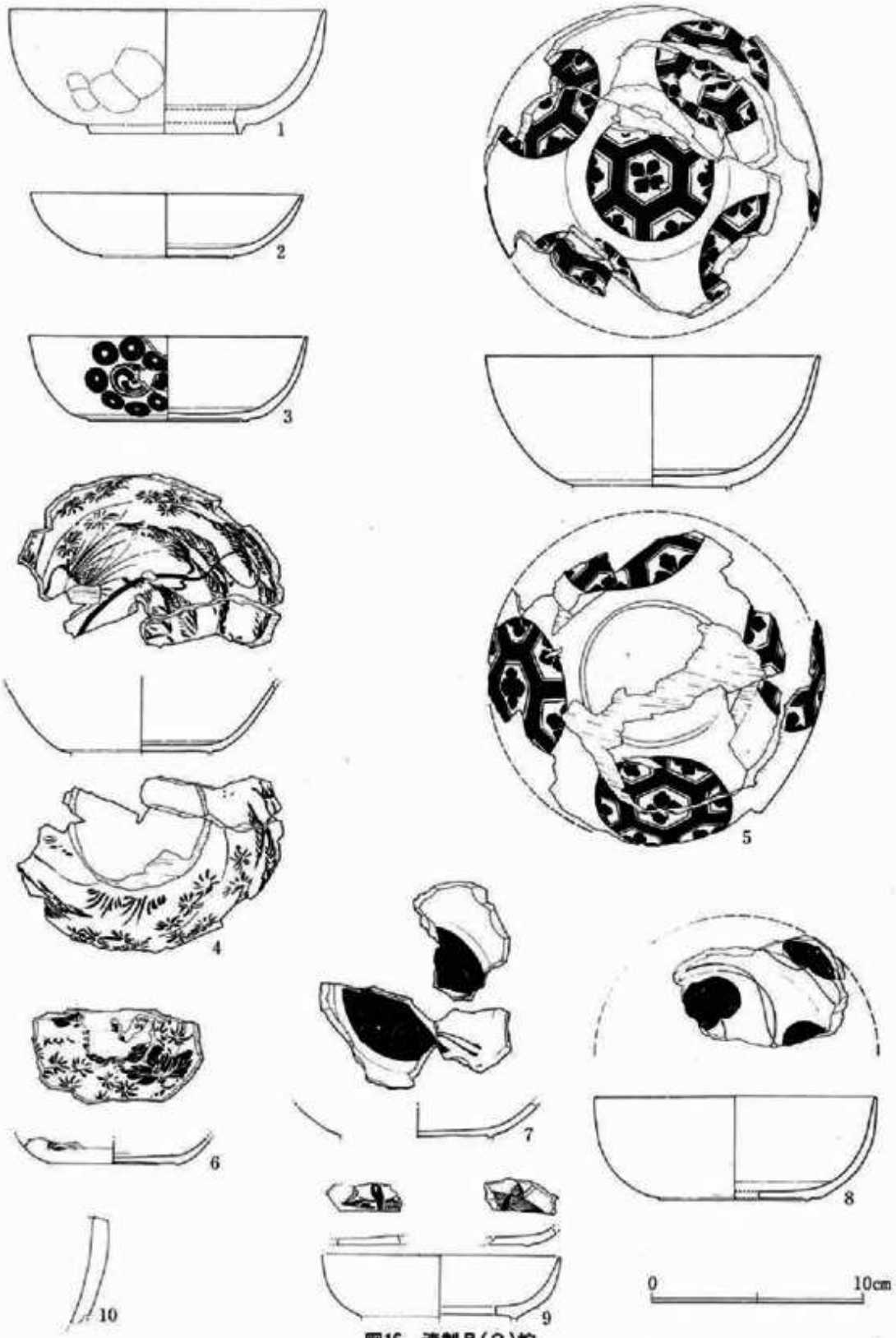



図16　漆製品(2)椀

残存部分が少なく意匠は不明。底部はやや浅い輪高台。第II面土壙7より出土。7は底部のみ残存。底径は概ね7.2cm程度。全体の大きさは8cm程度になるものと思われる。内底面に扇を掻きとりの技法を用いて描いている。底部は輪高台。第II面より出土。8は口径13.5cm、器高5.0cm。内面に葵の紋様を描いている。これも葉脈の部分に掻きとりの技法を用いたものである。底部は輪高台。比較的薄手である。第II面2号建物より出土。9は口径11.3cm、器高は3.4cm程度であろう。全体に黒漆を塗ったあと、内面に朱漆が塗られている。その内底面に黒漆で紋様が施されている。接合関係にはないが、同一個体とお覚しき小片が一緒に出土している。その意匠は鶴で、ごく繊細に描かれている。やや厚手で口縁が狭く、比較的浅い器形。底部は輪高台。2号建物より出土。尚、3～9は手描きによる施文である。

図17－1～4はスタンプによる施文である。1は底径7.0cm。内外面にモッコウの文様が散っている。文様には漆が厚く図柄が鮮明な箇所と、漆が薄く図柄が不鮮明な箇所があり、全体に粗雑に施文された印象がある。底部は総高台。体部の立ち上がり部分が肉厚である。第II面土丹敷東側遺構群より出土。2は口径14.7cm、器高5.2cm。内面中心一箇所と、外面三箇所（うち一箇所は欠損しているので推定である。）に梅の文様が施されている。比較的幅のある輪高台を持ち、底面には漆を塗る前に「×」印を刻んだものが一箇所みられる。1号建物より出土。3は底径7.4cm、器高は口縁部が欠損しているため知り得ないが、概ね5.5cm程度である。四種のスタンプを用いて密な図柄を内外面に施している。即ち、内面は岩・幹・葉・鳥のスタンプを組み合わせて施文し、外面は葉・鳥の二種のみで施文している。全体に施された文様のそれぞれには漆の濃淡のムラが無く、極めて精密で丁寧な施文であるといえる。底部は輪高台。比較的薄手である。第II面より出土。4は底径7.0cm。器高は知り得ないが、全体の大きさは3cm程度であろう。内外面とも桐が密に施文されている。外面は文様の残存状態が良好でなく不鮮明であるが、内面は文様のそれぞれに漆の濃淡のムラがなく、極めて丁寧な施文であるといえる。第II面土丹敷東側遺構群より出土。

鉢（図17—10）

小片であるため法量は知り得ないが、かなり大きな器形をなすものと思われる。残存部には文様は見られず、黒漆はごく厚く施されている。第II面より出土。

b　盆（図17—5・6）

5は幅約24cmの盆の端部である。厚さは約7mm。角をもつ帯状の周縁を削り出している。全面に黒漆を直塗りし、幅の中央に菊花の文様をスタンプ朱漆で施している。第II面土壙7より出土。6は厚さ約8mm。外面は黒漆、内面には朱漆を塗ったもの。周縁は5に比べて小さく、周縁に向かって身は薄くなる。第I面より出土。

尚、ここに挙げた二個体はいずれも小片であり、全様を知り得るには充分ではない。従って、これに脚が取り付く「膳」である可能性も指摘しておく。

c　膳脚（図17—7）

残存長7.0cm。はめ込み部分の深さ1.0cm程度。黒漆が塗られているが、その残存状態は良くなく漆

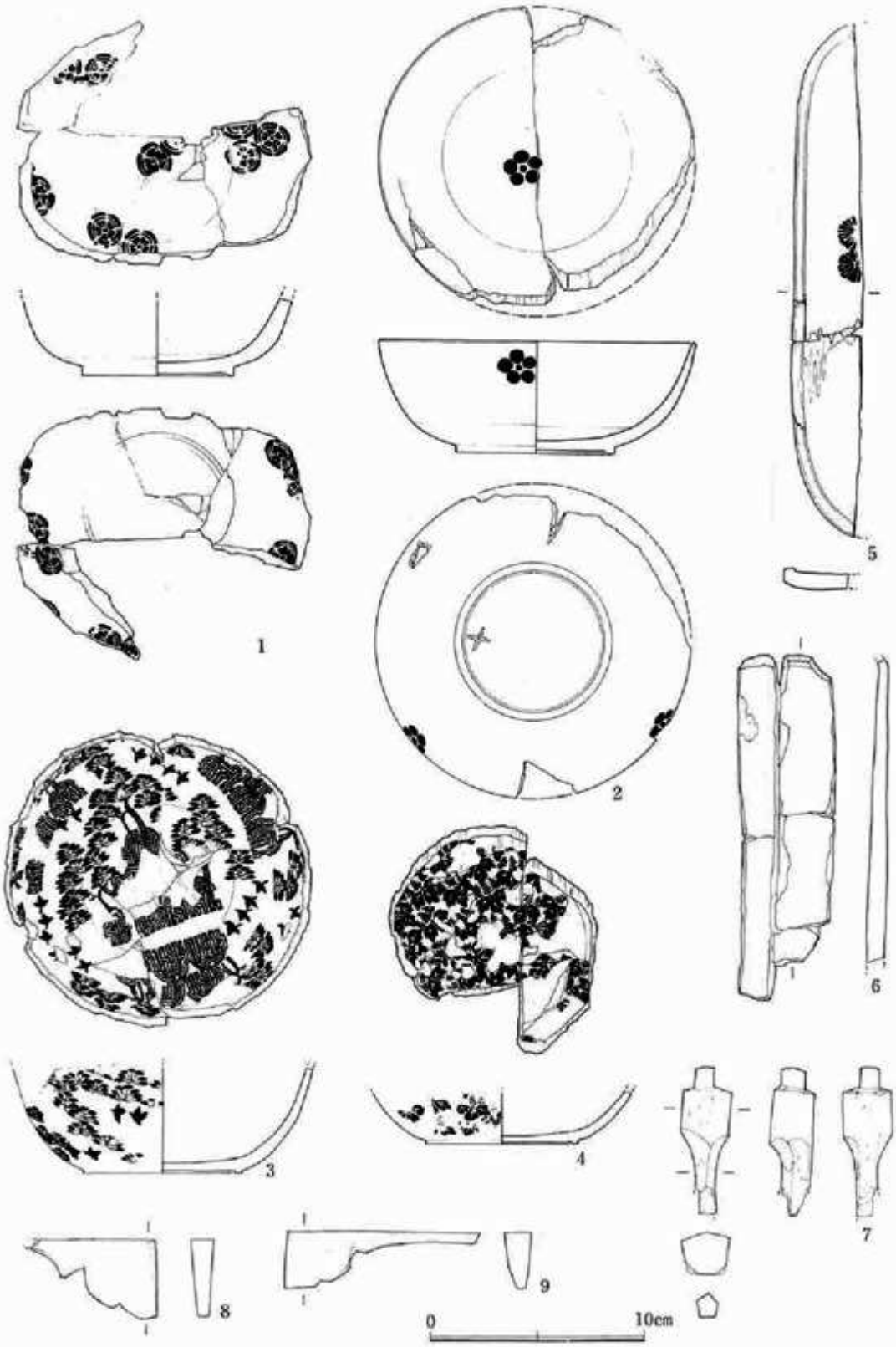



図17　漆製品(3)椀・鉢・膳脚・側木

がかなり剝れ落ちている。はめ込み部分上面には朱漆の文様がわずかに認められ、この脚の取り付く膳には文様が施されていたことがわかるが、意匠や描き方の技法などは知り得ない。第II面より出土。

d　側木（図17—8・9）

膳脚の取り付きを補助する側木である。二点とも片面は厚く漆が塗られており、これに対して裏面は塗りが粗雑である。8は第II面、9は第II面土壙より出土。

e　柄状製品（図18—5）

長さ17.0cm。太さ約1.5cmの製品である。黒漆がその側面全体に塗られているが、保存状態は良くなく、端面にまで塗られていたか否かはわからない。一方の先端部には深さ約2.2cmの穴があけられており、この部分に何かの付属品が取り付けられていたものと考えられる。第II面より出土。

f　櫛（図18—1～4）

歯の間隔が粗なもの（1～3）と密なもの（4）二種に大別できる。今回の調査で出土した製品は、全体の大きさを知ることができるものはない。ここに挙げた製品はいずれも棟がゆるい弧を描く一般的なタイプのものと考えられる。4点いずれも第II面より出土。

13　木製品（図19・20）

杯（図19—1）

口径9.0cm、器高3.4cm。高台の形状は総高台で高く、やや厚手の体部には外面に比較的明瞭な稜線がみられる。木製で漆が塗られていない製品として特殊な例であるといえる。第II面より出土。

ヘラ状製品（図19—2～4）

具体的な用途は不明であるが、形状の異なる三点がいずれも第II面から出土している。2は柄の部分で幅1.8cm、厚さ5mm。先端にかけて薄く削られており、片側が幅広になる。3は厚さ4mm。柄の部分は欠損しているが細く、偏平な小型の勺子といった形状。4は幅約1.5cm。先端はとがっており表は山型、裏面はゆるい凸面に削られている。

箸状木製品（図19—5～9）

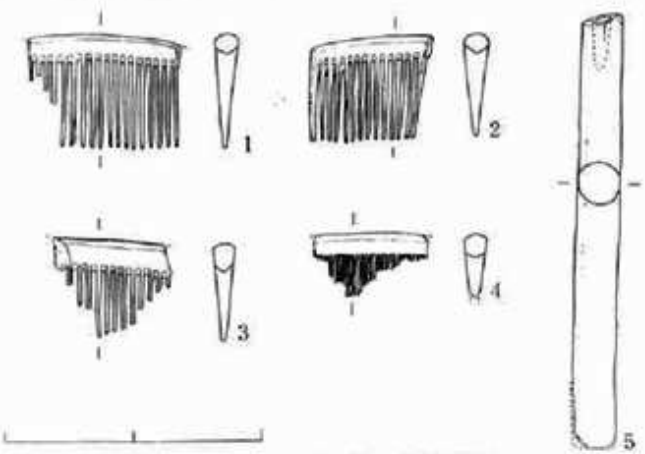



図18　漆製品(4)櫛・柄状製品

多く出土しているが、残存状態の良いものをここに挙げた。

5～7は第II面より出土。8・9は第II面2号建物より出土。長さは23cm程度、幅は太い箇所で7～8mm程度のものが多いようではあるが、法量はばらつきが大きく、断面の形も不揃いである。

膳脚（図19—10・11）

11は長さ6.5cm、はめ込み部分は8

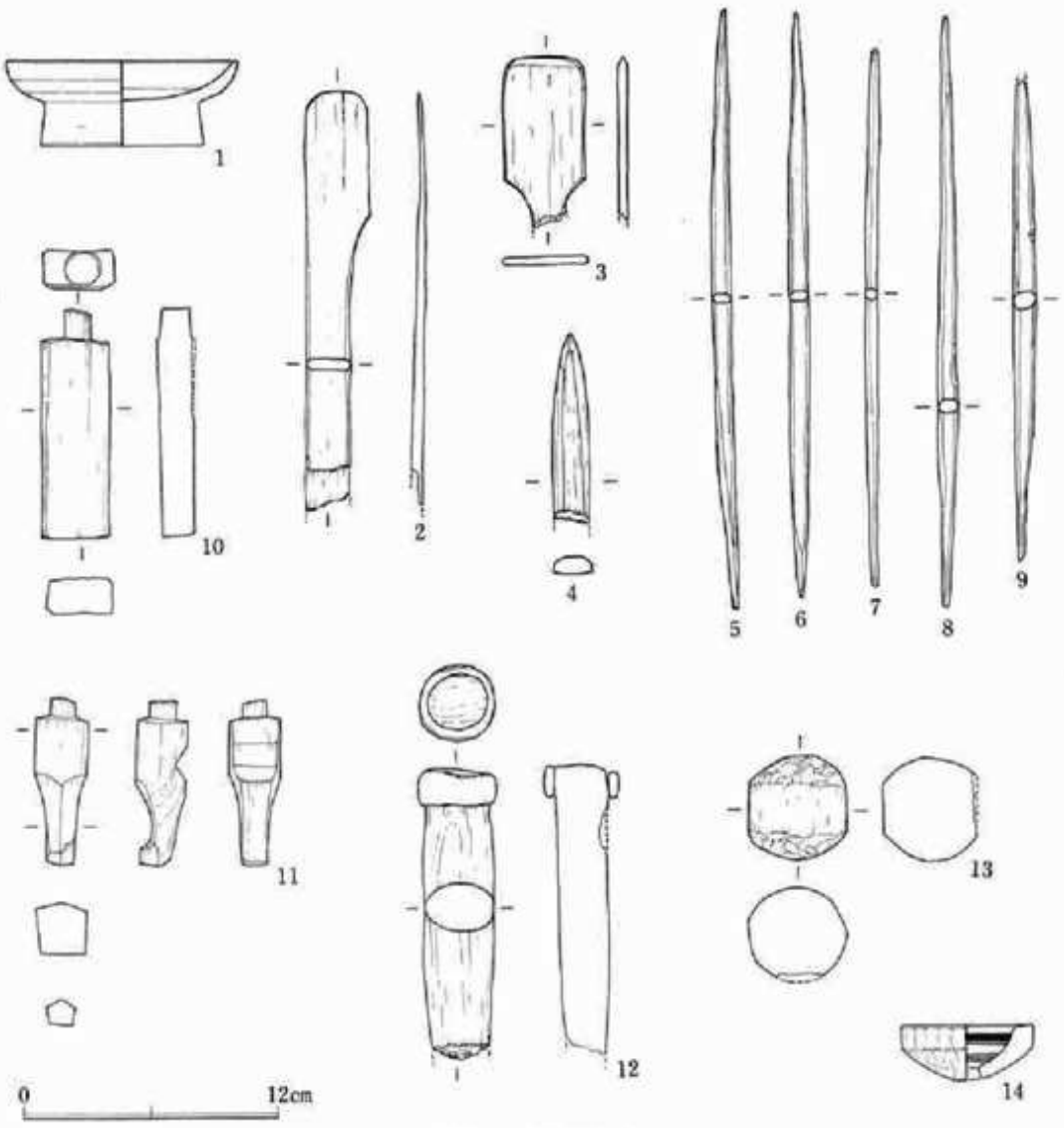



**図19　木製品(1)**

mm程度の深さをもつ。漆は塗られていない。第II面より出土。なお10は用途不明であるが、11のようなはめ込みの凸部を持ち、膳脚のように用いられた可能性も考えられるのでこの項に挙げた。ただし装飾的な形状には加工されていない。また全体に粗雑な削りであり、どのように使用されていたのか知り得ない。第II面より出土。

ノミ（図19—12）

12はノミの柄と覚しき製品である。柄の部分は断面が長径2.7cm、短径2.0cm程のだ円形を呈し、先端にかけてはやや細くなっている。一方の先端は断面は円形を呈し、鉄製の環がはめられている。第II面2号建物より出土。

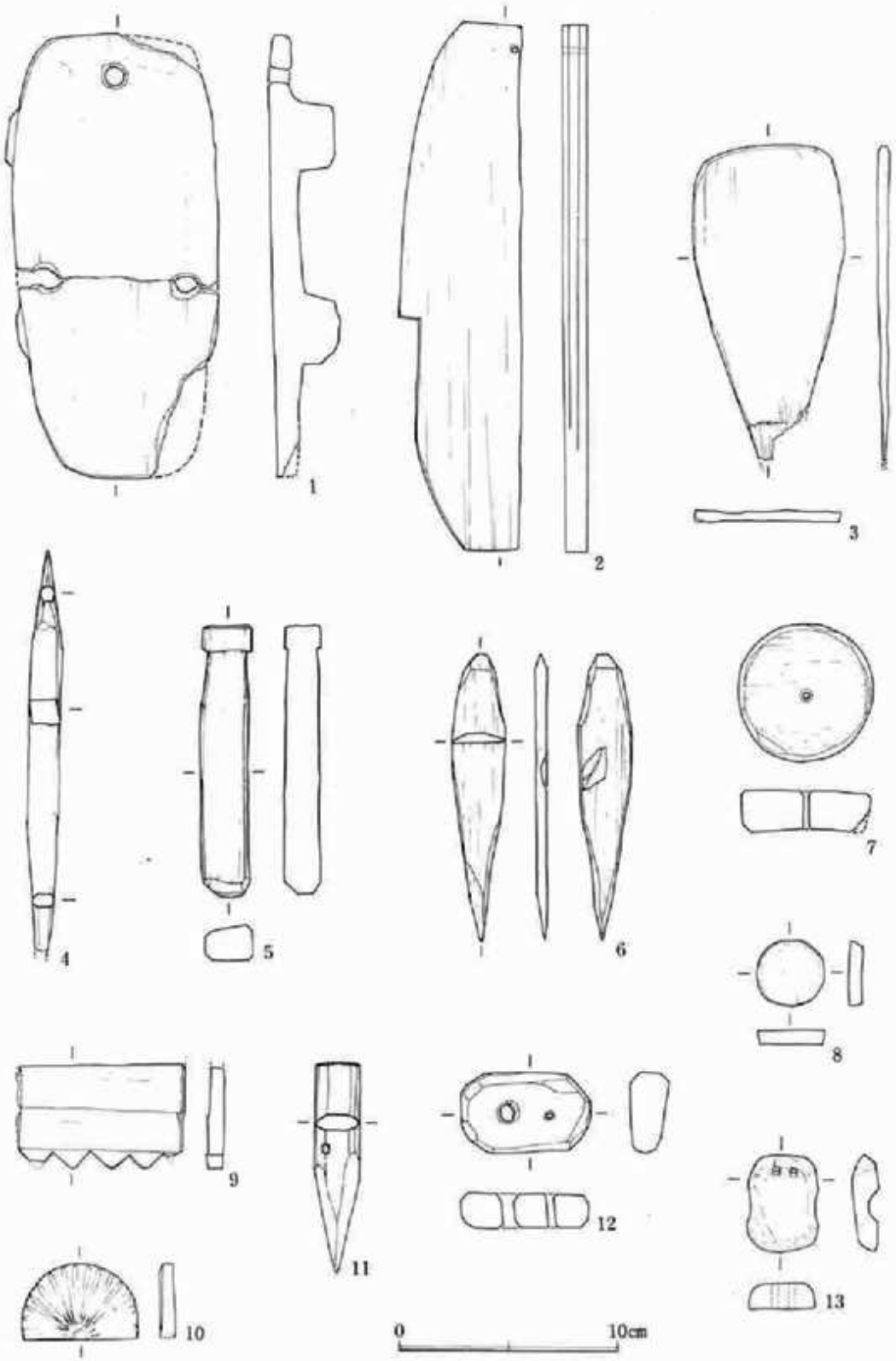



図20　木製品(2)

遊戯具（図19—13・14）

13は円柱状の材の上下を削って球体にしたもので、毬打であろうか。加工は粗雑であり、整った球体ではない。第II面土壙6より出土。14は独楽である。上面の径は5.2cm。下にいくに従って体部は薄くなるように削られ、内面には帯状に墨で同心円が施されている。削りはごく丁寧で、墨入れもその点は同様である。なお、芯棒は残存しなかった。第II面土壙7より出土。

下駄（図20—1）

台長20.5cmで比較的小振のもの。全体に摩滅がはなはだしく、残存状態も良くない。第II面土丹敷東遺構群より出土。

草履芯（図20—2）

2は厚さ約1.0cmの板材を用いた加工途中の草履芯。板材を長さ24cmの草履芯の形に切っており、これをナタか何かで三枚にさいているが、かかとの部分はつながったままである。従来、草履芯は薄くさいた板を一枚ずつ形に切って作られるように考えられてきた傾向もあるようだが、本製品は厚手の板をまず形に切ってから薄くさくという製作手順をうかがわせるもので、興味深い。第II面より出土。

用途不明の製品（図20—3～13）

3は厚さ約5mmの板で、花弁状の形をなすもの。欠損箇所があり、当初の形状は知り得ないので、杓子のようでもあるが、それにしては柄の取り付き部は細すぎ、また欠損部にむかって厚みがなくなっている。第II面土壙6より出土。4は不整形な角材の両端をとがらせたもの。ただし一端は先端が欠損している。加工はごく粗雑に施されており、一時的に用いられるごく簡略な工具という程度のものであろうか。第II面より出土。5は長さ12.2cm。粗雑に削られた製品で、断面は台形の四隅を面取りしたような形を呈し、上部に凸形の削り残しの部分を持たせる。陽物の形代か。第II面より出土。6は厚さ5mmの板材を削ったもの。片面は凸形に削られ、裏面は平らであるが中心部に粗い削りとり痕がある。一端を鋭くとがらせ、もう一端は丸みをもたせている。加工はごく粗雑である。第II面土壙7より出土。7は厚さ2.0cm程で中心部にむかってやや薄くなる径6.2cm程度の円盤。中心に穴が穿たれている。周縁は表裏面ともに面取りが施されている。第II面1号井戸より出土。8は厚さ6mm、径約3cmの円盤。遊戯に用いられる駒であろうか。第II面1号建物より出土。9は厚さ8mm程の板材を加工したもので、一辺を波形に切っている。板材の両面はナタ状のもので割られたままであり、不整形。端部は波形の部分をのぞいて欠損しており、当初の大きさは知り得ない。第II面土壙7より出土。10は厚さ約8mm、径約5.2cmのほぼ半円形に近い板に、菊花状の浮き彫りを施したもの。加工はごく丁寧に施されている。第II面より出土。11は長さ9.5cm。一端を両刃状に削って鋭くとがらせたヘラ状の製品で、中心部をそれたところに一箇所穴が穿たれている。第II面より出土。12は長さ6.0cm、幅約3.7cm、小判形の製品。厚さは中央で約1.5cm。比較的粗雑な加工であるが角を切り落として全体に丸みをもたせたもので、二箇所に大小の穴が穿たれている。紐を通して長さを調節したり固定したりする用具といった可能性も考えられよう。第II面より出土。13は長軸

4.5cm程の隅丸方形の製品。表面は角を丁寧に削り落としている。裏面は平坦な面に1.6cm幅の溝状のくぼみが削られている。端部に二箇所の穴が穿たれている。第II面より出土。

# 第三章　調査のまとめ

第Ⅰ面における生活面の使われ方は、南側に土丹面を伴なわない建物址、その北側に東西方向の道路上の土丹版築面、更にその北に平行する溝、そして部分的に残存する土丹版築面である。この土丹版築面上に建物址は検出されなかった。

この面出土の遺物は、舶載磁器が少なく、瀬戸製品が多くなる。かわらけも、薄手化の傾向を持つものもあるが、大体に於て側面観もそう開かず前代より多少時期が下るとみて、14世紀中頃を中心として前後する時期と考えられる。

第Ⅱ面は確実な面として把握したのは調査区南側の土丹版築面だけであり、他は確認面に留まる。調査区南西で検出された土丹面に沿う建物址の東側辺は、磁北から35°東に振れている。雪ノ下一丁目233番9他地点（北条時房・顕時邸跡）の第Ⅱ面建物址と同方向で、ほぼ若宮大路に平行していると見てよい。

この面の時期は、舶載磁器が比較的多く出土している。中でも白磁口兀小皿が多く出土している。かわらけに手づくね成形のものは含まれない。第Ⅱ面はかわらけの器型からみて13世紀末から14世紀前半に位置づけられよう。

註

1：3遺跡とも発掘調査報告書は未刊。「大三輪龍彦編『中世鎌倉の発掘』

有隣堂（1983）

2：『（推定藤内定員邸遺跡――鎌倉市新中央公民館用地内遺跡の発掘調査報告書』

同発掘調査団・鎌倉市教育委員会（1985）

## 図版 1

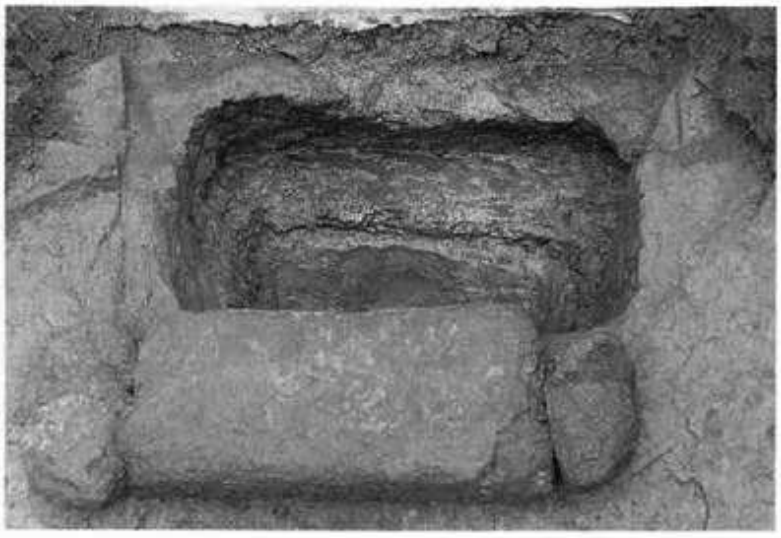
◀1.先行調査T21号建物

▶2.同上T7囲炉裏

◀3.同上T11井戸

図版2

◀1.井戸検出状況(南から)



▶2.同上完掘状況(北から)

◀3.瓦質輪花手培り出土状況

## 図版3

◀1.建物1・木組溝1・建物2・

▶2.建物2・縦板列1・(東から)

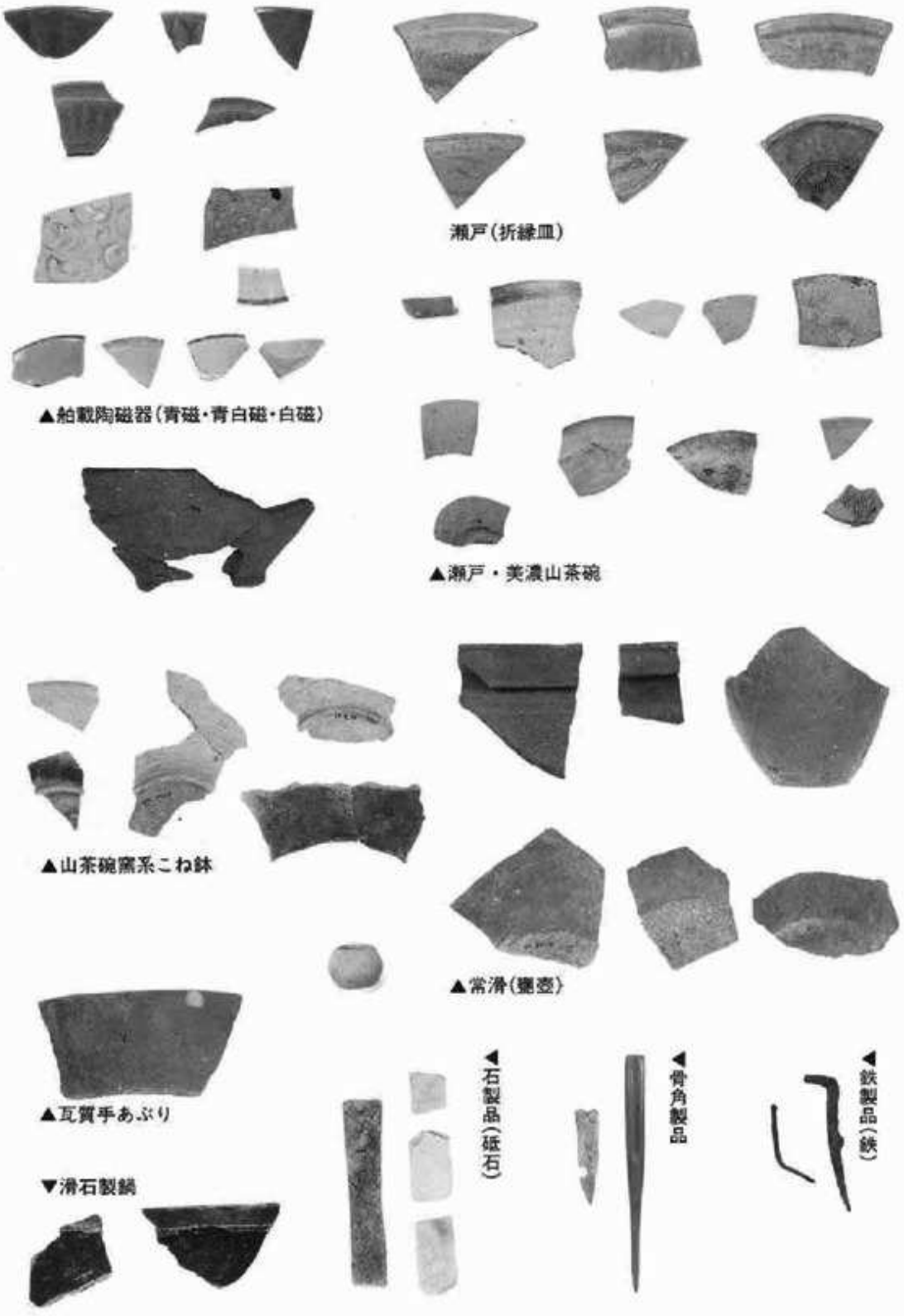
◀3.縦板列1・(北東から)

◀1.井戸址(北東から)

▶2.土壙1(馬の埋葬状況)

◀3.土壙5(馬骨・かわらけ)

## 図版5


瀬戸(折縁皿)
▲舶載陶磁器(青磁・青白磁・白磁)
▲瀬戸・美濃山茶碗
▲山茶碗窯系こね鉢
▲常滑(甕壺)
▲瓦質手あぶり
▼滑石製鍋
◀石製品(砥石)
◀骨角製品
◀鉄製品(鉄)

第1面

第2面土丹面上

第2包含層

2号建物址

2号建物址

1号建物址

図15-1　同-2

同-3

同-4

同-5

同-6

同-8

同-9

同-12

同-13

同-10

同-11

同-14

同-15

同-16

同-17

図版7

図版16-1

図版16-2

図版16-3

図版16-4

図版16-7

図版16-5

図版16-6

図版16-8

図版16-10

図版16-9

図版17-1

図版17-2

図版17-3

図版17-4

図版17-6

図版17-5

# 図版8

図版17-8

図版17-9

図版18-1

図版18-2

図版18-3

図版18-4

図版18-5

図版19-1

図版19-10

図版19-2

図版19-3

図版19-11

図版20-3

図版20-12

図版20-4

図版20-13

図版20-14

図版20-1

図版20-4

図版20-11

図版20-5

図版20-6

図版20-7

図版20-8

図版20-9

図版20-10

図版20-12

図版20-13

## 6．明月院旧境内遺跡

山ノ内字東管領屋敷187番６地点

# 例　言

1、　本報は、鎌倉市山ノ内字東管領屋敷明月谷187番6に所在する明月院旧境内遺跡における店舗併用住宅建設に伴う発掘調査報告書である。

2、　発掘調査は、昭和63年1月8日から同年1月31日にかけて実施した。

3、　本報の執筆は、田代郁夫があたった。図版作成には原　廣志、龍　実、大畑明子、があたり、これを原が編集した。

4、　本報で使用した写真は、遺構を田代が、遺物を木村美代治が撮影した。

5、　調査体制は以下の通りである。

担当者　　松尾宣方（鎌倉市教育委員会）
調査員　　田代郁夫
調査補助員　田中哲也・田代美芽（現地）、
及川加代子・渡部律子（資料整理）

6、　出土品等発掘調査資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

7、　発掘調査及び資料整理の際には、以下の諸氏諸機関から貴重な御教示と援助を賜った。記して感謝の意を表したい。（順不同・敬称略）

手塚直樹・河野真知郎・斉木秀雄・馬淵和雄・
大河内勉・宮田　真・宗臺秀明・菊川英政・
武　淳一・村上和久・瀬田哲夫・福田　誠・
佐藤　泉・柳橋典子・長田夏子・大三輪龍彦・
吉田章一郎・石井　進・吉田文夫・吉田茂夫・
吉田　茂・多田建設

# 目　　次

例　言……(144)
目　次……(145)

## 本 文 目 次

第一章　　調査地点の位置と歴史的環境 ……(146)
第二章　　遺構と遺物 ……(148)
第1節　基本土層の説明 ……(148)
第2節　検出遺構 ……(148)
第3節　出土遺物 ……(151)
第三章　　まとめ ……(155)

## 挿 図 目 次

図1　遺跡位置図……(147)
図2　調査区位置図……(147)
図3　遺構全体図……(149)
図4　井戸址……(150)
図5　出土遺物(1)……(152)
図6　出土遺物(2)……(153)
図7　古銭拓影……(154)
図8　かわらけ系統別変遷図（試案）……(156)

## 図 版 目 次

図版1－1、第1面全景　2、第2面全景　3、調査区西壁土層
図版2－1、井戸址検出状況　2、井戸址完掘状況　3、第1面遺物出土状況（瓦質輪花手焙り）
図版3－1、舶載陶磁（明の白磁・青磁）2、国産陶器（瀬戸）3、瓦質製品（香炉、手焙り）
図版4－1、かわらけ　2、古銭　3、石白

# 第一章　調査地点の位置と歴史的環境

遺跡は、例言で述べた如く鎌倉市山ノ内字東管領屋敷明月谷187番6に所在する。浄智寺の向かいの谷にあり、この谷を明月谷という。明月谷は、南西に向かって開口し、谷奥から流れる小河川に沿って、いくつかの小谷を内包している。調査地点は、この谷戸の入口近く、現在の明月院の門前、南東に位置し、明月院につづく道に面した、一段高い平場上にある。

現在谷戸内には、明月院だけが残っているが、かつてこの谷戸内には禅興寺があり、明月院は、その塔頭として成立したものである。禅興寺は、正しくは福源山禅興久昌禅寺と号し、北条時宗の開基、開山は蘭渓道隆である。開創の年時については、文永五年（1268）から六年頃の間とされている。(註1)鎌倉期に於ける禅興寺の規模は、元亨三年(1323)の貞時十三年忌供養に僧衆九十二人が参加しており、このことから建長・円覚の四分の一、浄智の次、大慶・万寿の上であるという。(註2)関東十刹の制が定められた後も、その一つとして、順位は時により所伝によって定まっていないが、一位、あるいは二位を占めている。足利氏とさしたる関係もないのに、関東にあってこれだけの上位を維持しているのは、鎌倉期に、既に叢林としての地位を確立していたからであろうとされている。(註3)天文七、八年頃（1538～9）の成立で、その記す内容は永享頃（1429～1441）のものであろうと推測されている。(註4)『五山記考異』には、仏殿・法堂・僧堂・経蔵・山門・稜厳塔・昭堂その他がみえ、塔頭には明月院・宗猷庵・黄龍庵等があげられ、上村本『宗派目子』所収の「明月院目子」には、このほか久昌窟（鎮守）・大弁才天・羅漢塔及び、宗徳庵等がある。

その後、黄梅院文書（東大資料編纂所架蔵影写本）年未詳「道潅書状」(註5)によれば、寺領が逸乱されたりしているが、また永正六年（1509）古河公方政氏が、禅興寺領の還補について述べた書簡があり(足利政氏書状)、再興している。そして天正九年（1581）に足利義昭が、恵澄を禅興寺住持に任命したりしている（成安寺文書）のをみると、この頃まで健在であったらしいが、後再び衰え、貞享頃（1684～1687）には仏殿一つが明月院に付属したような形になっている。禅興寺は明治の初め、廃寺となった。

註

1　川副武胤「臨済宗寺院」『鎌倉市史・社寺編』　高柳光寿編・吉川弘文館　1959

2　註1に同じ

3　註1に同じ

4　註1に同じ

5　註1に同じ

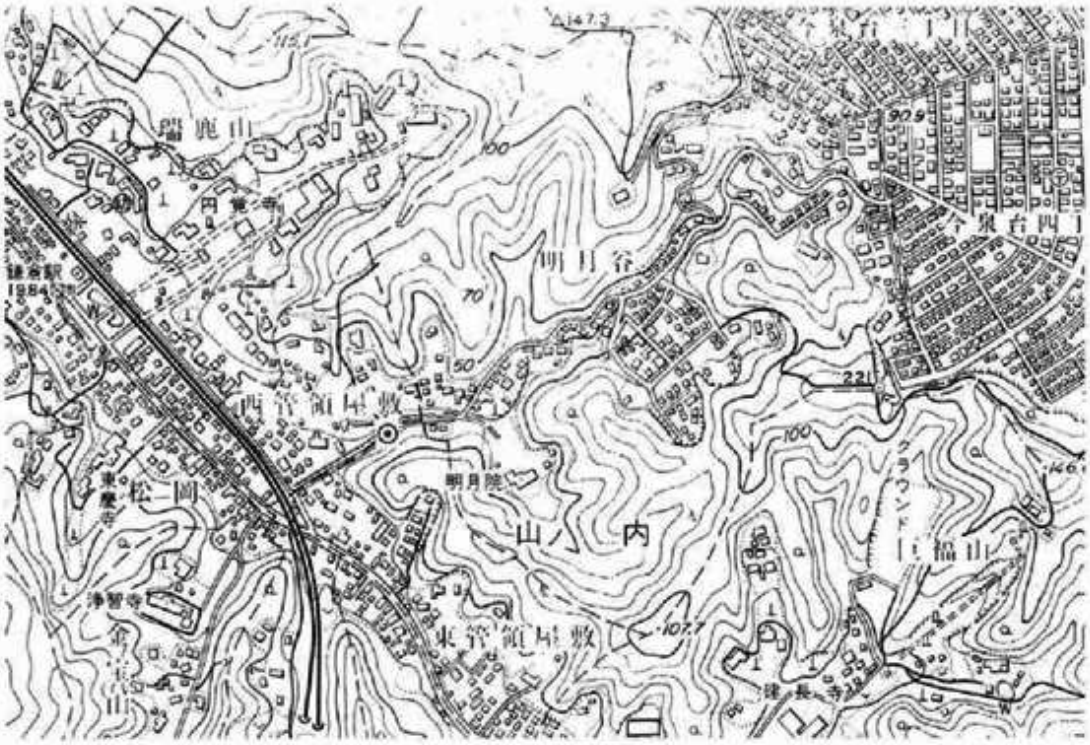



図1　遺跡位置図

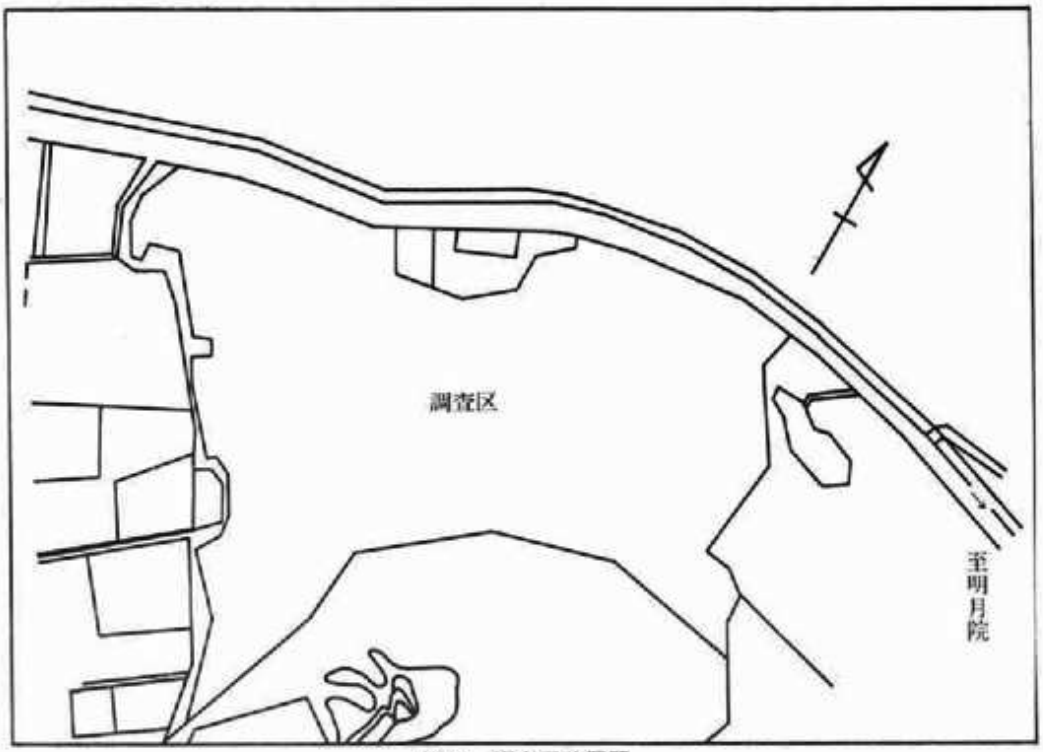



図2　調査区位置図

# 第二章　遺構と遺物

## 第1節　基本土層の説明

第1層　近代以降の盛土で、暗褐色を呈する。厚さは、平均70～80cm。

第2層　調査区北側の岩盤崖面が、風化作用等によって、崩落したために堆積したと思われる土丹層で、土丹塊及び、土丹粉と腐食土が混ざり合い、水気を含んで粘性を帯びた、黄褐色土である。厚さは平均50cm程である。

第3層　同じく崖面が、一気に崩れ落ちたようで、調査区北側に三角堆積する。土丹によるガラガラの黄褐色土丹層である。

第4層　遺物包含層である。木炭を少量含み、黒色土と小土丹の混ざり合った、暗黄褐色土である。この層の上面で、柱穴等をいくつか確認した為、第一面としたが、全体に遺構の検出が難しく、調査期間等を考慮して、岩盤面上まで下げて、最終的な遺構確認を行なった。本層の厚さは平均10～20cm程である。第4層を除去すると、岩盤削平面が表出する。

## 第2節　検出遺構（図3・4）

調査区は、明月谷戸の南東山裾に位置し、西北に向って開口した平場上にある。この平場は北側で標高27.5m、山際奥では27.7mを測る。平場の南東から北東の一部にかけては、岩盤崖面に向って高まりをみせる。その上部の標高は28.5mである。

この平場岩盤面上は平均して約150cm程の堆積土に覆われていたが、基本土層の説明で先述したように、約120cm程掘り下げたところで、暗黄褐色土で遺物を含んだ、やや締りのある土層を検出した。この土層の上面には炭化物の広がった範囲や柱穴等の遺構も、いくつか確認でき、ある時期の生活面と思われた。しかし、顕著な地業面を構成せず、しかも遺構覆土の判別が困難であったため、さらに10～20cm掘り下げて、岩盤面上で遺構確認を行なった。

この結果、3棟以上の掘立柱建物と柱穴、溝、井戸、石切跡などの遺構を検出した。

a 掘立柱建物址

柱穴は調査区全体から多数検出されている。大体径20～30cmのもので、方形を呈する例が多く、円形の例も多少認められる。

全体を眺めると、調査区東、中央付近と調査区西に3列、南北に柱穴の集中がみられ、それらはさらに小規模のまとまりをもって並んでいる。石切りによる削平岩盤面の改変も多いが、一定規模の建物址の存在をうかがわせるものである。柱穴の小規模の集中は建物の建替えによるものであろ

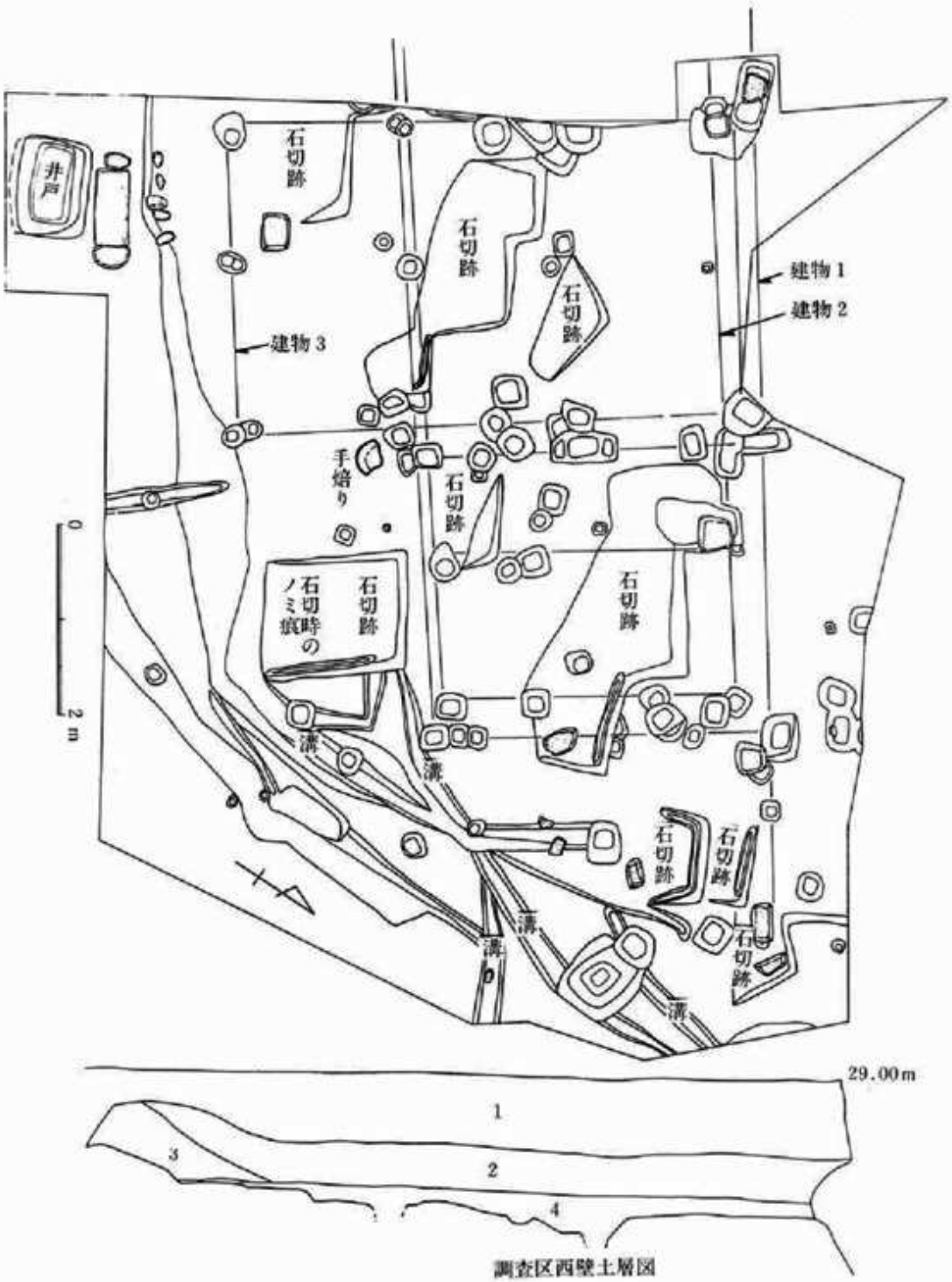

井戸
石切跡
石切跡
石切跡
建物1
建物2
建物3
手焙り
石切跡
石切跡
石切時のノミ痕
石切跡
溝
溝
石切跡
石切跡
溝
溝
石切跡
溝
0
2m
29.00m
1
2
3
4
調査区西壁土層図

**図3　遺構全体図**

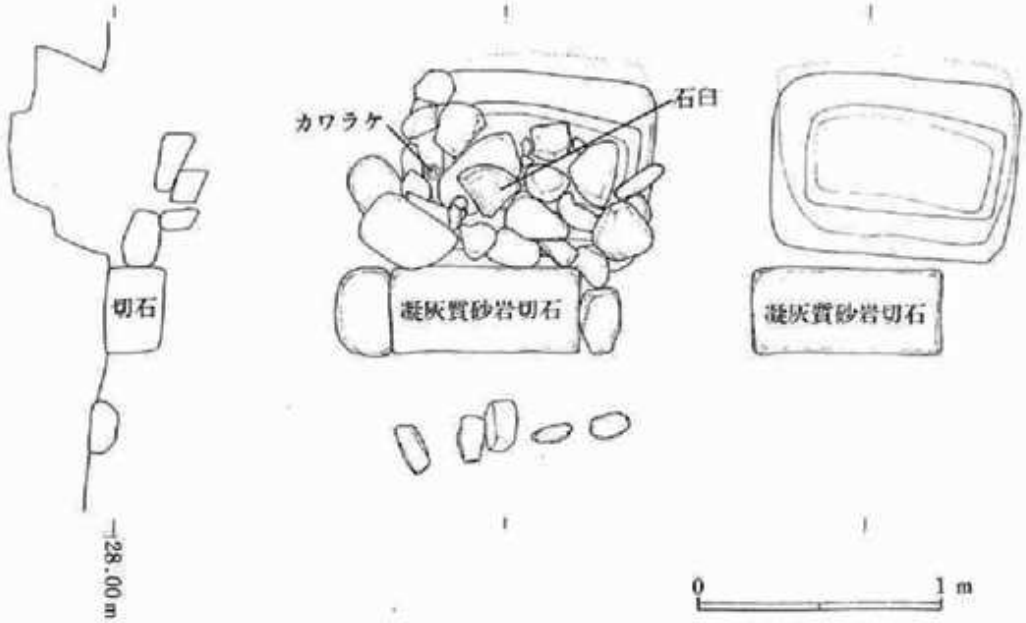



**図4　井戸址**

うか。

建物は張出し部分や、構造上の問題を度外視して、一応、建物の規模を想定すれば、図上で3棟を確認することができた。調査区の岩盤平場は調査区外北側及び西側に、さらに広がりをもち、建物の規模自体更に延びる可能性が充分に考えられる。

建物1の規模は、南3.53m、東西6.32m。建物2の規模は、南北3.07m、東西6.06m。建物3の規模は、南北5.0m、東西3.06m。

b 溝址

調査区南東の岩盤崖面下に、数条の溝が検出された。規模は幅約20cm、深さ10cmで調査区平坦面にほぼ添うように、南から北へ傾斜している。これらは岩盤崖面からのしぼれ水や、雨時の流れの建物側への流れ込みを防ぐ為のものであろう。

c 井戸址（図4）

岩盤面上に掘り込まれている。平面形は長辺98cm、短辺74cmのやや隅丸の長方形を呈する。南側側壁は、ややオーバーハングしながら最初の底面に至り、深さは北側で22cm、南側で28.5cmである。この底面内は、更に平面形の各辺をほぼ平行に縮少した長方形に掘り込まれている。長辺80cm、短辺42cmである。深さは北側で15.5cm、南側で8cmである。この井戸址北側と近接して、長辺78cm、短辺35cm、厚さ24cmの鎌倉石（凝灰質砂岩）の切石が岩盤面上に設置されている。井戸内覆土は殆んど、30～40cm大の伊豆石で、一時に投げ込まれた状況を呈している。この岩石中からは、石臼（図6－23）及びかわらけ（図6－11）が出土している。井戸址完掘後、しばらくすると水が滞水し、

かつても岩盤崖面からのしぼれ水を溜めた施設であったことが窺われる。

d　石切跡

調査区全体に９ヶ所以上にもおよぶ、鎌倉石（凝灰質砂岩）の切り出しを行なった痕跡を確認した。石切跡には切り出し時のノミ痕を思わせる、細長い溝状の痕跡が残っているものが認められる。この石切跡は、第１面構成土によって覆われていたことから、第２面である岩盤上生活面にさほど隔たらない時期に形成されたものと思われる。

## 第３節　出土遺物

a、　陶磁器類

舶載磁器（図５－１）

１は白磁皿である。口縁部は１cm程の、ごく小片である。内面及び、体部外面下半まで施釉されており、白濁した色調を呈する。胎土は、かすかに黄色味を帯びた白色で、気泡が多い。第４層（包含層）中出土。

他に青磁碗の小片が第４層（包含層）中から出土している。

この他に、図化できなかった青磁の小片を出土している。図版　参照。

国産陶器　（図５－２～５）

２・３は瀬戸の緑釉小皿である。２は口縁部片、３は底部片である。底径５cm。２は、口縁部内外に灰釉が施されている。３は底部右回転の糸切りで、２・３とも胎土は、かすかに黄色味を帯びた灰白色を呈している。ともに岩盤面上より出土。

４は、瀬戸灰釉碗の口縁部片である。内面及び、体部中半まで施釉されている。胎土は黄色味を帯びた灰白色を呈している。岩盤面上出土。

５は、瀬戸の灰釉鉢で、口縁は外方に引かれる。第１面出土。

b 瓦質製品（図－６～８、10・11）

６・７は香炉である。６は口径8.8cm。上方に向かってやや開く筒型で、口縁外面やや下がったところに、菊花紋が連続してスタンプされている。四足を有する。岩盤面上出土。７はハカマ腰型の香炉であろう。胴部外面に下向きの剣頭文様がスタンプされている。岩盤面上出土。

８は土風呂。岩盤面上出土。

10・11は手焙りである。10は輪花で、口縁部は内側に舌状に張り出し、外面のヘラ押し部分内側の同位置に粘土を貼付する。ともに第１面出土。

c 石臼（図６－23）

下臼の４分の１程の破片である。径39.3cmで、厚さ9.3cmである。井戸址覆土中から他の伊豆石と伴に出土している。

d 古銭（図７－１～10）

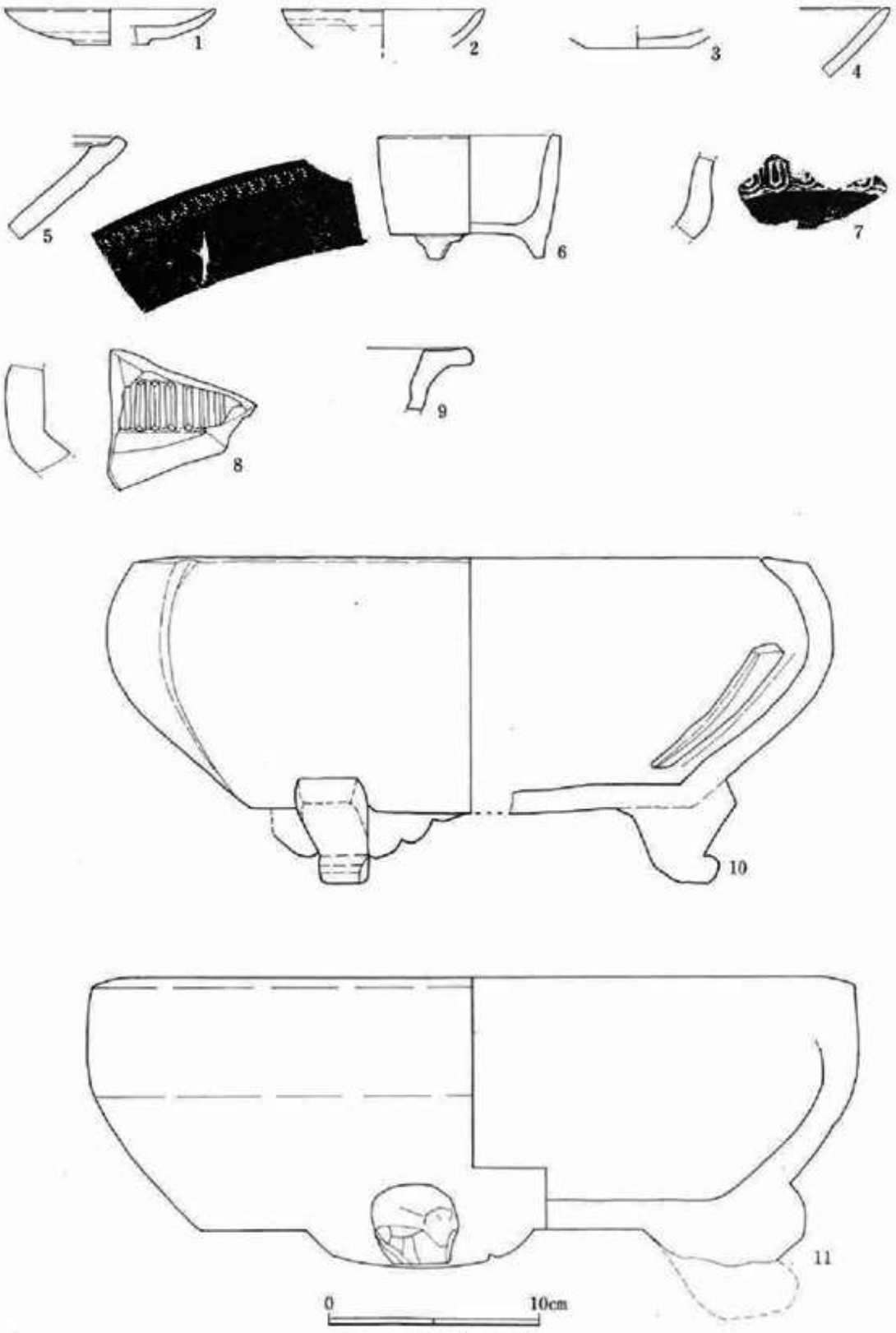



図5　出土遺物（1）

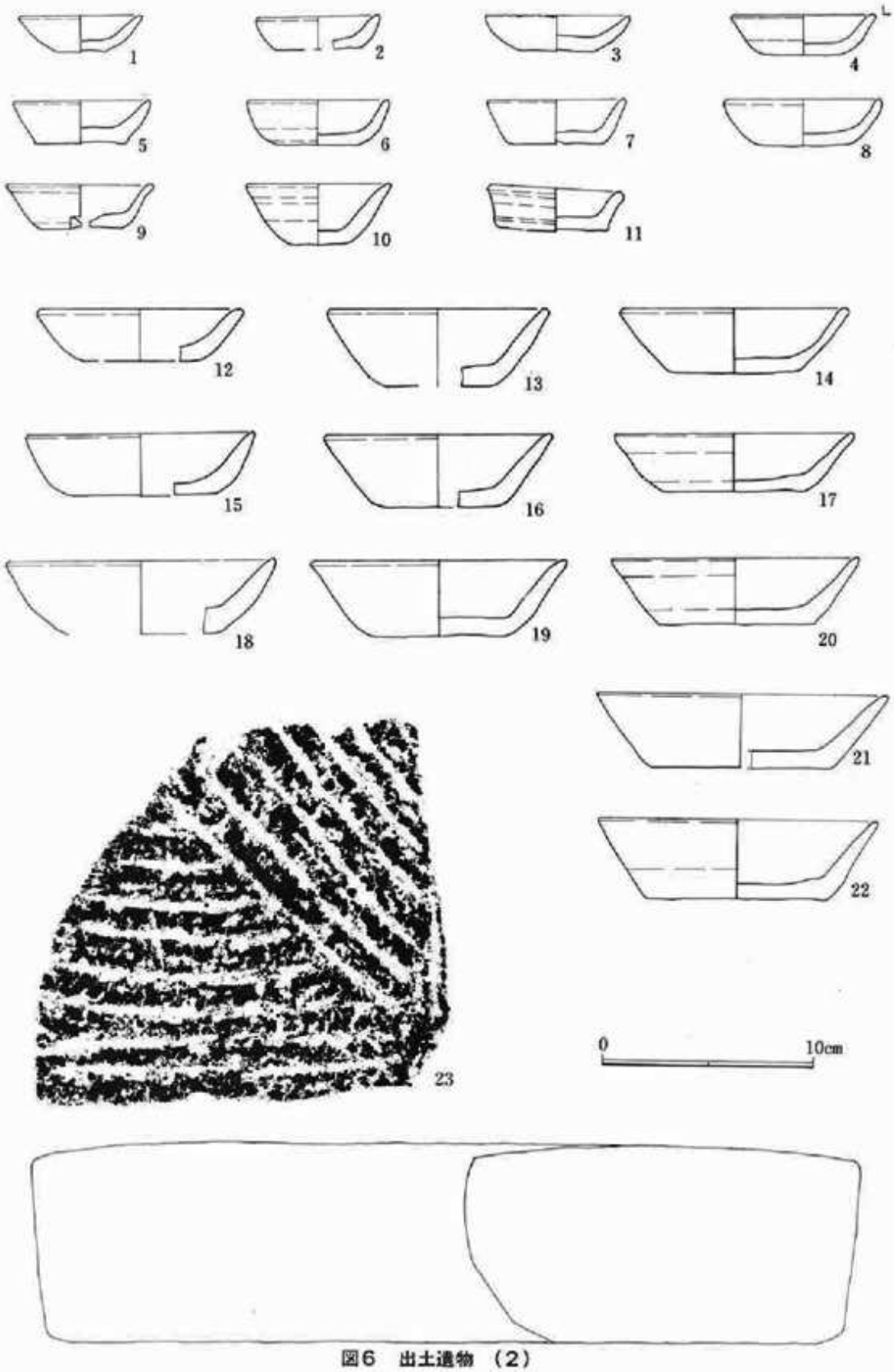
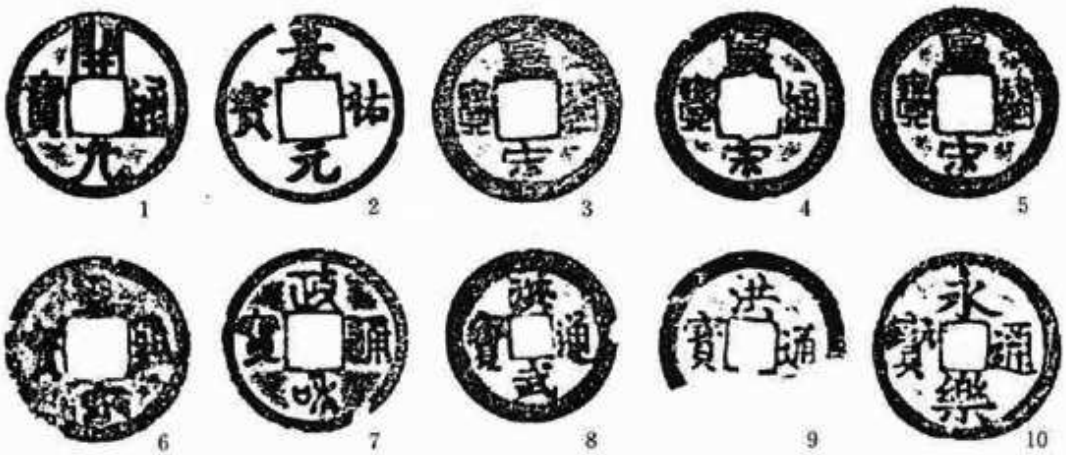



図6　出土遺物（2）

かわらけ法量表（図6）　単位cm

| 法量番号 | 口径 | 底径 | 器高 | 備　考 | 法量番号 | 口径 | 底径 | 器高 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 5.9 | 2.4 | 1.8 | | 12 | 10.0 | 5.7 | 2.5 | |
| 2 | 5.9 | 4.2 | 2.6 | | 13 | 10.7 | 5.0 | 3.8 | |
| 3 | 6.9 | 3.7 | 1.7 | | 14 | 11.0 | 6.3 | 3.1 | |
| 4 | 7.0 | 3.7 | 1.9 | | 15 | 11.0 | 7.0 | 3.0 | |
| 5 | 6.6 | 4.3 | 2.0 | | 16 | 11.0 | 5.4 | 3.5 | |
| 6 | 6.8 | 4.0 | 2.2 | | 17 | 11.5 | 6.6 | 2.8 | |
| 7 | 6.8 | 4.5 | 2.2 | | 18 | 12.8 | 準7.5 | 3.5 | |
| 8 | 7.6 | 4.4 | 2.3 | | 19 | 12.3 | 6.0 | 3.7 | |
| 9 | 7.1 | 3.9 | 2.1 | | 20 | 11.9 | 7.5 | 3.2 | |
| 10 | 7.0 | 2.8 | 2.9 | | 21 | 14.0 | 8.6 | 3.5 | |
| 11 | 6.5 | 5.4 | 2.1 | 胎土・焼成ともに極めて良好 | 22 | 13.5 | 8.7 | 3.8 | |




1　2　3　4　5　6　7　8　9　10

図7　古銭拓影

1は唐銭で開元通寶、初鋳年は621年。2～7は北宋銭である。2は景祐元寶で、初鋳年は1034年。3～6は皇宋通寶で、初鋳年は1039年。7は政和通寶で、初鋳年は1111年。8～10は明銭である。8・9は洪武通寶で、初鋳年は、1368年。

10は永楽通寶で、初鋳年は1408年。これらの古銭は、第4層中から出土している。

# 第三章　まとめ

本遺跡出土のかわらけの分類と変遷

今回出土した遺物は種類、量ともに、決して多いとはいえない。鎌倉の旧切り通しの内側での調査例と比すれば、格段の相違がある。しかし市街地では、中世から近現代に至るまで地業、削平が繰り返されている為、比較的上層にある中世でも下った時期の遺物は、殆んど出土しない。これに対して、本遺跡からこの期の遺物が出土したことは、谷戸内の小平場で、しかも北向きといった環境の為かもしれない。

ここでは本遺跡出土のかわらけを分類し、市内各遺跡出土の遺物との比較によって、遺跡の年代を考えてみたい。

本遺跡出土のかわらけを、面及び遺構別に分けると、岩盤面上出土（第2面）出土のものは、図－3、5～7、17、20～22である。第1面出土のものは、2、4、9、10、12、13、15、16、18、19である。そして11は井戸址覆土中から出土している。

岩盤面上（第2面）出土のかわらけをI期とし、それより上の第1面出土のものをII期とする。井戸址は、第1面を検出した段階で、既に覆土の大半を占める伊豆石が検出されている。井戸廃絶時の一回的投げ込みと考えられ、その覆土中から出土しているかわらけは、II期より更に新しいものと考えて大過ないと思う。井戸覆土中出土のかわらけをIII期とする。

（旧）I→II→III（新）

I期・II期を通して、かわらけは大、中、小の3種で構成され、III期は小皿が1点出土しているだけである。この大、中、小をそれぞれa、b、cとする。また出土かわらけには、各期を通じて系統的変遷が看取され、この各系統をA類・B類・C類・D類とし、変遷を1、2、3で示した。図8参照。

I－Aのかわらけは形態差によって2種に分けられる。ともに体部側面観は直線的であるが、体部外面立ち上がり部がストレートなもの（I－A－1）と、外方向に緩やかに内弯するもの（I－A－2）である。II－Aのかわらけは体部側面が直線的で、立ち上がりやや外方向に内弯し、この特徴はI－A－2と共通するが、口縁部がかすかに外反傾向を示す点が異なる。（I－A－3）。A類はI期、II期を通じて体部側面が直線的であることが類別の根拠である。I－A－1は、体部外面立ち上がり部について、II－A－3と共通点をもたないので、I－A－2と同一岩盤面出土だが、より先行するタイプと考えられる。

B類のかわらけは体部側面が緩やかな内弯傾向を示し、口唇部が鋭角的なものである。この特徴をもっともよく表わしているのは、II－B－2で、この系統をI期に求めると、I－B－1が一応考えられる。このタイプのかわらけのI期からII期への変遷は、体部内面立ち上がり部の肥厚する点に

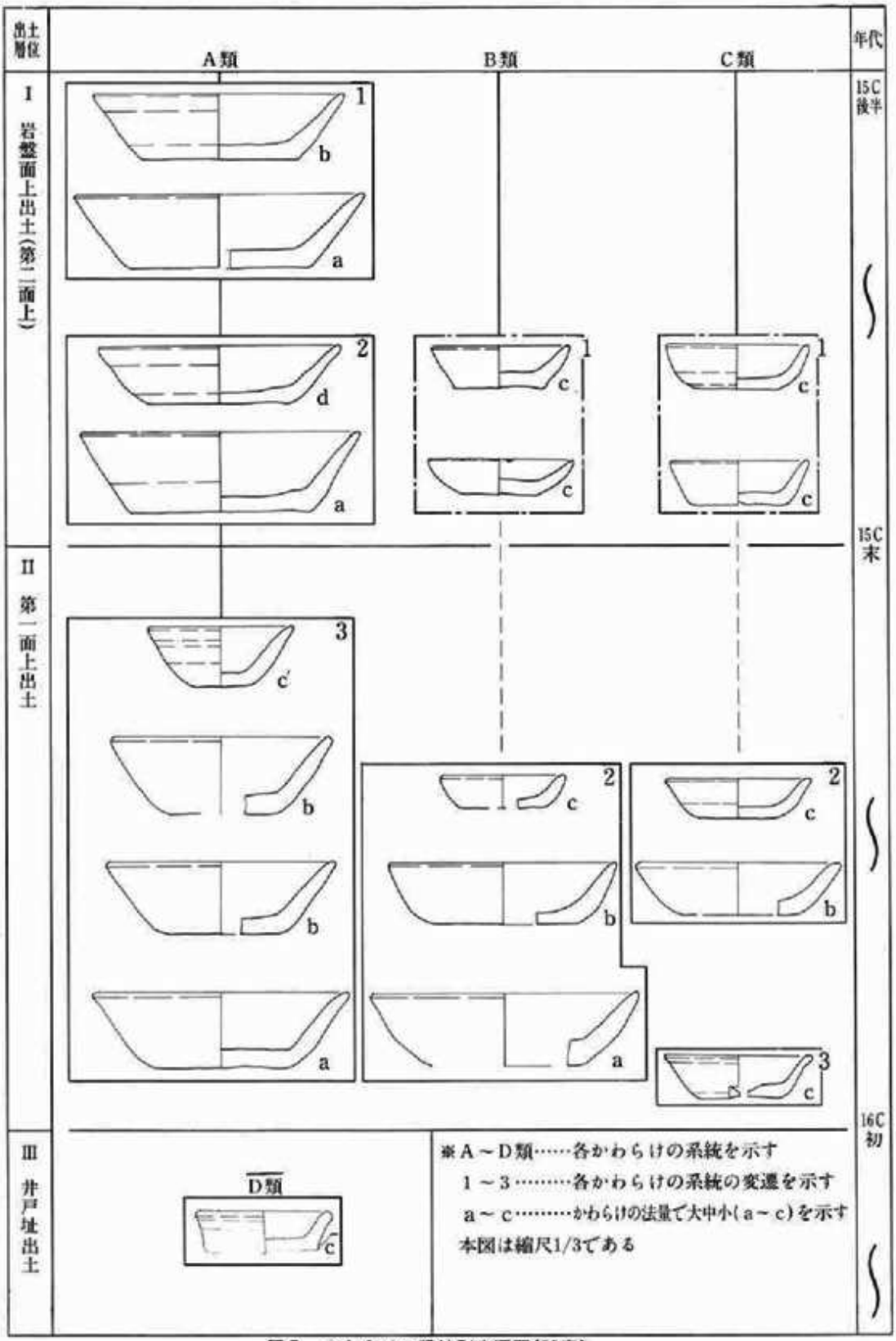



図8　かわらけの系統別変遷図(試案)

求められる。

C類のかわらけは、体部下半に膨をもち、底部壁、体部壁の厚さが、各期を通じて左程変化せず、口唇部が外反傾向をもつところに系統的特徴がある。この口唇部の外反傾向は、次第に強くなり、II—B—3では外方向に舌状に引かれる様になる。

D類は胎土、焼成ともに極めて良好で、型態的にも前期に系統を求めることができない。I期、II期の系統的連続性に対して、II期、III期の間には、年代幅を多く取る必要があろう。

市内各遺跡の中で、今回出土のかわらけと同タイプのものが出土しているのは、裏八幡西谷遺跡、(註①) 鶴岡八幡宮境内遺跡、(註②) 等である。

裏八幡宮西谷遺跡では、第1区1号岩盤造成遺構（第3削平面、溝）、第2区上段遺構第1削平面・第3削平面、下段遺構、第3区試掘坪4から、本遺跡出土かわらけ中のものと近似するものが出土している。このかわらけの特徴は、底部壁、体部壁共に著しく厚手で、体部は直線的に立ち上がり、口縁部が大きく外反する。これらを共伴した明磁の年代観を中心に、瀬戸、常滑窯の編年により15世紀後半～16世紀前半に位置づけている。

鶴岡八幡宮境内の調査は、直会殿用地、研修道場用地、鎌倉国宝館収蔵庫建設用地、(註③) 鶴岡文庫建設用地、の4ヶ所で実施されている。

研修道場用地では、V基に編年された第一面で出土している、かわらけ中のものが近似している。このかわらけの特徴は、側壁が直線的に外反する点である。伴出遺物は、瀬戸の折口鉢、灰釉碗、入子風の小型碗が出土している。

また、直会殿用地第5・6面出土のかわらけ群と近似する、側壁の外反角度が前期に比して、より強く直線的になるものも、今回出土のかわらけ中に含まれている。これらは研修道場用地発掘調査報告書で、VI期に編年されている。直会殿用地では、瀬戸の縁釉小皿を伴出し、研修道場用地では、瀬戸の折口鉢と、口縁内側に突帯をもつ鉢などが伴出している。V期は、天正十九年（1591年）の「造営目論見絵図」に対する解釈に異論のあることを前提とした上で、遺構から判断し、また直会殿の第6面からはこの期のかわらけが極くわずかしか出土しておらず、逆に研修道場の第1面からは直会殿・第6面出土のかわらけが全く含まれていないことを根拠に、15世紀後半頃としている。玉縄城本丸出土かわらけに類似するものの、胎土は同質であるが、側壁はより直線的であり、やや異質であるとし、瀬戸の縁釉小皿の伴出、玉縄城の存続年代を考慮して、16世紀初頭頃の年代を与えている。次に鶴岡文庫建設に伴う二十五坊の調査では、上述のV期、VI期は、それぞれ二十五坊5期、4期に当てられている。5期は、I次調査トレンチ部分、及びII次調査第4期が相当面である。5期、4期のかわらけの側面観は、ともに外反傾向をもつが、胎土による差異が認められる。5期・I次調査各トレンチ下層のものは、砂を含んだ胎土で、器肉も薄い良質なものが多く、上層ではこの傾向が逆転して、粉質胎土のものが7～8割を占める。II次調査第4期では、粉質胎土が2－3割である。伴出遺物は、瀬戸製品の他に中国製磁器が多いが、明磁は含まれず、肥前製品も全く含まれていない。第5期のかわらけは、15世紀後半～16世紀初頭頃とされている。4期のかわら

けは、粉質胎土のものが全体の比率で9割を占める。口径では大、中、小、極小、の4種類がある。伴出遺物では明磁、肥前窯製品は全く認められず、瀬戸製品が主体をなし、手焙りでは、口唇部が内側に舌状に張り出すものが殆んどである。この型の手焙りと鍔釜が含まれていることが、4期の特徴のひとつであり、鍔釜が鎌倉では15～16世紀にかけて出土し、上記手焙りは「いわゆる中世」には出土していないことから、4期には16世紀中頃から後半の年代が与えられている。

また、河野真知郎氏は、昭和61年段階の「鎌倉における中世土器様相」と題する論文の中で、(註④)本遺跡出土のかわらけのタイプを殆んど含むと思われる鎌倉第VI期を、15世紀中頃～16世紀前葉としている。

以上を前提として本遺跡出土遺物を通観すると、第1面から岩盤面に至る包含層中から、瀬戸緑釉小皿・折口鉢が出土しており、本遺跡の遺物からみた開始期が15世紀であることは確実である。また、口縁が内方向に引き出される瓦質輪花の手焙りが出土していることから、16世紀代にかかることもほぼ誤りないと思う。しかし鎌倉周辺地域での美濃大窯期の遺物の大量な出土状況を考えると、この期の瀬戸、美濃製品が皆無であることは、16世紀代に大幅にかかることを躊躇せざるを得ない。また、II期の遺物を戦国期とするには、形態的にも15世紀の特徴が色濃いように思われる。C（小型）タイプでやや深味を増すI－A－3－C'は、戦国期以降の極小タイプのかわらけの萌芽ではなかろうか。

これらのことを総合して、I期、II期、III期の年代観を述べれば、I期は15世紀の後半1400年代を2分割して）から末頃、II期は15世紀末から16世紀の初頭と考えておきたい。

註

1　服部実喜「裏八幡西谷遺物」『神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告4』　同センター　1984

2　斉木秀雄「直会殿用地発掘調査報告書」同調査団　1983

斉木秀雄「研修道場用地発掘調査報告書」　同調査団　1983

斉木秀雄「鶴岡八幡宮境内遺跡発掘調査報告II」同調査団　1987

3　鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書」同調査団　1985　この調査地点から15・16世紀のかわらけは出土していない。

4　河野真知郎「鎌倉における中世土器様相」　『神奈川考古　第21号　古代末期中世における在地系土器の諸問題』　神奈川考古同人会　1986

図版1

1. 第1面全景（南から）

2. 第2面全景（南から）

3. 調査区西壁土層（部分）

## 図版2

▶1.第Ⅰ面全景

◀2.同上調査区南土丹版築面

▶3.同上溝ノ土層堆積状況

# 図版3

図5－1

明・青磁碗

青磁碗

図5－2

瀬戸緑釉小皿

図5－3

瀬戸灰釉鉢

図5－5

図5－6

同左

図5－8

図5－9

図5－10

# 図版4

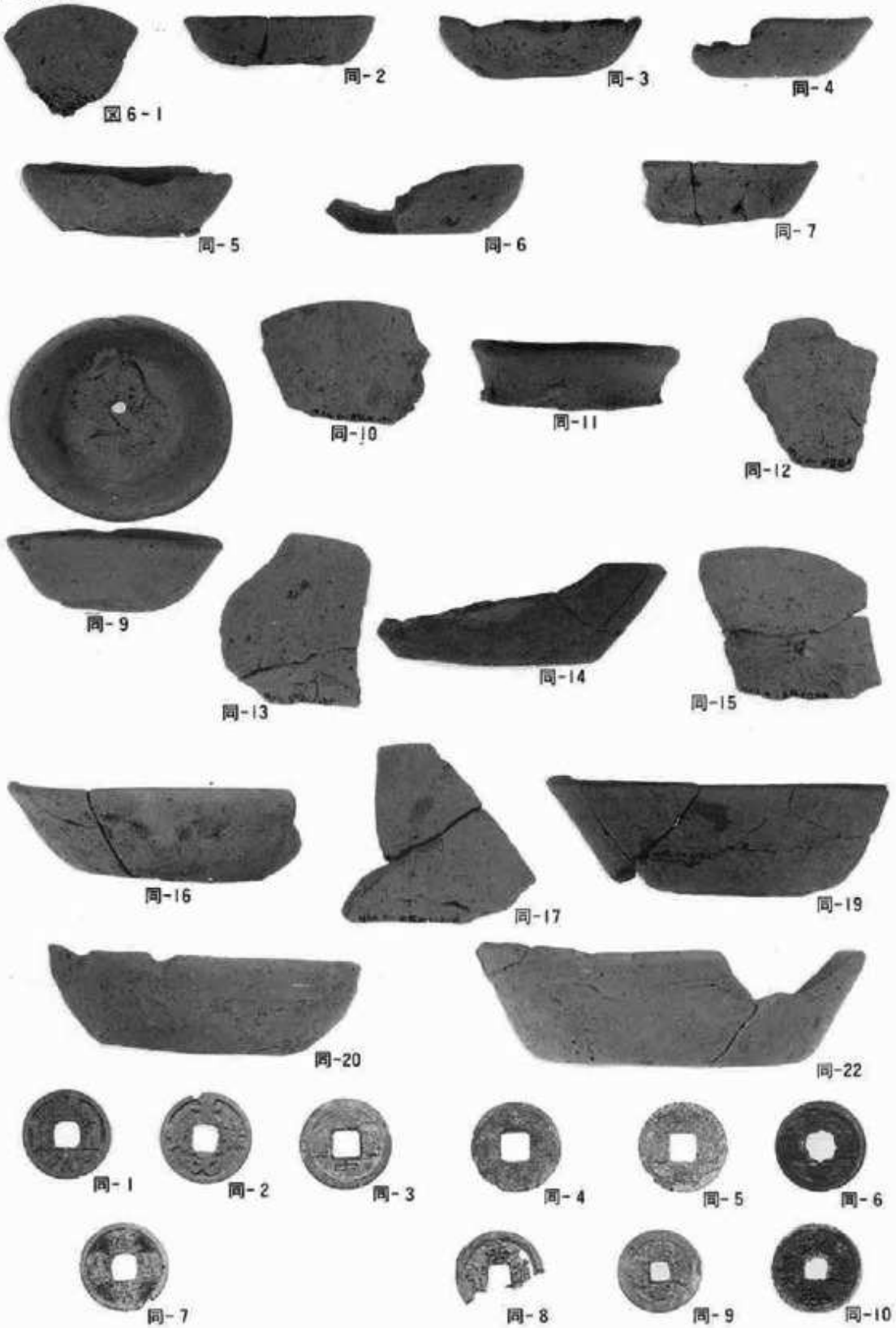


図6-1
同-2
同-3
同-4
同-5
同-6
同-7
同-10
同-11
同-12
同-9
同-13
同-14
同-15
同-16
同-17
同-19
同-20
同-22
同-1
同-2
同-3
同-4
同-5
同-6
同-7
同-8
同-9
同-10

# 7．若宮大路周辺遺跡群

小町二丁目12番18地点

例　言

1．本報は、鎌倉市小町二丁目12番18における自己用店舗建設にともなう埋蔵文化財発掘調査報告である。

2．発掘調査は国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。

3．本報の執筆および編集には馬淵和雄が、図版作成には馬淵・菊川英政・関口真理・渡部律子・及川加代子があたった。

4．本報で使用した写真は、遺構は馬淵が、遺物は木村美代治が撮った。

5．調査体制は以下のとおり。

担当者　　馬淵和雄(鎌倉市教育委員会嘱託)

調査補助員　　渡部律子・梅木信之・新国哲也・関口真理・松本信一・成田サキ・市瀬ツル子・桜田守男・成田初枝・川名由子・青木綾子

(以上現地作業)

及川加代子（資料整理)

6．また事業者の協力により、現地作業においては鎌倉市高齢者事業団の次の人々の御参加を得た。

高橋作造・大森由夫・登坂幸雄・佐藤功・箕田孝善・岩間敏雄・増田保・狩野徳恵知

7．発掘調査・資料整理の際には、次の諸氏・諸機関から貴重な御教示と援助をたまわった。記して感謝の意を表したい。(順不同・敬称略)

大三輪龍彦・三浦勝男・鎌倉考古学研究所・藤原良章・吉田章一郎・江上幹幸・柳川清彦・中田　英

# 第一章　調査地点の位置と環境

本地点は鎌倉駅の北方約200m、若宮大路から西に約80mの、現在「小町通り」と呼ばれる商店街に面した場所にある。「小町通り」商店街は新しく設けられた道なのであまり参考にできないが、本地点より西に約40mのところを若宮大路に平行して南北に走る路地があり、大路と今小路との間とちょうど二分する位置にあるので、これが中世期以来の街割を知る上で手掛りになると思われる。

この付近についての文献は見当らないが、北方約200mにある「北条時房・顕時邸跡」と呼ばれる場所の南側の並びに位置する点からみても、若宮大路沿いに並んでいたと思われる御家人達の屋敷の一角に当っている可能性はある。

この付近は、市内中世遺跡の中枢の場所に当り、鎌倉駅一帯から八幡宮にかけて、すでに何十箇所も調査されてはいる。しかし、たいていが500㎡以下の狭い区画なので、各地点のつながり等はほとんど不明のままである。だから、例えば庶民住居のようなものを検出したとしても、現状では、武家屋敷の中の「庶民居住区」（今小路西遺跡御成小学校用地の用語[註1]）なのか、それとも独立した庶民の町の一画なのか、ということを決めることは難しい。

若宮大路と、先述の南北の路地に挟まれた一画を北の八幡宮側から眺めてみると、まず「北条時房・顕時邸」と呼ばれる場所で既に数箇所の調査地点があり、若宮大路の側溝らしい大溝[註2]や地割を示す溝[註3]等も検出されている。本地点付近では過去大きな面積を調査する機会に恵まれず、地割等もわかっていない。本地点以南では、鎌倉駅の発掘調査（「蔵屋敷遺跡」）[註4]で、大路とほぼ平行した溝が検出されているのに対し、先述の路地を挟んで西側に当る小町一丁目116番地点[註5]では、大路と大幅にずれた軸線の溝が検出されているので、この路地に条坊制の規制の境界が設けられている可能性はある。

また、鎌倉駅付近のいくつかの調査地点[註6]では、奈良・平安時代の竪穴住居址が発見されており、今小路西遺跡御成小学校用地内で検出された古代郡衙前面の集落構造とその規模を知る上でも、本地点は貴重な位置にある、と言えよう。

註1　今小路西遺跡発掘調査団『今小路西遺跡（御成小学校内）発掘調査概報』1988
2　雪ノ下一丁目273番ロ地点および雪ノ下一丁目274番2地点など
3　雪ノ下一丁目233番－9他地点
4　鎌倉駅舎改築にかかる遺跡調査委員会『蔵屋敷遺跡』1984
5　「若宮大路周辺遺跡群（小町一丁目116番地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書2　昭和60年度発掘調査報告』1986
6　註5の地点など5箇所

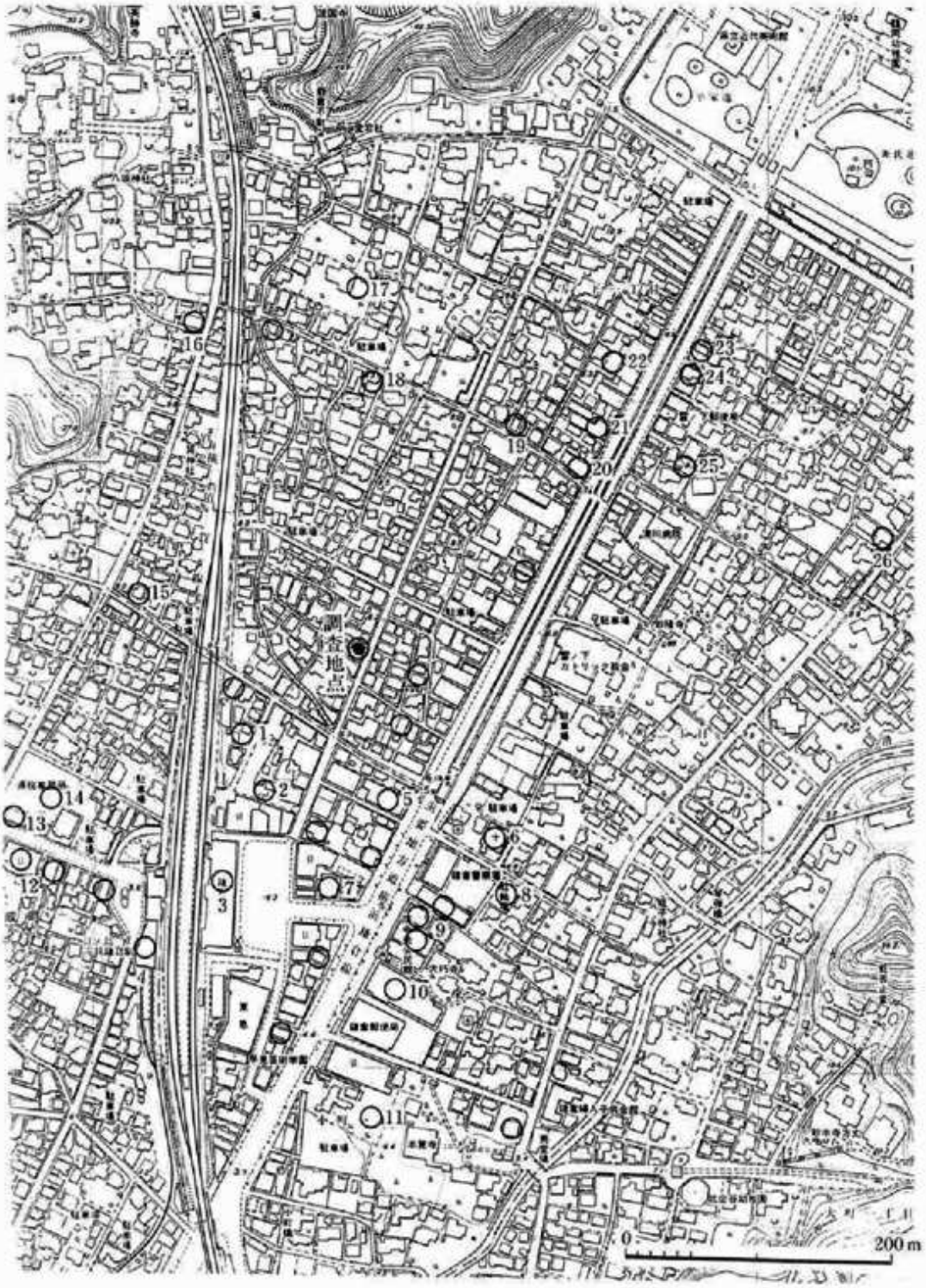



図1　近辺の主な発掘調査地点

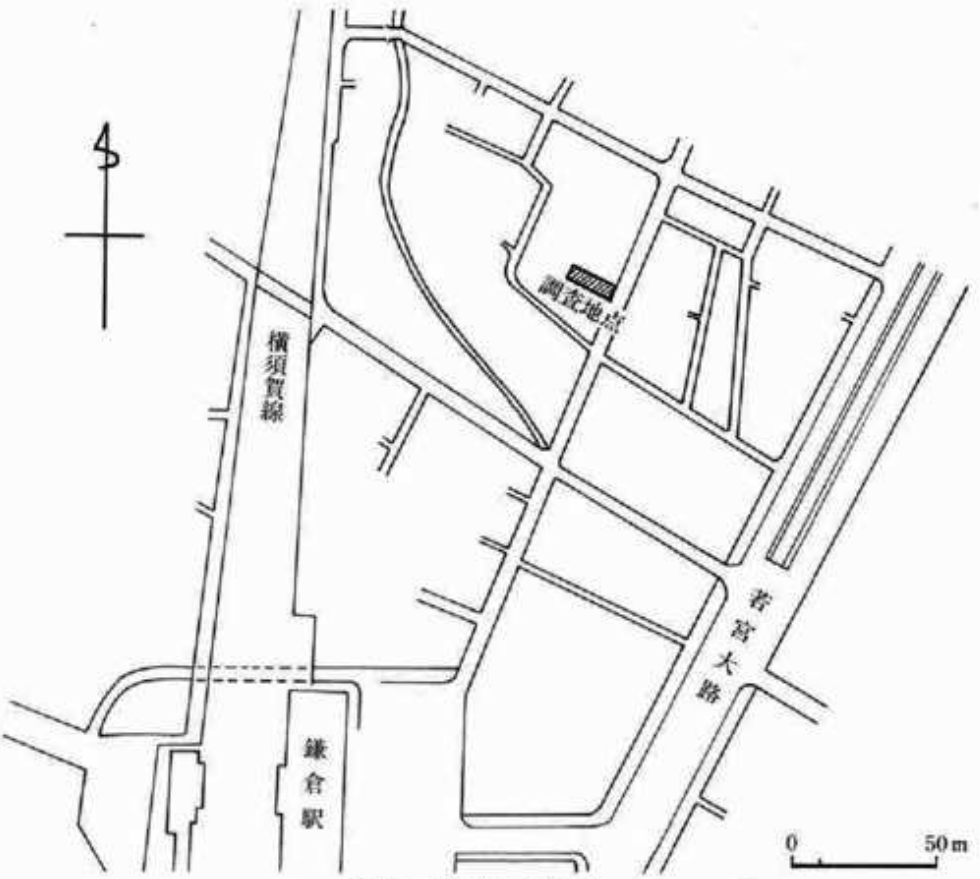



図2　調査地点の位置

図1 調査地点名

1　小町一丁目116番地点
2　小町一丁目106番地点
3　蔵屋敷遺跡
4　蔵屋敷東遺跡
5　二ノ鳥居西遺跡
6　小町二丁目345番－2地点遺跡
7　小町一丁目75番地－1地点
8　大巧寺旧境内
9　小町一丁目309番5地点遺跡
10　(推定)藤内定員邸跡遺跡
11　本覚寺旧境内
12　諏訪東遺跡
13　御成町228番－2他地点
14　千葉地東遺跡
15　扇が谷一丁目74番8地点
16　扇が谷一丁目131番1地点
17　雪ノ下一丁目210番地点
18　小町二丁目39番6他地点
19　雪ノ下一丁目233番－9地点
20　雪ノ下一丁目274番－2地点
21　雪ノ下一丁目273番－ロ地点
22　雪ノ下一丁目271番－1地点
23　雪ノ下一丁目371番－1地点
24　雪ノ下一丁目372番－7地点
25　雪ノ下一丁目419番－3地点
26　雪ノ下一丁目432番2地点

※番号を付していない地点は、立会い等その他の調査地点

## 第二章　調査の概要と経過

本調査に先立って、基礎杭の入る８箇所を1987年４月に調査した。この結果、地表下約50cmまで近・現代の客土層の及んでいることが判明したため、この深度まで重機を導入して排土した。調査面積は建物建築にかかる約130㎡である。東側の商店街に面した一画には、コンクリートの地下倉が地山層にまで達しており、この部分の調査は除外した。

調査にあたっては、若宮大路に平行した南北軸線と、これに直交する東西の軸線とを４m間隔で設け、前者にアルファベットを、後者に算用数字の名称を付した。各方眼区画の名称は北西角の軸線交点を充てた。南北軸方位はN－27.5°－E（MN－34.5°－E）である。

本調査は５月22日より重機を導入して始められ７月10日に機材を撤収して終了した。その間以下のような節目がある。

６月13日　上層遺構面全景写真撮影と平面図等終了。

７月６日　地山面全景写真と平面図等終了。

７月９日　東域拡張部全景写真と平面図等終了。

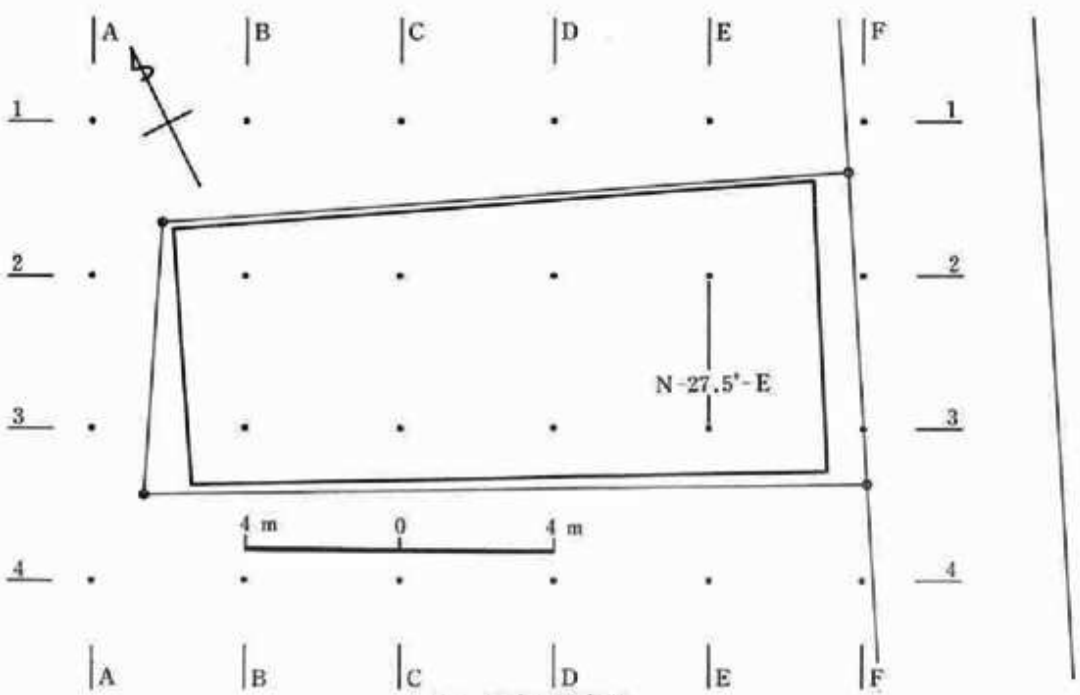



図３　調査区設定図

# 第三章　遺構と遺物

## 第1節　層序

近・現代の客土層を除くと、部分的に非常にぶ厚い土丹（泥砂岩の三浦地方における呼称）地業層がある。これはおそらく、近・現代客土の際の床土であり、その下に中世の生活面があらわれる。これを第Ⅰ面とした。この面には部分的に土丹面があるが、多くは暗茶褐色砂質土によって構成されている。貝殻粒子や炭化物の散在する面である。地表下約70cm前後、標高約6.2mにある。

第Ⅱ面はⅠ面下約10～20cmにある暗青灰色粘質土で構成される面で、この面にも砂・貝殻等の散布が認められた。炭化物も非常に多い。

第Ⅲ面は黒褐色粘質土の中世基盤層上面であり、この付近の上面の標高は約5.8m前後である。この面は土中の鉄分の非常に堅く固まったところが部分的にみられ、またその鉄分のせいで、茶褐色を呈するところもある。青灰色の海成砂層はこの面下約10～20cm程度である。

## 第2節　第Ⅰ面の遺構と遺物

この面で検出したのは土壙10基、溝2条、かわらけ溜り3群、通路状の面等である。

### 1．かわらけ溜り1（図5）

幅3～3.6mの大きい溝状の落ち込み（溝1）の中に約300個体以上が捨てられていた。南北の調査区外に溝状の落ち込みが伸びており、さらに広がるものと思われる。またこの落ち込みが実際に溝であるのか、それともゴミ捨て穴のようなものであるのかは、護岸施設がなく、覆土に水の流れた痕跡もみられないところから不明である。深さは50～60cm、断面形は箱形である。

出土遺物（図7－1～16）

かわらけ（1～6）のうち大型品は低めの器高のものが多くみられ、小型品は薄手で内湾するものの他に浅い器高のものもある。また中型品（3）が含まれているが、これはこの時期特有のものである。いずれもロクロ成形のもの。

7～9は山茶碗窯系こね鉢で、いずれも丸い端部を持つが、肥厚するもの（8・9）としないもの（7）がある。

10・11は常滑甕で、12も同じく常滑であるが、概して、口縁端部が上方に向って尖る、平たい盤である。

13は瀬戸折縁鉢で内・外面に目痕がある。

14は瓦質の火鉢。

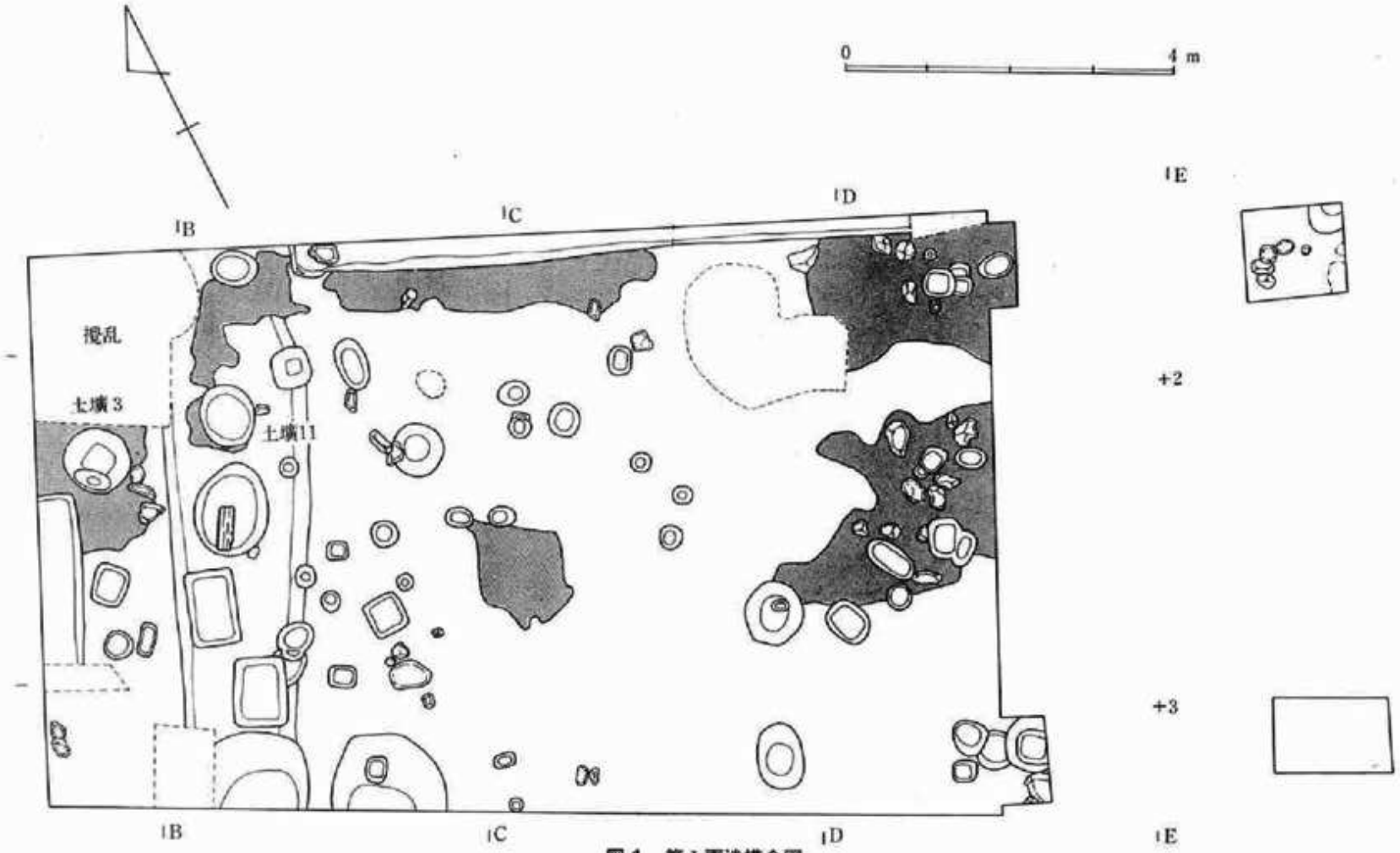



図4　第1面遺構全図

15は滑石鍋で、つばの上と下とで器壁の厚味が異なる。淡褐色と銀灰色とがしま模様をなす石材。

16は太平通宝。北宋の976年初鋳。

## 2．かわらけ溜り2（図6右）

B－2、かわらけ溜り1の上にある。約70個体がまとまって出土した。

いずれもロクロ成形のもので、器形的にはかわらけ溜り1と変らず、大型品はやや低めの器高、小型品は薄手で器高の高いものと低いものとが混在している。

## 3．かわらけ溜り3（図6左）

B－2北東部にある土壙中からまとまって出土した。13個体が土壙に捨てられている。

土壙自体は直径60cm、深さ35cm、逆台形の断面を呈する円形プランの穴である。

出土遺物（図7－17～21）

大型・小型ともにロクロ成形で、薄い器壁の、器高も高め、内湾する体部を持つもの。大体において焼きが良い。

## 4．溝2

北壁際に南岸がのぞいている。断面V字形で、西端は溝1の手前でとまり、東端は撹乱壙に切られている。深さ40cm以上、幅は不明。

出土遺物（図7－22～24）

22はかわらけで口縁部に油煤が付いており、燈明皿として使われたものか。

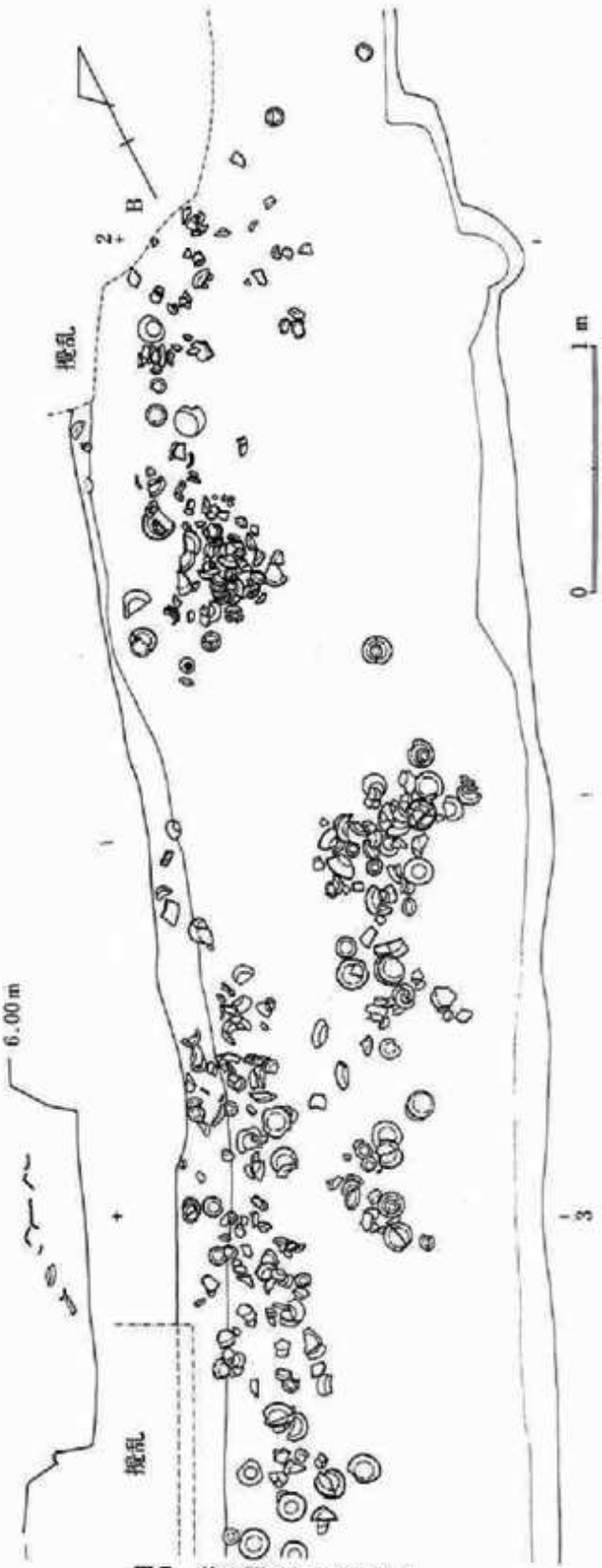



図5　第1面かわらけ溜り1

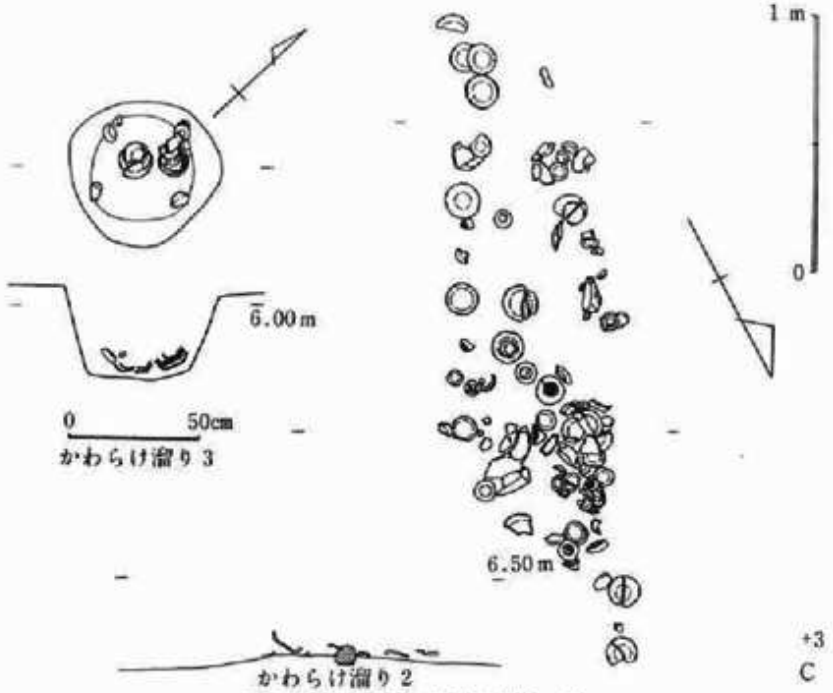



**図6　第1面かわらけ溜り2、3**

23は蓮弁文青磁の小碗。青緑色透明の釉薬で、高台畳付のみ露胎。内湾度が大きい。

24は鉄製品で、舟釘のような大きな釘だと思われる。

## 5．土壙1

B－2のかわらけ溜り上で検出した。南北112cm、東西90cm、楕円形で、断面は皿形。深さ約20cm。底面に長さ58cmの板が入っている。

出土遺物（図7－25・26）

ともにロクロ成形による。小型の25は低い器高の、楔形に斜め上方に伸びる器壁を持ち、大型の26は薄手で内湾する高い器高のもの。

## 6．土壙2

B－2・3にある方形土壙。南北85cm、東西68cm、深さ18cmで、断面は皿状。

出土遺物（図7－27・28）

いずれもロクロ成形の薄手で器高の高いものであるが、28はこの時期特有の中型品。

## 7．土壙4

調査区西壁にあり、西半は外に出ている。南北210cm以上、東西は不明。深さ約20cm。

出土遺物（図7－29～31）

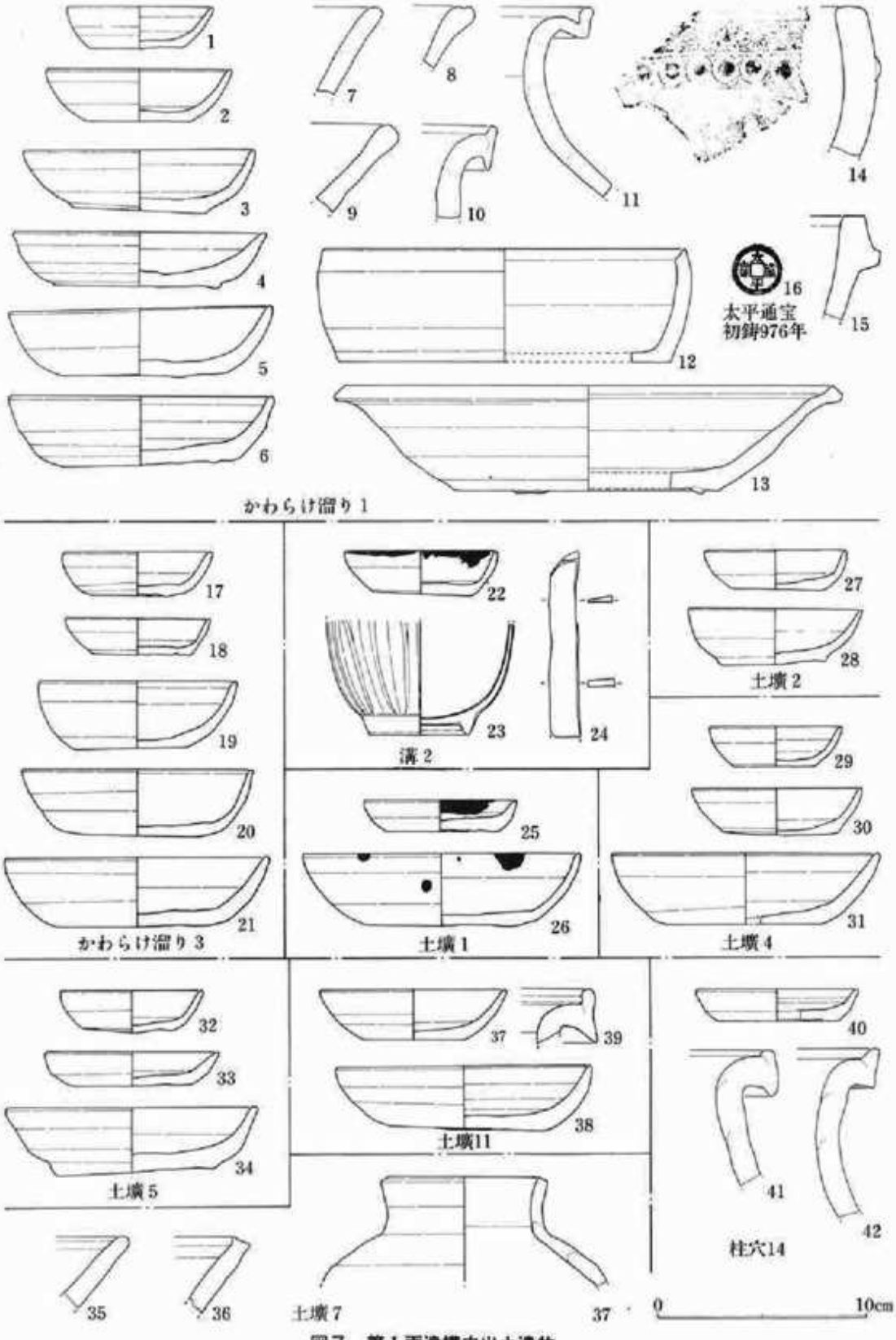



図7　第Ⅰ面遺構内出土遺物

ロクロ成形品の大・中・小の三種がみられる。いずれも薄手で高い器高のもの。

## 8．土壙5

B－3南壁にあり、南側は調査区外に出ている。東西115cm以上、南北92cm以上、深さ約50cm。

出土遺物（図7－32～34）

ロクロ成形ばかりだがいく分器高の低いもの（33・34）がみられる。

## 9．土壙7

C－3にある楕円形土壙。南北82cm、東西55cm、深さ25cmで擂鉢状の断面を呈する。

出土遺物（図7－35～37）

35は山茶碗窯系こね鉢で、36は常滑こね鉢、37は同小壺である。37の口縁端部は上方に尖る。

## 10．土壙11

B－2北西角にある円形土壙。南北75cm、東西68cm、深さ26cm。断面は皿形を呈する。

出土遺物（図7－37～39）

37・38はロクロ成形かわらけで、37は薄手の小型品、38はやや厚味ある器壁の大型品。39は常滑の甕である。

## 11．柱穴14出土遺物（図7－40～42）

B－2にある楕円形の柱穴14から出土した遺物である。

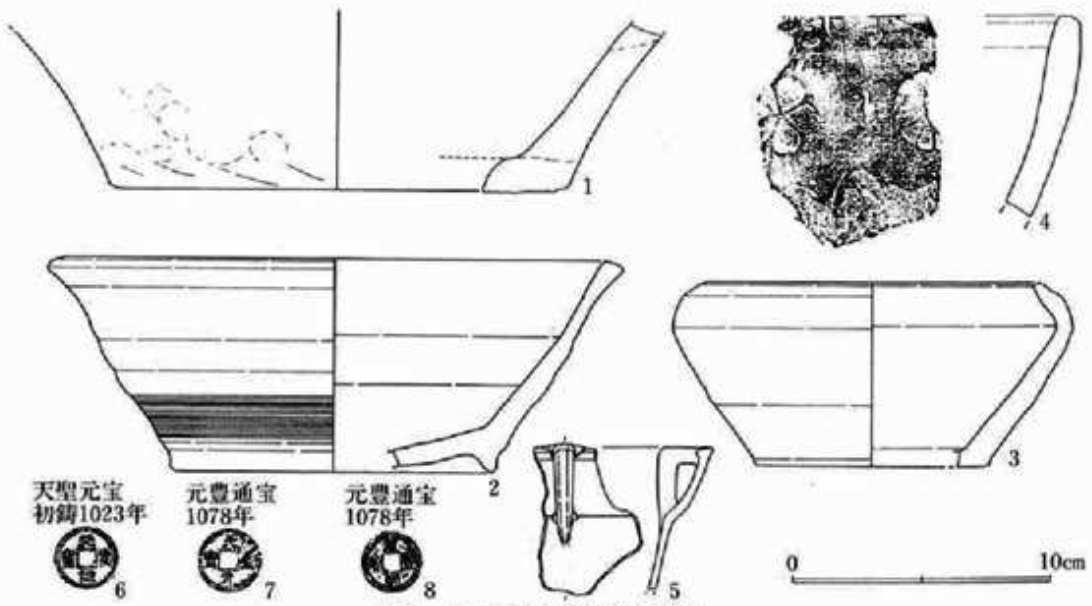



図8　第Ⅰ面上包含層出土遺物

40はロクロ成形の小型品で、器高は低め、器壁が楔形で斜め上方に伸びる。

41・42は常滑の甕口縁部。

### 12. 第Ⅰ面上包含層出土遺物（図８）

１は常滑甕底部。２・３は山茶碗系のこね鉢と鉢である。２の高台脇の削りは櫛歯のような細かいぎざぎざをもつ工具による。

４は火鉢で、瓦質だが淡褐色を呈する。

５は鉄鍋の内耳部分。なおこの他に横長湯口の付いた底部片もある。

６は「天聖元宝」で初鋳1023年、７・８は「元豊通宝」で初鋳1078年である。

## 第３節　第Ⅱ面の遺構と遺物

この面で検出したのは井戸１基、土壙６基（うち方形竪穴１基、常滑埋甕土壙１基含む）、柱穴約60口等である。

### １，井戸１（図10）

調査区中央部にある方形の木組み井戸である。掘方は東西２m30cm、南北２m08cmのほぼ正方形の大きなもので、木組みはこの掘方の南西角近くに寄せられている。

木組みは上下二段構造になっている。まず掘方底面に幅およそ27cm前後の板で組んだ四角い枠組みを据え、内側に打ち込んだ杭で固定する。この枠の上縁には、外側に幅９cm前後の角材による枠組がはめ込まれて、二段目の縦板の井戸枠が載るのである。この縦板は長さ35～40cm位で雑に切られた格好になっており、上辺に蓋のような横板の名残りがみられる。

井戸枠は下段の内法が、東西72cm、南北75cm、上段の内法が、東西92cm、南北90cmと、ほぼ正方形を呈する。深さは58cm（北東角）～72cm（南西角）である。

出土遺物（図12－６～10）

６は手づくねの小型かわらけである。７はロクロ成形の大型品だが、厚い器壁を持つ。

８～10は山茶碗窯系こね鉢で、口縁部は肥厚し、端部は丸い。

### ２，方形竪穴１（図11－４）

C－３にある長方形土壙。北辺２m40cm、南辺１m95cm、南北１m88cmと多少台形に近い。深さ約40cmで、逆台形の断面を持つ。

出土遺物（図12－１～５）

１～３のかわらけはどれもロクロ成形で、大型のものは厚めの器壁を持ち、小型のものは浅い楔状の器壁を持つ。

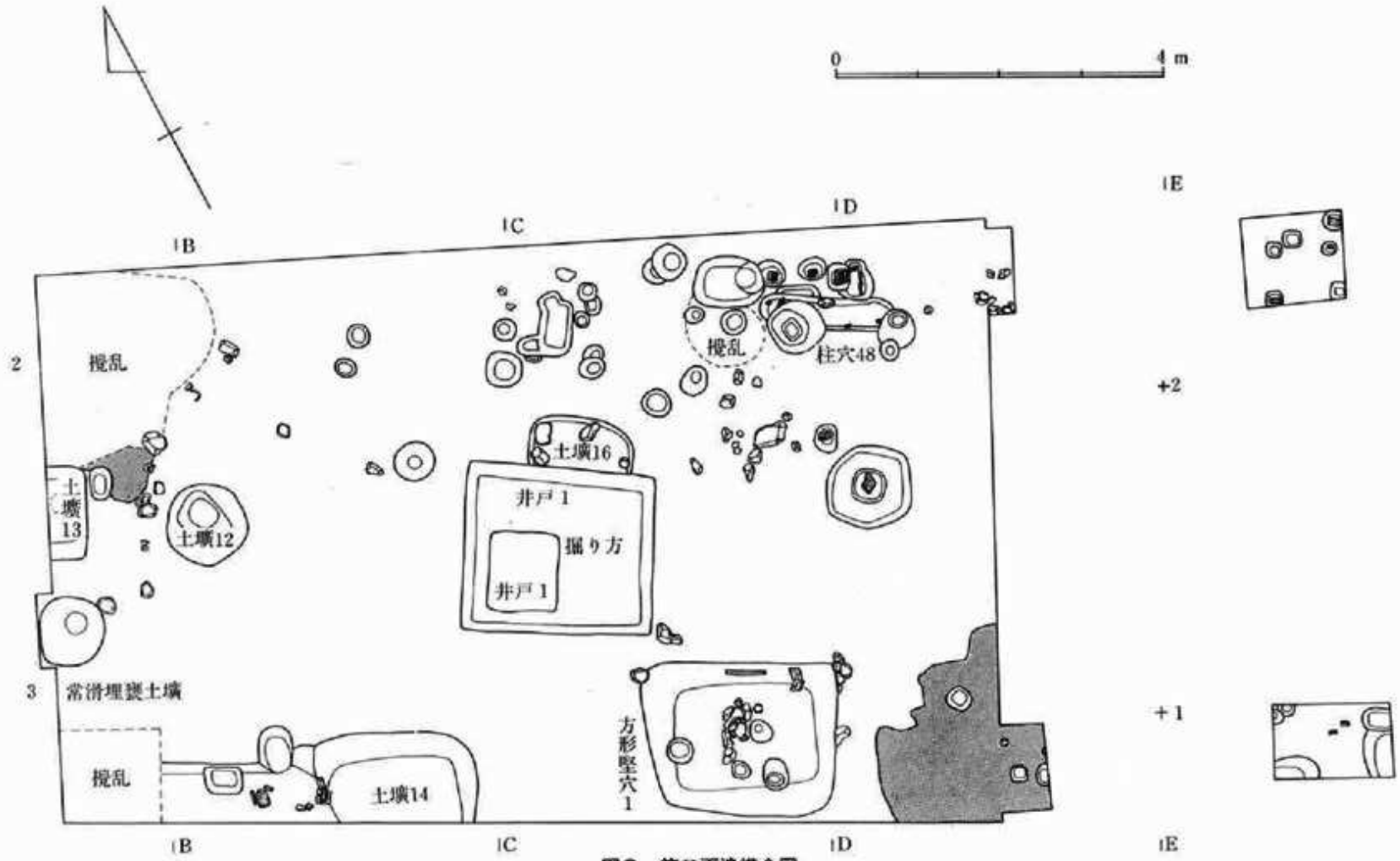

0
4 m
1B
1C
1D
1E
2
3
+2
+1
撹乱
撹乱
柱穴48
土壙16
井戸1
掘り方
井戸1
土壙13
土壙12
常滑埋甕土壙
撹乱
土壙14
方形竪穴1

図9　第II面遺構全図

4・5は常滑甕口縁部である。

### 3．土壙12（図11－2）

B－2にある円形土壙。南北1m、東西95cmの整った円形で、壁なかほどから柱穴状に深く落ちる。深さ56cm。

出土遺物（図12－11～14）

11・12は山茶碗窯系のこね鉢で、口縁部は肥厚し、端部の丸いもの。13は常滑こね鉢である。

14は手づくねかわらけである。

### 4．土壙13（図11－3）

A－2の西壁際にあり、西半は調査区外に出ている。南北1m15cm、東西は不明、深さ約20cmの方形である。

### 5．土壙14

B－3南壁際にあり、南側は調査区外に出ている。東西1m80cm、南北1m08cm以上、深さ30cmの方形土壙。断面はほぼ箱形を呈する。

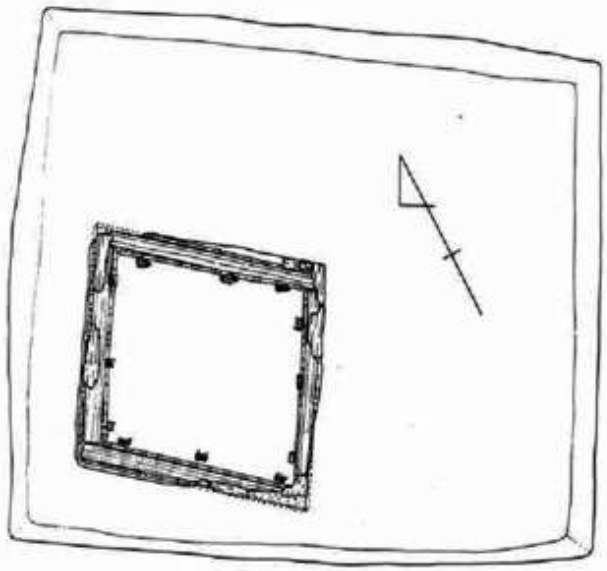


図10　第II面　井戸1

出土遺物（図12－15～18）

15はいわゆるミニチュアのかわらけ、16・17はロクロ成形のかわらけである。

18は白磁四耳壺である。口径12cm、肩部径24.4cm、底径7.6cmに復元される。器高はおよそ34～35cmであろう。胎土は灰色でしまり良く、釉薬は僅かに青味を帯びた灰緑色の透明釉である。外底部が焼けている。

### 6．常滑埋甕土壙（図11－1）

A－2の西壁際にあり、擂鉢状の土壙中に常滑甕底部が遺存している。土壙自体は直径85cm前後の円形で、深さ35cmである。

出土遺物（図12－23）

底径24.3cmの大きな常滑の甕。口縁部は不明。

## 7．第Ⅱ面上包含層出土遺物（図13・14）

1はかわらけ質のミニチュア皿、2は白かわらけ質のミニチュア皿である。

3～15はかわらけ。このうち3・8に薄手・内湾というやや後代の様相が残るが、他はおおむねやや厚味のある器壁で、器高もあまり高くないものが多い。

16は口縁部が黒色を呈する瓦器質の土器。17は手づくね白かわらけである。

18～20は青磁で、18は内面に蓮弁文のある小鉢、19・20は鎬蓮弁文碗である。

21・22は白磁口兀げ皿。

23～26は青白磁。24は瓜型の水注で、23はおそらくその蓋である。24は淡水青色の釉薬で表面が焼けている。25は渦巻文の大きめの水注。胎土はやや粗く灰色で、釉薬は淡水青色だが、これも表面が焼けている。26は牡丹唐草文梅瓶。肩部径19cm、底径10.5cm。釉薬は淡水青色、胎土はやや灰色がかっている。焼成良好。

27は瀬戸入子である。28は同灰釉四耳壺で、口径9cm、肩部径17cm。

29・30は土錘。29は長さ5.6cm、直径1.3cm、30は長さ4.9cm、直径1.8cm。

31～33は火鉢類である。31は土器質で、内外共に焼けている。32は灰褐色で瓦質に近く、外面に煤が付き、内面は焼けて表面が剝落している。33は粗い瓦質。

34～50は44を除いて常滑で、34～42・46～48が甕、43・45が壺、49・50がこね鉢である。甕の縁帯は34・42が幅広の頸部に接近したもので、他はおおむね離れている。46は混入か。

44は渥美の小壺である。

51～53は山茶碗窯系のこね鉢で、51は若干上方に尖る口縁端部を持つ。

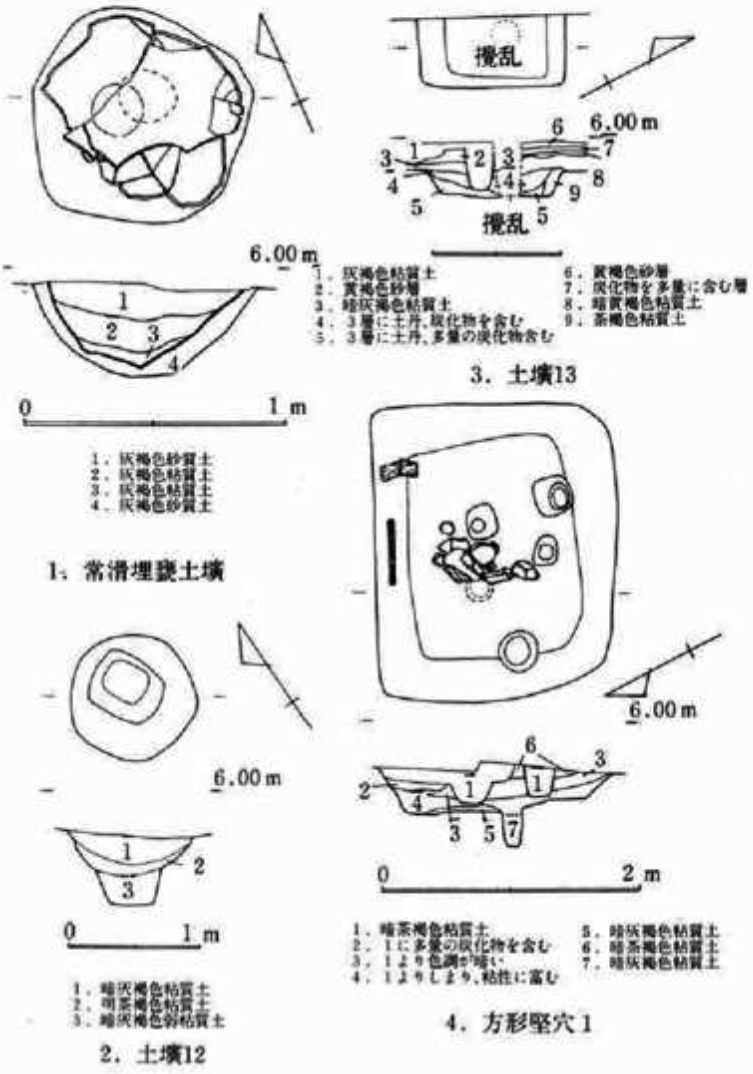



**図11　第Ⅱ面　常滑埋甕土壙、土壙12・13、方形竪穴1**

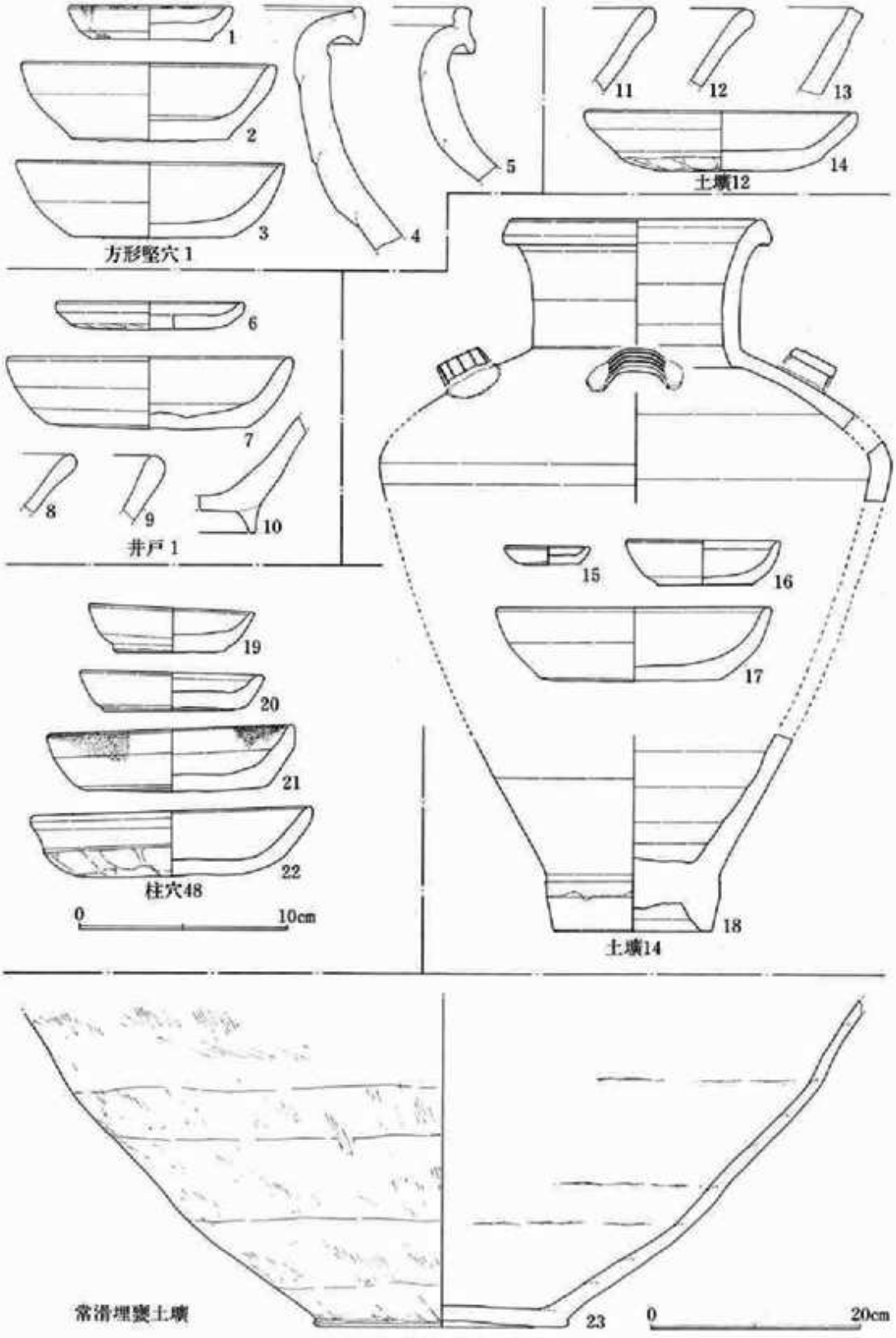



図12　第II面遺構内出土遺物

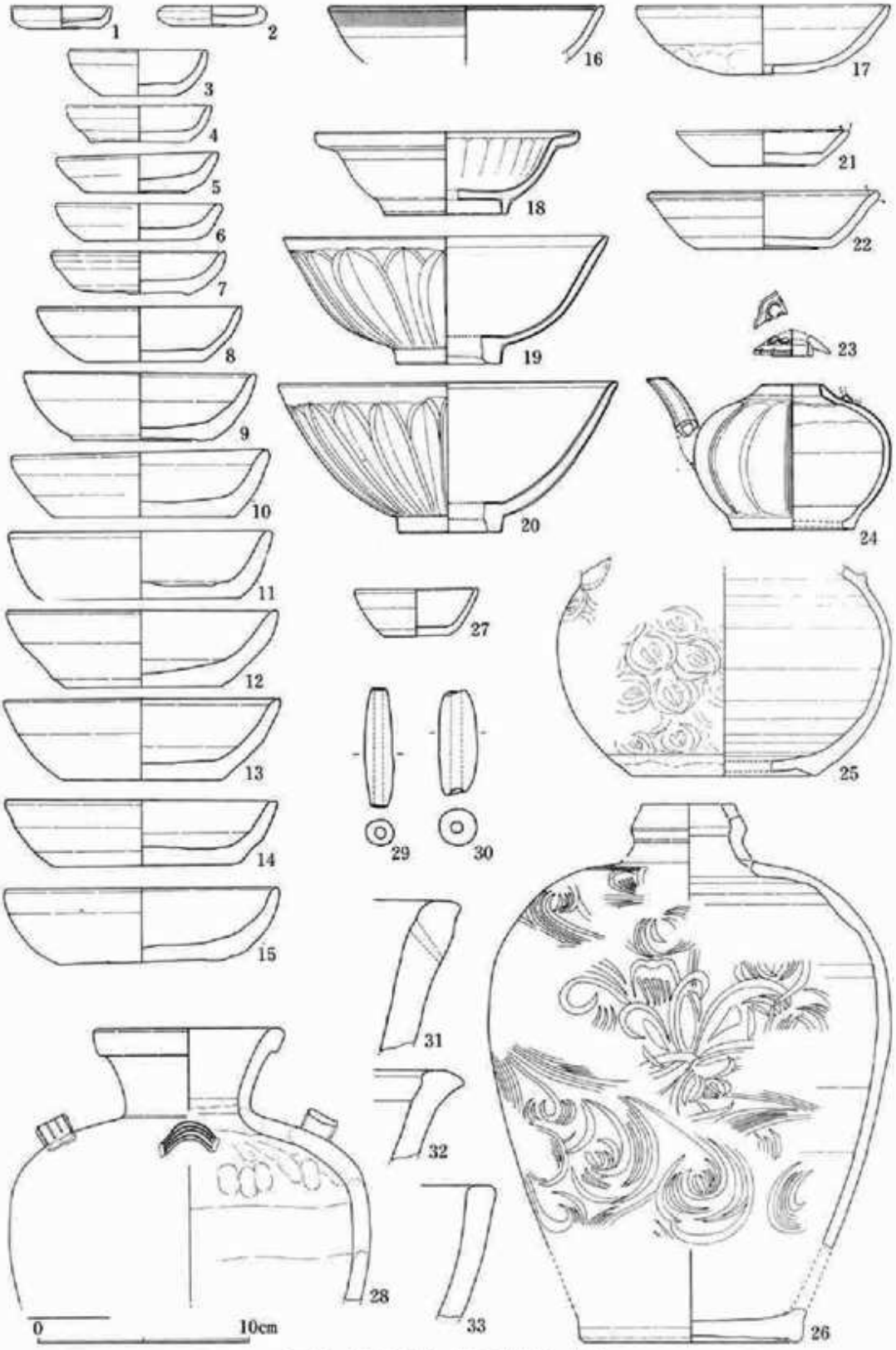



図13　第II面上包含層出土遺物（1）

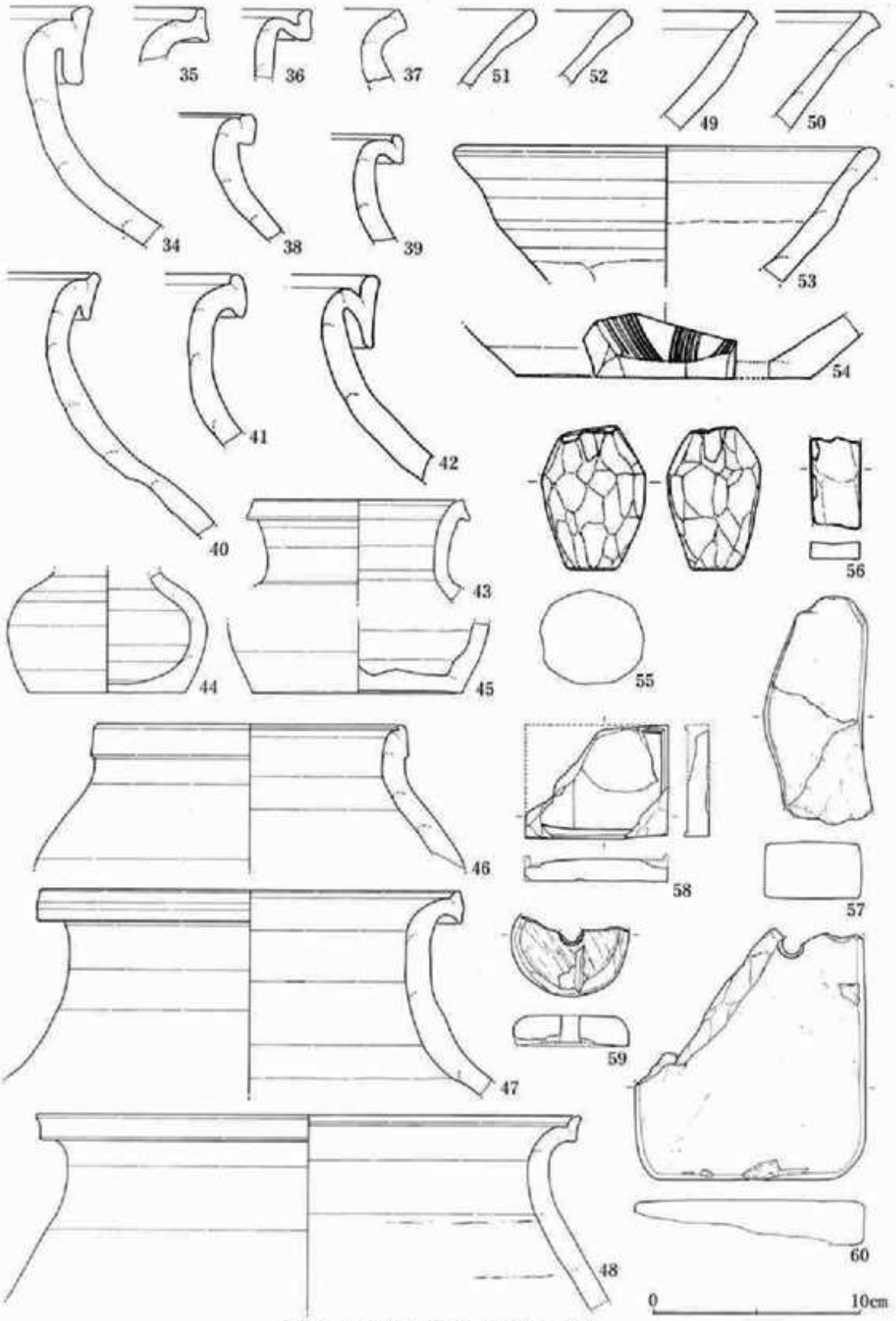



図14　第II面上包含層出土遺物（2）

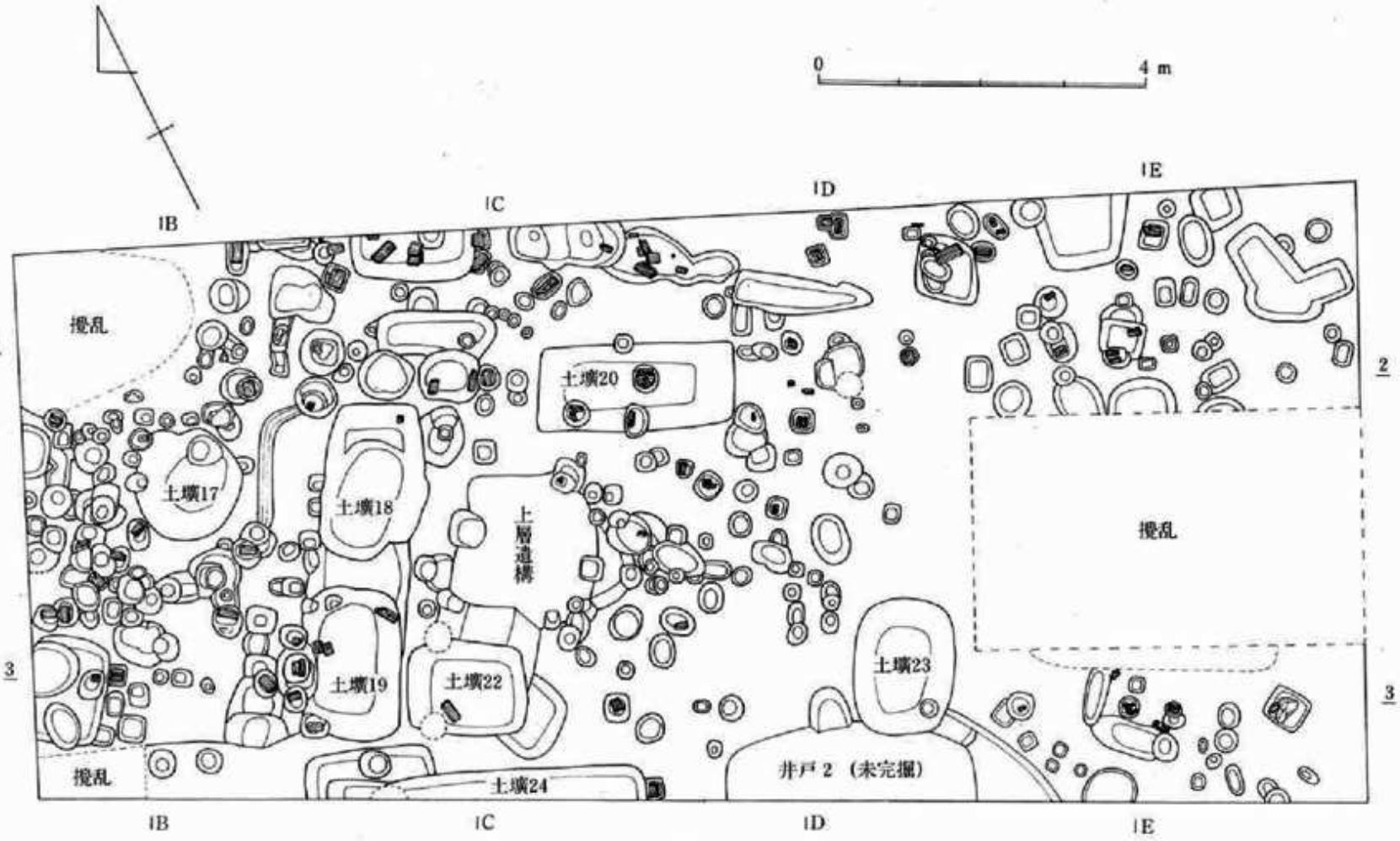

0
4 m
IB
IC
ID
IE
2
3
攪乱
土壙17
土壙18
土壙19
土壙20
土壙22
土壙23
土壙24
上層遺構
井戸2（未完掘）

図15　第Ⅲ面遺構全図

54は備前擂鉢である。条線帯は6条一束。

55～60は石製品である。55は泥砂岩（「土丹」）を土錘形に成形しようとしているもので、おそらく未成品。56はきめ細かな白色の凝灰岩製仕上げ砥。57は黒色の粘板岩製仕上げ砥。58は黒褐色の粘板岩製硯。59は滑石製紡錘車。60は板状に仕立てた滑石製品。おそらく温石。割れ口は淡褐色で銀色を帯びる。

## 第4節　第Ⅲ面の遺構と遺物

この面で検出したのは土壙29基、井戸1基（崩落の恐れあるため未完掘）、柱穴約320口である。この面は東側に調査区を拡張したが、拡張区中央に大きな地下倉による撹乱が入っている。

### 1．土壙17（図16－1）

B－2にある円形土壙。東西1m31cm、南北1m34cm、深さ44cm。

出土遺物（図17－7～9）

7・8はいずれも手づくねのかわらけで、器壁はやや厚めである。

### 2．土壙18・19（図16－2）

B－2・3にあり、2基が南北に細長く並んでおり、おそらくひとつながりの遺構である可能性が考えられる。土壙18は長さ1m92cm、幅1m32cm、深さ68cm、隅丸長方形あるいは楕円形で、断面は逆台形を呈する。土壙19は長さ1m89cm、幅1m27cm、深さ78cm、これも隅丸長方形あるいは楕円形で、断面は逆台形を呈する。2つの土壙がつながると長さ4m25cmになり、土壙と土壙の間も深さ30cmほどの落ち込みになっている。

土壙18出土遺物（図17－10～12）

10は青白磁の瓜形水注である。口縁部に櫻落文が見える。

11・12はロクロ成形かわらけ。大・小ともに器高がやや低く、厚めの器肉を持つ。12は楔形に斜め上方に伸びる器壁のもの。

### 3．土壙20（図16－3）

C－2にある長方形土壙。東西方向に主軸を持つ。東西2m42cm、南北1m3cm、深さ45cm、断面は箱形を呈する。

### 4．土壙22（図16－4）

B・C－3にある隅丸方形の土壙。東西1m52cm、南北1m18cm、深さ65cmで、断面形状は逆台形を呈する。

## 5．土壙23（図16—5）

D—3にある隅丸長方形、あるいは楕円形の土壙。南北1m69cm、東西1m22cm、深さ約50cmで、断面は擂鉢状を呈する。

## 6．土壙24

B・C—3南壁際にあり、南側の大部分が調査区外に出ている。東西3m95cmの大きな落ち込み

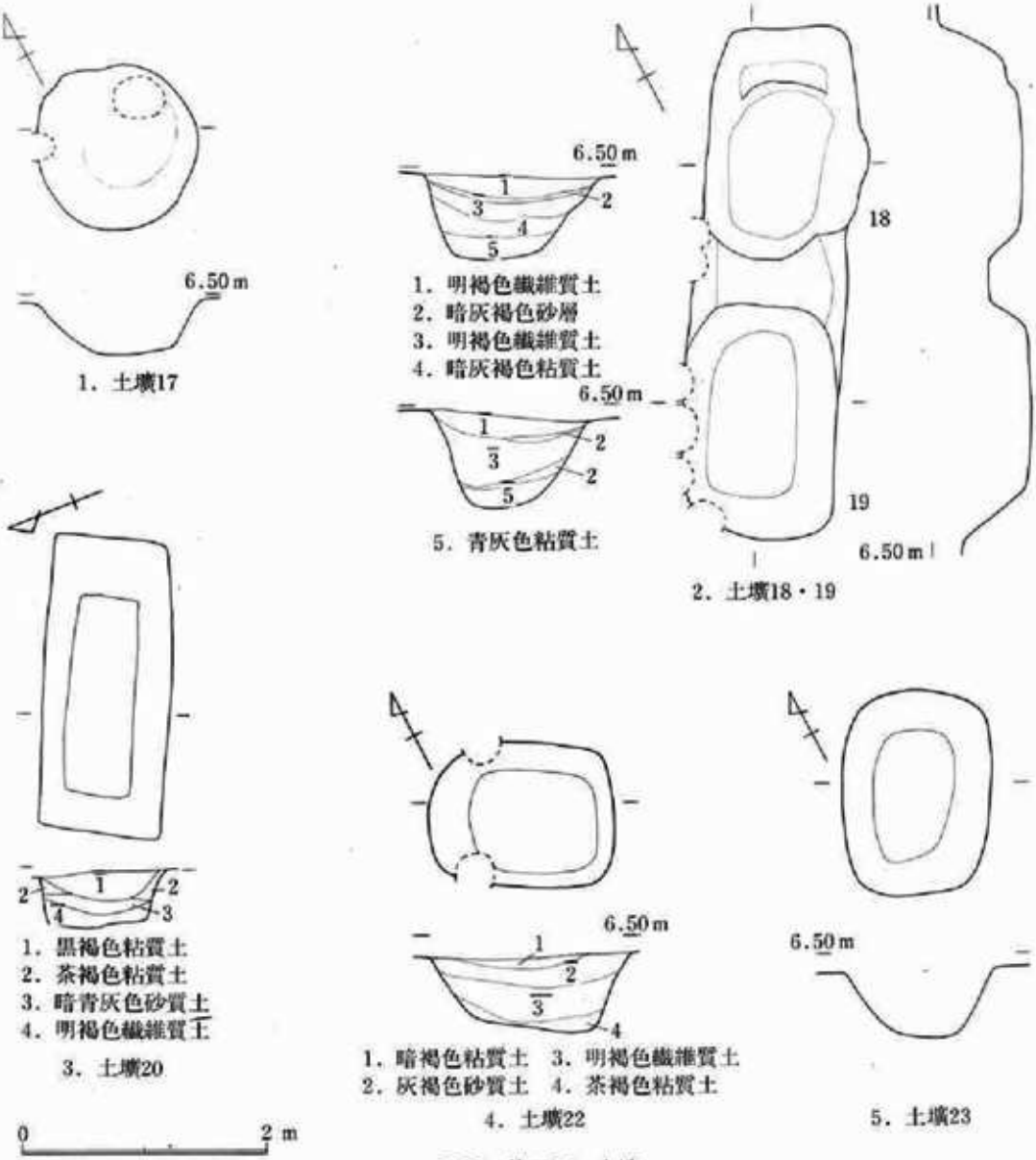



図16　第Ⅲ面　土壙

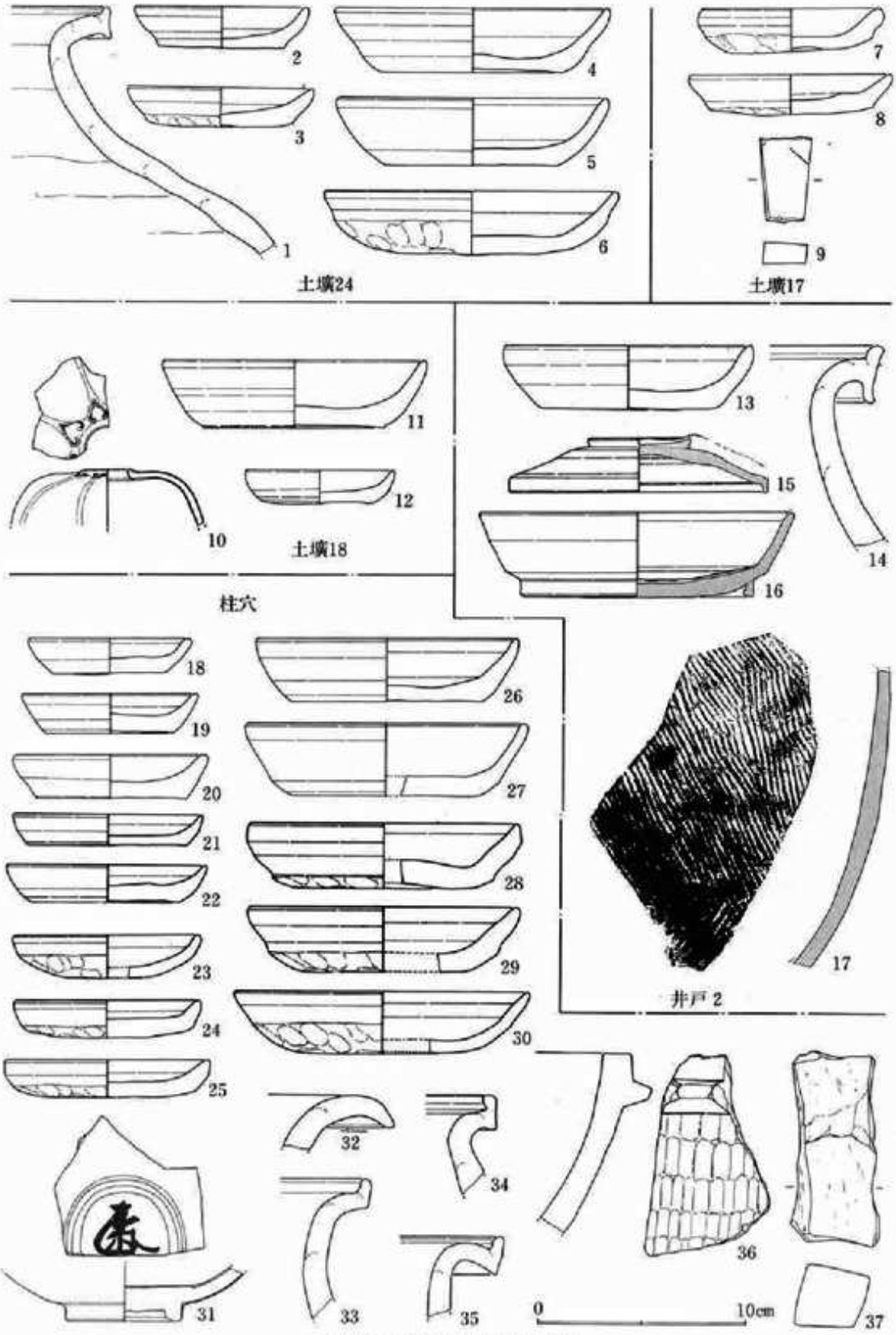



図17　第Ⅲ面遺構内出土遺物

て、方形竪穴である可能性が強い。深さ55cm。

出土遺物（図17－1～6）

1は常滑の甕である。縁帯は細く、頸部からかなり隔たっている。

2～6はかわらけ。ロクロ成形で器高が低いものと、手づくね成形のものとが混在している。

## 7．井戸2

C・D－3の南壁際にあり、南側は調査区外に出ている。東西3m5cmもある大きなもので、殆んど垂直に近い壁面を持っている。調査区壁の崩落の危険性があり、完掘はできなかった。平面形は隅丸方形を呈し、大きさからみて掘り方であると思われる。

出土遺物（図17－13～17）

13はロクロ成形かわらけ。14は常滑甕口縁部である。

15～17は須恵器である。15は蓋坏の蓋で、灰黒色を呈し、堅緻に焼けている。16は蓋坏の身部で、灰白色の瓦質に近い焼き上り。15・16は別の物である。17は叩キ目のある甕胴部。これらの須恵器は遺構とは直接の関わりがないが、すぐ近くで鬼高～真間期の集落が確認されているので（若宮大路周辺遺跡群小町一丁目116番地点など）、当地点付近にも古代集落が存在するのは、まず確実である。なお須恵器にはこの他、長頸壺の底部片も出土している。

## 8．柱穴等からの出土遺物（図17—18～37）

柱穴等、Ⅲ面で検出した小さな落ち込みからの出土遺物のうち、主なものをまとめた。

18～30はかわらけである。うち18～22・26・27はロクロ成形のもので、大体が低い器高のものである。他は手ずくね成形である。

31は画花文系の青磁無文碗で、外底面露胎部に花押がある。

32は渥美甕口縁部である。

33～35は常滑甕で、いずれも、上方に伸びる縁帯である。

36は滑石鍋。

37は砂岩の中砥。何を砥いだかは不明であるが砥面が大きく波打っている。

## 9．第Ⅲ面上包含層出土遺物（図18—1～23）

1～10はかわらけで、ロクロ成形のもの（1～3・7・8）と手づくね成形（4～6・9・10）とが混在している。ロクロ成形のものは薄手で内湾する器壁をもつものとやや厚手のものの双方が見られる。

11は内面にミガキのある瓦器碗。12は手づくねの白かわらけである。

13は青磁蓮弁文碗である。蓮弁は細い単弁で、釉薬は灰青色の失透釉、表面がいくらかくすんでいる。

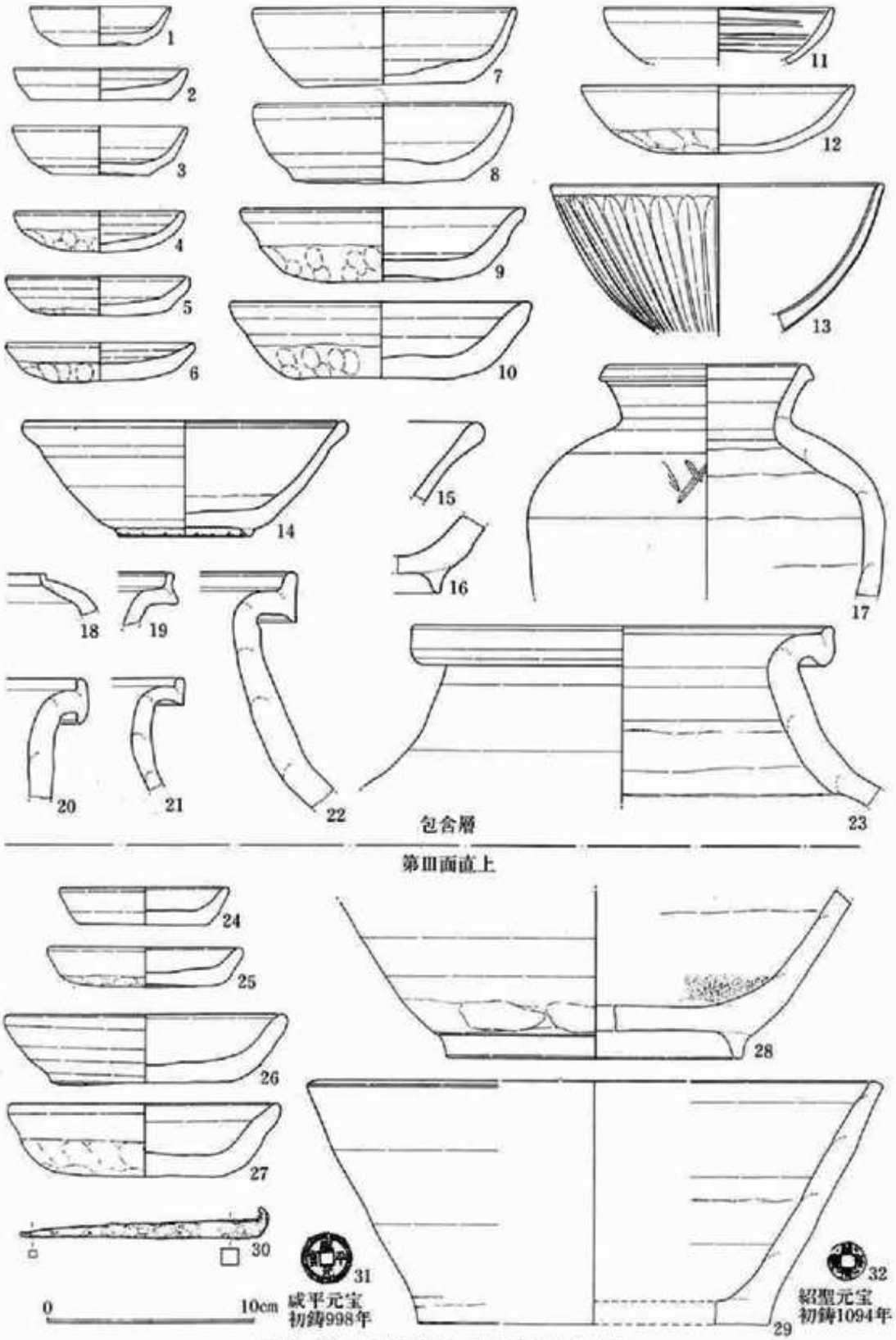



図18　第III面上包含層・III面直上出土遺物

14は山茶碗で、口縁端部をかなり丸くおさめたもの。15・16は山茶碗窯系こね鉢である。

17は渥美壺である。肩部に灰黒色の釉薬が薄く刷毛塗りされている。また窯印らしき刻文がある。

18は渥美と思われる無頸壺である。

19～23は常滑甕で、上方に伸びる縁帯のものが多く、頸部から離れている。

## 10. 第Ⅲ面直上出土遺物（図18—24～32）

第Ⅲ面、つまり中世基盤層上面から出土したものを一括した。

24～25はかわらけで、24・26がロクロ成形、他が手づくね成形である。24は楔形に斜めに伸びる器壁を持つもので、他はいずれも、厚手のつくりの、ずしりとした質感のあるもの。

28は山茶碗窯系こね鉢で、内・外面ともに二次焼成を受けている。

29は常滑こね鉢。無高台で、下半部から上半部にかけて次第に薄くなる器壁を持つ。口縁端部はやや丸味を帯びた角型を呈する。

30は大きな釘。断面は方形である。

31は北宋銭「咸平元宝」、初鋳は998年。32も北宋銭「紹聖元宝」、初鋳は1094年である。

# 第四章　まとめ

### 遺構の性格について

本地点は、鎌倉の市街地を鶴岡八幡宮から海岸まで真一文字に貫く若宮大路から約80m西の、まさに市街地の中心的な一角にある。中世の若宮大路の両横には、幕府や得宗家、有力御家人の屋敷などが並んでいたと言われるので、本地点もその範囲に入っていることは確実である。今回の調査でそれを明確に物語る遺構・遺物はもちろん発見されてはいないものの、特に第Ⅲ面における遺構の密集ぶりや、遺物中に舶載の優品がいくつか含まれていることなどの点に、その一端をうかがうことができるのではないだろうか。ただ、柱穴そのものはそれほど大きくないので、武家の館址というよりは、屋敷地内の「庶民居住区」のようなものであろう。

遺構のなかでは第Ⅱ面で検出した井戸1が、二段構えの井戸枠という、やや特異な構造を持っており、注意を要しよう。また第Ⅲ面で検出された同じような規模・形状をした一群の土壙の性格も追求されねばなるまい。この土壙については、どういった性格の遺跡に多いのか、(広い範囲の調査の場合) 遺跡のどの部分に集まっているのか、を考えることが手だてになるであろう。

本調査では街割りを明確に示す溝などは検出されなかったが、第Ⅰ面かわらけ溜り1の溝状の落ち込みと、その西側の通路状の面に、それを想定することもできる。現在の若宮大路西側の歩道からこの溝までの距離は、地図からの概測値であるが約93～95mである。鎌倉の街割りが11丈を単位になされているという最近の考えからいけば、これは約33丈に近い。

### 遺構の年代について

第Ⅰ面からの出土遺物を見てみると、かわらけは薄手の内湾する器壁を持つものが多く含まれる一方、かわらけ溜り1のそれにみられるようなやや厚味ある器壁で低い器高のものも含まれている。また、常滑の甕口縁の縁帯はあまり発達していない。これらの様相から、第Ⅰ面の年代は14世紀前半～中葉と考えることができるであろう。

第Ⅱ面出土遺物のうちでは、かわらけに手づくね成形品が含まれていることが第Ⅰ面と異なる点である。また、ロクロ成形のものも、器高が低くなり、小型品に楔形の斜め上方に伸びる器壁のものが目立ってきている。こういった様相から、第Ⅱ面を13世紀後半代とすることができよう。

第Ⅲ面出土のかわらけをみると、およそ半数を手づくね成形品が占めている。ロクロ成形のものも器高が低いものがほとんどである。この他にもこの面からは渥美の甕が出土していること、常滑の甕口縁部では上方に伸びるだけの縁帯のものが多いこと、などの点からみて、第Ⅲ面の年代は13世紀前半～中葉と考えられる。

1．表土
2．茶褐色砂質土
3．2にかわらけ片、土丹を含む
4．2に小土丹を含む
5．茶褐色砂質土
6．暗茶褐色砂質土—第Ⅰ面
7．暗青灰色粘質土—第Ⅱ面
8．土丹地業層
9．暗青灰色粘質土
10．黄灰色破質土
11．灰褐色砂質土
12．青灰色砂質土
13．黒灰色砂質土
14．暗茶褐色砂質土
15．黄灰色砂層
(上層に一部土丹版築)
16．炭化物を多量に含む
17．16に土丹粒を含む
18．暗茶褐色砂質土
19．暗茶褐色粘質土
20．暗青灰色粘質土
21．暗青灰色粘質土
22．黒褐色粘質土(中世基盤層)
—第Ⅲ面

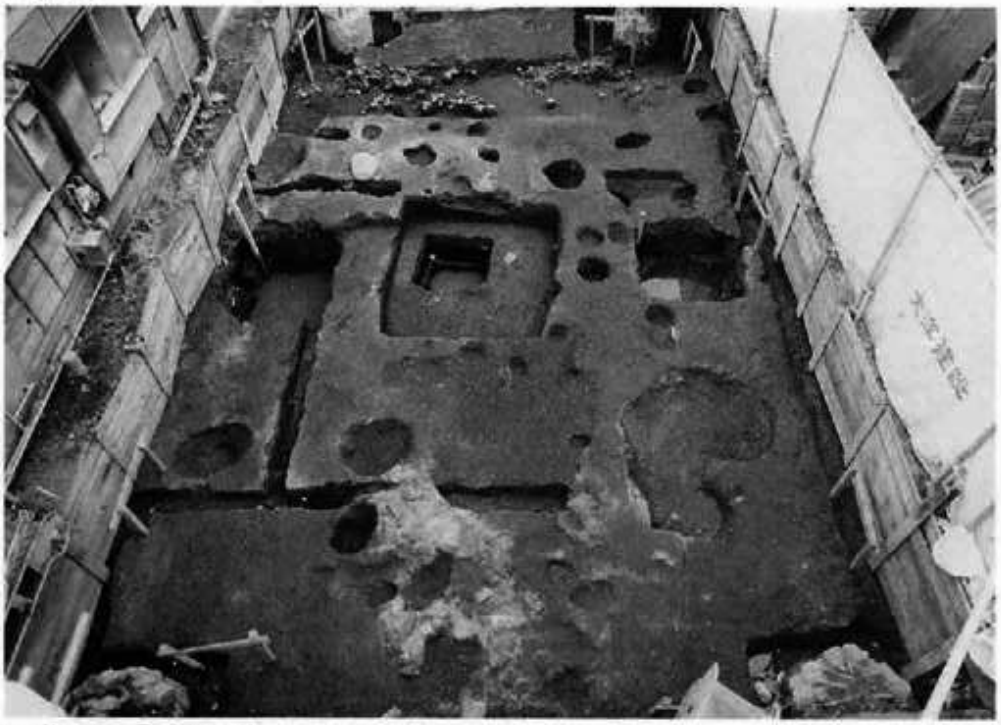
図19　土層断面図

2. かわらけ溜り 2 (北から)

1. かわらけ溜り 1 (北から)

3. かわらけ溜り 3 (東から)

## 図版2



1．第II面全景（東から）

2．同上（西から）

1. 井戸1（南から）

2. 常滑埋甕土壙

## 図版4

1．第Ⅲ面全景（東から）

2．同上（西から）

1．北東拡張区（西から）

2．同左（東から）

3．南東拡張区（西から）

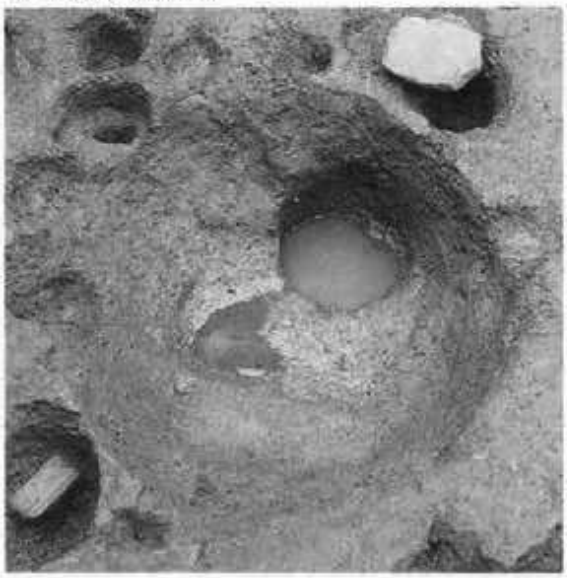
4．同左（東から）

## 図版6

1．土壙23（南から）

2．土壙20（東から）

3．土壙17（南から）



4．土壙18・19（南から）

1．青磁碗

2．青磁鉢

3．青磁碗底部の花押

4．白磁四耳壺

5．白磁口兀げ皿

6．その他白磁

## 図版8

1．青白磁梅瓶

2．青白磁壺

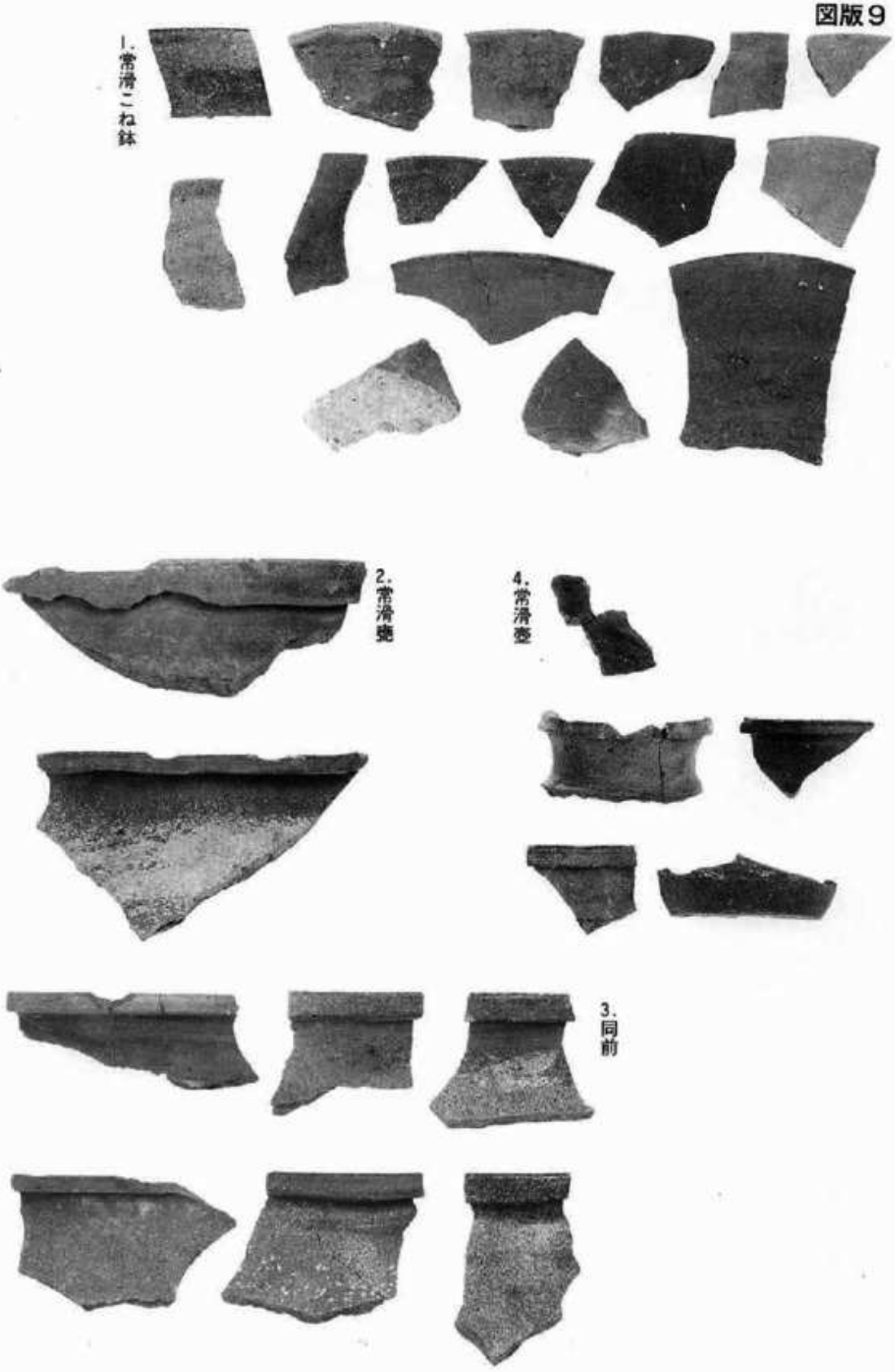
3．青白磁水注

3．瀬戸卸し皿他

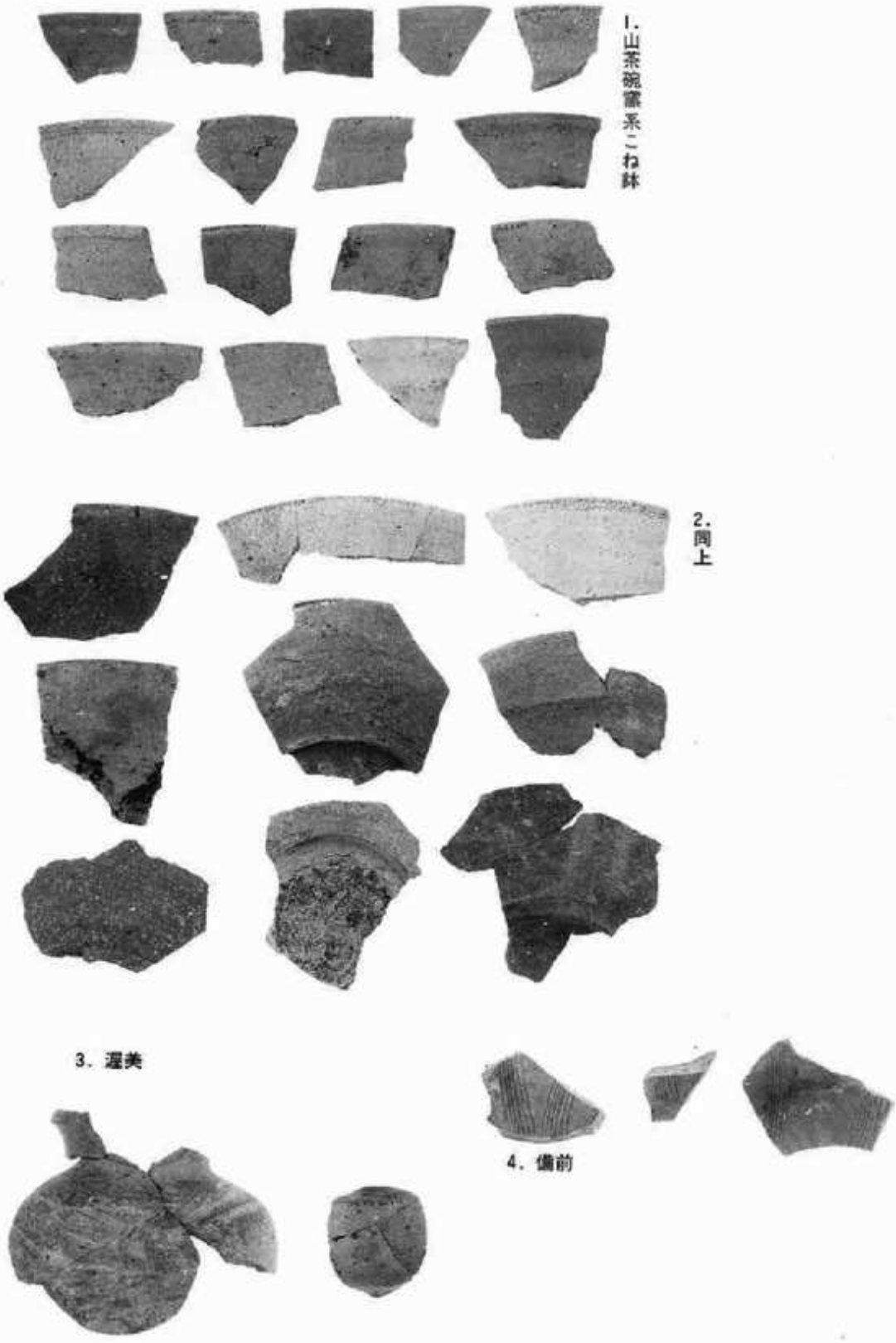
4．瀬戸四耳壺

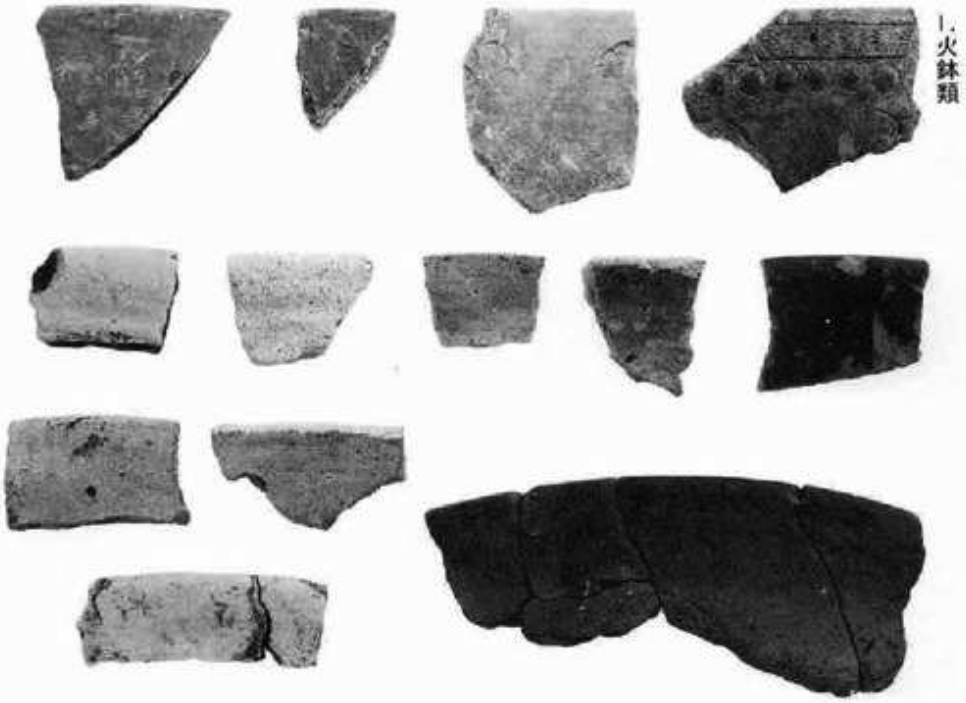
5．山茶碗

4．瀬戸入子他


1.常滑こね鉢
2.常滑甕
4.常滑壺
3.同前

## 図版10





1. 火鉢類

3. 銭

2. 土錘

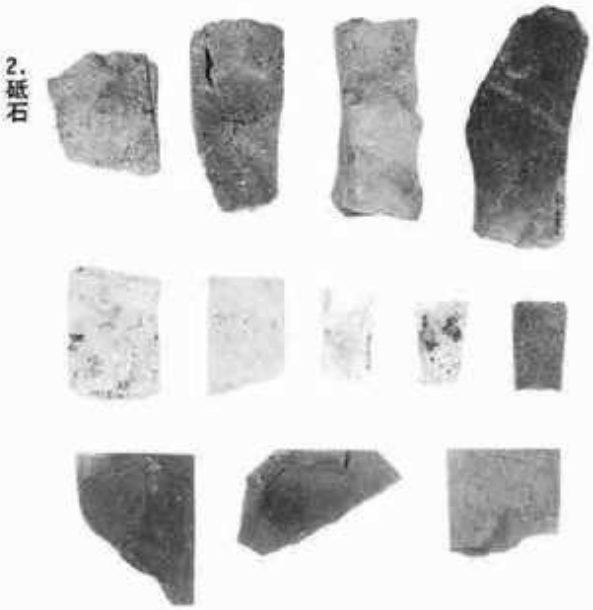
4. 鉄鍋

5. 鉄釘他

6. 土製紡錘車
（表採品）

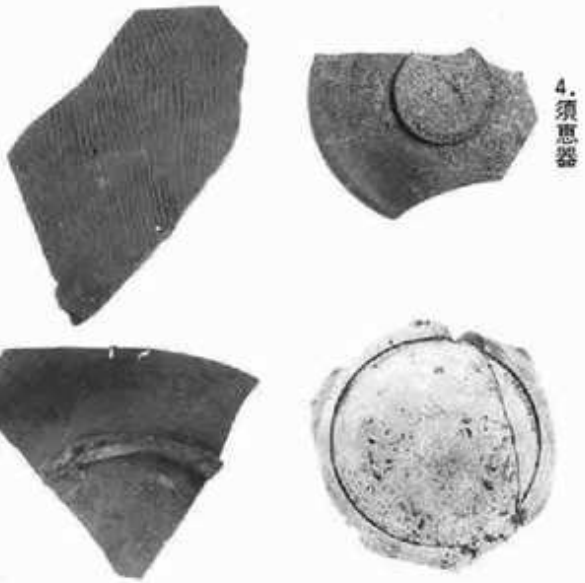
図版12

1. 滑石製品



2. 砥石

3. 土丹製品（錘未成品？）



4. 須恵器

## 8．今小路西遺跡

扇ヶ谷一丁目131番1地点

例　言

1．本報は、鎌倉市扇ヶ谷一丁目131番１地点における店舗併用住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告である。

2．発掘調査は国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。

3．本報の執筆には馬淵和雄が、図版作成には馬淵・及川加代子・渡部律子・太田美知子・佐藤泉・南保由利・小宮恵美子があたった。

4．本報で使用した写真は、遺構を馬淵が、遺物を木村美代治が撮った。

5．調査体制は次の通り。

担当者　　馬淵和雄(鎌倉市教育委員会嘱託)

調査補助員　梅木信之・新国哲也・渡部律子・関口真理・汐見一夫・成田サキ・市瀬ツル子・成田初枝・青木綾子・川名由子・及川加代子・太田美知子・南保由利・小宮恵美子・佐藤泉・杉山春信

6．調査参加者は次の通り。

鎌倉市高齢者事業団　平子重雄・箕田孝善・高橋作造・岩間敏雄・増田　保・登坂幸雄

7．現地調査と資料整理の期間中、次の諸氏・諸機関からは貴重な助言と協力をたまわった。記して深く感謝の意を表する。(順不同・敬称略)

宗村浩美・須藤道子・鈴木香織・石井　進・柳川清彦・服部英雄・吉田章一郎・鎌倉考古学研究所・中田英・伊藤正義・松崎水穂・大三輪龍彦・服部実喜

## 第一章　調査地点の位置と環境

本地点は、「今小路西遺跡」のほぼ北端、ＪＲ鎌倉駅から北に約400mの、現在の今小路に面した場所にある。ここはまた、「北条時房・顕時邸跡」と名付けられている区域の南辺を東西方向に走る道路と、南北方向に走る現今小路とが交差する地点にもきわめて近い（約10～20mほど南）位置でもある。

現在の今小路は、六地蔵の交差点付近から本地点の南側約150－160m付近まで大体直線をなして、若宮大路と平行しており、以北では西にやや曲がりながら本地点付近にいたる。六地蔵交差点より南は今小路とは呼ばれていないが、道そのものは、若干東寄りに傾きながら直線的に由比ヶ浜の海岸通りにまで通じている。若宮大路との距離は先述した本地点北側の東西路との交点で約300m、駅付近で約275m、六地蔵交差点で約265mである。

「今小路」の名が文献に現れるのは『快元僧都』天文八年（1539）10月条が初見で、それ以前は「今大路」と呼んだという説註1、「武蔵大路」と呼んだとする説註2がある。貞享二年（1685）の『新編鎌倉志』には巽荒神より北を今小路、南を長谷小路と呼ぶ、とある。呼称は諸説あって定まらないが、長谷方面から化粧坂、亀ヶ谷坂に抜ける主要道であったことは確かである。

本地点西南には無量寺谷と呼ばれる深い谷があり、『新編鎌倉志』には「昔此処に無量寺と云寺有。泉涌寺の末寺也しと云。今は亡。（中略）今鍛治綱広が宅有」とある。綱広は刀工正宗の子孫で、現在も当主は綱広を名乗っている。本地点の西側隣地には刀工正宗の工房址を示す石碑が立っており、当否はともかく、本地点が正宗の鍛治ときわめて近い位置にあるのは確実であろう。

今小路を少し南下して鎌倉駅付近にいたると、今までに何箇所か発掘調査された場所がある。例えば中世の道路と民家の検出された千葉地遺跡（現紀ノ國屋）、方形竪穴建物がいくつか検出された諏訪東遺跡（現富士銀行）、中世の河川と町屋、古墳時代の住居が検出された千葉地東遺跡（現県企業庁）、そして奈良・平安時代官衙と中世の壮大な武家屋敷が検出された御成小学校用地などである。

また本地点北側には鎌倉五山の三位寿福寺がある。この寺は正治二年（1200）、北条政子が明庵栄西を開山として建てたものであるが、もと源義朝の邸跡といわれ、頼朝が鎌倉に入った時ここに館を建てようとしたが、すでに義朝追福の堂が建てられており、土地も狭かったので変更したと『吾妻鏡』にみえる。

今小路を隔てた東側は、「若宮大路周辺遺跡群」として近くでいくつか調査が行なわれており、一帯が古代は沼地のような場所で、地山の堅い砂層まで、深いところでは実に４m以上もあることが判明してきている。

註１　高柳光寿『鎌倉市史　総説編』　1959

２　貫達人「鎌倉時代の鎌倉」『歴史教育』５－７　1957

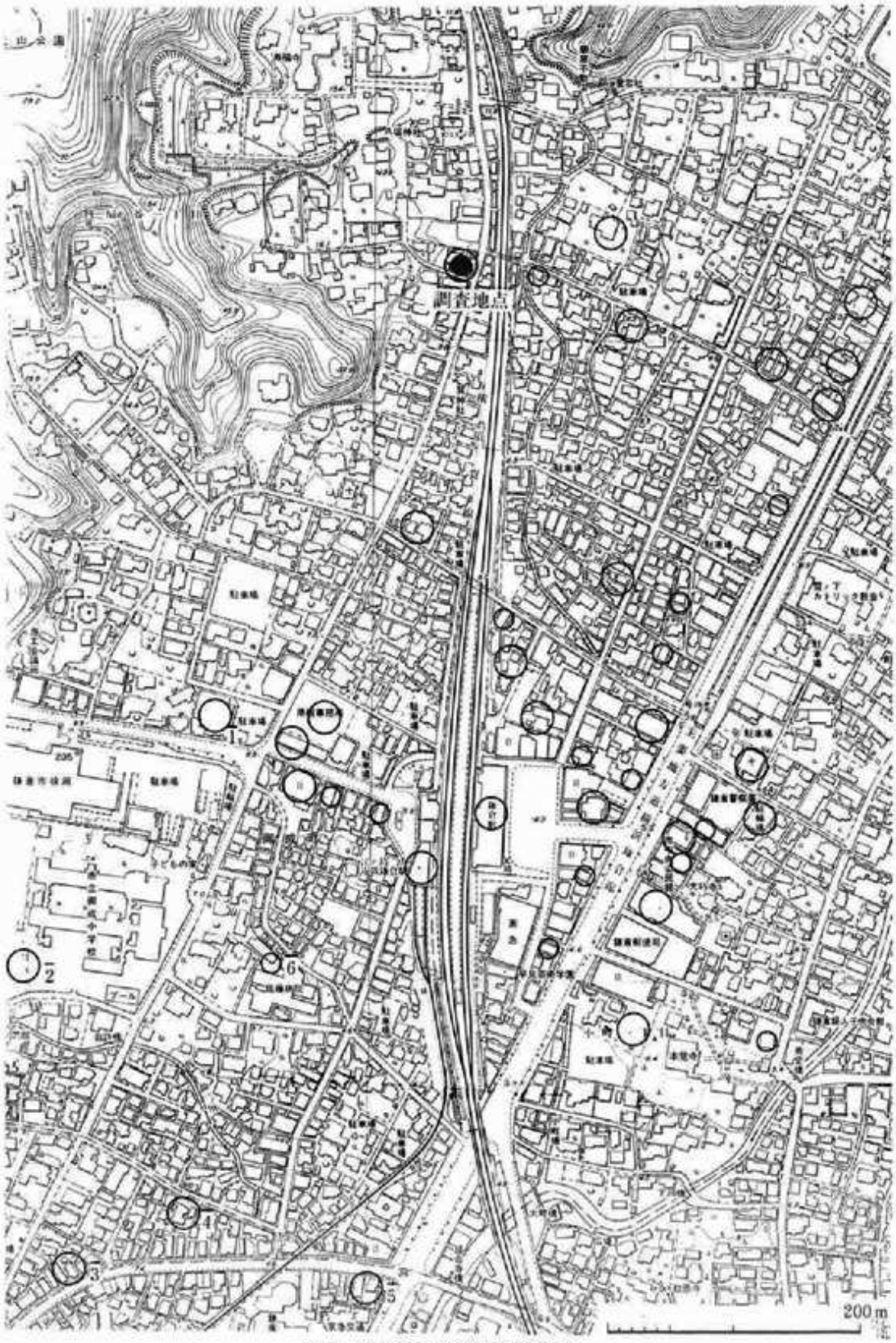



図1　近辺の主な発掘調査地点

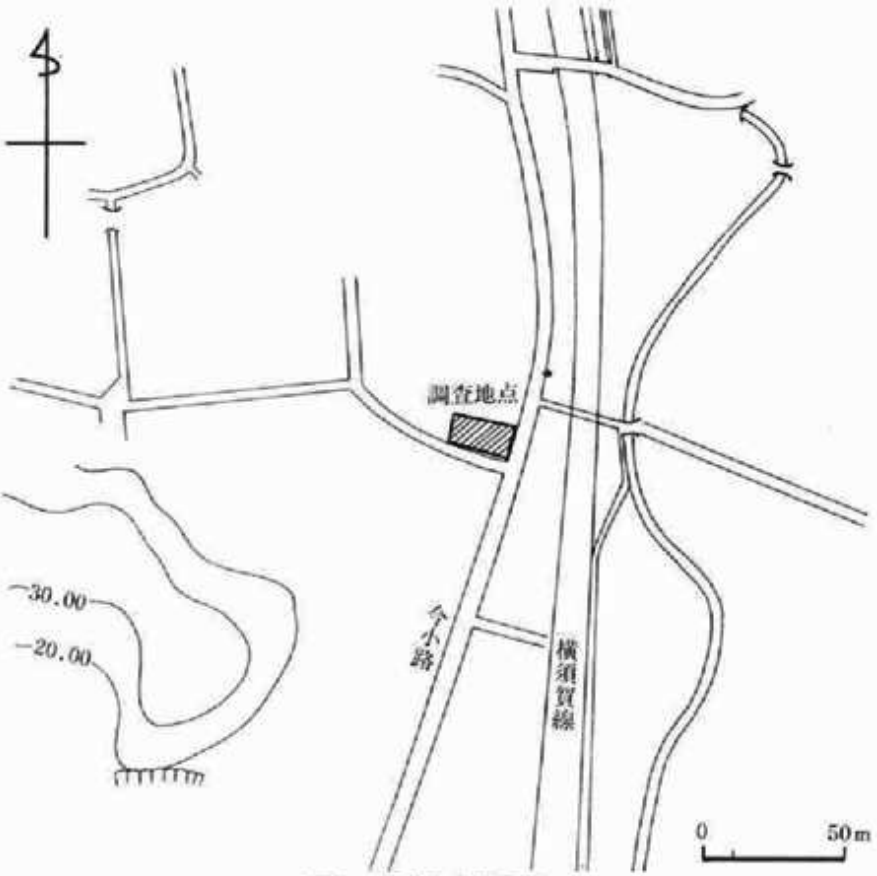



図2　調査地点位置図

図1調査地点名

1　千葉地遺跡　1980年度調査

2　今小路西遺跡（御成小学校建設用地）1985・1986年度調査

3　由比ヶ浜一丁目128番地点

4　由比ヶ浜一丁目118番地点　1987年度調査

5　由比ヶ浜二丁目2番2地点　1988年度調査

6　立会い調査

※その他の調査地点については本書内の若宮大路周辺遺跡群小町二丁目12番18地点の報告を参照されたい

## 第二章　調査の概要と経過

地表下50～70cmまで、近・現代の客土層の及んでいることが試掘によって確認されていたので、本調査に際しては、この客土層を重機によって排土した。掘削面積は建物建築にかかる約112㎡、調査期間は1987年７月13日から同年８月13日までである。

調査にあたっては、若宮大路主軸方位に平行した南北軸線と、これに直交する東西軸線を４m間隔で設け、前者に１～６の算用数字、後者にA～Dのアルファベットを冠した。南北軸方位はN－27.5° －Eであり（＝MN－34.5° －E）、若宮大路には平行しているが、当地点前面の今小路には平行していない。各方眼区画の名称は北東角の軸線交点を充てた。

調査は以下のような経過を辿った。７月13日重機掘削。７月14日基準点の設置と遺方設定。人力による排土と遺構検出作業。７月23日上層遺構実測と写真撮影終了。７月31日中層遺構実測と写真撮影終了。８月10日下層遺構写真撮影。８月12日同実測終了。８月13日機材撤収と片付け。

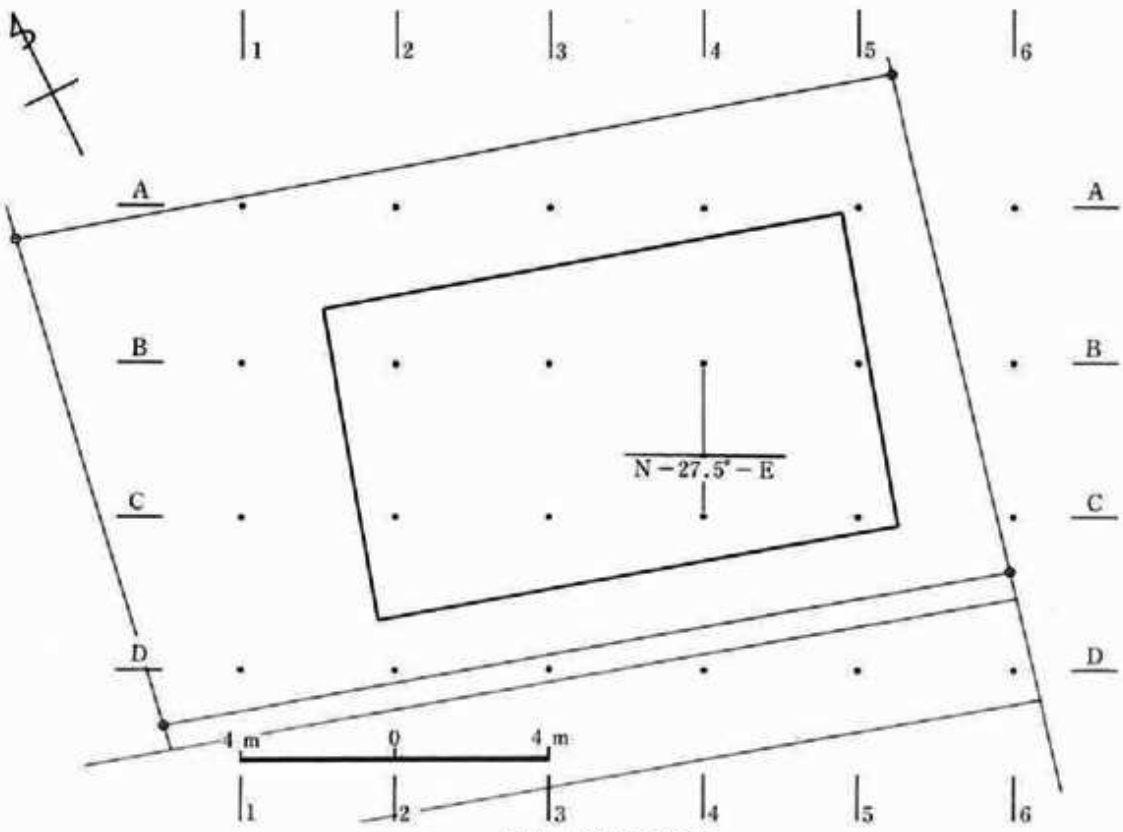



図３　調査区設定図

# 第三章　遺構と遺物

## 第1節　上層の遺構と遺物

近・現代の客土層を除くと、地表下50～70cmで中世期から戦国期にかけてのものと思われる灰～明褐色の砂質土が現われる。この面で検出したのは東西方向の溝1条、南北方向の溝2条、今小路の側溝と思われる南北方向の溝1条、土壙、等である。

### 1．溝1

B・C－2・3にある東西方向の石組み溝。東側の大部分は攪乱壙に切られており、先端部は不明。幅は西壁際で約110cm、東端の攪乱と切合うところで約2.8m、深さは西壁際で63cm、東端で42cmである。東に向って流れている。

石組は、大小形態様々の雑多な石を乱雑に積んだもので、石の組み方ではなく、ただ自重のみによって支えられている。

**出土遺物（図6・7・8）**

上層からの出土遺物（図6）には、火鉢（1）、常滑の甕（2・3）、備前擂鉢（4）などがあるが、年代的な主体は15世紀以降にあると思われる。おそらく、後代に浚渫された溝の堆積土中のものであろう。

下層出土遺物（7・8）は次の通りである。

1～3は青磁で、1・2が画花文系の無文碗、3が蓮弁文の碗である。

4～8は瀬戸である。4・5は灰釉の折縁鉢、6はやや白濁する釉薬で、後世の混入である可能性がある。7が卸し皿、8は鉛釉の小壺である。

9～13は山茶碗窯系のこね鉢である。口縁部が肥厚し、端部の丸いものが多い。

14～23は常滑。14は小壺の口縁部で、胎土は赤褐色で粗い。17～20はこね鉢である。口縁端部が前後に少し引き伸ばされているものが多い。21・22は甕で、いずれも縁帯が頸部に付かない。22は口径44cmと大型。23は甕の破片の縁を摺ったものである。

24～30はかわらけとかわらけ質の土製品である。かわらけはいずれも内湾する薄い器壁を持つ。30はかわらけの胎土で作られた板状の土製品で、用途はわからない。

31は火鉢である。底部の脇をヘラで削っている。

32は土錘。直径3.3cm。

33は三巴文の宇丸瓦々当部。直径12.4cm。粗い砂質の胎土。

34は吹子羽口である。先端の直径は5.8cm。

35は凝灰岩の砥石である。四面全部砥面で、おそらく中砥。

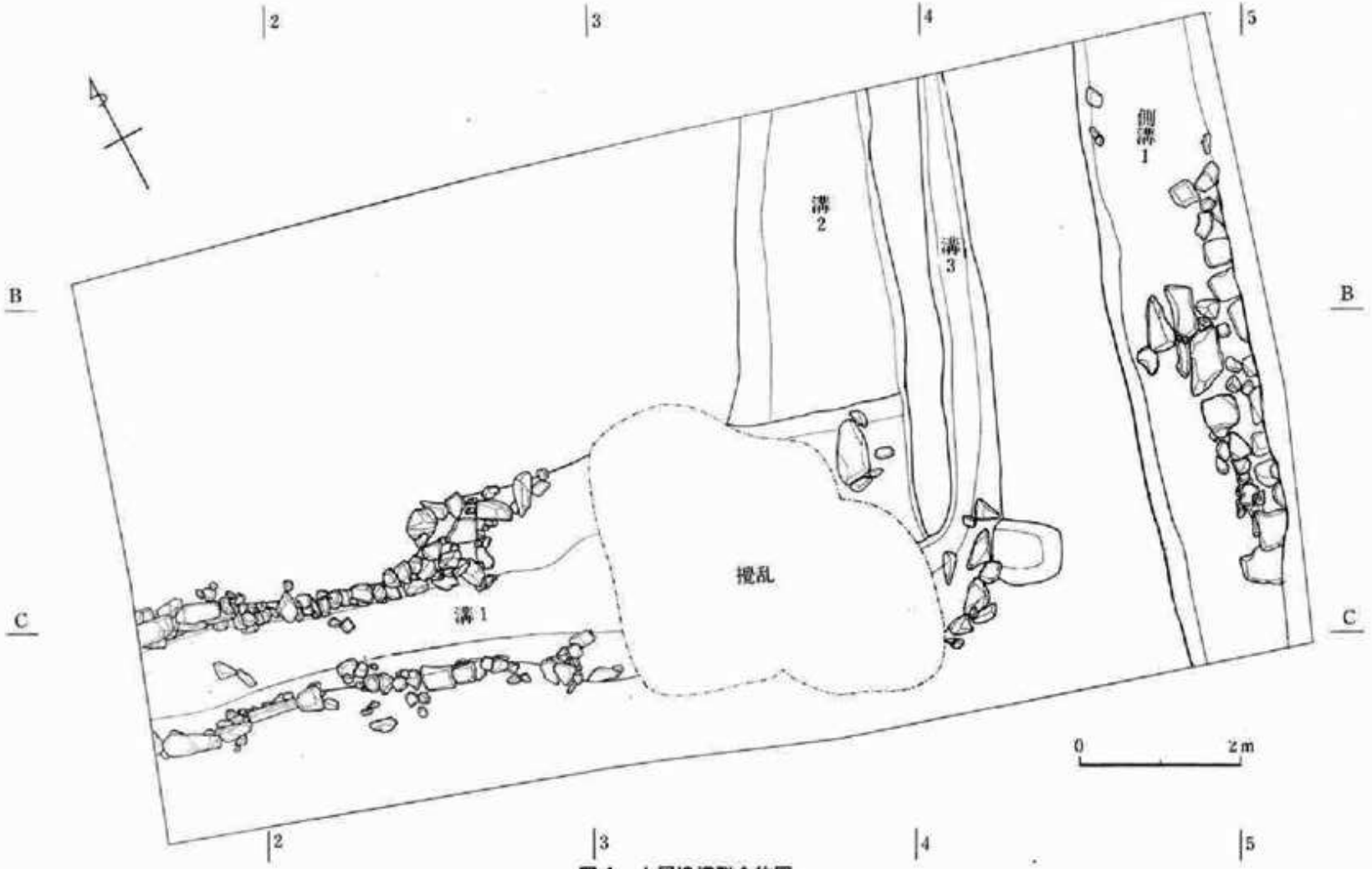



図4　上層遺構群全体図

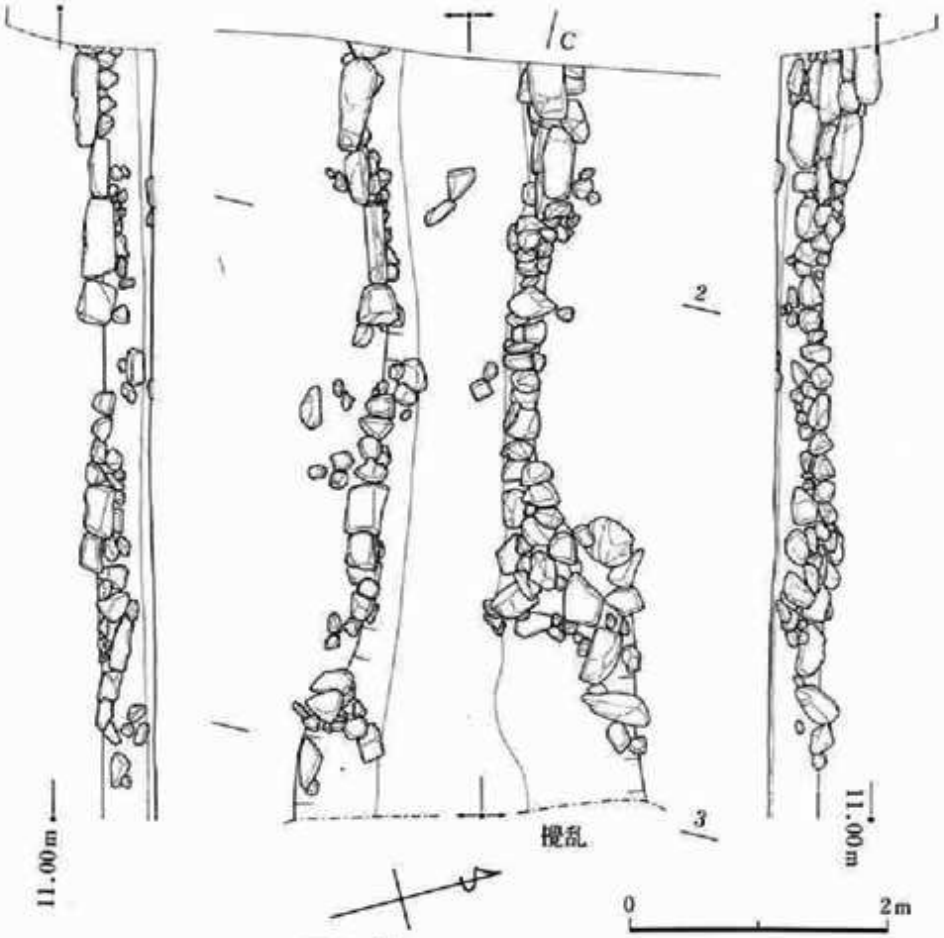



図5　溝1

これらの遺物は大体13世紀後半から14世紀後半にかけてのもので、若干混乱しているが、南北朝時代に主体があるとみてよかろう。

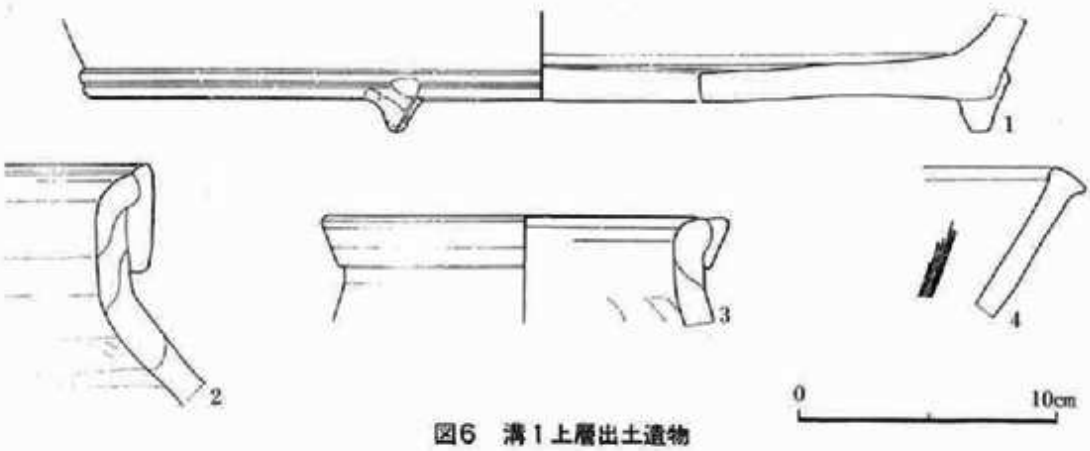



図6　溝1上層出土遺物

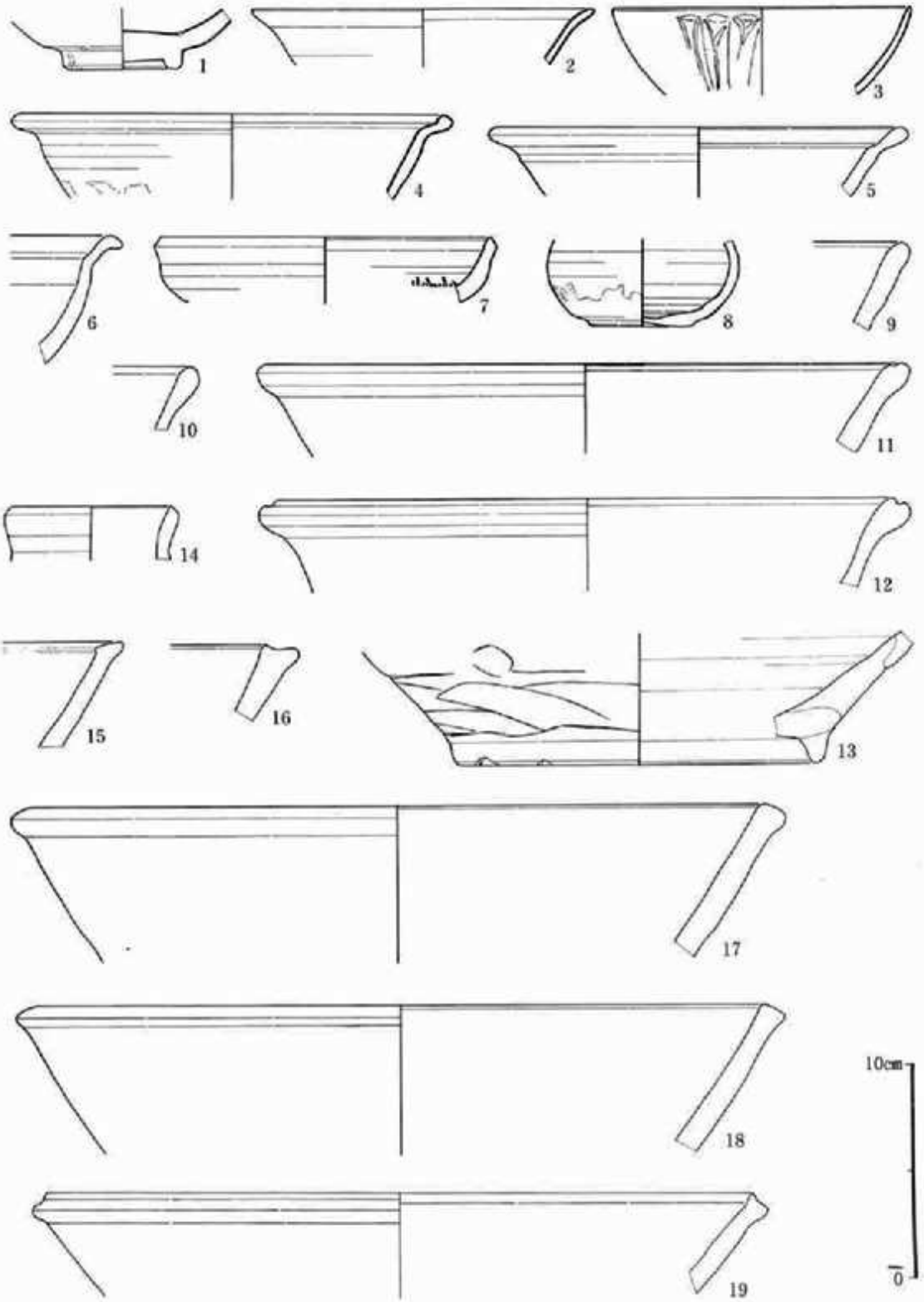



図7　溝1出土遺物(1)

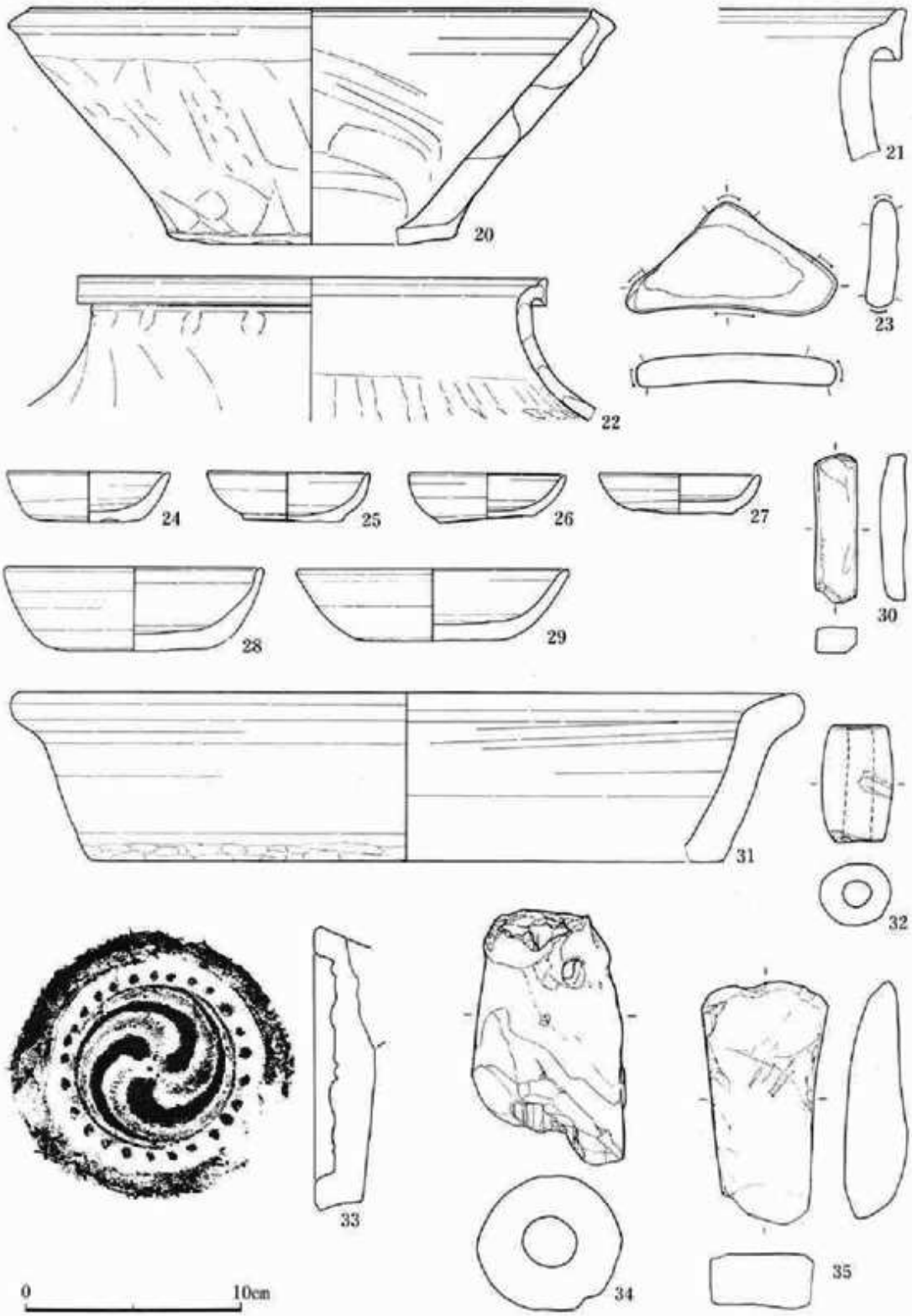



図8　溝1出土遺物

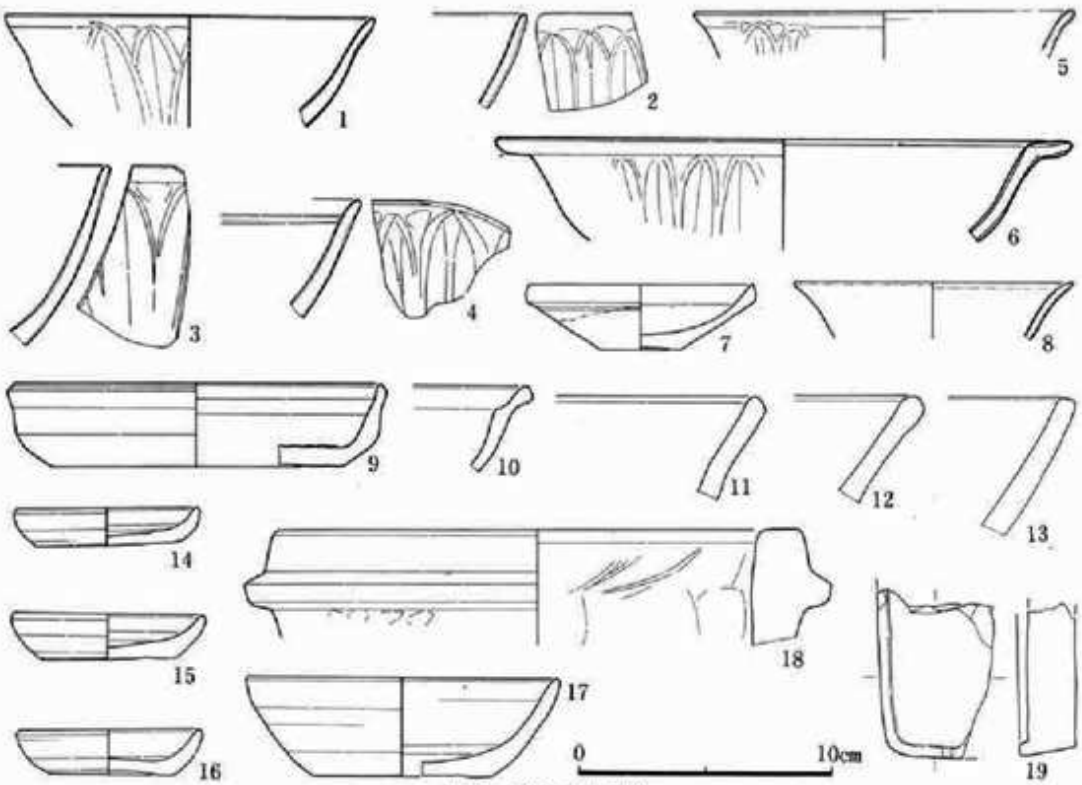



図9　溝2出土遺物

## 2．溝2

A・B—3を南北に走る断面逆台形の溝。幅約140cm～205cm、深さは確認面から約30～40cmであり、北壁際の方が深くなっているが、南側が確認できないので流下方向は断言できない。

**出土遺物（図9）**

1～6は青磁である。1～5は蓮弁文碗で、6は同鉢である。

7・8は白磁で、7は玉縁の小皿であり、白濁する釉薬が外面下半を除いてかけられる。12世紀代のものであろう。8は口兀げ皿。

9は瀬戸卸し皿で、10は同じく折縁鉢である。

11・12は山茶碗窯系のこね鉢、13は常滑こね鉢である。いずれもあまり肥厚しない口縁のもの。

14—17はかわらけで、小型のものは器壁が小さく楔状。

18は滑石鍋で、石材の滑石はきめがとても粗く、特有の銀色の光沢に欠ける。19は硯の陸部。茶褐色の細かいきめの石材が使われている。

## 3．溝3

4軸にほぼ沿って南北に走る、断面U字形の溝である。幅は約30cm（北壁際）～約65cm（南側）で、南端に雑な石組の護岸が残り、撹乱に切られて詳細は不明であるが、溝1南側の護岸に通じ

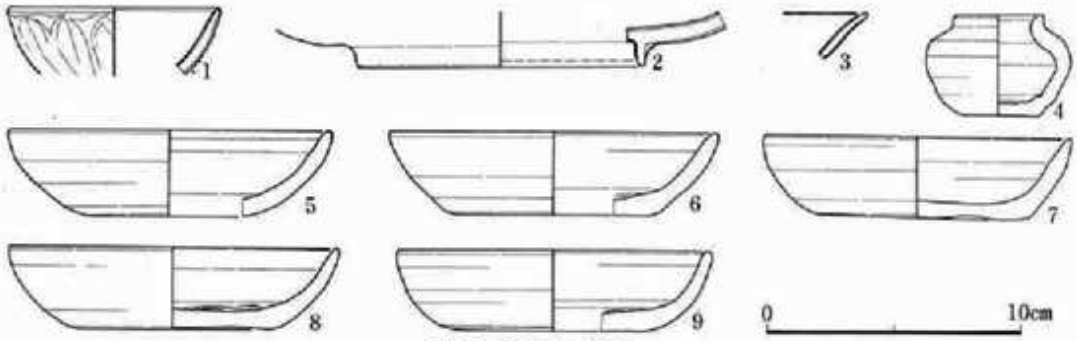



図10　溝３出土遺物

るような感がある。深さは約40cm内外で、南に向って流れる。

**出土遺物（図10）**

１は蓮弁文青磁の小碗で暗緑色の釉薬がかけられている。２は青磁鉢。

３は口兀げの白磁皿である。

４はかわらけ質の胎土を持つ小壺である。５～９はロクロ成形のかわらけで、やや器高が低く、若干厚めの器壁を持つ大型のもの。

## ４．側溝１

調査区東壁際を南北に流れており、位置と規模からみて、中世の今小路（武蔵大路または今大路）の西側側溝であるのは間違いない。

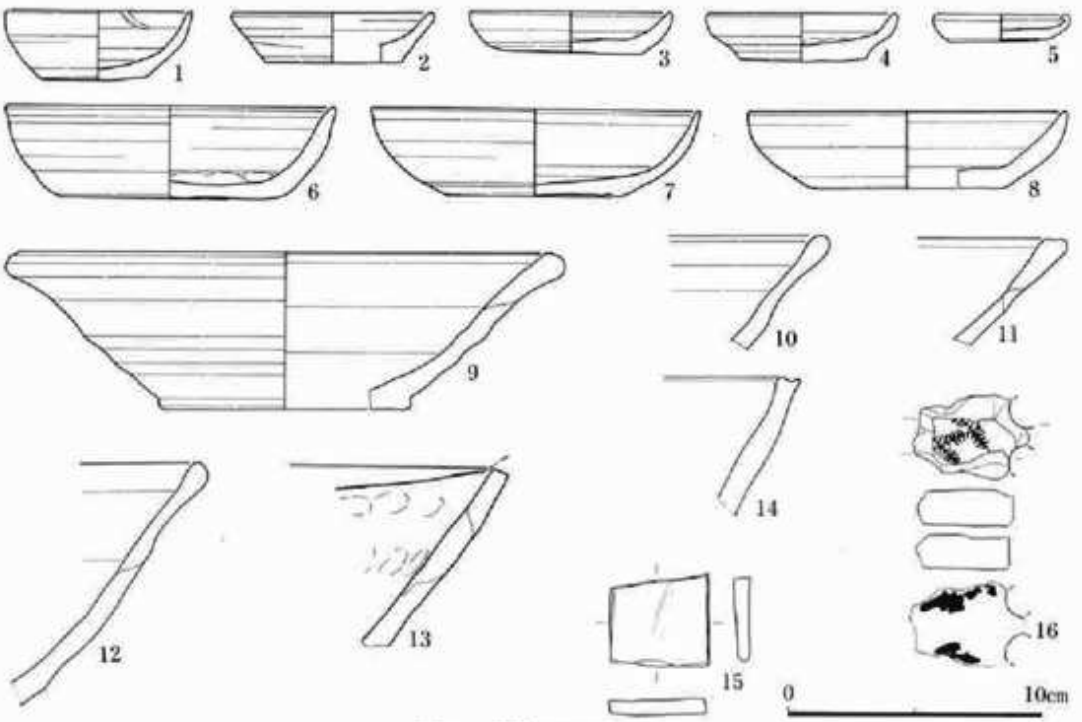



図11　側溝１出土遺物

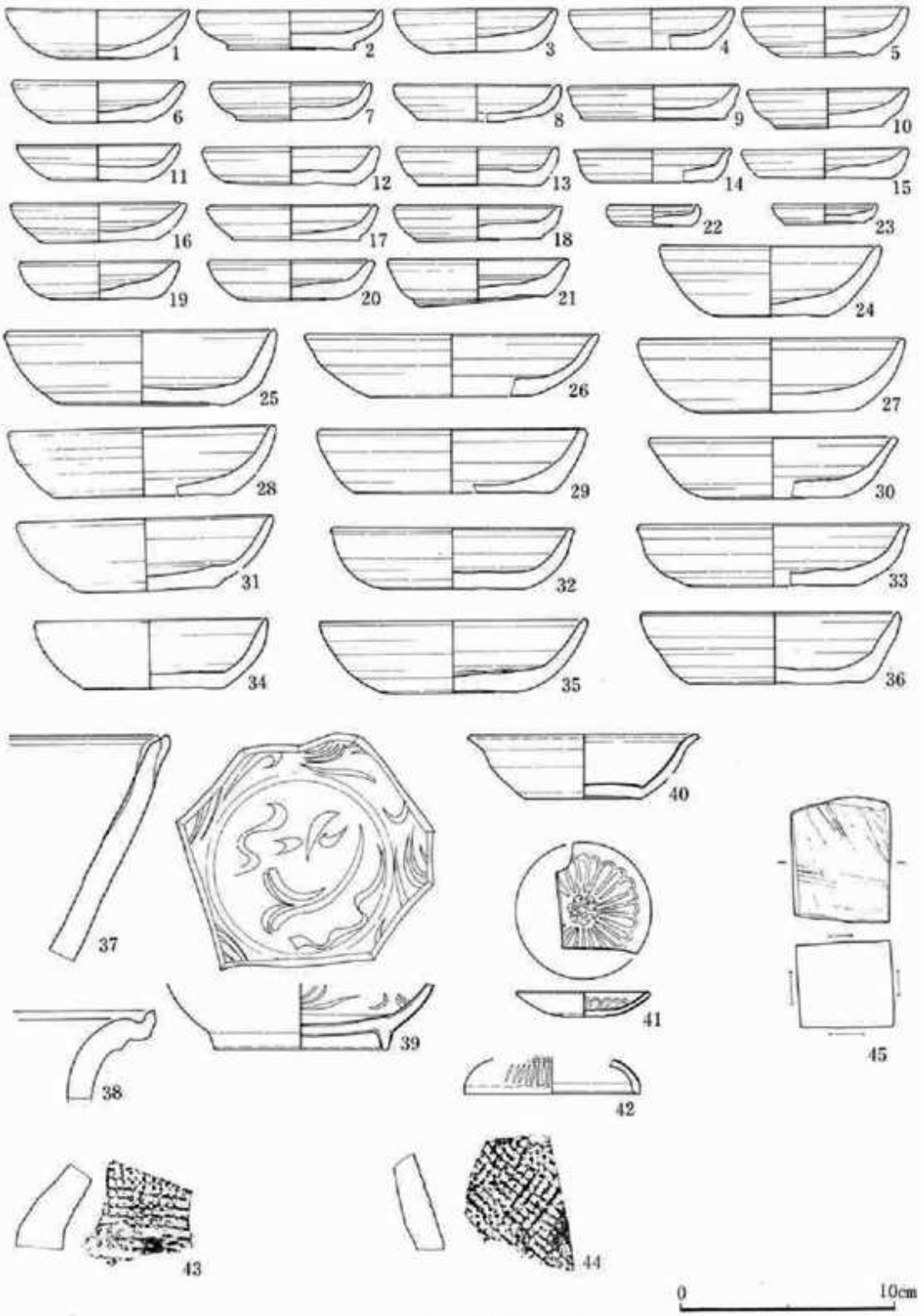



図12　上層遺溝面出土遺物

断面は逆台形を呈し、幅は北壁際で約1.7m以上、南壁際で約1.5m以上を測り、深さは確認面から北壁際で約50cm、南壁際で約70cmである。南に向って流れている。中には人頭大よりも大きな石が沢山投げ込まれている。

出土遺物（図11）

1～8はかわらけ。器壁が薄く、内湾するもの（1・7）、直線的な器壁のもの（2）、楔状に斜め上方に伸びる器壁の小型のもの（3）、古式の様相を持つもの（4）など様々で、溝という性格からか、混入があると思われる。

9～12は山茶碗窯系のこね鉢で、いずれも肥厚する丸い口縁端部を持つ。

13・14は常滑こね鉢。15は安山岩の仕上げ砥である。15は骨製品で、厚さ1.4cmの板状に仕立てた大型哺乳類の骨に二ヶ所の円孔を開け、表面に藤のような文様を陰刻、裏面に黒漆を塗る。用途は不明。

## 5．上層遺構面出土遺物（図12）

遺構確認面直上で採集した遺物をまとめた。

1～36はかわらけて、その多くがA・B－1・2付近で採集されたものである。いずれもロクロ成形であり、手捏ねによるものは1点も含まれていない。小型も大型も、器高対口径の比の小さな低めのもので、やや薄めの体部を持つ。22・23はミニチュアのかわらけである。

37は常滑こね鉢、38は同甕で、これは他の遺物よりも古いので、下層のものが混入したものと思われる。

39は青磁鉢。青灰色の半透明釉で、画花文が内面全体に見られるが、年代的には14世紀後半以降の、やや時期を降ったものだろう。混入品だと思われる。

40は白磁の口兀げ皿。41は青白磁の小皿で内面に型押しの菊花文がある。42は青白磁の合子蓋。

43・44は灰黒色で流文の目立つ、瓦質に近い胎土の甕の、頸部（43）と体部（44）。格子目の叩キ痕がある。瀬戸内の産であろう。

45は凝灰質砂岩の砥石。中砥で、4面とも砥面に使われている。

これらの遺物は、大体14世紀、南北朝期に比定されよう。

## 6．上層包含層出土遺物（図13・14・15）

近・現代の客土層を除いた後の、遺構面に達するまでの包含層中から出土したものである。

1～3は青磁蓮弁文碗で、4・5は同無文の鉢。6は白磁口兀げの碗。7は青白磁の型押しによる小皿である。

8～11は瀬戸である。8は暗緑色の灰釉が口縁部にかけられたもの。9～11は灰釉のかけられた折縁の鉢。

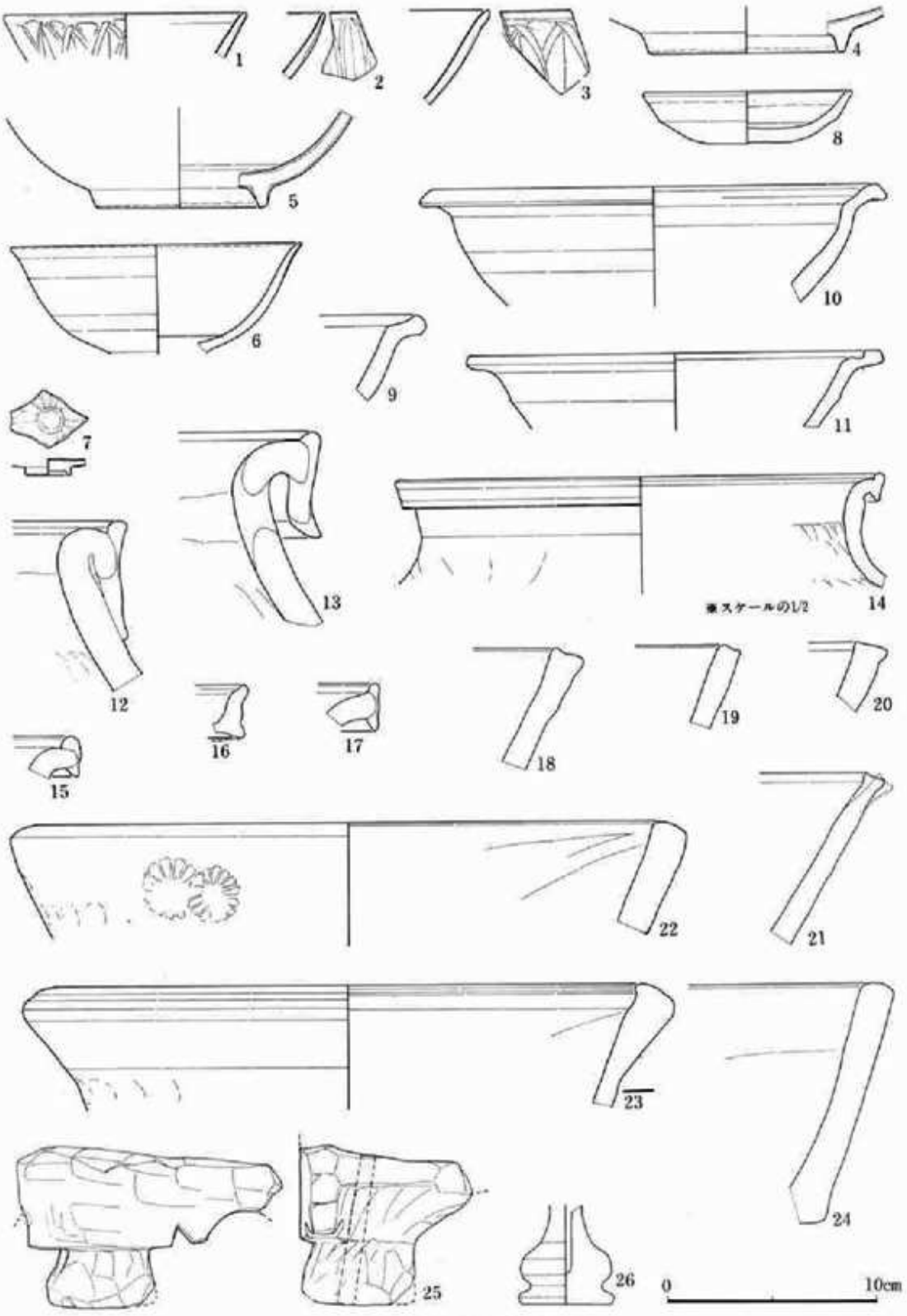



図13　上層包含層出土遺物（1）

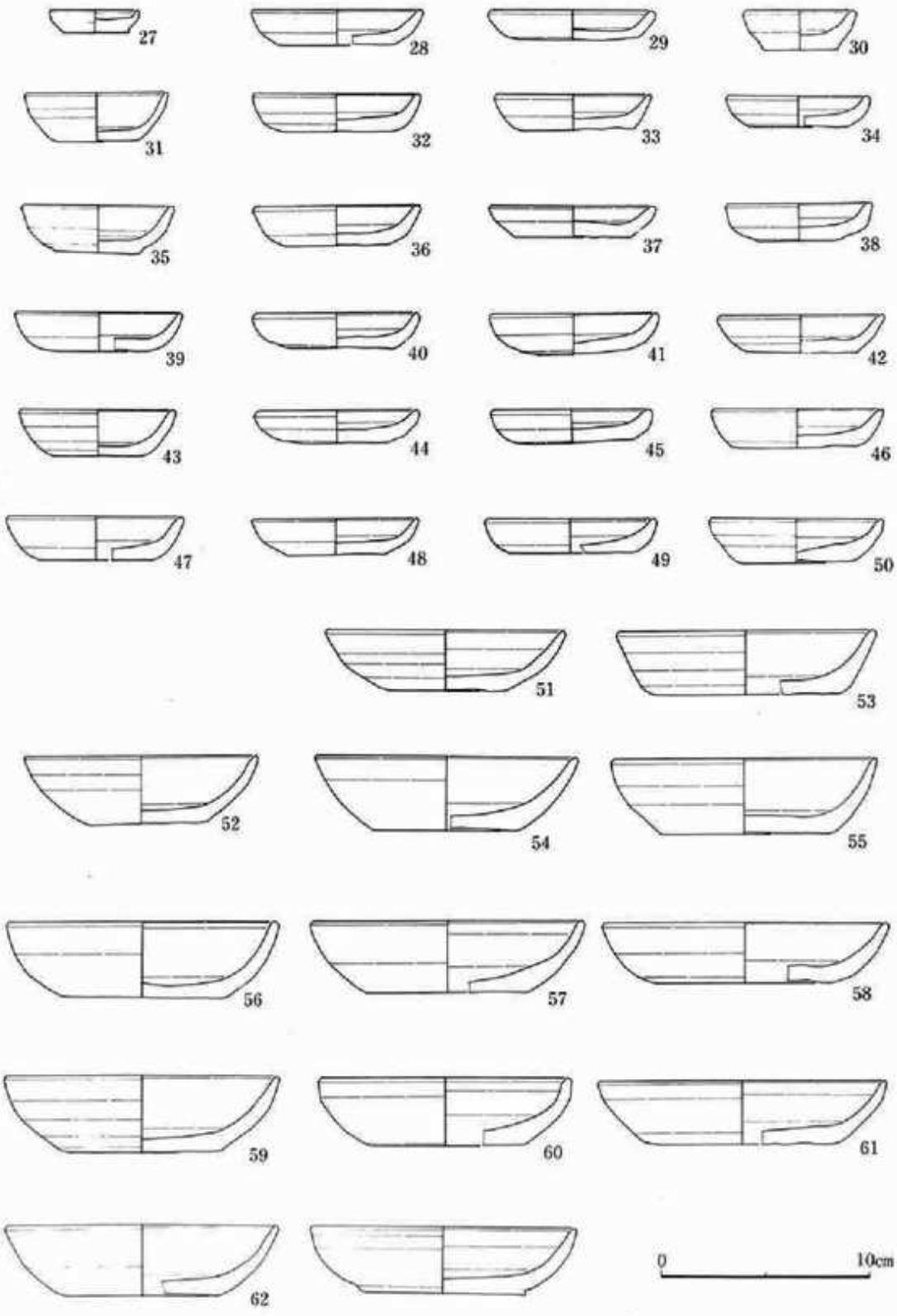



図14　上層包含層出土遺物(2)

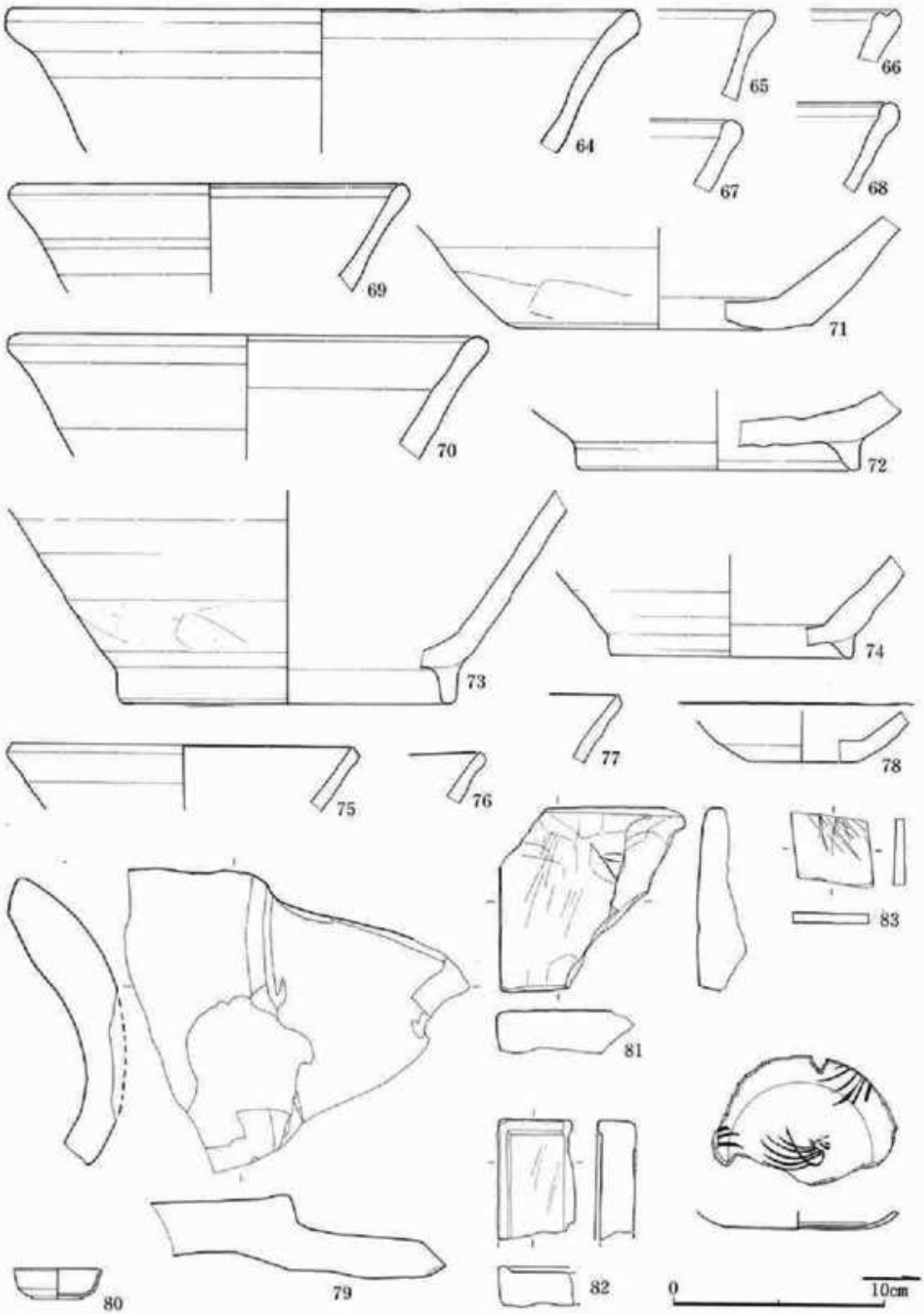



図15　上層包含層出土遺物(3)

12～17は常滑の甕口縁部、18～21は同じくこね鉢である。12・13はきわめて幅の広い縁帯を持ち、うち12のそれは頸部にくっついている。14は口径46.7cmという大口径のもの。こね鉢類は角ばった断面の口縁端部を持ち、21には片口が付く。

22～24は瓦器質の手焙りであり、25は土器質手焙りの脚である。25は粗い淡褐色の胎土で、円筒形の脚と肘木を持つ。脚に穴が開いているのは、熱によるひずみを逃がすためか。

26はかわらけ質の胎土の小壺。口縁部を欠失する。

27～62はかわらけであり、27～49が小型、50・51が中型、53～62が大型である。いずれもロクロ成形で、小型のものはおおむね器壁が小さく斜め上方に伸び、大型のものはやや薄手に近いが器高が低めのものが多い。50・51は14世紀代に特有のもの。これらのかわらけは30に新しい様相が認められるものの、大体14世紀中葉～後期、南北朝時代に属している。

63～77は山茶碗窯の産品で、63～73がこね鉢、74～77が山茶碗である。こね鉢はいずれも、肥厚する丸い端部の口縁部で、65の端部には沈線が巡っている。70には高台がみられない。山茶碗の口縁端部は上方に向って尖る。

78は男瓦である。粗い砂質の胎土を持つ。

79は銅製の小碗で、仏具の六器である。口径4.1cm、器高1.45cm。

80は板状の滑石製品で、温石であろう。81は黒色粘板岩の硯片。82は仕上げ砥である。

83は漆器皿で、内面に朱漆の草文がある。

## 第2節　中層の遺構と遺物

上層遺構面の下約30～55cmの辺りにある。凝灰岩と泥岩の版築面で、北側は凝灰岩切石による石畳みもみられる。この面で検出された遺構は東西溝2条、今小路側溝、土壙4基などである。

### 1．溝4

上層の溝1とほぼ同じ場所にあるが、規模がはるかに大きく、護岸施設はないが壁はしっかりしている。幅約4.5m（西壁際）～3.6m（東壁際）、深さ約90cm、皿状の断面形をした大きなもので、西から東に向って流れている。東側は今小路側溝に当る。断面で数度の掘直しを確認した。

出土遺物（図17・18）

1・2は青磁蓮弁文碗である。3は青白磁合子の身部、4は同じく青白磁の梅瓶胴部である。5～8は白磁口兀皿。

9～16は瀬戸である。9は大型の水注の注口部で、透明の灰釉がかかる。10は四耳壺口縁部で、薄い灰釉がかけられる。中世猿投窯のものか。11は鉛釉の小壺。12～15は折縁鉢である。16は卸し皿。

18～22は山茶碗窯系のこね鉢で、端部の丸い肥厚する口縁部を持つ。

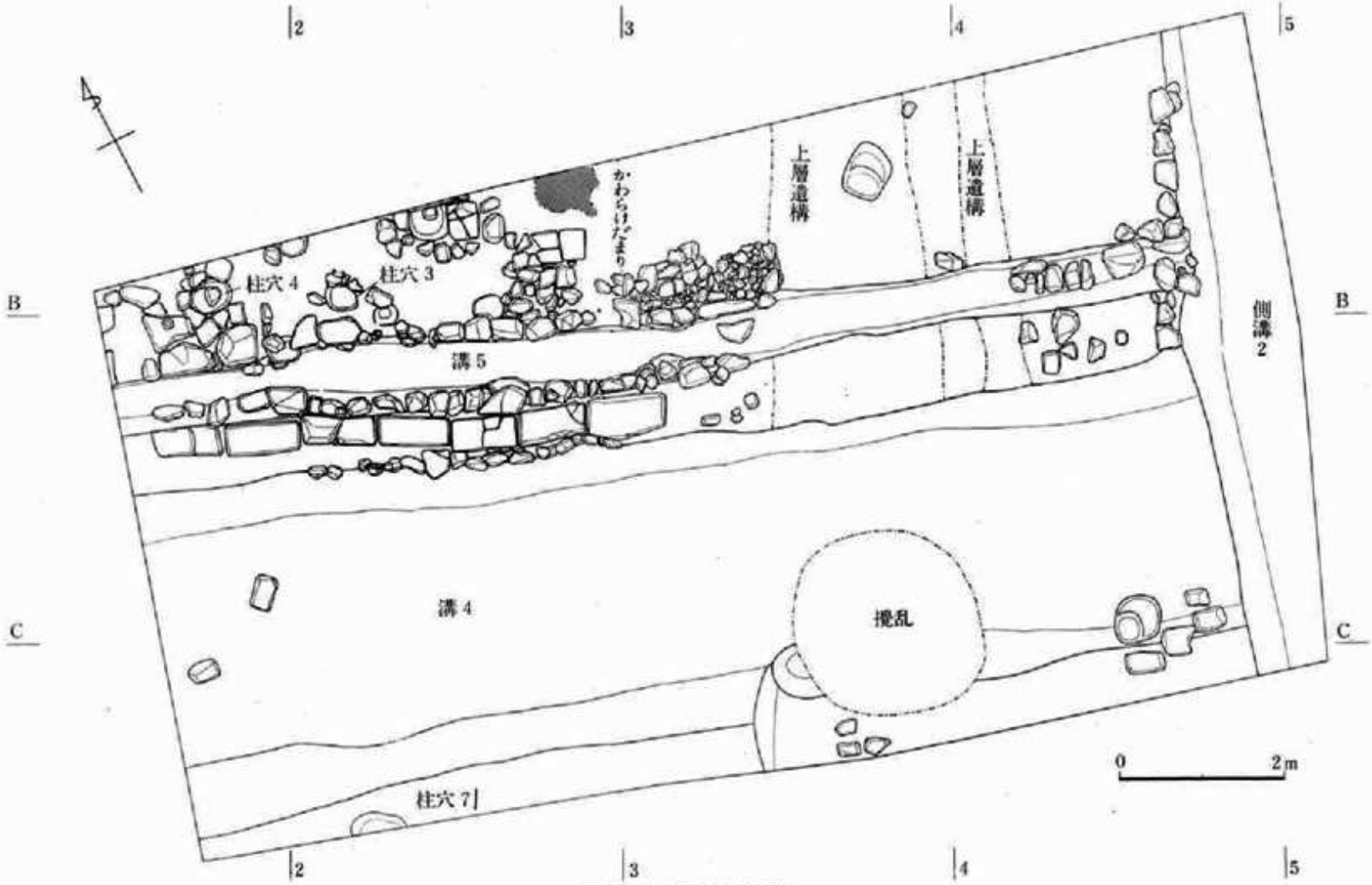



図16　中層遺構群全体図

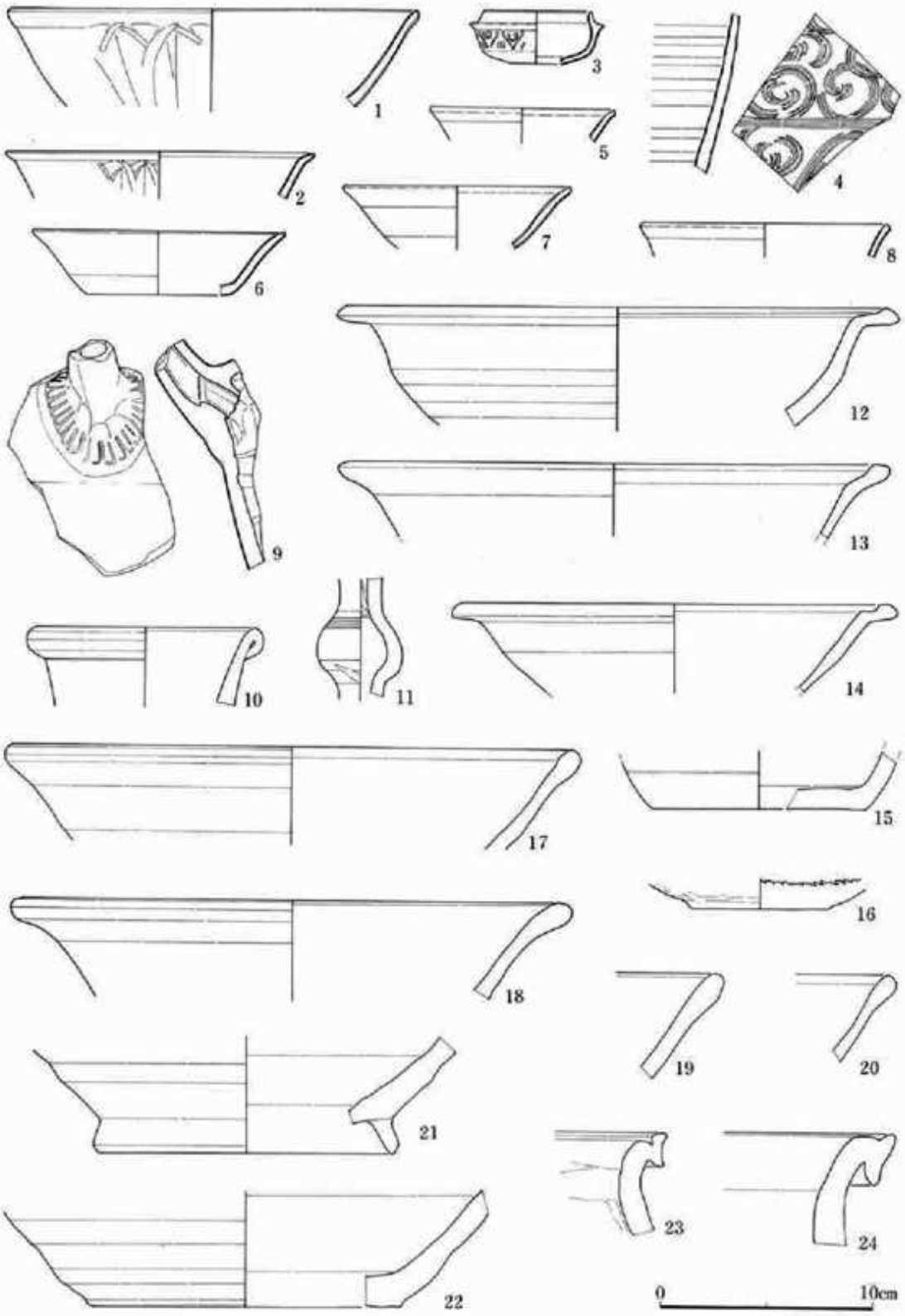



図17　溝４出土遺物（１）

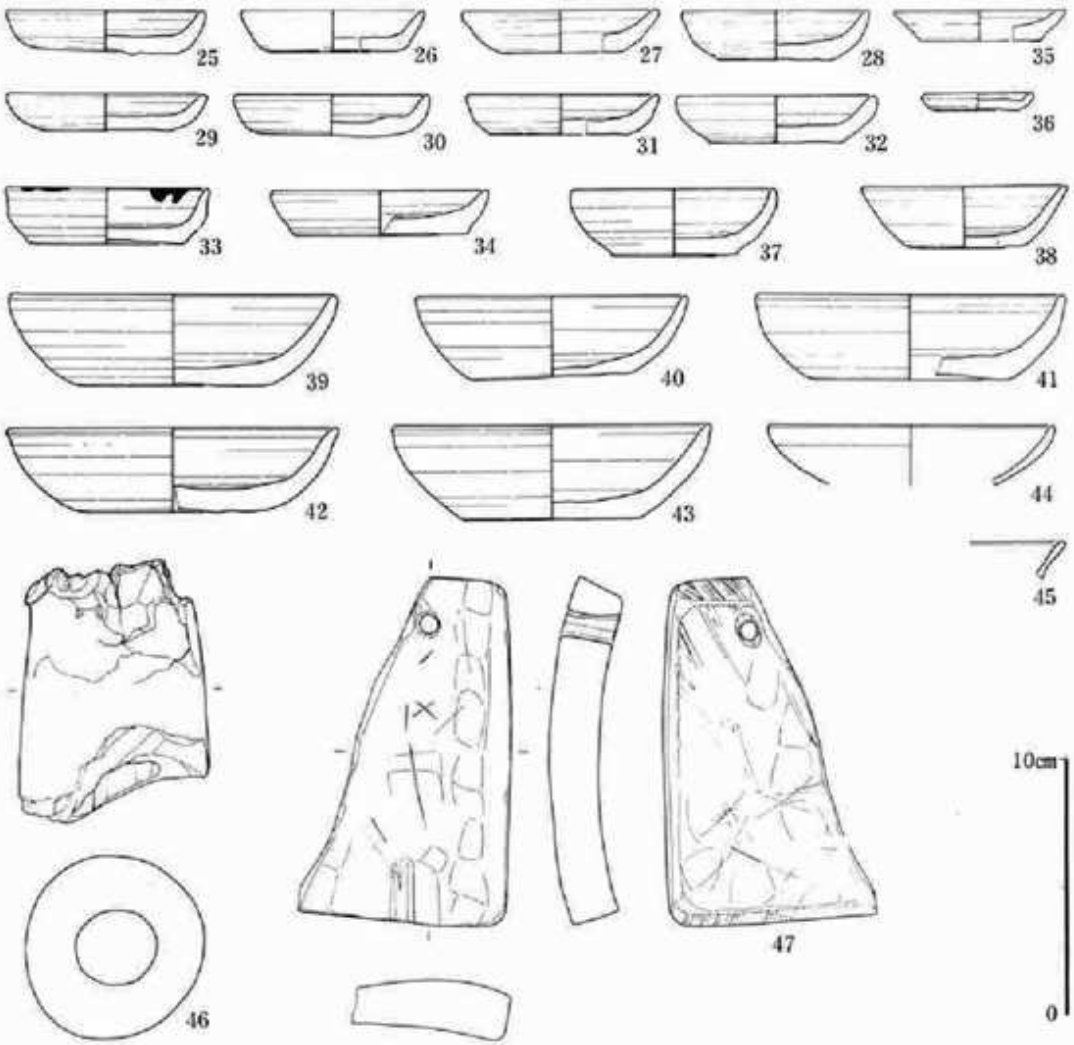



図18　溝４出土遺物(２)

23・24は常滑の甕。

25～43はロクロ成形のかわらけである。手捏ねによる成形は見られない。小型のものは斜め上方に伸びる器壁を持つもので、器高も低め。37・38のように薄手で深いものもみられる。大型品はやや深めのものが多い。

44は白かわらけ。白く固い胎土のもの。45は瓦器である。

46は吹子の羽口である。先端の径は6.6cm。

47は滑石鍋転用品で、鍋のつばを削り落とし、穿孔したもの。温石であろう。

## ２．溝５

溝４の北側を平行して走る溝である。幅約60cmで、U字型の断面を呈し、西から東に流れる。深

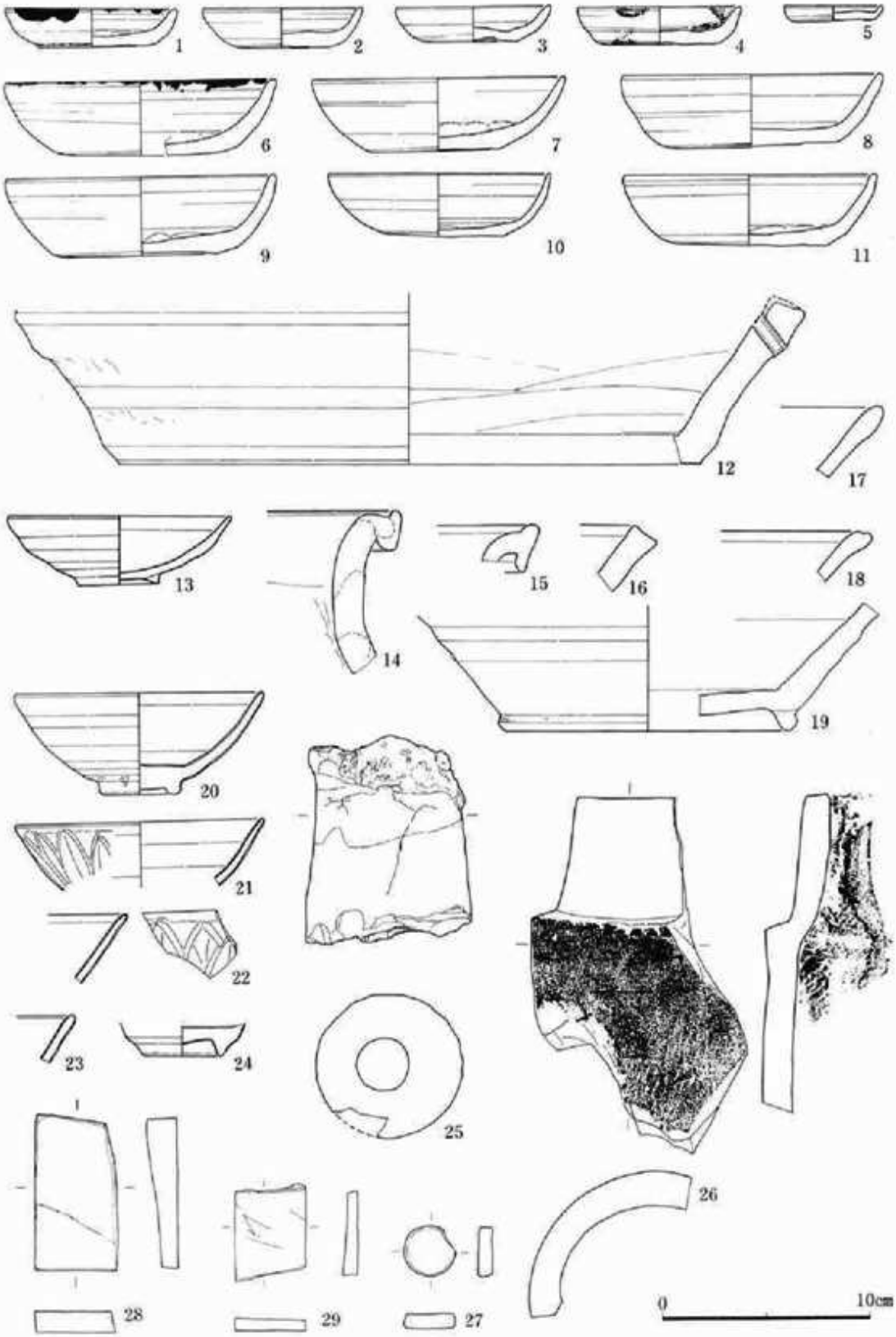

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
17
13
14
15
16
18
19
20
21
22
23
24
25
26
28
29
27
0
10cm

図19　溝５出土遺物

さは平均して55cm程度である。溝の南北の壁は石組みになっている。また、この溝5と、先述の溝4との間は、長方形の凝灰岩切石を縦に並べて基盤とした通路、または築地塀の基礎のような様相を呈している。

出土遺物（図19）

1～11はかわらけ。いずれもロクロ成形で、薄手で内湾する器壁を持つものが含まれているが、大体は溝4の一群と共通していると思われる。

12は瓦質の盤状手焙りで、口縁下に穿孔があるところから、吊り下げられて、鍋替りに使われた可能性がある。

13は早島の碗。淡褐色に固く焼き締っている。

14・15は常滑の甕であり、16は同じくこね鉢である。こね鉢の端部は四角い。

17～19は山茶碗窯系のこね鉢である。17・18は肥厚する口縁で、丸い端部を持つ。

20～24は青磁で、20・23が無文碗、21・22は蓮弁文碗、24が折腰の小鉢である。

25は吹子羽口で先端の直径は6.5cm。

26の男瓦は、灰色の固く焼き締ったもので、作りもていねいである。

28・29はいずれも仕上げ砥である。

27は円盤状の土製品。かわらけの底部を摺って成形したもので、中世の印地か？

## 3．かわらけだまり（図20）

北壁際の3軸やや西寄りに位置している。石敷上に厚い炭化層が認められ、その中にあったものである。30個体ほどのかわらけと、常滑胴部片、青磁等がかたまって出土した。図20－1～6はその代表的なものを図化した。

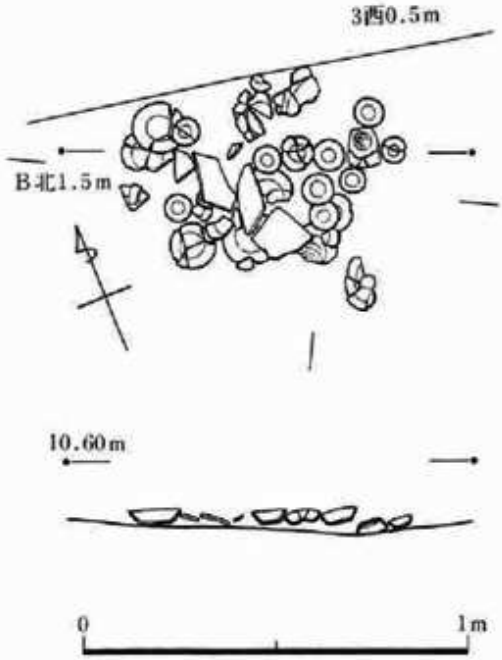


図20　かわらけだまり

出土遺物（図21－1～6）

1～4はかわらけで、小型のものは低めの器形で、大型のものは、やや低く厚めの体部を持つものと、なだらかな、やや高い器高を持つものとがある。5はミニチュアかわらけである。

6は青磁蓮弁文碗。口径18.3cmと大きい。

## 4．石敷

A・B－1・2・3にある。大小様々の石で構成されているが、溝5の切り込み肩の線は、おお

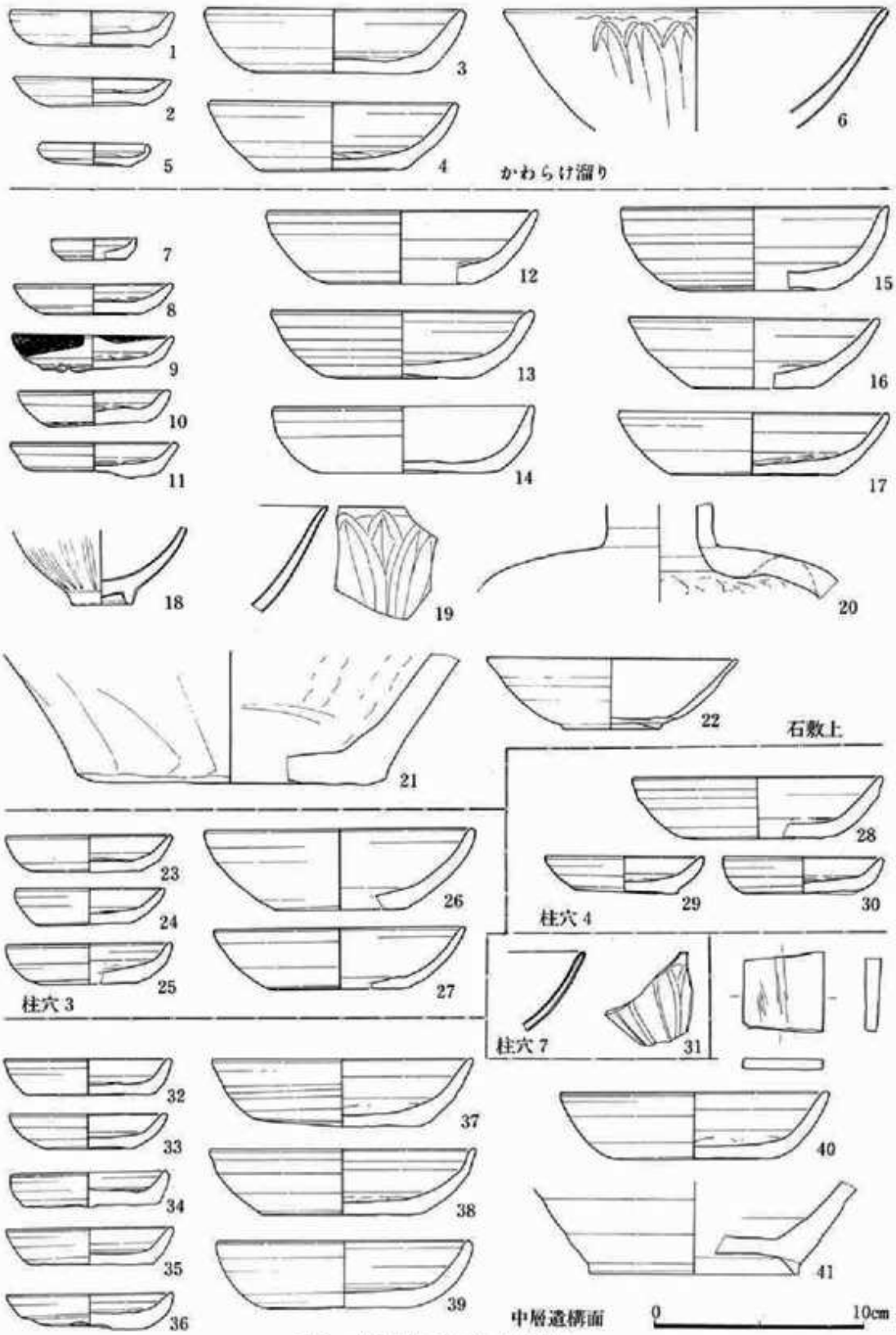



図21　中層遺構・同面上出土遺物

むねそろっている。この石敷の上には厚い炭化層があり、前述のかわらけ溜りをはじめ、出土遺物は多かった。またこの上面からは大量の鉄滓、吹子の羽口等、製鉄遺構の存在を示唆する遺物が出土している。

出土遺物（図21－7～22）

7～12はかわらけで、うち7はミニチュアの皿である。8～11の小型品はいずれも浅い器高で、斜め上方に伸びる器壁を持っている。大型のものも、大体なだらかに斜めに伸びる器壁を持つものが多い。

18・19は青磁蓮弁文碗。

20は瀬戸瓶子肩部で、薄い灰釉がかけられている。21は常滑の甕底部である。

22はおそらく早島産と思われる碗。淡褐色で固く焼けている。

### 5．柱穴3

A－2の石敷中にある。中からかわらけがまとまって出土した。柱穴の性格は不明。

出土遺物（図21－23～27）

いずれもかわらけで、すべてロクロ成形のものである。小型のものも大型のものもやや薄手で内湾気味の器壁を持つ。

### 6．柱穴4

調査区北西角近くのA－1にある。これも石敷中にあり、中に礎石と思われる伊豆石が座っている。かわらけ数点が出土した。

出土遺物（図21－28～30）

図化したのはいずれもロクロ成形で、大型1点、小型2点であるが、おおむね厚めの器壁で、斜め上方になだらかに立上るものである。

### 7．柱穴7

溝4南岸のC－2にある。青磁蓮弁文碗片1点が出土した（図21－31）。柱穴の性格は不明。

### 8．中層遺構面出土遺物（図21－32～42）

石敷面以外の面上遺物を集めた。

32～40はかわらけで、小型のものはおおむね楔形の小さめの器壁を持ち、大型のものはやや内湾する器壁を持つ。これらは大体14世紀前半～中葉に比定されよう。

41は山茶碗窯系のこね鉢底部～体部下半である。

42はきめ細かな玄武岩らしい石材を使った仕上げ砥である。

### 9．中層包含層出土遺物（図22）

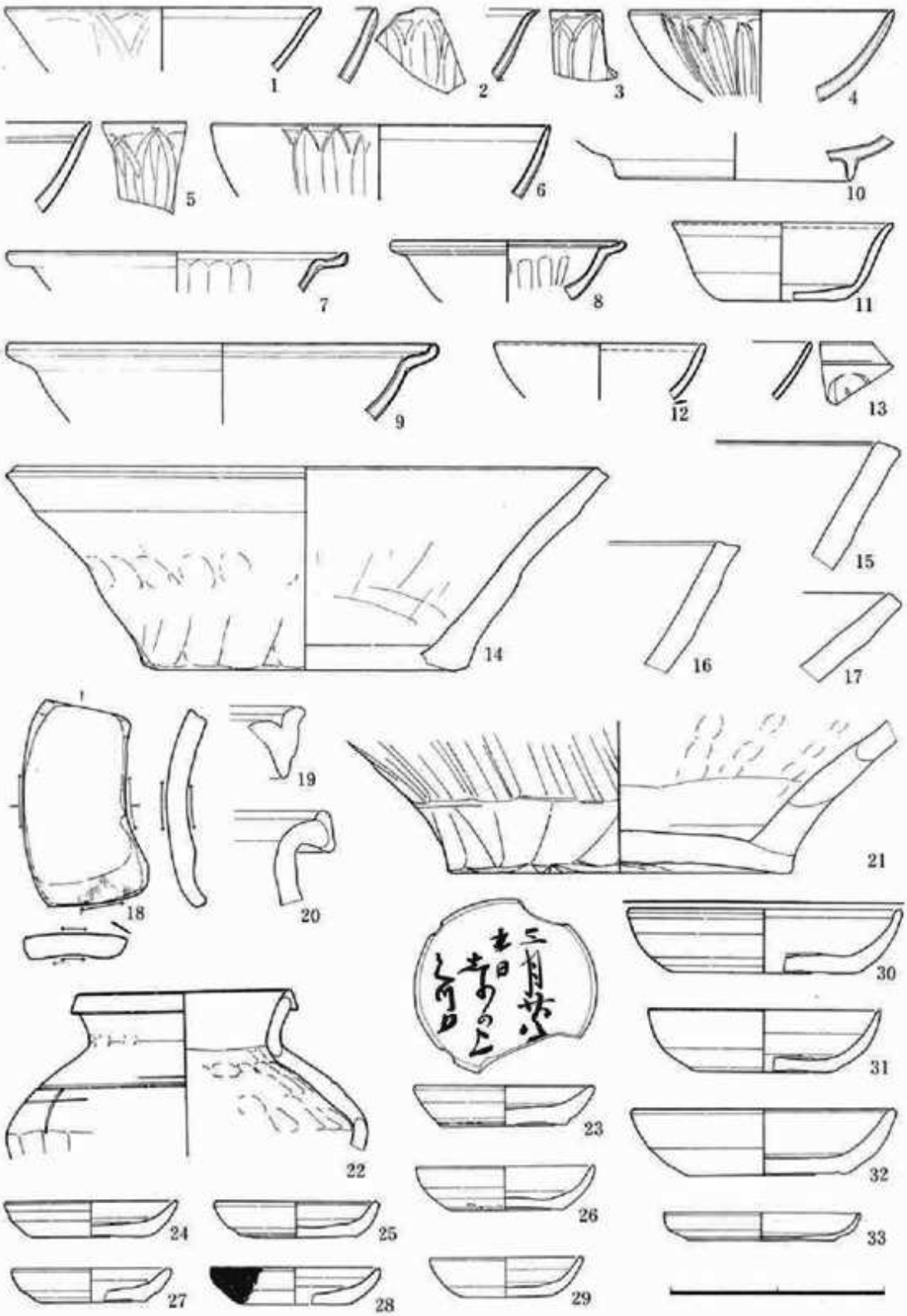


図22　中層包含層出土遺物

1～6は青磁蓮弁文碗である。6の蓮弁は剣頭文に近く、釉薬は暗緑色に発色している。7・8は内面に蓮弁文のある青磁小鉢で、10・11は同じく青磁の無文鉢である。

10・11は白磁口兀げ皿である。

13は青白磁皿であるが、碗である可能性もある。外面に片切彫りの文様がある。釉薬は淡水青色に発色。

14～22は常滑類である。14～17はこね鉢で、いずれも角ばった口縁端部を持つ。18は甕体部片の四周を摺ったもの。19～21は甕である。22は壺体部上半で肩部に縦の界線を持つ。

23～32はかわらけである。うち23は内面に墨書が見える。

三月廿八日(カ)□

九日

志の(のカ)□上

久ツ□(一字不明)

(大三輪龍彦鶴見大学教授の御教示による)

かわらけ自体はおおむね低い器形のものが多いが26・29・31のように薄手で内湾するものもある。

33は無文の漆器皿。

## 第3節　下層の遺構と遺物

中層遺構面の下約25～45cmにある。破砕された凝灰岩および泥岩による堅牢な版築面である。この面で検出された遺構は、今小路側溝と思われる木組の南北溝、土壙7基、柱穴50数口、そして長屋のように連なった方形竪穴建物列などである。また、柱穴の群集する場所と方形竪穴建物列の間には、なにもない細長い空間があり、位置的にみて、通路であった可能性がある。

### 1．側溝3（図24）

東壁際で検出した。側溝1・2の下層にあるもので、位置的と構造からみて、これも今小路の側溝であるのは間違いないところである。

溝の構造は次の通りである。

掘方は幅約75～110cmの、箱型に近い逆台形の断面を呈し、この壁に沿って幅約40cm（最大で）の横板を、ところによっては二段に並べる。この横板は、等間隔に打ちこまれた角杭によってとめられている。角杭の間隔は65cm前後である。2尺2寸ということだろうか。角杭の上端には横木が渡されて突っ張りとされ、壁板が土圧によって内側に倒壊するのを防いでいる。また、この溝には木の蓋があったらしく、部分的にそれが残っている。内法は最大で約65cm、深さ35～40cmである。

主軸方位はN－20°－Eで、ほぼ現在の今小路と同じである。若宮大路とは7.5°程度ずれており（若宮大路はN－27.5°－E）、今小路（武蔵大路・今大路）は、中世期から既に平行していなかっ

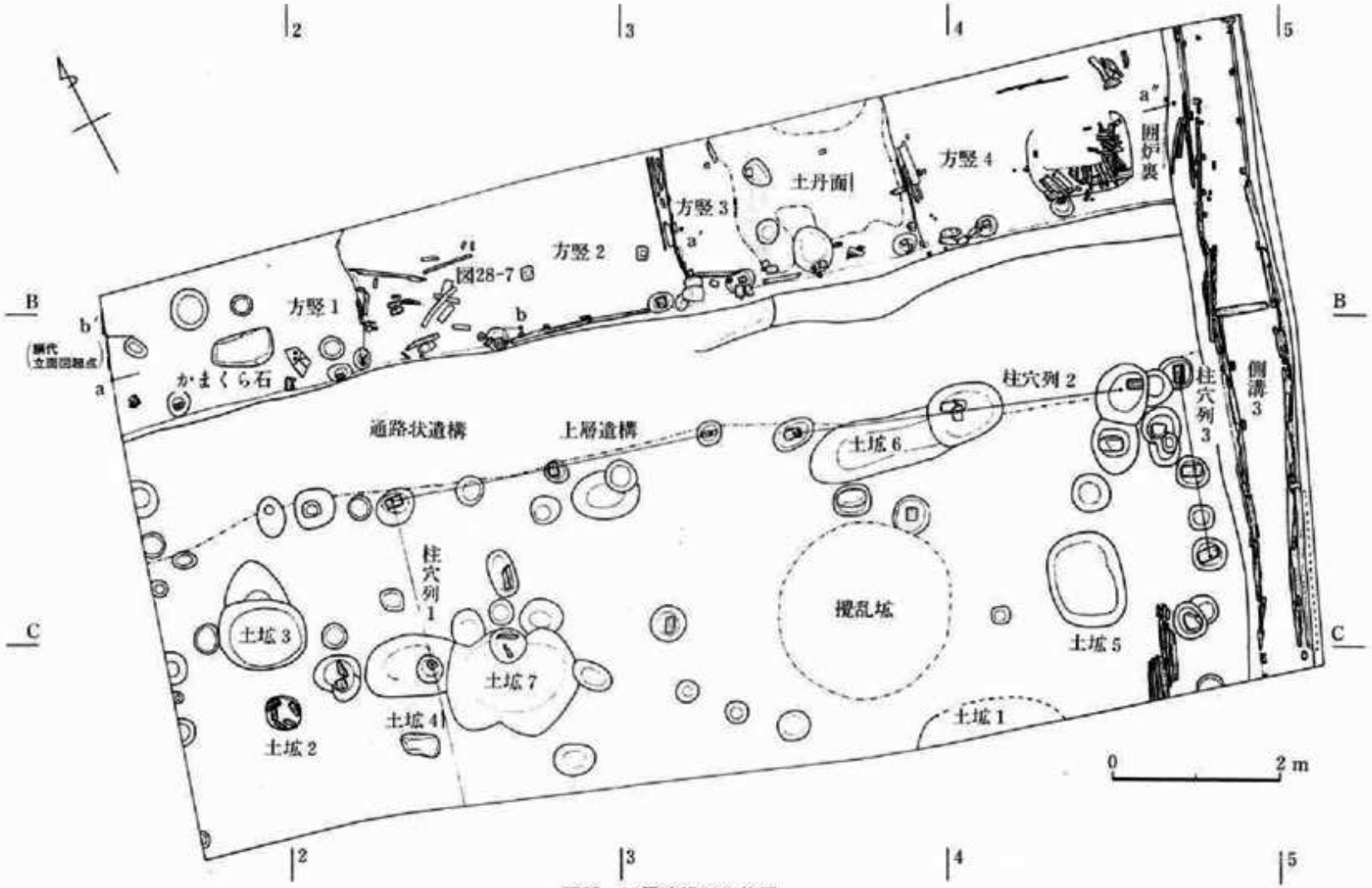



図23　下層遺構群全体図

た可能性が強い。

なお、この溝は火事にあったようで、蓋の板や杭の上部が焼けている。

**出土遺物（図25）**

1～6はかわらけ。いずれもロクロ成形である。大型はやや厚手で器高の低いもの（1・4）と薄手で内湾するやや器高の高いものが混在している。小型のものは器高が低く、楔形に斜め上方に伸びる器壁のものがみられる。

7は黄白色の白かわらけ。

8～11は山茶碗窯系こね鉢で、いずれも口縁端部を丸く収めるもの。

12～15は常滑である。12はこね鉢で、口縁端部はやや丸味を帯びるものになっている。13～15は甕である。

16・17はいずれも瀬戸の入子。

18は土錘で、長さ8.4cm、直径3.5cm。

19は白磁口兀げ皿。20は青磁碗。21は同じく青磁の鉢である。

22は漆塗の横櫛。

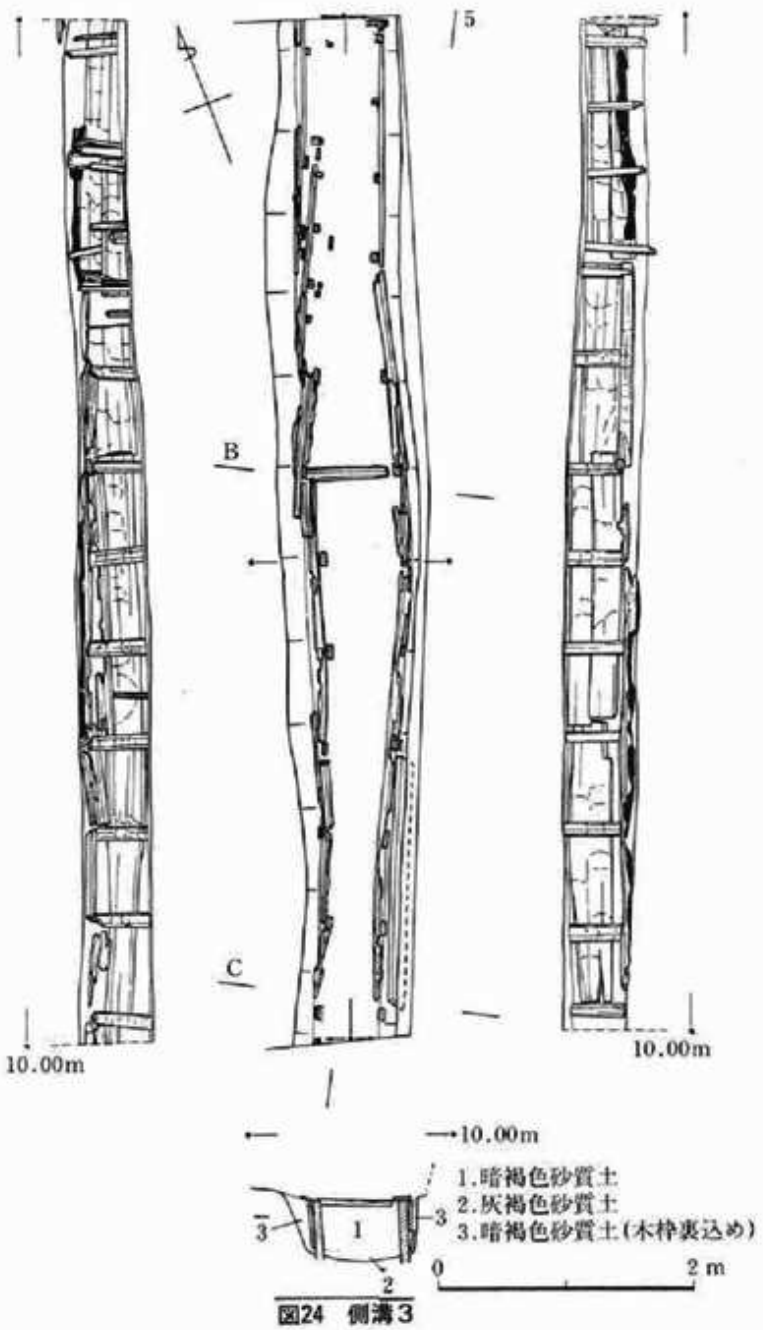


図24　側溝3

## 2．柱穴群

通路状の平坦な場所の南側に、いくつか柱穴を検出した。そのうちに、列をなしているものは3

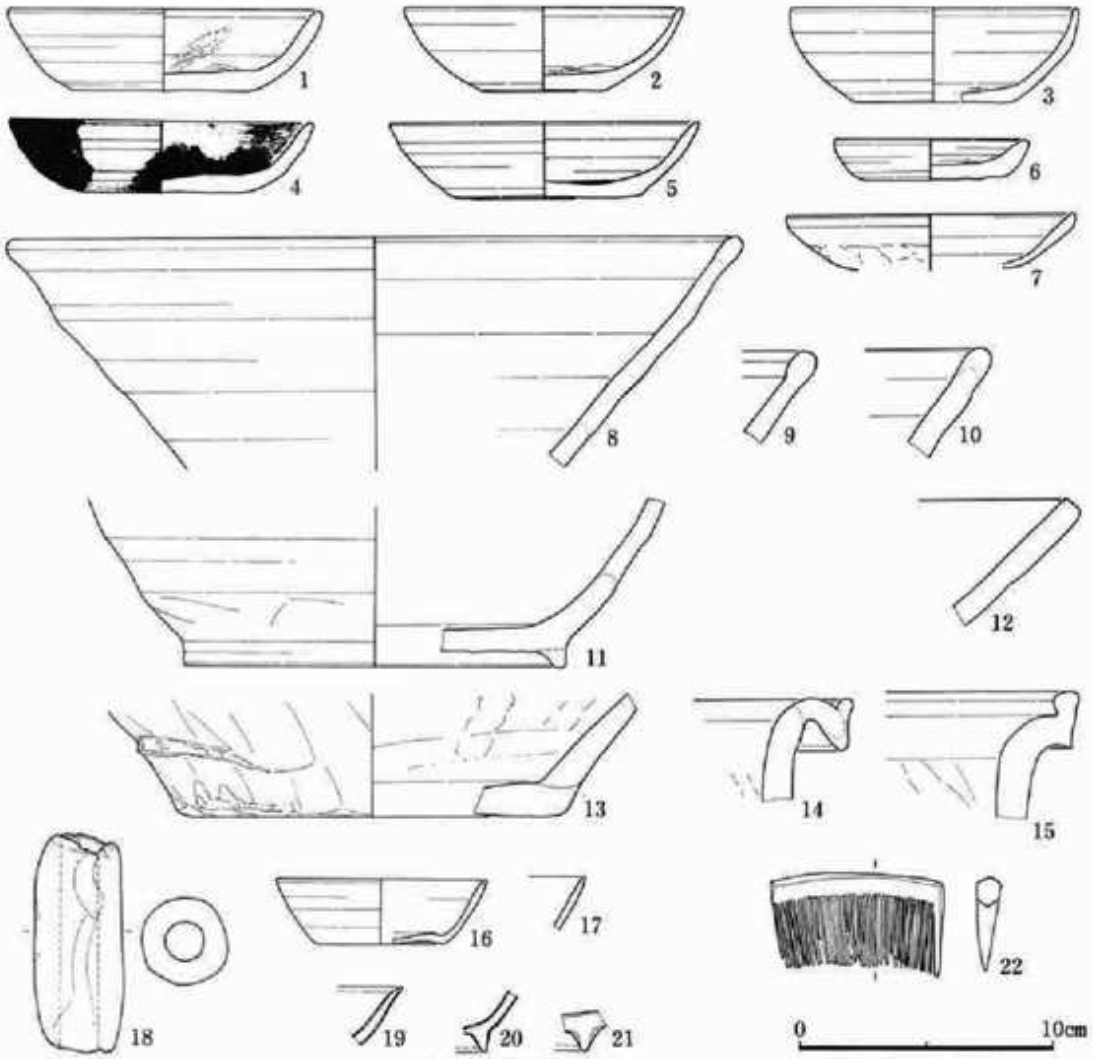



図25　側溝３出土遺物

列あるが（図23参照）、いずれも中途半端で、掘立柱建物を形成するようなものは見当らなかった。なおこれらの柱穴は、いずれも礎板を持っている。

### 3．土壙（図23・26）

7基を検出した。うち代表的なものは図26に示した。いずれも性格不明であるが、いくつかはゴミ穴のようなものであったと思われる。

### 4．方形竪穴（図23・26）

通路状の平坦面の北側に4基が東西方向に連なっている。西から順に1～4の番号を付した。1から4に向って床面が少しずつ、段階的に低くなっていく。それぞれの境界には板が縦に並べられ

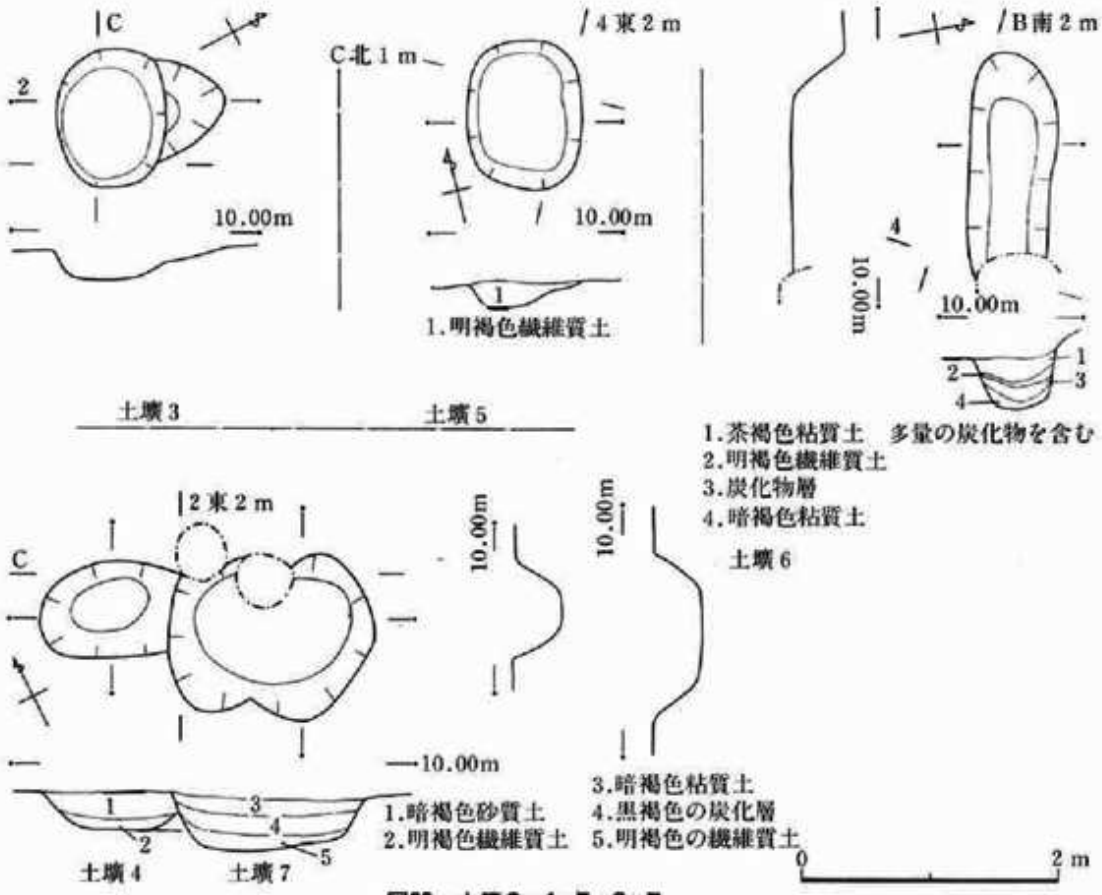



**図26　土壙3・4・5・6・7**

ているようであるが（部分的に遺存）、2と3の境界は、横板を箱型に組んだ水路、あるいは流しのような構造になっている。

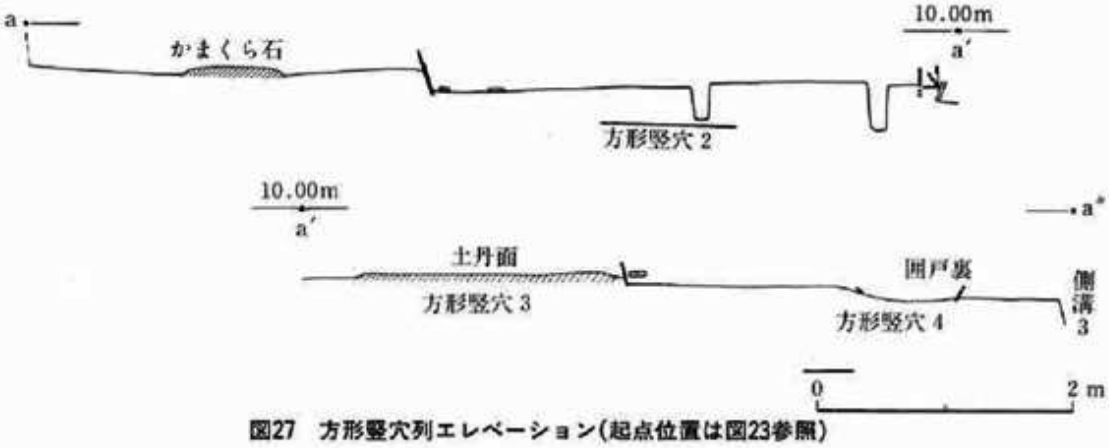



**図27　方形竪穴列エレベーション（起点位置は図23参照）**

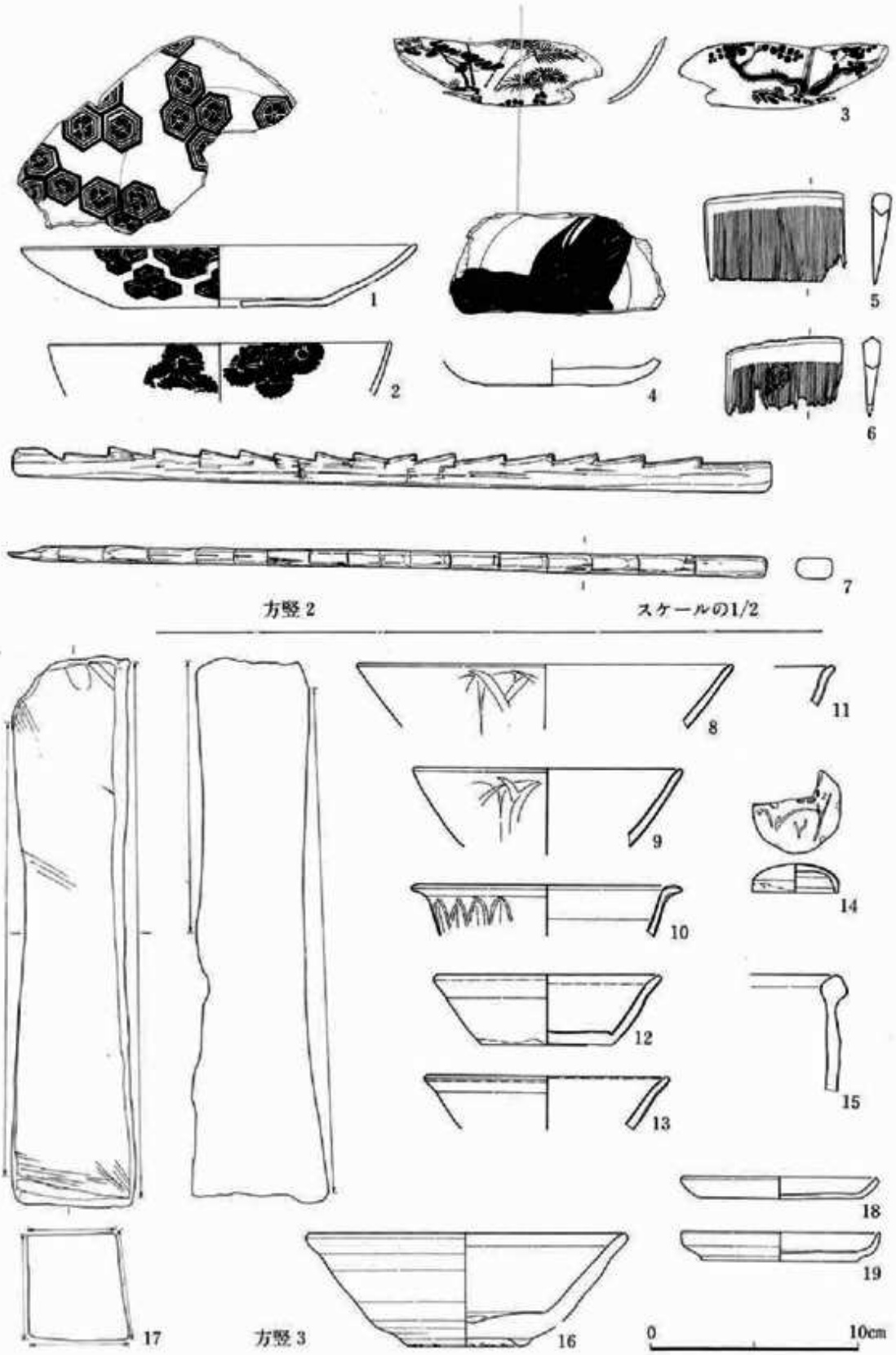



図28　方形竪穴2・3出土遺物

また通路側の壁際には、2mまたは1m間隔で角柱列が確認できる。6尺6寸または3尺3寸ということであろう。

**方形竪穴1**は西側と北側が調査区外に出ており、規模は不明。中央部通路寄りに、最大長77cmもある平坦なかまくら石が床面に埋め込まれており、何か作業台のようなものを思わせる。

**方形竪穴2**は東西幅3m95cm（最大）、南北は不明である。1より約20cm程度床面が低くなっている。西側の間仕切りは縦に板を並べたもので、東側は先述のように排水口とも思われる箱型の木組み水路となっている。南壁の通路側は横板を置いたもの。床面には大量の木製品が散在しており、明褐色繊維質の、まるで馬糞のような土が堆積している。また角柱穴2口を床面で確認した。

**方形竪穴2出土遺物（図28－1～7）**

1～4は漆器の椀・皿である。1は大きな皿で内・外面に亀甲文が押されている。2は表裏に菊花文の押された椀。3は内面に松竹梅、外面に梅の描かれた椀。4は鶴文の皿である。

5・6はいずれも横櫛。漆塗である。

7は長さ73cm、厚さ2cmの刻みの付いた角材。中央部から刻みの方向が逆を向いている。これはおそらく自在鉤で、刻みは縄の長さを調節するためのものであろう。

**方形竪穴3**は東西幅2m95cm（最大値）で南北は不明。2よりも約10～15cm床面が低くなっている。床面には広い範囲で破砕泥岩（土丹）の版築面がみられる。東・西ともに壁体は縦板である。また、南西角に当る通路は一段低くなっており、あるいは入口であった可能性も考えられよう。

**方形竪穴3出土遺物（図28－8～11）**

8～10は青磁蓮弁文碗であり、11は同じく無文の碗である。

12・13は白磁口兀げ皿。

14は青白磁合子の蓋の部分である。梅花文が上面に型押しされている。全体は輪花を成す。

15は泉州産と思われる緑釉盤。

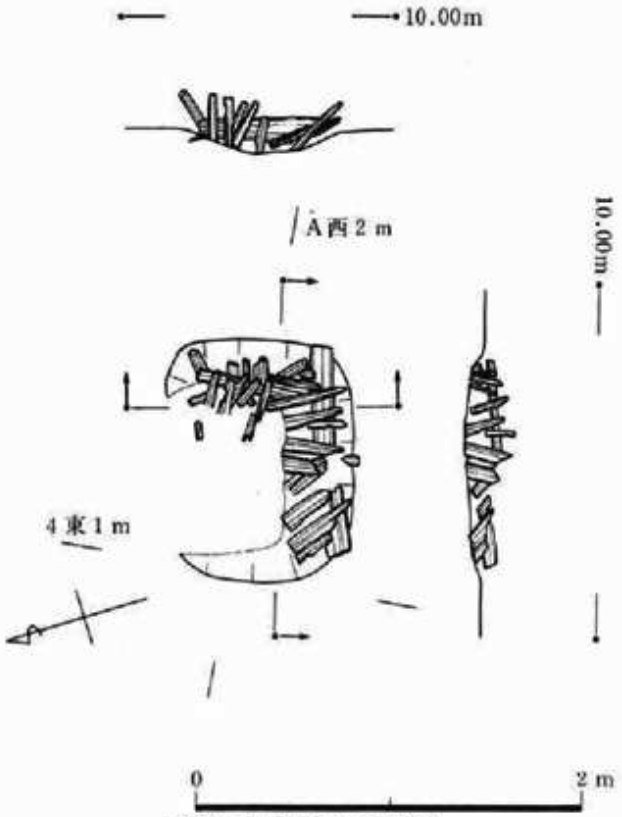


図29　方形竪穴4の囲炉裏

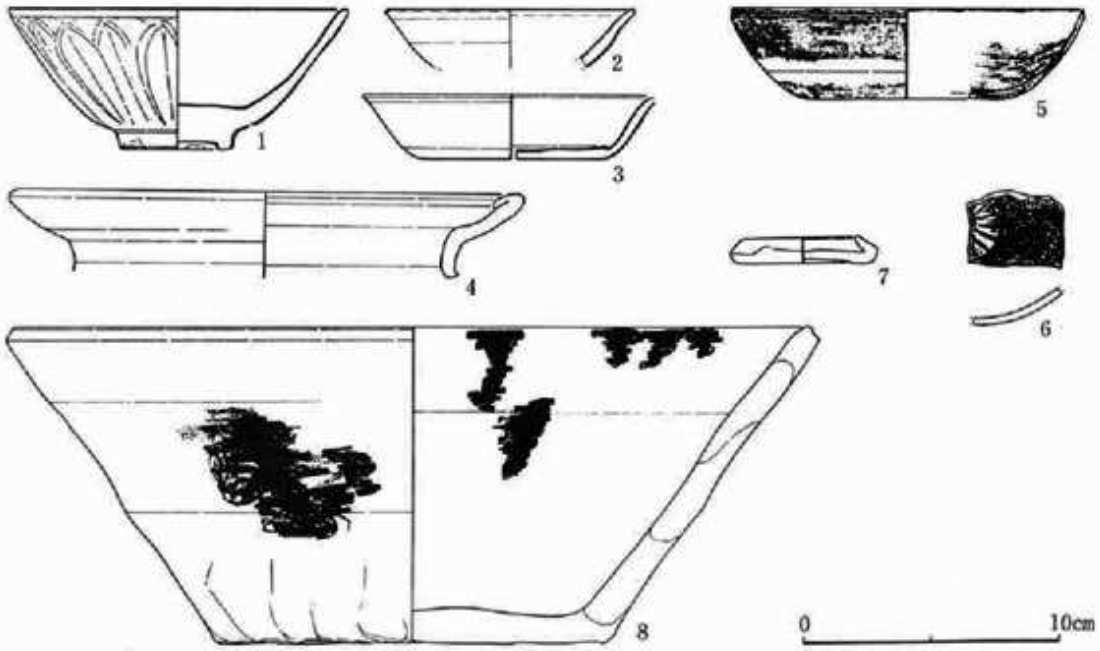



図30　方形竪穴４出土遺物

16は山茶碗である。高台は低く、畳付にもみ殻痕を残す。胎土は灰色できめが粗い。

17は砂岩製の大型の中砥。

18・19は漆皿である。共に高台が無い。

**方形竪穴４**は東西幅３m30cm、南北幅は不明である。３よりも約８～12cm床面が低くなっている。床中央部北寄りに、小さな、長さ90cmの横板が、杭によって東西方向に固定されている。

床面の通路寄りには囲炉裏らしい木組を持った浅い窪みがある（図29）。大きさは東西が125cm、南北が１m、木組みの枠は、つぶれて正確には不明であるが、大体東西１m、南北60cm前後であると思われる。縦板は最大のものの長さは32cmで、かなり深いものであったことがわかる。

この方形竪穴の床面からは灼文字・伊勢型鍋など煮沸関係の遺物が出土している。

**方形竪穴４出土遺物**（図30）

１の青磁蓮弁文碗は淡青緑色透明の釉薬がかかっている。

２・３は白磁口兀げ皿。

４は伊勢型鍋口縁部である。

５・６は瓦器で、６の内面には菊花文の押印がある。

７はいわゆるミニチュアのかわらけ。

８は常滑のこね鉢で、外面にも内面にも煤が付着している。内底面に熱で剥落している部分があり、火鉢として使われた可能性もある。

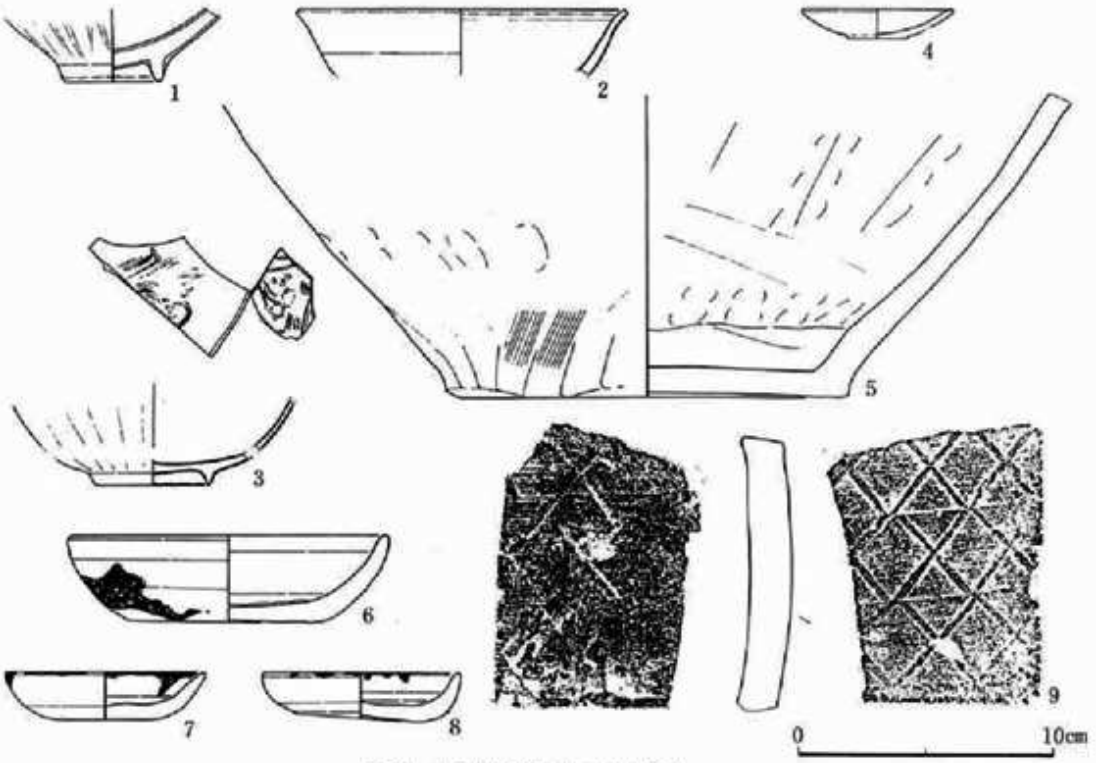



図31　通路状遺構上面出土遺物

## 5．通路状遺構

南側、柱穴列のみられる地域と、北側の方形竪穴列の間に遺構の存在しない場所が東西に細長くある。ここは破砕泥岩で堅くつき固められており、場所的にみてもおそらく、通路、あるいは路地のようなものであると思われる。

幅は約1.5m（西壁際）～2m（東端）、周辺より一段高い。側溝3に直交する軸線を持っている。

**出土遺物（図31）**

本址上面で採集した遺物である。

1は青磁蓮弁文碗、2は白磁口兀げ皿である。3は白磁碗で、内面におそらくは梅花の押印文、外面には縦の回帯が並ぶ。高台畳付のみ露胎。

4は青白磁の無文小皿。

5は常滑甕。

6～8はかわらけで、いずれも煤が付着している。

9は内外に格子目の叩き文様を持つ女瓦。

## 6．下層遺構面出土遺物（図32）

1は常滑の甕底部である。

2～6は山茶碗窯系のこね鉢で、いずれも口縁端部の丸いもの。5には片口がつく。

7はミニチュアのかわらけである。

8～11はかわらけであるが、多少厚みを持つ器壁のものが多い。9に古式（13世紀前半まで）の様相が認められる。

12の青磁蓮弁文碗は幅の広い蓮弁で、削り取った際のカンナ痕が明瞭に残る。

13は刀子であるが反りと刃部の位置関係が通常とは逆で、普通はみねに当る部分に刃がついている。

14は大きめの鉄釘。

15は玄武岩の仕上げ砥。

16は内外面ともに菊花文の押された漆椀である。

## 7．下層包含層出土遺物（図33～35）

1～5は口冗げの白磁類で、1が碗、他が皿である。6・7は型押しの白磁類で、6は内面に梅

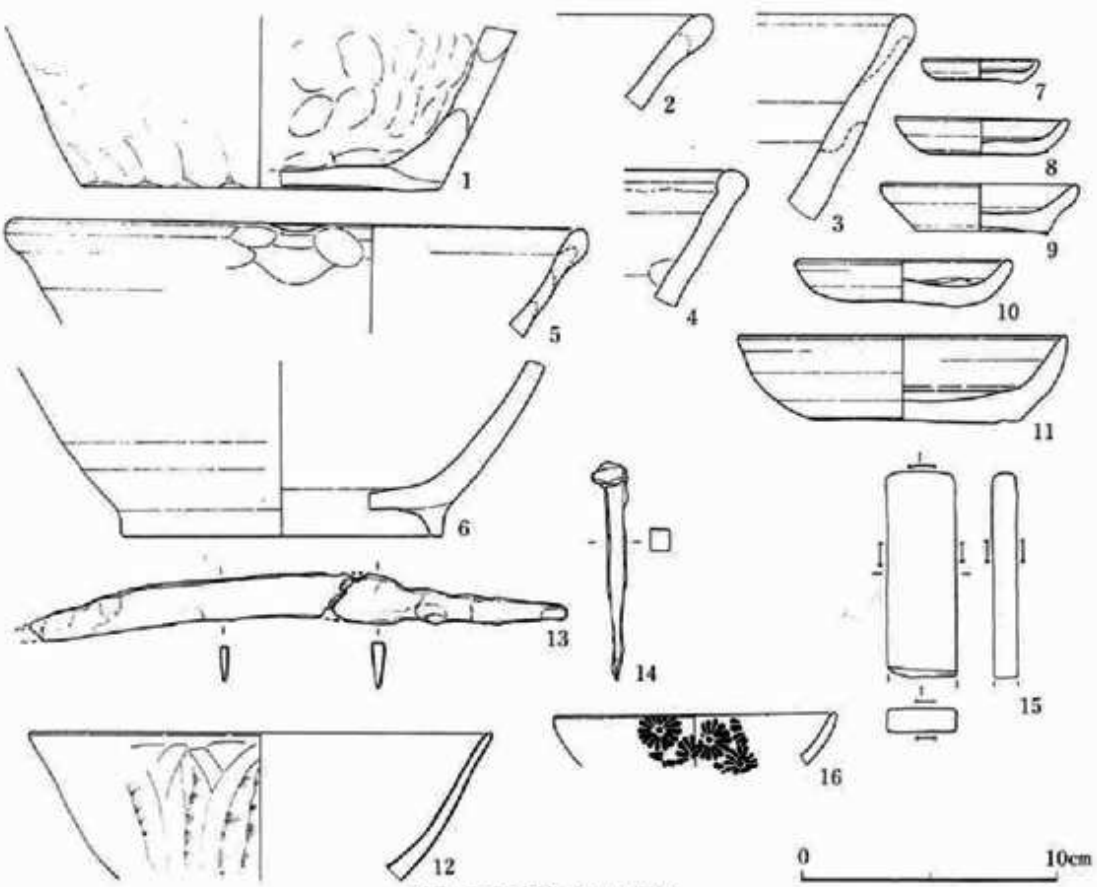



図32　下層遺構面出土遺物

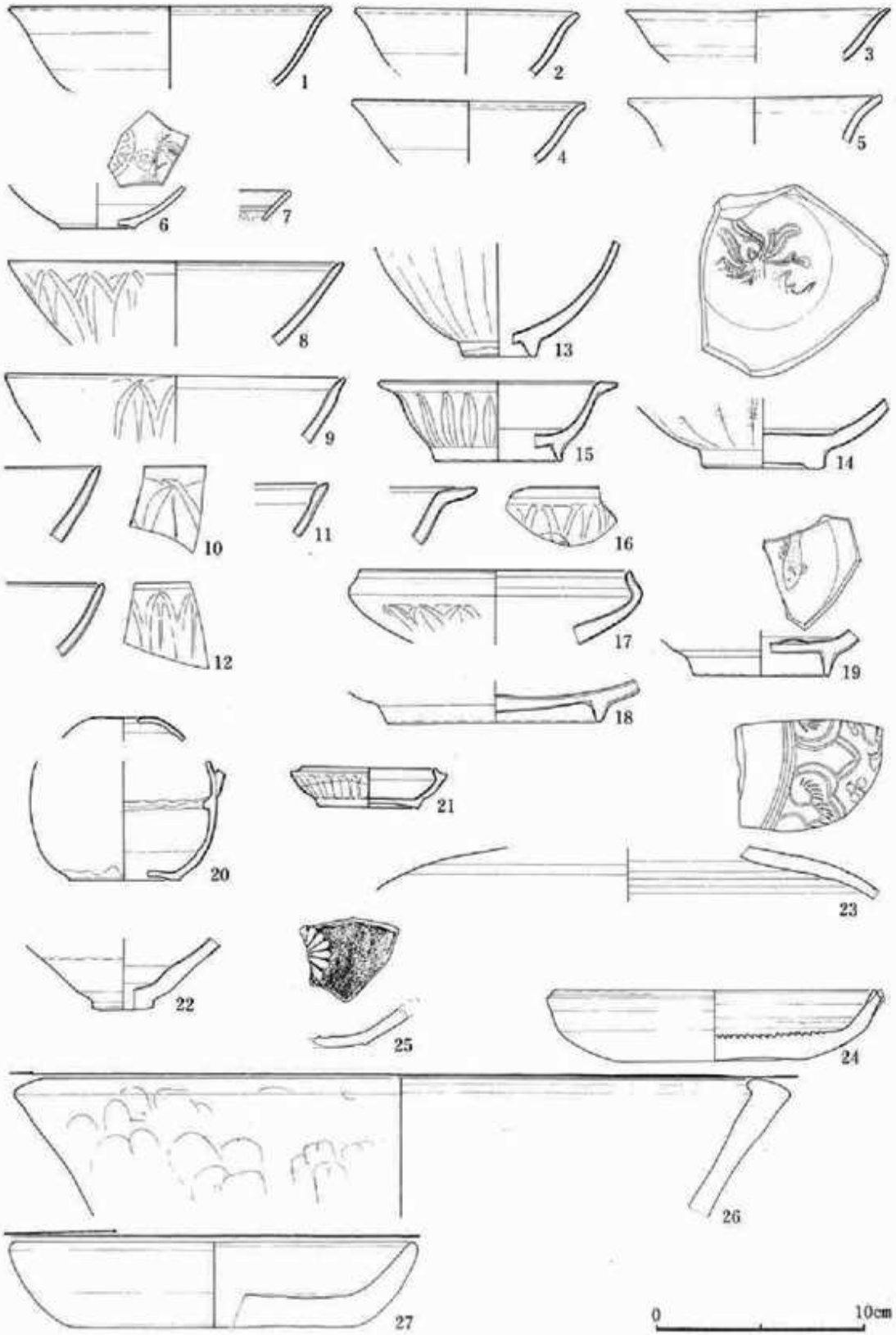



図33　下層包含層出土遺物(1)

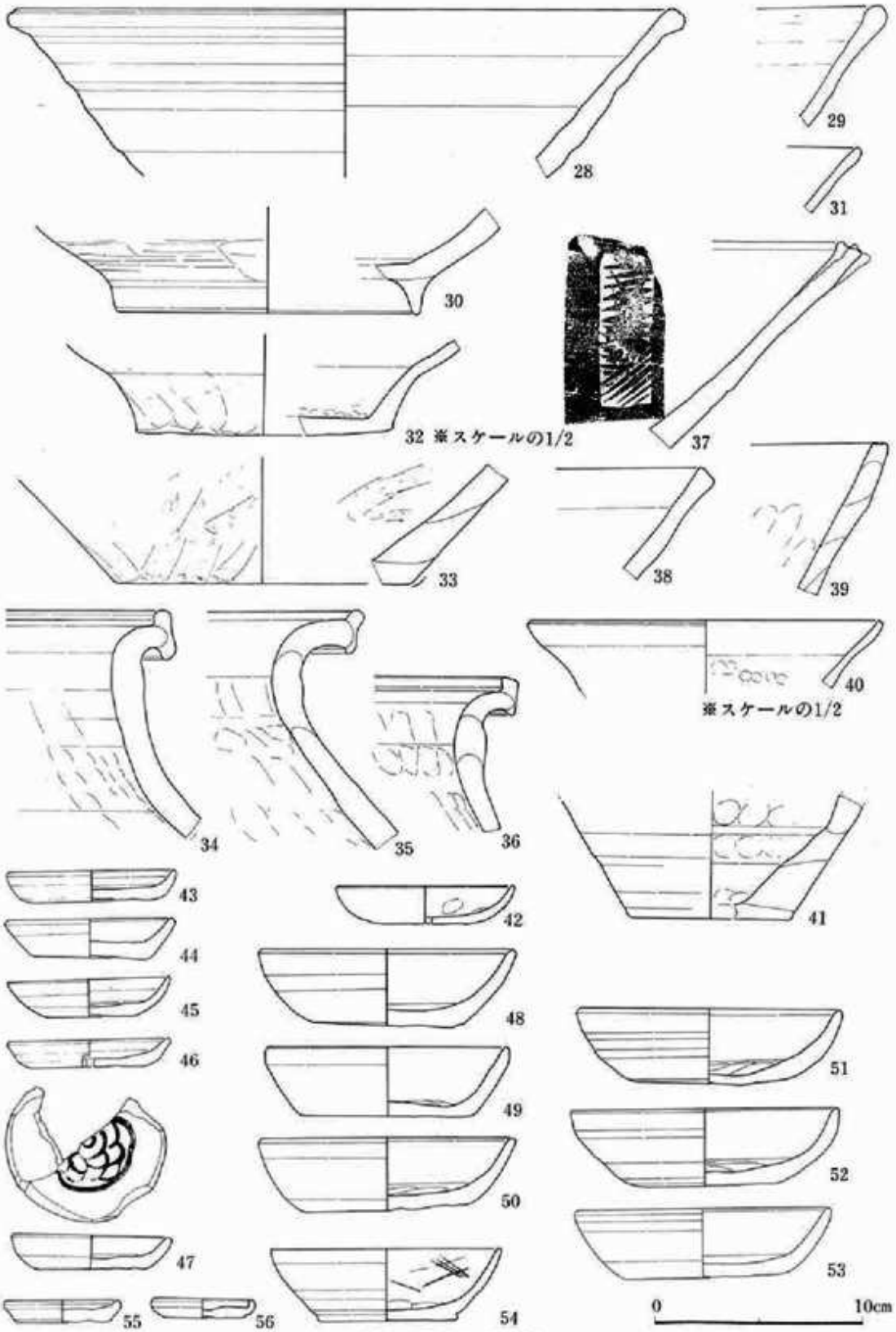



図34　下層包含層出土遺物(2)

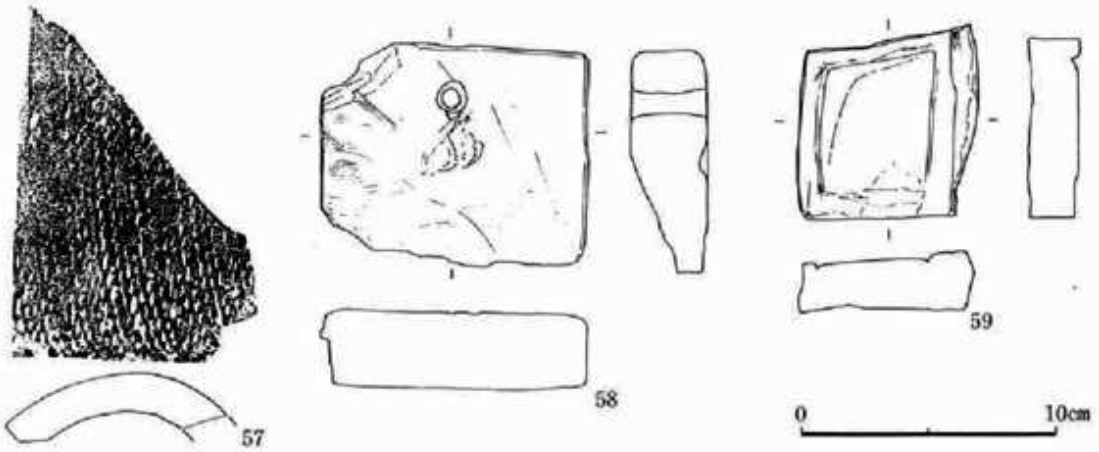



図35　下層包含層出土遺物(3)

花文、7には花弁が見える。

8～19は青磁である。8～14は蓮弁文碗で、14は内底面に牡丹の押印文がある。15・16は外面に蓮弁文のある鉢類、17は口縁部の内側にくびれる鉢である。18は無文の鉢、19は双魚文の鉢で、片方の魚のみみえる。

20・21は青白磁、20は水柱、21は合子身である。

22は舶載の天目茶碗で、胎土は灰色、少しきめは粗いが堅緻なもの、釉薬は内壁が漆黒、内底面が茶色、外面が茶色を呈する。

23は高麗青磁肩部である。灰色で緻密な胎土に白土が象嵌されている。釉薬は灰青色で透明度が非常に高い。

24は瀬戸卸し皿。

25は菊花文が内底面に押印されている粗い瓦質の碗で、低い高台がつく。

26は盤形火鉢である。粗い瓦質の胎土。

27はかわらけ質の浅鉢で、内面が焼けており、火皿として使われたものか。

28～30は山茶碗窯系こね鉢で、口縁部が肥厚し丸い端部のもの。31は山茶碗である。

32～42は常滑である。32～36は甕類で、縁帯は頸部からかなり離れたもの。37～40はこね鉢類で、37には片口下の内面に、甕の叩きに使われるような文様が押されている。またこのこね鉢は還元炎焼成気味で山茶碗窯系こね鉢の胎土に近い。41は壺底部。

42は白かわらけである。

43～56はかわらけで、47には内底面に青海波文の墨書がある。55・56はミニチュアのかわらけ。

57は男瓦である。

58は滑石の板状製品で、おそらく温石であろう。

59は硯。赤褐色の石で、一度壊れたものの破片に再加工を試みている。

図36　網代立面図(起点位置は図23を参照)

すでに規制深度に達していたが、この辺り一帯は基盤層が深く、中央部を深掘りしてみた。また方形竪穴1・2床面下に網代に板を組んだ遺構を確認した。これらと、その際に出土した遺物・銭・表採遺物等を本節で紹介する。

## 1．網代（図36）

方形竪穴1・2の床面下、B軸やや南に検出した。幅10cm前後の板を組み合わせたもので、東西方向に約4m10cm続いている。板塀のようなものと思われる。

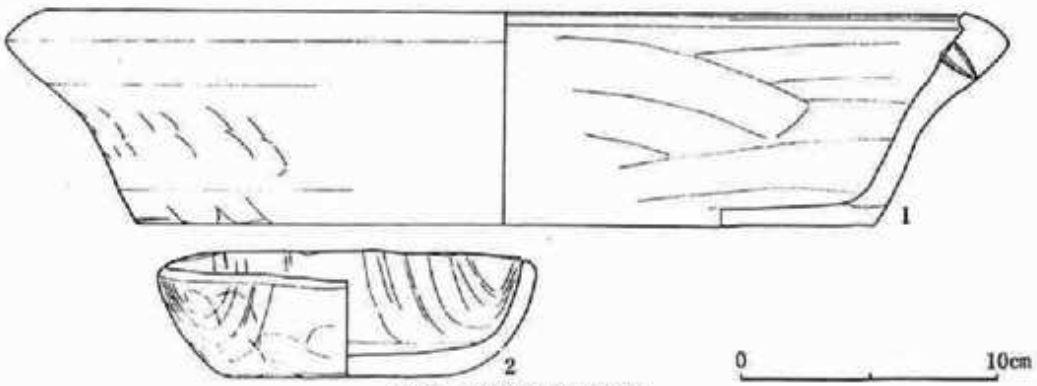



図37　網代付近出土遺物

出土遺物（図37）

網代検出時に周辺から出土したものである。

1は盤形の火鉢。堅い瓦質の胎土で、口縁下の小円孔は貫通していない。

2は木椀。削った痕が体部外面に残っている。

## 2．深掘り（図38）

中世基盤層（図38土層番号14）まで1m以上あり、上面の標高は約9.2mである。基盤層は黒褐色粘質で、混入物をほとんど含まない。

出土遺物（図39）

1は青白磁皿。淡青緑色の釉薬がかけられている。内面には片切彫りと櫛歯状工具による文様がみられる。

2は手ずくねかわらけ。本遺跡では数少ない。

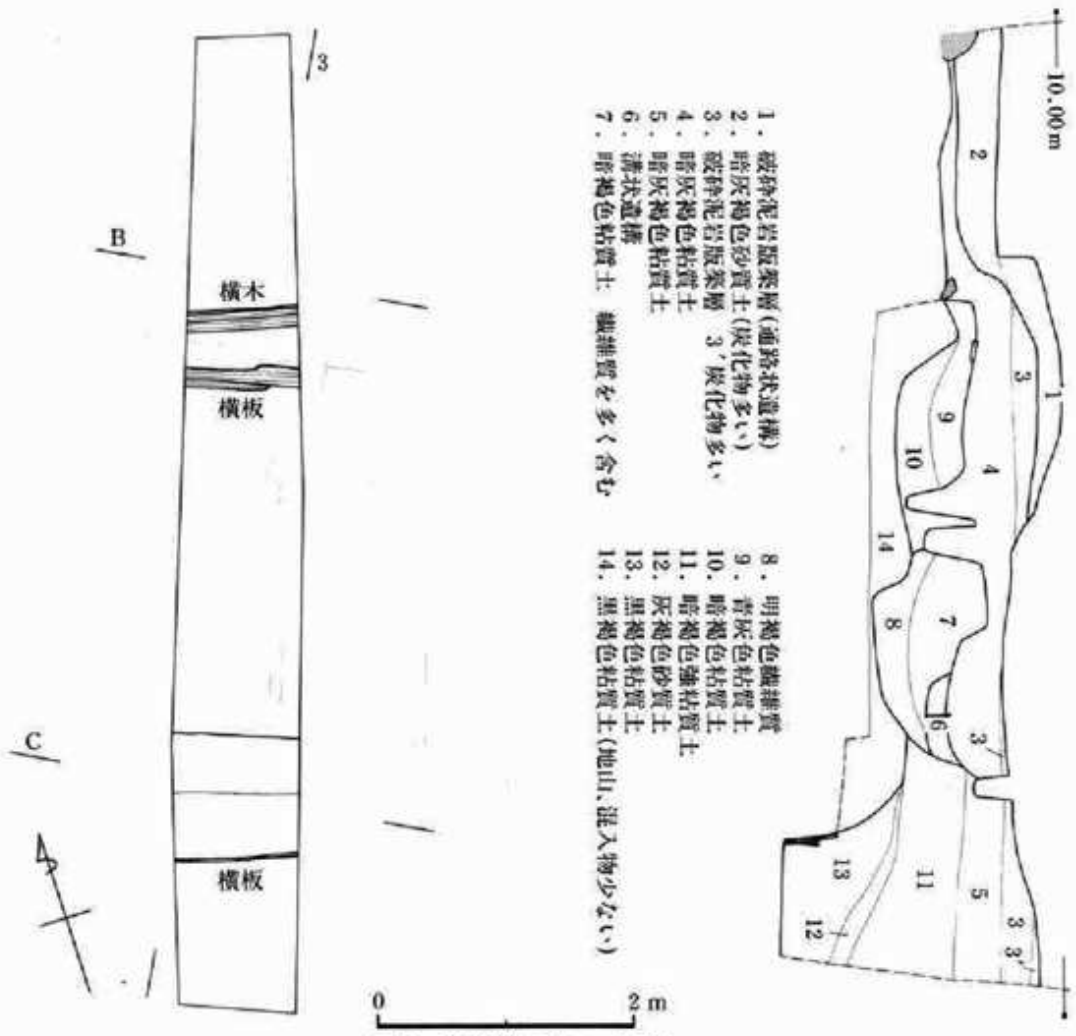



図38　深堀り平面図・土層図

3は男瓦である。

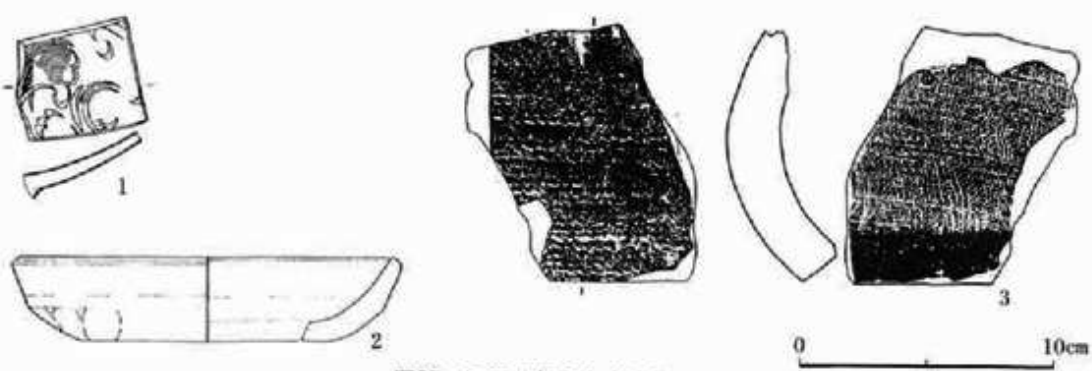



図39　深掘り部分出土遺物

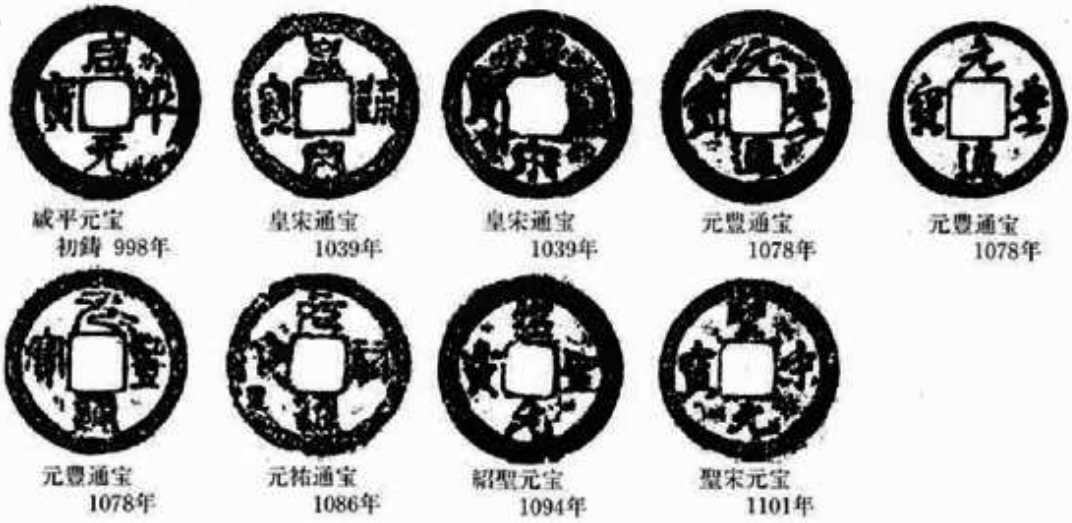



図40　銭

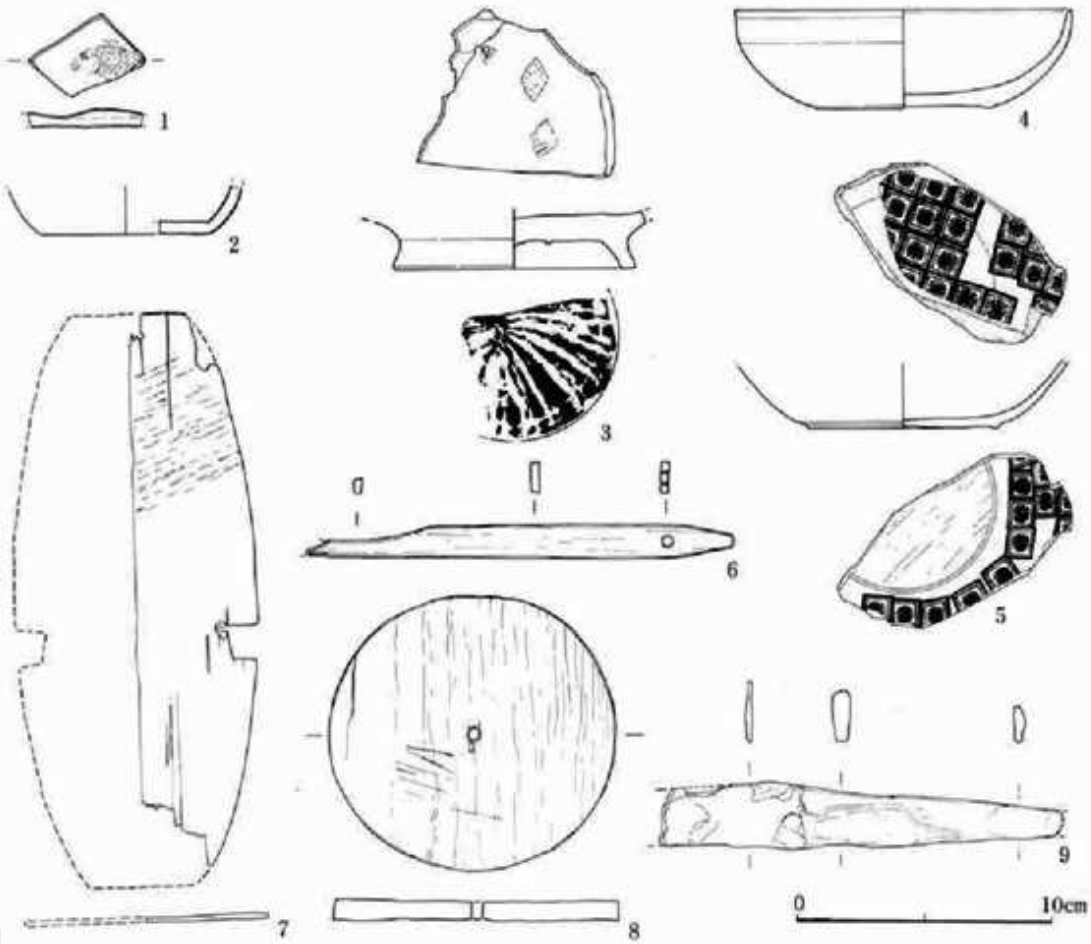



図41　表採遺物

## 3．銭（図40）

遺構の年代とは直接関わりのないものなので、ここに一括した。最も古いものは「咸平元豊」の998年、最も新しいものは「聖宋元豊」の1101年である。

## 4．表採遺物（図41）

撹乱壙等で採集したものもこれに含めた。

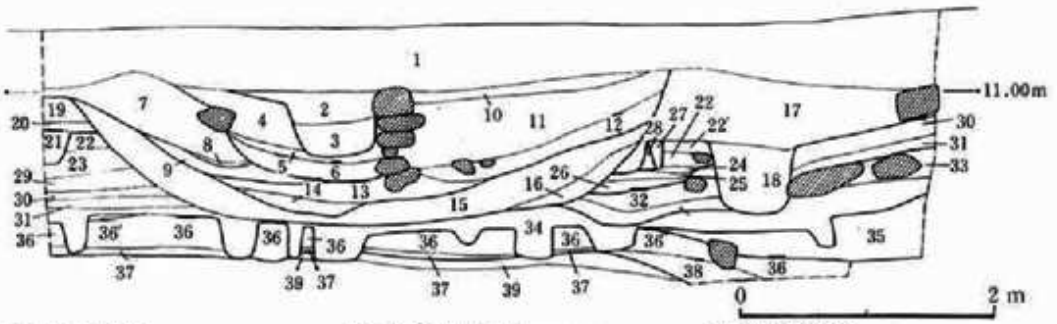
1は双魚文の青磁鉢、2は白磁口兀げ皿である。

3は瀬戸の鉢と思われる灰釉のかけられた陶器で、内底面に松葉あるいは貝をあしらった押印があり、外底面高台内に卸し目がある。高台内のみが露胎、胎土は灰色で岩石質である。

4・5は漆椀で、5には菊花の押印文がある。

6は扇骨と思われる。7は板草履である。8は壺の蓋らしい木製品である。

9は刀子と思われ、さやの木質が付着している。




1．表土ー近・現代客土
2．灰褐色砂質土
3．灰色砂層
溝1埋積後堆積土
4．茶褐色弱粘質土
5．茶褐色粘質土
6．灰褐色粘質土
7．灰褐色砂質土
溝1堆積土
8．暗褐色弱粘質土
溝2第3期浸蝕後堆積土
9．茶褐色弱粘質土
溝2第2期浸蝕後堆積土
10．茶褐色粘質土
11．暗褐色粘質土
12．灰褐色砂質土
13．暗褐色粘質土
14．灰褐色砂層
溝2第1期浸蝕後堆積土
15．暗灰褐色弱粘質土
16．灰褐色砂質土
溝2堆積土
17．灰褐色砂質土ー山砂客土
18．暗褐色粘質土ー溝4堆積土
19．暗褐色粘土
20．灰褐色砂質土
21．暗灰褐色砂質土ー柱穴覆土
22．凝灰岩・混岩版築層（22'はややしまりが悪い）
23．暗褐色砂質土
24．暗褐色粘質土
25．灰褐色粘質土
26．灰褐色弱粘質土
27．茶褐色粘質土ー柱穴覆土
28．茶褐色弱粘質土ー柱穴覆土
29．明黄褐色砂質土
30．灰褐色砂質土
31．灰黒色炭化層
32．凝灰岩・混岩版築層
33．凝灰岩石組
34．灰褐色強粘質土
35．黒褐色粘質土
36．凝灰岩・混岩版築層（36'はややしまりが悪い）
37．灰褐色粘質土
38．黒色粘質土
39．凝灰岩・混岩版築層

図42　西壁土層図

# 第四章　まとめ

**遺構の軸線について**

調査区東端で検出した、今小路側溝と覚しい溝の主軸方位は約N－20°－Eで、現在の今小路とほぼ同じである。若宮大路主軸方位はN－27.5°－E（磁北ではMN－34.5°－E）なので、7.5°程度ずれていることがわかる。つまり第三章第3節の1側溝3の項ですでに書いたように、中世期から今小路（「武蔵大路」・「今大路」）は、若宮大路とは平行していなかった可能性が強い。

また、本調査で検出したその他の溝や通路、柱穴列などの軸線も、大体今小路側溝に平行、あるいは直交している。つまり、この付近の街割にあっては、若宮大路を基軸としているのではなく、最も近接した主要道である今小路の軸線に規制されていることがわかる。その軸線の変更がどこでなされているかは大きな問題であるが、今のところは不明である。あるいは今小路そのものが境界かも知れない。

ただし、本調査で検出した側溝の年代は、後に述べるように鎌倉時代後期と思われるので、それ以前に関してはもう少し慎重でありたい。

**遺構の性格と年代について**

上層の遺構群では何条かの溝がある。このうち溝1は乱雑に石を積んで護岸としたに過ぎないものであり、鎌倉時代頃にみられる、切石や木組みによるしっかりした護岸施設にほど遠い。当初の強力な街づくりも、権力者が去るとともに次第にタガが緩んでいることをうかがわせる。これらの遺構群の出土遺物は、第三章で述べたように、相当年代に混乱がみられるが、主体そのものはおおむね14世紀代中～後半にあると思われる。

中層の遺構では大量の鉄滓や吹子の羽口が出土した石畳が注目されよう。鉄滓は大半がいわゆる椀型で、石畳上の大量の鉄分や炭化層の存在とともに、すぐ近くに製鉄遺構が存在することを示唆している。あるいは『新編鎌倉志』にある。刀工正宗の工房址と関わりがある可能性も考えられよう。この面の年代は大体14世紀前半から中葉、つまり鎌倉時代後期から南北朝にかかる頃であろう。

下層の遺構では何といっても方形竪穴の列が注目される。ここで検出したのは4つの部屋であるが、検出された囲炉裏が一つであったこと、方形竪穴1の作業台のような大きいかまくら石（凝灰角礫岩）の存在、等、部屋ごとに機能分化していた可能性がある。また通路のような版築された細長い空閑地をはさんで、南側には柱穴列がいくつか存在している。これは近くの、若宮大路周辺遺跡群雪ノ下一丁目210番地点[註1]などでもみられた例で、街並のあり様の一端がよく示されていると思われる。この面の年代は遺物からみて大体13世紀後半から14世紀前半、つまり鎌倉時代後期に比定されよう。

**註1**　1988年に馬淵が担当して調査

## 図版 1

1. 溝1（東から）

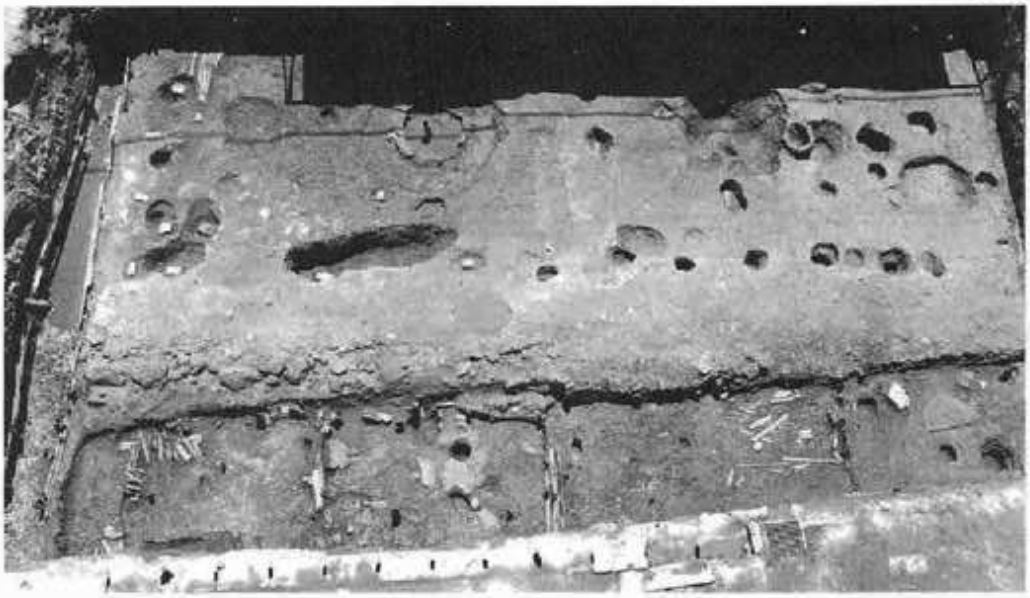
2. 側溝1（南から）

## 図版2

1. 中層遺構全景（北から）

2. 溝5（東から）

## 図版3



1. 下層遺構全景（北から）

2. 同上方形竪穴の並び（東から）

## 図版4

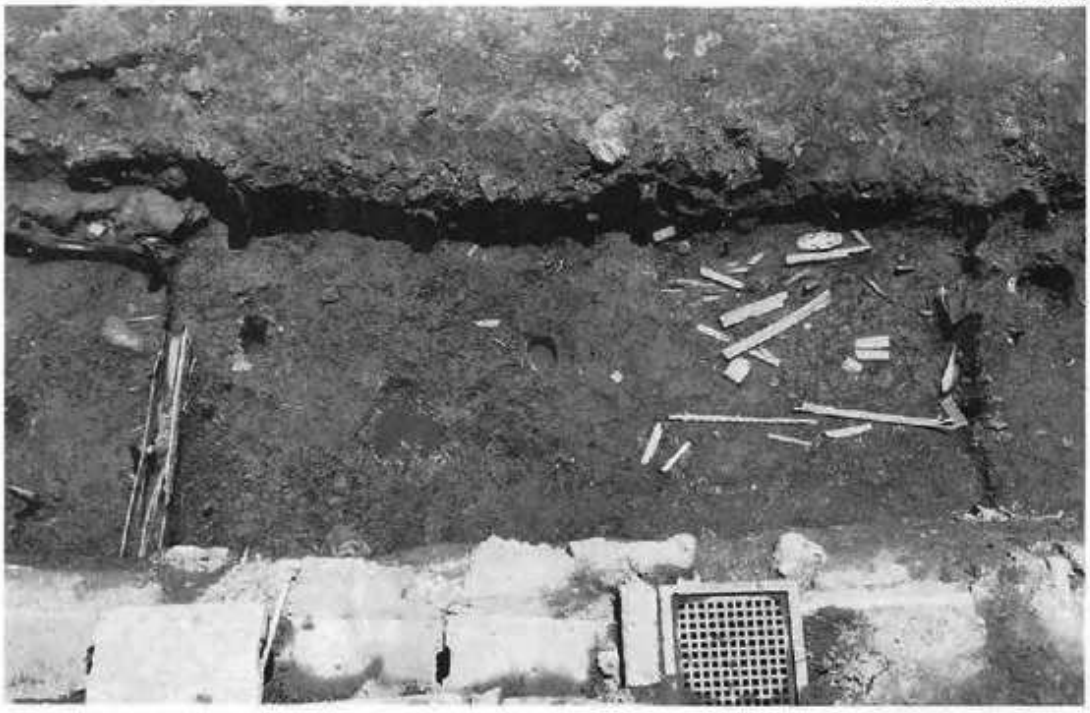
1.側溝3(南から)

2.同前(北から)

3.同前(西から)

1.方形竪穴1(北から)

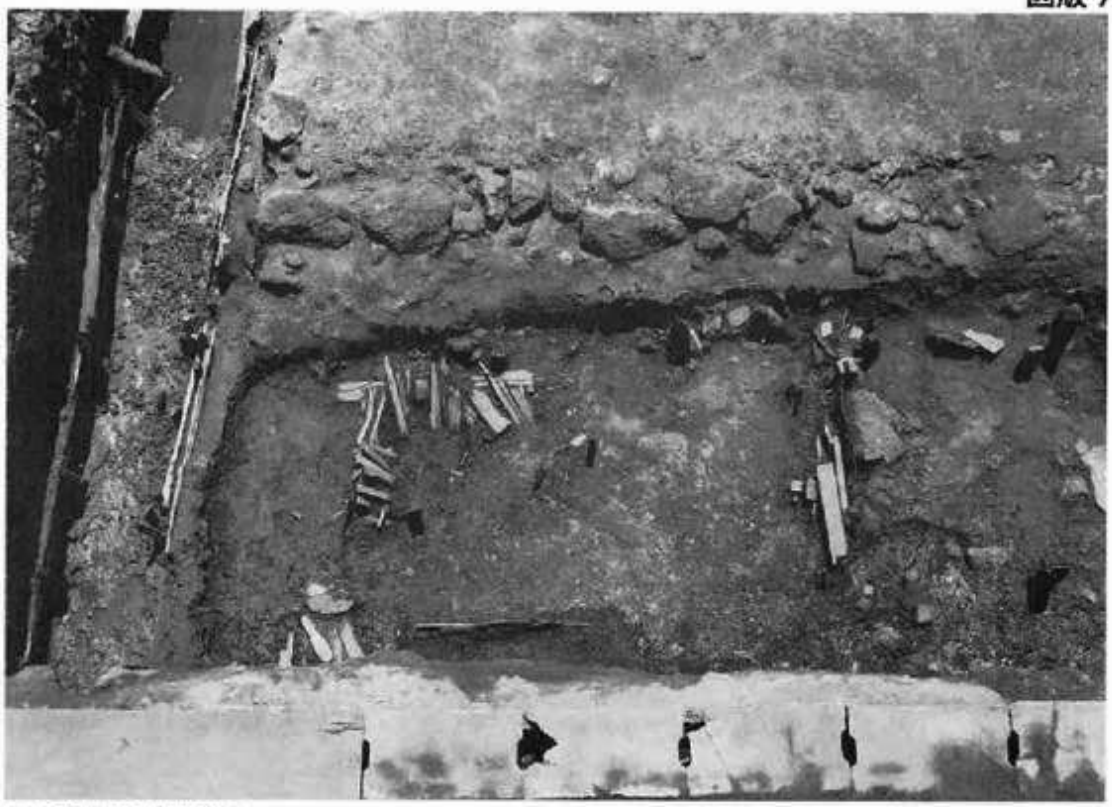
2.方形竪穴2(北から)



## 図版6

1.方形竪穴3(北から)

2.同3.4間の板列(東から)



1.方形竪穴4(北から)

2.同上囲炉裏

## 図版8

1.吹子羽口出土状況

2.青磁出土状況

1.綱代(東から)

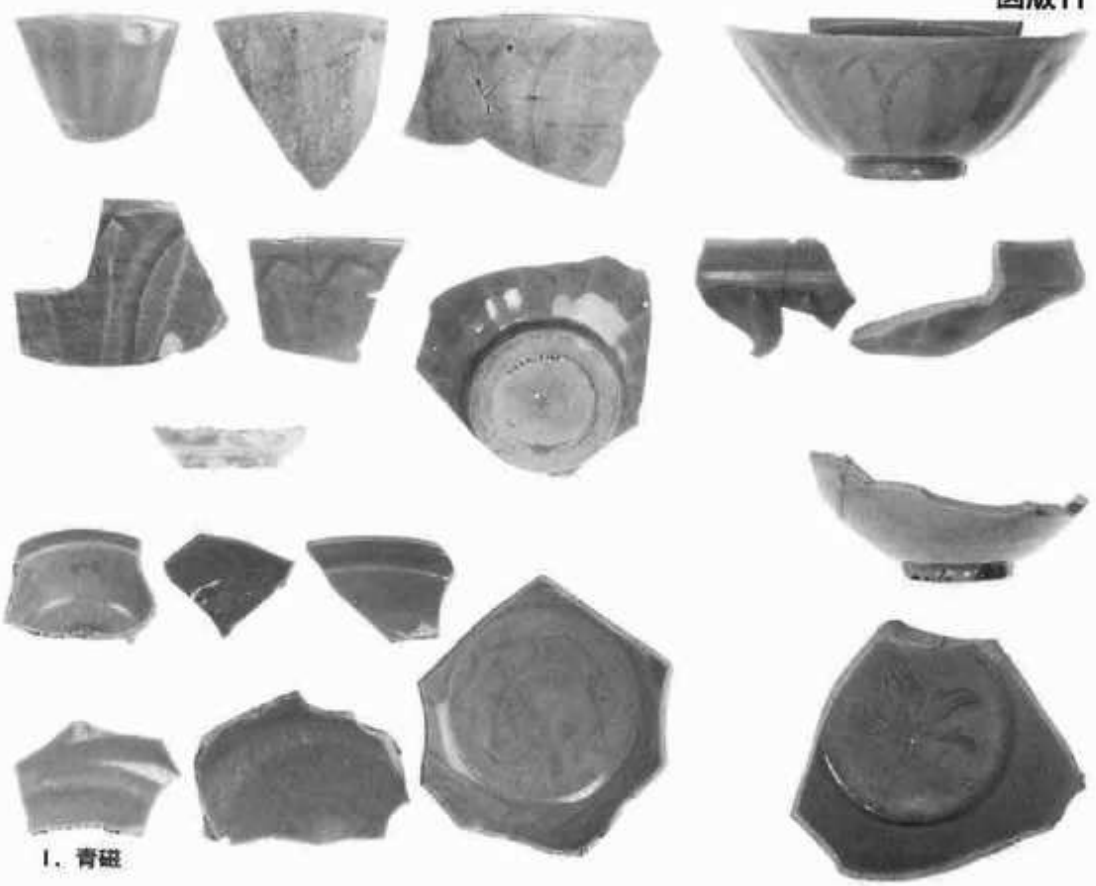
2.同上(西から)

## 図版10

1．深掘り（南から）

2．同左　北側の横板（南から）

3．同前南側の落込み（南から）

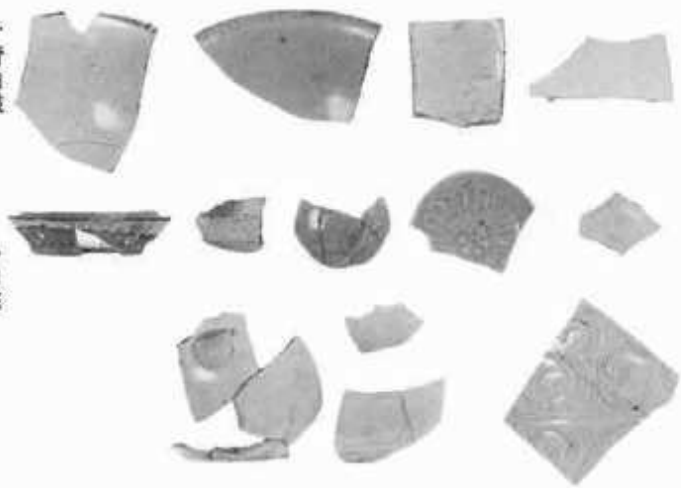


1．青磁

2．白磁

3．青白磁

4．白磁



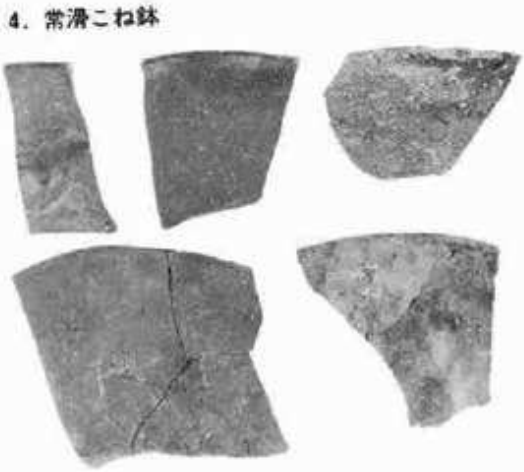
5．その他の舶載陶磁器

## 図版12

1．瀬戸

2．山茶碗窯素こね鉢

3．山茶碗



4．常滑こね鉢

5．常滑甕

6．搬入系土器

7．火鉢

1．土鍋

2．土製円板

3．火鉢

4．土製鉢

5．土製品類

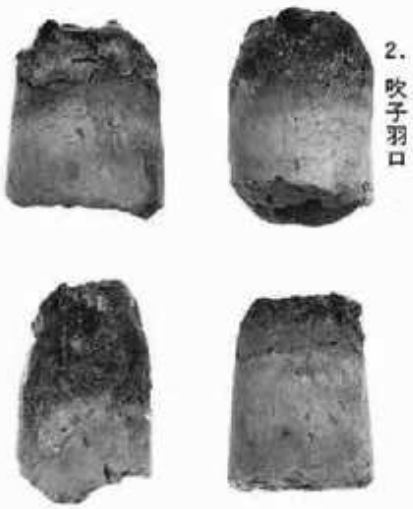
6．墨書かわらけ

7．かわらけ類

8．ミニチュアかわらけ

## 図版14

1. 瓦

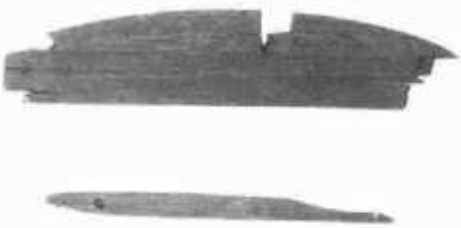


2. 吹子羽口

3. 石製品と磨研常滑(中段)

4. 木製品

5. 木椀



6. 漆椀

7. 自在鈎

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書5

昭和63年度発掘調査報告書

発行日　平成元年3月

編集
発行　鎌倉市教育委員会

印刷　㈱稲元印刷